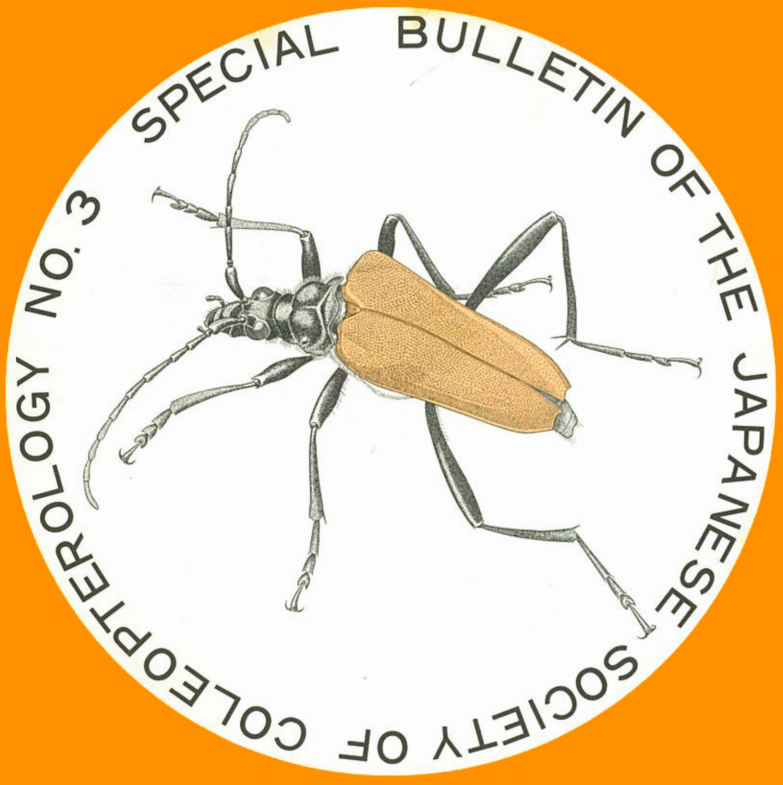
KUSAMAIA

PAPERS ON LONGICORN BEETLES IN HONOUR OF KEIICHI KUSAMA



1988

日本鞘翅目学会

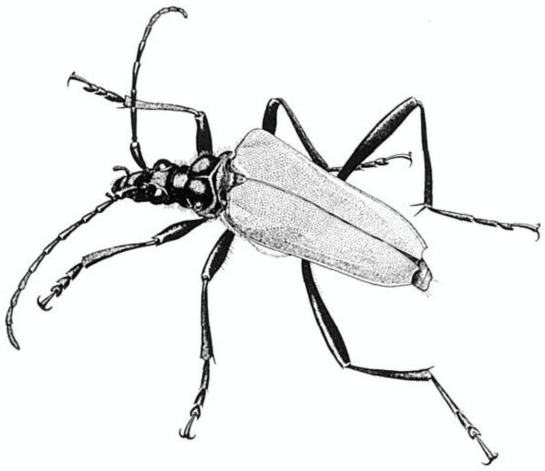
東京

KUSAMAIA

PAPERS ON LONGICORN BEETLES IN HONOUR OF KEIICHI KUSAMA

日本鞘翅目学会特別報告 第3号

草間慶一先生記念論文集



1988

日本鞘翅目学会

東京

Cover illustration

Pachyta erebia BATES f. *kusamai* HAYASHI, an attractive lepturine cerambycid beetle discovered by K. KUSAMA.
Del. S. KASAHARA

目　次 Contents

カミキリとの 50 年間をふりかえって……草間　慶一　1

草間慶一カミキリ関係著作目録……　3

〈カミキリ座談会〉

草間慶一先生を囲んで……草間　慶一・小比賀正敬・新堀　豊彦・露木　繁雄・高桑　正敏・藤田　　宏・小笠原　隆　7

〈日本のカミキリ相〉

北海道のカミキリ相……竹田　昌史　19

東北地方のカミキリ相……草刈　広一　25

関東地方のカミキリ相……露木　繁雄　30

中部地方のカミキリ相……湯沢　宣久　34

近畿地方のカミキリ相……岩田隆太郎　38

中国地方のカミキリ相……山地　　治　44

四国地方のカミキリ相……小笠原　隆　50

九州地方のカミキリ相……入江　平吉　54

南西諸島のカミキリムシ……槇原　　寛　58

「日本のカミキリ相」を解明するための文献紹介……穂積　俊文　64

東京都高尾山のカミキリムシ……藤田　　宏　72

大阪府箕面市のカミキリムシ……岩田隆太郎・西川芳太郎・大垣　　誠・和田　洋介・山下　俊一・八木　正道　94

新種ツシマヒメハナカミキリの記載……斉藤　秀生・斉藤　明子　119

SAITO, S. & A. SAITO: A New *Pidonia* from the Tsushima Islands (Coleoptera, Cerambycidae)

スミイロハナカミキリの知見……下村　　徹・豊嶋　亮司　126

SHIMOMURA, T. & R. TOYOSHIMA: Taxonomic Notes on *Nivellia extensa* (GEBLER) (Coleoptera, Cerambycidae, Lepturinae)

タイワンキスジトラカミキリとその近縁種……新里　達也　133

NIISATO, T.: *Cyrtoclytus formosanus* and its Allied Species (Coleoptera, Cerambycinae)

日本のリュウキュウルリボシカミキリ種群の研究……槇原　　寛　142

MAKIHARA, H.: A Study on the Group of *Glenea chlorospila* in Japan —Studies on Cerambycidae (Coleoptera) of Japan (7)—

カミキリとの50年間をふりかえって

草間　慶一

虫と生化学，カミキリと放射性同位元素，趣味と本業です．本業のほうは昭和 62 年 3 月 31 日に終了し，今後はカミキリについてのみとなりました．

カミキリを本業にしたいと思ったのは，湘南中学の 4 年生 (昭和 15 年) の夏，家中で長野県の白骨温泉に行ってたくさんのカミキリを採ったときからです．このとき上高地にも行き，帝国ホテルの庭でキベリカタビロハナカミキリを 1 頭採集して大喜びしたのです．その頃の図鑑に非常に稀とあったからです．

私が虫を採り出したのは昭和 5 年頃だったかと思います．叔父が世界的な蝶のコレクターだったので，私も最初は蝶を集めていました．逗子町 (現在は市) の中を 5 回転居し，6 回目の昭和 10 年に小学校の近くの家を買って，静岡に来るまで住んでいたのです．この 5 年生の時，机に 2 人一緒に座ったのが現在の田中 明博士 (北海道大学教授) で，「蝶より甲虫のほうが面白いぞ」と言われ，一緒に逗子の山や神武寺に採集に行き，すっかり甲虫のとりことなってしまったのです．

三浦半島以外に採集に行ったのは，前に書いた白骨が初めてで，16 年には父と八ケ岳に，17 年には野尻湖に一緒に行きました．18 年には小比賀正敬博士 (慶応大学教授) が湘南中学 1 年生だったときで，一緒に奥日光の湯元から金精峠を越え，菅沼や丸沼に採集に行きました．この時，キベリカタビロハナカミキリがたくさんいて，約 300 頭ぐらい採集しても，まだ採り切れなかったほどです．19 年には湯元から鬼怒川に出て尾瀬まで歩きました．本当にハナカミキリがたくさん採集できたことを覚えています．

新種とおぼしきものを見出したのは，大学院生の昭和 28 年のことでした．小比賀正敬・露木繁雄両氏と 2 日間かけて転付峠を越え，南アルプスの奥深く二軒小屋に入り，東俣に 2 日ほど採集に出かけたものの雨で結局二軒小屋に戻り，車屋沢の近くでヨツスジハナカミキリに似ているがそれより小さいカミキリを採ったのですが，その時これは絶対新種だと確信しました．これがヒメヨツスジハナカミキリでした．

この時，西俣からハイマツ帯を踏み越えて悪沢岳の近くに出たのですが，その苦労は大変なものだったので，これにこりて以後は道のない所は二度と通りません．実は，この時初めて 3,000 m 以上のピークを踏んだので，ついでに赤石岳にも登りました．日本には 3,000 m 以上のピークが 27 あり，現在まで登っていないのは 3 つ，すなわち塩見岳，仙丈岳，木曾御岳です．今まで登った一番高いピークは，アラスカを除いてのアメリカ合衆国の最高峰，北部カリフォルニアにある Mt. Whitney で，標高

1,500 m くらいまで自動車で行き，あとはテントを背負って 3,800 m くらいでキャンプ，4,418 m のピークを踏みました．1960 年のことです．

昭和 31 年だったと思いますが，南アルプスの一番南にある 3,000 m 以上のピーク，聖岳に登ったときのことです．山小屋でいろいろな話をしているうちに，日本産のカミキリのリストが欲しいなどということになり，これがきっかけになって昭和 34 年発行の「新しい昆虫採集 (下)」(京浜昆虫同好会編，内田老鶴圃) の日本産カミキリの生態と採集法一覧表となったのです．その後 2 回訂正し，4 回目に高桑正敏氏がいっそのこと図鑑にしようではないかということになって，「日本産カミキリ大図鑑」(日本鞘翅目学会編，講談社) が出版され，私のカミキリに対する思いも一段落したのです．

関西には古くから甲虫屋さんの会があり，記載論文中心の雑誌も発行されていたのですが，東京にはそういったものがなかったので，衣笠恵士博士らと日本鞘翅目学会を設立し，また Elytra という雑誌も誕生しました．

振り返ってみますと，日本全国くまなく歩き回ったつもりですが，壱岐と対馬には行ったことがなく，とくに対馬にはまだ私が持っていないカミキリが数種もあるので，来年にでもぜひ採集に行きたいと考えています．

外国でカミキリが一番たくさん採れたのはパプアニューギニアで，こんなに無数にいるところは他にないのではないかとすら感じたほどです．その他，私自身が行ったのはアメリカ合衆国の西部と東部，カナダ，台湾へは 6 回，中国の雲南省，タイ北部，インド北部です．アフリカの標本は前述の田中教授から，オーストラリアのものは東京大学の教授の方にかなりたくさんいただきました．カミキリが多いのにまだ行っていないのが南アメリカで，そのうちここもぜひ行ってみようと思っているところです．

1987 年 10 月 1 日　記す

草間慶一カミキリ関係著作目録

1940 a. 白骨の天牛. 湘南中学博友会会報, (20): 39–40.
1941 a. 天牛科 (1). 湘南中学博友会会報, (28): 2.
b. 天牛科 (2). 湘南中学博友会会報, (29): 1.
c. 赤城山採集記. 湘南中学博友会会報, (29): 1–2. (＋寺本一雄)
d. 赤城山採集記つづき. 湘南中学博友会会報, (30): 1. (＋寺本一雄)
e. 天牛科 (3). 湘南中学博友会会報, (36): 1.
1942 a. 逗子産甲蟲. 42 pp. 博友会.
1946 a. 逗子の天牛. 湘南中学生研会報, (2): 1–4.
1950 a. 逗子・鎌倉附近の天牛目録. 4 pp. (個人出版)
1953 a. 南アルプス採集行 (1). *Kabutomusi*, **2**(6): 1–4.
1954 a. 南アルプス採集行 (2). *Kabutomusi*, **3**(1): 1–14.
b. 三浦半島中北部のカミキリについて. *Insects Magazine*, (31): 5–14.
1955 a. 三浦半島中北部の天牛について [II] (続). *Insects Magazine*, (32): 12–24.
b. 三浦半島中北部の天牛について III. *Insects Magazine*, (34): 9–29.
1956 a. 聖岳へ甲虫を求めて. *Insects Magazine*, (37): 33–38. (＋小比賀正敬, 河原　誠, 露木繁雄, 西川協一)
1957 a. 聖岳へ甲虫を求めて (続). *Insects Magazine*, (38): 32–38. (＋小比賀正敬, 河原　誠, 露木繁雄, 西川協一)
b. 聖岳へ甲虫を求めて (完結篇). *Insects Magazine*, (39): 29–33. (＋小比賀正敬, 河原　誠, 露木繁雄, 西川協一)
c. 天城山のカミキリ. 駿河の昆虫, (20): 507–525.
1958 a. 南アルプスのカミキリ I. *Insect Magazine*, (43): 16–20 (＋小比賀正敬)
b. 南アルプスのカミキリ. 16 pp. (個人出版) (＋小比賀正敬, 露木繁雄)
c. 南アルプスのカミキリ II. *Insect Magazine*, (44): 11–19. (＋小比賀正敬)
1959 a. 南アルプスのカミキリ III. *Insect Magazine*, (45): 11–15. (＋小比賀正敬)
b. 日本産カミキリ類の生態と採集法一覧表. 新しい昆虫採集 (下), pp. 362–460. 内田老鶴圃.
1960 a. 南アルプスのカミキリ IV. *Insect Magazine*, (50): 39–64. (＋小比賀正敬)
1965 a. 日本産カミキリ類の生態と採集法一覧表. 新しい昆虫採集 (下) 増補新版, pp. 362–488. 内田老鶴圃新社.
1966 a. *Pidonia* の分布. インセクト・ジャーナル, (2): 45–52.
b. 世界と日本のホソコバネカミキリ属—その分類, 分布, 採集法—. 昆虫と自然, **1**(5): 7–11, 1 pl.
1968 a. 米国西部での昆虫採集. 静大だより, (15): 7.
1970 a. A new species of *Necydalis* from Amami-Oshima Island. *Ent. Rev. Japan*, **22**: 73–74.
b. ソ連印象記. 静岡大学学報, (88): 4–6.
c. カミキリ採集記録. 甲虫ニュース, (8): 4.
1971 a. A new subspecies and new records of Cerambycidae from Yaku Island and Hokkaido.

Ent. Rev. Japan, **23**: 24.

b. 富士山周辺の興味ある数種のカミキリについて. 静岡県の自然, (3): 4.

c. カミキリ研究史 (1). 甲虫ニュース, (12): 1-4.

d. カミキリ研究史 (2). 甲虫ニュース, (13): 1-4.

e. カミキリ研究史 (3). 甲虫ニュース, (14): 1-4.

f. 屋久島採集記. 静大だより, (26): 5-6.

g. Rain beetle か, 長波長光か. 月刊むし, (8): 16-17.

h. ジョージ・ルイスの足跡について (上). 月刊むし, (8): 18-23.

i. ジョージ・ルイスの足跡について (下). 月刊むし, (9): 14-20.

j. コゲチャヒラタカミキリの新寄生植物について. 月刊むし, (9): 32.

k. A new species of the genus *Pidonia* (Coleoptera, Cerambycidae) from Japan. *Annot. zool. Japan*, **44**: 233-235. (With M. Obika.)

1972 a. Generic names and type species applied to Japanese Cerambycidae (Coleoptera). *Rep. Fac. Sci. Shizuoka Univ.*, **6**: 95-126. (With M. Hayashi.)

b. A new species of *Ceresium* from Iriomote Island (Cerambycidae). *Ent. Rev. Japan*, **24**: 41-43. (With J. Komiya.)

c. 雑感・カラフトホソコバネカミキリを考える. 月刊むし, (20): 2-4.

1973 a. カミキリ研究史 (4). 甲虫ニュース, (15/16): 1-6.

b. 日本産カミキリの生態と分布一覧表. 新しい昆虫採集案内 (III) 付録. 156 pp.

c. *Necydalis* 属の研究史 (I). *Elytra*, *Tokyo*, **1**: 1-4.

1974 a. Notes on longicorn-beetles in the Bonin Islands (Coleoptera: Cerambycidae). *Rept. Fac. Sci. Sizuoka Univ.*, **8**: 117-135. (With H. Nara and Y. Kusui.)

b. Two new species of the tribe Rhodopinini from Yakushima Island and Formosa (Coleoptera • Cerambycidae). *Rept. Fac. Sci. Shizuoka Univ.*, **8**: 137-140. (With J. Komiya.)

c. 南西列島採集記. 静岡大学学報, (131): 15-16.

d. *Necydalis* 属の研究史 (II). *Elytra*, *Tokyo*, **2**: 1-6.

e. 天城山およびその近傍のカミキリ. 東海自然誌, (1): 23-59.

f. 昆虫の本. 静岡大学図書館通信, (28): 3.

g. カラフトホソコバネカミキリおよびミドリヒメスギカミキリの食樹について. 月刊むし, (43): 36.

1975 a. 1975 年にむけて—カミキリ界—. 月刊むし, (46): 10-11.

b. Notes on the longicorn genus *Necydalis*, homonym and synonym. *Elytra*, *Tokyo*, **2**: 22.

c. Two new species and a new subspecies of *Necydalis* from Formosa and Japan (Coleoptera: Cerambycidae). *Rept. Fac. Sci. Shizuoka Univ.*, **9**: 51-56.

d. 大井川上流域のカミキリ. 南アルプス奥大井地域学術調査報告書, pp. 102-133. 静岡県及び静岡県自然保護協会.

1976 a. トカラ列島のカミキリ. 月刊むし, (59): 9-16. (+入江平吉)

b. 静大周辺の昆虫について. 静大だより, (40): 8.

c. Notes on the longicorn genus *Mesosa*, two new species and others from Nansei Islands of Japan. *Elytra*, *Tokyo*, **3**: 19-23. (With H. Irie.)

d. 硫黄島採集記. 静岡大学学報, (160): 7-8.

1977 a. Three unrecorded longicorn beetles from Naka-Iwojima Island (Volcano Islands). *Elytra, Tokyo*, **5**: 12. (With S. TSUYUKI.)

b. Description of a beautiful new species of Clytini from the Bonin Islands (Cerambycidae). *Elytra, Tokyo*, **5**: 17–18.

c. 日本産ニセリンゴカミキリ属 2 種の再検討. *Elytra, Tokyo*, **5**: 37–38. (＋多比良嘉晃)

d. The genus *Exocentrus* MULSANT of Japan and its adjacent regions: (1) notes on a new species. *Elytra, Tokyo*, **5**: 39–42. (With Y. TAHIRA.)

e. ミヤマケシカミキリの分布記録追加. *Elytra, Tokyo*, **6**: 42–43. (＋多比良嘉晃)

1978 a. 昆虫類. 浜岡原子力発電所環境調査報告書, pp. 161–172. 静岡県.

b. The genus *Exocentrus* MULSANT of Japan and its adjacent regions: (2) the revision of Taiwanese species. *Elytra, Tokyo*, **6**: 9–32. (With Y. TAHIRA.)

c. 静岡県のカミキリ. 駿河の昆虫, (100): 2958–2977.

1979 a. 大井川上流のカミキリ第 2 報. 東海自然誌, (3): 62–71. (＋多比良嘉晃)

b. 1970 年代の昆虫界をふりかえって—カミキリ界—. 月刊むし, (100): 9–11.

c. 台湾のネキダリスについて. 月刊むし, (100): 30–32.

d. Researches for Cerambycidae at Hui-Sun experimental forest (Nantou Hsien, central Taiwan) in June 1978. *Rept. Fac. Sci. Shizuoka Univ.*, **13**: 73–96. (With Y. ODA.)

e. A revision of the genus *Pothyne* THOMSON in Japan and Taiwan (Cerambycidae). *Elytra, Tokyo*, **7**: 1–14. (With M. TAKAKUWA.)

f. 静岡県のカミキリ. 静岡県の生物—日本生物教育会第 34 回全国大会記念誌—, pp. 111–119.

g. 8-1 鞘翅目について. 昭和 53 年度長島ダム環境調査報告書, pp. 48–53. 建設省中部地方建設局長島ダム工事事務所.

1980 a. Notes on longicorn beetles in New Guinea (1) (Coleoptera, Cerambycidae). *Rept. Fac. Sci. Shizuoka Univ.*, **14**: 55–61.

b. 石垣島における *Rondibilis femorata* の発見. 月刊むし, (111): 16–17.

1981 a. 1980 年の昆虫界をふりかえって—カミキリ界—. 月刊むし, (120): 10–12.

b. 静岡県下におけるコゲチャサビカミキリの記録. 月刊むし, (123): 32.

c. ダージリンでのカミキリ採集. 月刊むし, (125): 16–17.

d. (2) 大井川源流部原生自然環境保全地域で記録された昆虫. 大井川源流部原生自然環境保全地域調査報告書, pp. 283–294. 日本自然保護協会.

e. 12-3 鞘翅目. 昭和 55 年度長島ダム環境調査報告書, pp. 316–330. 建設省中部地方建設局長島ダム工事事務所. (＋多比良嘉昆)

f. ムツボシアオコトラカミキリの採集記録と学名の変更について. 月刊むし, (130): 34–35.

1982 a. 創刊によせて (1). 静岡の甲虫, 1(1): 1–3.

b. 静岡県を原産地とする甲虫その 1—カミキリムシ科—. 静岡の甲虫, 1(1): 5–8. (＋多比良嘉晃)

c. 世界のヒラヤマコブハナカミキリ属について. 月刊むし, (134): 2–4.

d. J. L. Gressitt 博士をしのぶ. 月刊むし, (137): 24–26.

e. 初島の甲虫. 静岡の甲虫, 1(2): 1–14, 1 pl. (＋市川恭治)

1983 a. 1982 年の昆虫界をふりかえって—カミキリ界—. 月刊むし, (144): 8–10.

b. VI. 甲虫類 (鞘翅目). 静岡県の重要昆虫, pp. 114–156. 杉山恵一編, 第一法規.

c. 昆虫と私：カミキリに惹かれて．インセクタリウム，**20**(12): 2.

1984 a. 日本産カミキリ大図鑑．567 pp．日本鞘翅目学会編．講談社．(＋高桑正敏，窪木幹夫，小宮次郎，槇原　寛，大林延夫)

1985 a. 輸入種と考えられるカミキリ．昆虫と自然，**20**(1): 16.

b. カ．鞘翅目．静岡県の自然環境—静岡県自然環境基本調査の概要—，pp. 90–96．静岡県．

1986 a. 今月のむし—ヒメヨツスジハナカミキリ—．月刊むし，(179): 1.

b. 甲虫類．長島ダム建設地周辺環境調査報告書，pp. 183–237．建設省中部地方建設局長島ダム工事事務所．

c. A new species of the Papuan longicornia (Coleoptera). *Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol*, (2): 245–246.

1987 a. 静岡大学 24 年間の思い出．静大だより，(87): 5.

～草間慶一先生を囲んで～

出席者：草間慶一・小比賀正敬・新堀豊彦・露木繁雄
高桑正敏・藤田　宏(司会)・小笠原　隆
期　日：1987 年 6 月 6 日　　場所：神奈川県立博物館

草間先生のカミキリのルーツを探る

藤　田：本日は遠いところをどうもありがとうございました．今まで珍品を語る座談会はたくさんやってきましたが，今日は草間先生を囲んで，カミキリ一筋 50 年を振り返った座談会をやってみたいと思います．まず草間先生に，なぜカミキリを始めたのかという小学生の頃からの話をお願いします．

草　間：母の叔父がチョウのすごいコレクターだったんです．その影響で，5 才頃からチョウを採ってたんですね．それで，小学校の 4 年生までずいぶんチョウを採ったんですけど，小学校 5 年の時に隣に座っていたのが，今北大にいる田中 明さんでして，彼がチョウより甲虫の方がおもしろいから一緒に甲虫を採りに行こう，というんで甲虫を採りだしたんです．それから，中学も同じ湘南中学 (現神奈川県立湘南高校) で，一緒に「博友会」へ入ったんですけど，その「博友会」は，我々が入るまではチョウ屋ばかりで，我々が甲虫屋では最初ではなかったかと思います．それで甲虫を全部採ってたんですけど，僕が本当にカミキリ屋になろうと思ったのは，中学 4 年の時 (昭和 15 年) に白骨温泉へ行って，ハナカミキリをすごく採ったんですよね．それでもうすっかり嬉しくなって，それから実をいうと上高地へも行って，網を持ってずっと歩いたんだけど，誰にも文句を言われなかったんです．(笑)

露　木：そりゃ，そうだろうねえ．(笑)

高　桑：規制なんか何もなかった頃でしょうからね．

草　間：そこでキベリカタビロハナカミキリを採ったんですね．その頃図鑑には非常に稀と書いてあったんですよ．それですっかり嬉しくなっちゃってね．(笑) それじゃ，オレはカミキリをやろうって決めたのが昭和 15 年だったんです．それからずっとカミキリをやっているわけなんですけど，中学 5 年の時は，高等学校の受験で本当はみんな勉強している時だったんですけど，夏に父親と一緒に八ヶ岳へ行ったし，昭和 18 年には，当時中根さん (中根猛彦氏) が書いた昆虫界の「野尻湖畔のカミキリ」というのを見て，野尻湖畔へも採集に行きました．実は，その時も高等学校の一次は受かったんだけ

ど，僕はなにしろ中学 1 年の時に欠席日数が規定よりも 1 ヵ月くらいオーバーしてたのを，受持ちの先生が鉛筆で書いてある所を全部消してくれて，3 日前までにしてくれたんですよね．

藤　田：それは虫を採ってて欠席日数がオーバーしたんじゃないですか?

草　間：違うよ!(全員爆笑) 夏休みは確かに虫採りに行ったけどね．それで，大学に入る時に東大の動物へ行きたいと思って聞いたら，虫屋は歓迎しないって言われてね．それでまあ，おやじが化学だったんで，またうちの親戚に化学出てるのがたくさんいたもんですから，化学へ入ったわけです．虫は，おやじが趣味にしておけって言うもんですから趣味にして，今まで結局趣味で通しちゃったわけなんです．

藤　田：どうもありがとうございました．草間先生のカミキリをやりだしたルーツが湘南中学の頃だということで，その湘南中学の後輩の小比賀先生と新堀先生が今日いらっしゃってますので，その頃の先生方から見た草間先生が，どういうひどい人だったかを教えて下さい．(笑)

小比賀：僕が最初お会いしたのは，虫が原因だったんですね．コトラカミキリを逗子で採ったと言ったら，ウソだ! と言われてね．(笑)

露　木：そりゃそうだ．(爆笑) (分布的に考えられない場所での採集例なので)

小比賀：でも本当にキイロトラがたくさんいた薪に来ていて，平山の図鑑 (平山修次郎：原色千種続昆虫図譜) のイメージをちゃんと覚えてたのね．すぐ判ったもの．本州には稀なり，って一．だからすごく嬉しいわけよ．それを小学校の展覧会に出して，草間先生もご覧になって，湘南に入った時お会いして，ウソだ! と言われた．(笑) そりゃ雲の上の存在だったけど，でもずいぶんお世話になりましたよ．それから僕も本格的にカミキリを始めるようになったんです．そのコトラの標本は今でも持っていますよ．そういえば，僕が湘南に入った年 (昭和 19 年) の夏休みを使って，奥日光へ連れてってもらったんですけど一．

草　間：丸沼の立派な旅館に僕らだけだったんだよな．

小比賀：大尻沼で草間先生がオオアオ採られて，初めて生きているのを見たのでうらやましくてしょうがないわけ．あの当時から大沢 (群馬県利根郡片品村) には土場があったんだけど，その土場で僕がセアカハナ採ったら，草間先生が怒るんだよ．(全員爆笑) オレは採ったことがないって．しょうがないんで，オオアオととり換えてもらって一．いいトレードだったかどうか判らないけど．(笑)

新　堀：僕なんか実際には，草間先生が角帽かぶって湘南に来られるのを遠くで見ていたという感じで，湘南生物部では一度も一緒に山に行ってないんです．大平さんとか，亡くなった森さん (森　可基氏) とかと，しょっちゅう山へ行ってたんです．ずいぶんいろいろな所へ行ったけど，最後の頃は天城へ行ったんだよね．

小比賀：そう，学校さぼってね．(爆笑)

新　堀：試験がある前だったのにね．

藤　田：その頃は皆さんがカミキリ屋になっていたんですか?

新　堀：そうなんだよね．

藤　田：今でこそカミキリ屋は多いんですけど，その頃はそれほどメジャーじゃなかったと思うんですけど一．やっぱり誰か 1 人やっていると，みんな始めちゃうんですね．

高　桑：さっき，雲の上の存在と言われましたけど，どういうところが雲の上だったんですか? 例えば，怖かったとか，やさしくなかったとか，いろいろ表現はあるでしょうけど．

小比賀：それはやさしかったですよ．今でもやさしいでしょ．(笑) あの頃の上級生は神様だったんですよね．1 年上でも大変なのよ．それが 10 近くも上なんだもの．そりゃ，平伏するわけですよ．

新　堀：そういう意味です．しかも東大で，カミキリの元祖みたいな方だったから崇め奉ってたんです．

カミキリ分布表作成の経緯と功績

藤　田：それでは，湘南中学時代にさんざん暴れた草間先生が，時代が経ち，京浜昆虫同好会に入られまして，被害者がさらに広がりました．京浜カミキリグループ全体にその弊害が及んできた，ということですけど，その京浜時代のお話しと，それに関連して，「新しい昆虫採集」の末尾にカミキリの分布表を作られましたけど，その辺の経緯をお話しいただけますか．

草　間：あれはねぇ，南ア聖岳へ行った時だったんだけど，何かこういったものがないかって話が出てね．

藤　田：その最初の時のは発行が 1958 年ですから，僕はまだ 5 才くらいだったんですよね．(笑)

露　木：「1958 計画」とか言ってね，同好会の西川協一大教祖がぶち上げてやったわけ．それを 3 回．

小笠原：1958, 1965, 1971 年の 3 回ですね．

草　間：そう，それで最後に，4 回目で図鑑になったわけです．↗

草間慶一先生

↗**藤　田**：この一番元の分布表を作る以前のまとまったカミキリの資料にはどういうのがあったんですか?

高　桑：いちおう，松下さんが北大紀要でまとめられた論文があって，それが戦前の皆さんがまず使われた資料だと思うんですよね．

草　間：そういえば，松下さんにヒナルリハナ送って，あれがハムシかカミキリかでもめた．(笑)

藤　田：確かにあれは一瞬考えますよね．似たようなハムシもあの頃出てくるし．

露　木：僕らの頃はもういい時代だったんだよ．すでにそういったものは，これはカミキリだとか，これはカミキリじゃないとか判るんだもの，草間先生のところに行けば‥‥．

高　桑：戦後出たのでは，保育社の原色昆虫図鑑の初版が 1955 年．だから，1955 年にはミスはあったにしてもちゃんとした図鑑という形でまとまっていた．

藤　田：そうすると，最初の分布表を作る時に，いちおう足がかりとなるものはあったんですね．

高　桑：図鑑は戦前からあるにはあったよ．特に平山のシリーズとか神谷の甲虫図譜なんかも．

小比賀：松村さんの変な絵のもので，ただしネキがいっぱい出てるのもあった．(笑)

藤　田：しかし，カミキリ分布表の草間先生の一番の功績は，珍品度をたくさん書いて下さったことで，これが非常に励みになったんですよね．

露木・新堀：そうなんですよね．あれは非常にいいですよ．

藤　田：一番最初のなんですけど，珍品度が 6 段階方式になっていて，「最も普通」「普通」「やや少ない」「少ない」「稀」「非常に稀」と書いてあって，高校生の僕としてはそれだけが励みで，どんなに努力しても「やや少ない」くらいまでしか採れないんですよね．それで，「非常に稀」というのを生まれ

小比賀正敬氏

て初めて採ったのが，上野公園のテツイロヒメで，なさけないんですけど，最初のリストには「非常に稀」になってて，ああオレもやっと「非常に稀」という虫を採ったんだって感激したんです．(笑)

露　木：今だってそうだよ．北隆館の図鑑がなぜ不評なのかって，それが入ってないからなんだよね．

藤　田：だいたい図鑑の解説の中で，記載の難しいところを読む人は少なくて，最後の何で採れるのか，とかそういうところしか読まないんですよね．さらにリストに，持ってる虫に白丸付けて，自分で採るとその白丸を塗りつぶす．ずいぶんそういう活用をしたものですよね．(笑)

露　木：みんな同じことやってる．(笑)

思い出のカミキリ達

草　間：カミキリで最初に採った新種というのはヒメヨツスジハナなんですよね．

露　木：あれは僕が初めて南アへ本格的な採集に引っぱってってもらった時のやつですね．

草　間：絶対新種だと思ったもんね，採った時に．

小比賀：飛んでても何か雰囲気が違いましたからね，あいつは．

藤　田：そういう野外の直感っていうのは当たるんですよね．

草　間：それでね，あれを大林さん (大林一夫氏) のところへ持ってったら，ああ，これは普通のヨツスジハナだってね，それで中根さんのところに持ってったら，あっ！新種だ，というんで，ところが実は大林さんのところにも標本を置いてきてたもんだから，それじゃあと，OHBAYASHI et NAKANE って具合になったんですよ．

藤　田：あと草間先生の名前が付いているので，キベリカタビロハナとか，チャイロヒゲビロウドなんかもありますけど．

草　間：あの (キベリカタビロハナの) 黄色いやつね．あれは本当，最初南アで採った時は驚いたね．

高　桑：実はあの黄色いのにも，本当に汚ない黄色のと，赤っぽいのと，2 つの型があるんですよね．

小比賀：じゃあ本当に汚ないのが *kusamai* だよ．(全員爆笑)

藤　田：あと，チャイロヒゲビロウドも，最初に草間先生が発見されたんですか?

草　間：そう，逗子でね．

露　木：あれは，ニセビロウドとかとはどうしても違うんで持ってったのよね．

草　間：それで前はね，イギリス人が名前を付けた何とかって種で言われていた (*fulvicornis*) んだけどね，ところがロンドンで見たら全然違うんですよね，これが．

藤　田：あと草間先生が採られた感激のある珍品とか，そういうのがありましたら‥‥．

露　木：やっぱりオオトラじゃないですか?

高　桑：いやぁ，それは偶然にしても，(笑) ほら，あるじゃないですか，*Aragea mizunoi*.

草　間：あーそうだ！　あの天城で採ったやつね．

小比賀：採った時，喜んだっけ?

露　木：わりーこと言ってる．(笑)

草　間：あれは判んなかった，何だか．小さくて．それで方々に貸してる間に足とられちゃってね．(笑)

高　桑：触角もね．

草　間：そう，採った時はちゃんと完全な標本だったんですよ．

小比賀：あれは水生池から八巻林道にあがっていく途中の叩き網なんだよね．

藤　田：やっぱ，採った瞬間，ホソヒゲケブカとかクリイロチビケブカじゃないと思われたんですか?

草　間：うん，変なもの採ったなーって思いましたよ．

露　木：あれは，小比賀さんがヒゲナガヒメルリ採った時だったかもしれないな．7月10日じゃないの?

小笠原：だいたい覚えているんですよね，そういうのって．

露　木：そうなんだ，とんでもないこと覚えてんだよ．(笑)

新堀豊彦氏

高　桑：ところで，オオトラはどうやって採られたんですか?

草　間：オオトラはね，日光の菅沼で薪が積んであったんですよ，かなり高く．それで下から見たら何かカミキリみたいな頭が見えて，それで上へあがってみたらオオトラだったわけ．

高　桑：その発見者は誰だったんですか，最初の．

草　間：僕だよう，何言ってんだよ．(爆笑)

高　桑：でも，こういうケースが多いの，僕知ってます．あっ，あそこに何かカミキリの頭が見えるなあって言ったら，どれどれって草間先生が採っちゃうの．(笑)

草　間：いやぁ，それは違うよ．(笑)

藤　田：草間先生は，今日本のカミキリは何種くらい持っておられるのですか?

草　間：いやぁ，数えたことないからなあ‥‥．

高　桑：いえいえ，草間先生は勘定してます．なぜかと言うと，僕のところに紙よこしましてね，これだけオレ持ってないからお前何かよこせって‥‥．(笑) ところが草間先生持っていないやつなんかもう相当の珍品ですから，僕だって持ってないんですよ．無茶を言っては困りますよ．(笑)

草　間：何しろ，昔の日本産で40何種かしか持ってないのがなかったんだけど‥‥．

藤　田：でも，今だいぶ増えましたからね．

草　間：そうなんだ〜．

藤　田：大図鑑で670ですけど，あとまだかなり増えそうですからね．

新　堀：だってもう10〜20種くらいは増えてるでしょ．

露　木：まあ，かなりいい加減そうなのもあるけど‥‥．

草　間：うーん，別種じゃないと思うのがずいぶんあるんだけどねえ．

海外でのご活躍の数々

藤　田：海外では，今年台湾に行かれてるんですよね．

草　間：台湾は5月の連休の時行って，2〜3種判らないのがあるんだよな．台湾のカミキリはドイツ箱で10箱くらいあるかなあ．

藤　田：台湾のカミキリ図鑑という話もたち消えになってしまったんだけど‥‥．

高　桑：しかし，それはどうしてたち消えになったんだろうねぇ，フジタ君?

藤　田：先生がご病気になったんで‥‥．(笑) 最初，草間先生が作ったリストを改訂して，それに図

露木繁雄氏

版を付けて出したいと思ってたんですけど，その改訂するのがものすごい手間で，先生にそれをやっていただくと，奥さんとお嬢さんに恨まれるんじゃないかと思って遠慮してるんですよ．(笑)

高　桑：上手だなあ．(笑) 本当は藤田君が担当することになってたんです．だいたい鞘翅目学会の席上でね，日本産と台湾産のカミキリ大図鑑を 2 冊作る，それで日本産の担当は僕がやって，台湾産は実は藤田君がやるということになってたんです．で，僕が日本産をやっているのを見てて，とてもあんなに時間使うのはイヤだ！　という風になって，台湾産はじゃあ逃げちゃおって逃げて‥‥．

藤　田：いや，ちょうど今からやろうかなあ，という時に先生倒れられちゃって‥‥．(笑)

新　堀：しかし，台湾には何種くらいいるんだろう?

藤　田：あのリストではいくつでしたっけ? 600 くらいですか?

露　木：600 はないんじゃないかな．(実際にはある程度の疑問種を入れて 617 種)

高　桑：割と思ったより少ないんですよね．名前を付けなきゃいけないのが沢山あるんですよ．

小笠原：名前が付いてるのがそのくらいですね．じゃあ，あと判らないのが 100 単位であるんだ．

草　間：そうなんですよ，たくさんあるんです．

藤　田：そのうち 500 以上は日本にありますからね．せめて標本写真だけでも並べたのがねぇ，図鑑は無理でしょうけど．

新　堀：そうですね，やっといた方がいいのかもしれませんね．

小比賀：ところで草間さんは，アメリカでもずいぶん開拓されたでしょう．

草　間：ええ，アメリカでは約 400 種採ったんですよね．それでアメリカ人のひとりをカミキリ気違いにしちゃって‥‥．(笑)

露　木：衣笠さんともアメリカで会ってるんでしょ．で，戻ってきて彼も気違いになっちゃって．(笑)

草　間：アメリカでは西部に 2 年，東部に約 1 年 3 カ月いて，アメリカのカミキリ 1200 種のうち，約 400 採ったわけです．あと，交換して半分くらいはあるんじゃないかな．ドイツ箱で 9 箱あるから．

小比賀：入れ替わりに僕が行ったんですよね．アリゾナから話があって，あんな変な所に行くのはイヤだって言ったら，草間先生が，あそこは有名な採集地だからぜひ行けって．(爆笑)

藤　田：草間先生は，台湾，アメリカ以外の海外では，ニューギニア，中国，タイ，インドへも行かれてるんですよね．南米とアフリカくらいですか，行ってないのは?

草　間：でもアフリカはね，北大の田中　明さんが米作を教えにずいぶん行ってて，ところがね，米を作る所はカミキリがいないんだってさ．(笑) それでもアフリカのカミキリを 2 箱ほどもらったけど，もう全然名前が判らない．(笑)

露　木：あとソ連へも行ってるでしょ．ネキのタイプ標本とか調べて，あれで相当判ったんだよね．

草　間：何しろ，ソ連に文部省から行った連中は沢山いるんだけど，みんな 3 カ月というのを 2 カ月くらいで帰ってきちゃうらしいんだよね．僕は 1 カ月延期したんですよ．(笑) 帰ってきたら，あなたみたいな人は初めてですって‥‥．(爆笑)

小比賀：あれ，いつから行かれたんでしたっけ?

草　間：4 月から 6 月までの予定で‥‥．

新　堀：そりゃ，1 カ月延ばしたくなるよね．(笑)

藤　田：海外の話の続きなんですが，新堀先生は中国とタイに草間先生と一緒に行かれたんですよね．ふつう 2 回は行けないんですけど．(笑) 草間先生はだんだんお年になられても，ちっとも大学生と変わらなくて採ってらっしゃるんですけど，一緒に行かれてそのハレンチな採り方はどうでしたか?

新　堀：いやあ，感服をしましたね，本当に．よくあそこまでおやりになるというね．私なんかずっこけちゃって，途中でいやになるんだけど，絶対やめないですね．

藤　田：沖縄なんかで会った時も，全然大学生と変わらないですもんね．

高桑正敏氏

新　堀：だいたい中国へ行った時なんか，バスに乗る時も必ず先生が一番入口に近い所に座るんですよね．(笑) 誰よりも先に降りられるようにって，これがすごい! (笑) 先生，もっといい所に座って下さいって言っても，いや僕はここでいいって‥‥．(全員爆笑) それからタイの時も，ドイステップ (チェンマイ近郊) ではじめ先生全然花に当たらないんですよ．それでこの木にいますよっていい場所へご案内したら，その木に半日いらっしゃいましたよ．(笑)

藤　田：そのあと秋山秀雄君がその木に行ったら，花が全部散ってたって．(爆笑)

新　堀：とにかくたいしたもんです．それで僕が非常に不思議だと思ったのは，暑い所でヤッケ着て，七ツ道具全部持ってね，僕なら死んじゃいますよ，あれは．(笑)

藤　田：それは還暦の頃ですよね，3 年くらい前のことですから．

草　間：でもやっぱり，最近体力が落ちたと思うよ．

小比賀：ふつう今の言葉，30 か 40 の頃に言うもんですけどね．(笑)

藤　田：あの採りたい，採りたいっていう気持は，ふつうそこまで続かないんですけどね．たいてい卓上採集の方にいってしまうんだけど．(笑)

新　堀：その方面はその方面で頑張っておられる．(笑)

高　桑：有名な話でね，誰かが珍品を採ったって言うと，どれどれっていつの間にか草間先生の毒管の中に入ってる．(笑) それで，まだ生きてるうちに自分の毒管の中に入れたから，これは僕が採ったんだってね．(笑)

草　間：そんなこと言ったかなあ．(笑)

小比賀：その辺のところだけは，若手にも完全に引き継がれてるね．(笑)

これからも草間先生に期待しています

藤　田：それでは最後に皆さんから，今後のカミキリのことでも，草間先生との今までのことでも何でもけっこうですから，短く，ひと言ずつしゃべっていただいて，それで最後に草間先生にまとめていただきたいと思います．それでは年の順で小笠原君から．

小笠原：僕は四国から出てきたんで，最初は関東色にも関西色にも染まってなくて，でも結果から言えば，関東のカミキリ界のすごくオープンな雰囲気が自分の性には合ってたと思います．その関東の御大として草間先生がいらっしゃって，僕自身は直接採集をご一緒させていただいたとかいうことは不幸にしてなかったんですけれども，そういった東京のカミキリ界の土台を草間先生が作られてきた

藤田　宏氏

わけですから，この意味で，草間先生には大変感謝しております．これからもますます頑張っていただきたいと思います．

藤　田：僕は草間先生とは沖縄で会ったくらいで，一緒に採集に行ったことはないんですけど，僕はだいたい草間先生の孫弟子みたいなものでして，上に常に怖い高桑さんがいましたから―．それでサロンに出て，カミキリニュースをやらされたのが運の尽きで，そのままズルズルと 20 年くらいカミキリをやってきたわけです．草間先生は，全然先生という感じじゃなくて，カミキリを集める時のライバルというか，まったく虫の話をする時は同じ線上で話されますし，それから草間先生が書かれた採集記なんか読んでも，若いのを追い越してすごく気持ちが良かったとか，そんなことばかり書かれてますんで，あまり無理されても困るんですけど，日本産全種を諦めないでやって欲しいですね．僕も今はクワガタやってますけど，諦めないでやるつもりですから．

高　桑：カミキリ大図鑑をやったわけですけど，あれははっきり言って，草間先生に対しての，みんなを代表しての恩返しというかな，要するに，草間先生が関東でみんなを育ててくれて，そういった者たちが，今ここまで判りましたよ，というものをたまたまやらされたということです．草間先生は，これからも例の，2 つあったら 1 つくれよ，というのをもっと言ってもらって，もっとも最近はもうあげないけど，(笑) あまり無理しないで虫採りを続けていっていただけたらありがたいな，と思ってます．それで，あと 20 年経ったらもう 1 回号令をかけて，もう 1 度日本のカミキリのまとめをやられることを希望します．

草　間：えー，20 年後にかあ! (笑)

藤　田：もう 1 回やらないと悔いが残りますよね．(笑)

露　木：僕なんか，虫はとにかく草間先生のところに出入りして始めたようなものだから，この悪の道に踏み込んだのは草間先生のせいだという形になっていますけどね．だから常に先生であったんだけど，これは決して虫だけじゃなくてね．毎晩夜中に押し掛けて (草間先生の家へ)，帰ってくるまで待ってて‥‥．なかなか帰って来ないんですよ，遅くまで．

草　間：あの頃は学位論文をまとめる頃でね，逗子まで帰っても一杯飲んでたもんだから．(笑) それで，ワイフはもう寝ちゃってるんだよね．で，露木だけが起きて待ってんの．(笑)

露　木：まあ，そんなことやってて，ずいぶんといろいろ教わって，でもいつまでも僕にとっては先生であるし，お元気でやってもらいたいなあ，というのが現在の心境ですね．

新　堀：私は湘南の生物部で，じかじゃなかったにしても草間先生の影響下で育てられて．湘南中学・高校の生物部の歴史的な伝統というのは，草間先生を頂点としてあって，その仲間に入れていただいたのが大変ありがたかったと思っています．私は途中で，仕事が忙しかったから 20 年ほどずっこけましたけど，浦島太郎の心境で虫屋の仲間に戻ってきて，だいぶ様子が違ったので大変だったんですけどね．(笑)「月刊むし」を，いきなり高桑君からたくさんもらって，ずーっと見てたんですよ．それで燃えたんですけどね．それでカミキリに関しては，草間先生の切り開かれた道は大きかったし，今でもちゃんと元気で一緒に海外の採集旅行ができて，大変楽しい思いをさせていただいていることを，心から感謝しています．

小比賀：静大はリタイアされたわけですけど，虫屋なんてのは絶対リタイアなんかないんだから．(笑)

でも，草間さんが定年というのは，やっぱり僕らにもおおいなる感慨があるわけでして，考えてみれば，10年経ったら僕もリタイアですからね．そしたらおおいに一緒に虫採りに行けると思って，今から楽しみにしているのね．(笑) どっか虫の採れる所にいい別荘でも作って下さいませんか? 本当にお体を大切に，いつまでも元気で虫採りを続けていただきたいと思います．

小笠原　隆氏

草　間：皆さんからいろんなこと言っていただいて嬉しいんですけど，僕自身は日本の中で対馬に行ってないんですよね．対馬のカミキリで数種持ってないのがありますし，それに対馬の虫は朝鮮系ですよね，だからぜひ対馬に行ってみたいんですよ．それから琉球列島はだいたい行きましたけど，沖永良部とか行ってないんで，これも行ってみたいですね．

小笠原：沖永良部は楽しいですよ．雑甲虫が全然いない島，叩いても叩いてもカミキリしか落ちない珍しい島ですよ．

草　間：それならなおさら行ってみたいですね．あとは南米ね．むし社がツアーで行った時があったでしょう．あれが脳内出血した年だったもんだから，どうしてもワイフが行くの許してくれなかったんだよね．それだもんで，本当にあれは残念だったんだ．また計画して下さいよ，南米を．

藤　田：時々やっていますけどチョウが多いんですよね．モルフォを採るやつとか．甲虫は難しいですよ．ちょっと1週間行ったくらいじゃ採り方が判らないから．チョウは飛んでるからいいけど—．

草　間：何しろ，南米はカミキリがたくさんいるんですよね．チリの人とは交換したことがあるんですけど，ブラジルの方は全然だから—．

露　木：でもやっぱ，僕らの頃はとにかく新しい採集地を探し出すのが楽しかった．

藤　田：それは僕らも，サロンに高校生の時行った時さんざん言われたんで，やっぱり今でも，有名な所も行きますけれど，基本的には全然違う所に行くとかやってます．

露　木：これは草間さんの影響なんだけど，でも実に大切なことなんだよね．

藤　田：じゃあ，そろそろこの辺で時間にもなりましたので，最後に草間先生の健康を祝って，新堀先生に乾杯の音頭をとっていただきたいと思います．

新　堀：それでは，本当に先生，ひとつお元気で，いつまでもリーダーとして頑張っていただきたいと思います．よろしくお願いいたします．ありがとうございました．

全　員：乾杯!

(編集・文責：小笠原　隆・高桑正敏)

草間先生
(Insect Magazine　75 号より引用)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 19–24, June 15, 1988

北海道のカミキリ相

竹田昌史

北海道地方には，日本産のおよそ 1/3 にあたる 200 種類以上のカミキリムシが記録されている．しかし，北海道でのカミキリムシの記録は一部の地域に集中し，いまだに未調査の地域は数知れない．一方，日本のカミキリムシの分布を考えるうえで北海道は非常に重要な地域である．古く北海道成立以前に分布を広げた，旧北区系，南方系の遺存種に加え，北からの寒流に乗って分布を広げつつあるもの，逆に南からの暖流に乗ってやってくるものがぶつかり合い，これらの要素がからみあって，非常に興味深いファウナを形成している．

以下，各亜科ごとに北海道におけるカミキリムシの分布について述べてみたいと思う．

今回北海道のカミキリ相を語るに当たって，便宜上北海道を 6 つの地域に分けて呼ぶことにする．

道南……黒松内低地帯以南の地域
札幌周辺‥黒松内以北から石狩平野までの地域
日高……日高山脈以南の地域
道央……旭川周辺（大雪山脈を含む）の地域
道北……天塩・留萌周辺より北の地域
道東……大雪・日高山脈より東の地域

以下の文中では，特記なき場合は上述した地域を意味するとお考え願いたい．

1. ノコギリカミキリ亜科

ウスバ，ノコギリ，コバネの 3 種類が全道に広く分布すると思われる．各種とも，今まで記録のない島々での調査を期待したい．

2. クロカミキリ亜科

クロカミキリは道南での記録はあるようだが，筆者の知っている限りでは採集した人を知らない．少なくとも，本州ほど個体数は多くないであろう．かつて筆者が高校生であった 1976 年頃，小樽の天狗山で確かに採集した記憶があるのだが，その当時はそれほど貴重なものとは知らずに友人に譲ってしまった．その友人は昆虫採集をやめてしまい，標本の所在も不明なので今となっては確証がない．札幌周辺の虫屋の記録を期待したい．

3. マルクビカミキリ亜科

ムネツヤサビ，オオクロ，ヒメマルクビヒラタ，オオマルクビヒラタ，トドマツが全道的に普通である．ツヤナシトドマツは数例道央での記録がある．しかし，筆者たちの確認した多数の標本中には見出せず，かなり少ない種なのかもしれない．ぜひお手元の標本を見直していただきたく思う．ツシマムナクボは，道南で採集されている．これは海流によって分布を広げていると思われる種類であり，苫小牧や日高の西海岸でも採集される可能性がある．ホソトドマツの採集例は道央，道北に集中し，あまり多くないが，筆者は千歳市内でエゾマツの生木に集まっているところを多数採集したことがあ

図 1. エゾマツ衰弱木上のホソトドマツカミキリ.

る．発生時期が 8 月上旬以降と遅いため，これまであまり調査されておらず，まだ隠れた多くの産地があることと思う．

この亜科のカミキリは各種とも分類上の問題点が多く残っていると思われ，もっと細かな調査・研究が必要であろう．

4. ホソカミキリ亜科

ホソカミキリが全道的に普通．

5. ハナカミキリ亜科

この亜科については，森，浅野，岡本 3 氏による詳細な報告がある（ちくばききり，(1): 1-51）ので詳しくはそちらを参照されたい．ここでは，若干重複する点はあるが，特徴的なもの等について述べておくことにする．

モモグロハナは道東の川湯における 1 例のみである．カラフトトホシハナとトホシハナは，混棲地でも場所的または時間的な棲み分けを行っていて，同じ日に同じ場所で両種が採集できることはほとんどない．この両種の正確な分布・生態の報告が待たれる．コアオハナの記録が 1 例あるが，花上に集まるという生態から考えると，もともと土着しているものであれば今まで 1 頭しか採集されないことは考え難く，したがって偶産の可能性が高い．

セスジヒメハナ以外の *Pidonia* は，私は偶産か，誤記録ではないかと考えている．もし本当に産するものなら，もっと大量に採集できるはずである．

ヒゲブトハナは，幼虫が大木のうろの部分に寄生するので，そのような大木が多く残っているような林の中ならどこでも棲息している可能性がある．スミイロクビボソハナは大雪山系以外の記録はないが，知床や天塩岳等には産するのではないだろうか．ヤマトキモンハナは，今までのところ非常に採集例が少ない．札幌周辺や道南の積極的な調査が待たれる．また，ミヤマルリハナ，クロルリハナは札幌周辺を除けば採集例は少ない．ヨコグロハナは朱鞠内湖周辺以外の記録は糠平の 1 例だけだが，道央，道東，道北の湿地帯を捜せば発見できるような気がする．筆者の経験では，蒸し暑いときにじめじめした場所で採集された個体が多い．カラフトヨツスジハナは，最近札幌周辺でも採集された．道央，日高の西側での記録が待たれる．エトロフハナも，最近積丹半島や稚内で採集され，北海道の海岸地帯の調査を進めればまだ産地は増えることと思う．このカミキリは，千島海流に乗って分布を広げている典型的な例であろう．

カエデノヘリグロハナ，クロサワヘリグロハナは，分布は局地的だが個体数は少なくない．両種が同一場所に分布している場合，時期的に完全に棲み分けを行っていて，カエデノヘリグロハナが姿を消してから数日後にクロサワヘリグロハナが現れる．タテジマホソハナは札幌周辺と道南でのみ採集されているが，採集例は非常に少ない．ニンフホソハナは石狩平野西部以南に分布し，場所によっては多産する．ヨスジホソハナは道央以東にしか分布しないと思われていたが，苫小牧での分布が確認され，タケウチホソハナとの棲み分けの問題とともに詳しい分布調査が必要である．

アイヌホソコバネは，朱鞠内以外での記録は愛山渓の 1 例しか発表されていないが，暑寒別岳周辺や，道北での採集例もあるようである．採集者の発表を待ちたい．オニホソコバネは道内全域で採集されているものの，個体数は少ない．ホソコバネは，1980 年に札幌市円山で浅野正信氏によって大量

に採集されて以来，大珍品から駄物に落ちてしまった感がある．全道に広く分布するようである．一方，ヒゲシロホソコバネは札幌周辺の記録しか知らない．円山では前種と混棲しているが，時期的な棲み分けを行っている．前種の産地で，もっと遅い時期に採集をしてみて欲しい．ウスリーホソコバネは本当にホソコバネと別種なのだろうか？　筆者達の円山のホソコバネをみると判然としない個体も多く，再調査を行う必要があるであろう．またホソコバネとツヤホソコバネが本当に同種なのかどうかについてもいろいろ疑問があるのだが，字数の関係上別の機会に譲りたいと思う．カラフトホソコバネは北海道には分布していないのではないだろうか．筆者は，このカミキリは *Larix* (カラマツ属) 依存種ではないかと考えている．本州での分布を見ても，天然のカラマツが分布している地域でしか採集されていない．北海道には天然のカラマツはなく植林のカラマツのみであるので，もしこの考えが正しければ分布しない可能性が高い (樺太にはグイマツという *Larix* 属の樹種が分布している)．

6.　カミキリ亜科

ミヤマカミキリの記録はわずかながら確実にあり，かつて札幌市内の果樹園で採集された個体を確認している．道南の調査を行えば再発見できるかもしれない．トビイロの標本を筆者は確認していないが，道南には産する可能性が高い．ヨツボシも道南で採集されているようだが，記録は少ない．採集されている方に発表をお願いしたい．ヨコヤマヒメの分布の可能性はあると思う．また，*Stenhomalus* 属の種で筆者が確実に産すると言えるのはトワダムモンメダカのみであるが，他の種類も実際に産するのかもしれない．道南や南部の海岸線の調査を進めてみる必要があるであろう．

Obrium 属は，ナカネアメイロとサドチビアメイロがほぼ全道的に分布している．個体数も少なくない．例えば，両種とも札幌駅のすぐ裏にある北海道大学の構内でさえ大量に採集することができるのである．エゾアメイロと思われるものは，札幌周辺でも採集されているが，アカオニアメイロは道東での採集例しかないようである．ツシマアメイロとされているものはサドチビアメイロの黒化型ではないだろうか？　ツシマアメイロが産すると言う朱鞠内で，筆者達は，体色が赤い型，赤～黒へ変化する中間型，黒い型の各型の *Obrium* を採集している．

Molorchus 属ではシラホシヒゲナガコバネが，*Glaphyra* 属ではカエデヒゲナガコバネが全道的に分布し，個体数も多い．コジマヒゲナガコバネは，やはり全道的に分布するが，採集例は少ない．コボトケヒゲナガコバネは道南で採集されているようだが，標本は未見である．

トラフホソバネの採集例も少ないが，藻岩山，円山でオヒョウの立ち枯れで多数採集されたことがある．ルリボシは全道的に多く分布し，晩夏に美しい姿を見ることができる．ジャコウの分布は局地的だが，個体数は少なくない．道南での採集例はあるのだろうか？　ミドリは全道で普通だが，オオアオはやや少ない．しかし，クルミが多くある場所では時々見かけることができる．アオも全道に分布するようだが，個体数は多くない．

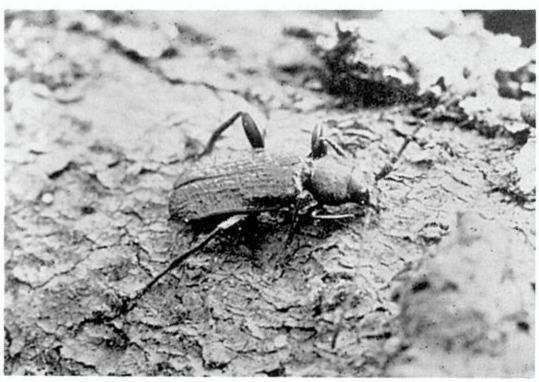


図 2．エゾマツ材上のミドリヒラタカミキリ．

クロヒラタは，局地的にではあるが全道的に産するようである．イタヤカエデの伐採木上で見かけることが多い．ルリ

ヒラタは，道南や札幌周辺ではあまり多くないが，その他の地域では大発生することもある．特に，民家の軒先の針葉樹の薪の上で世代を繰り返す時などには，驚くほど大量の個体が見られることがある．ミドリヒラタはつい最近まで大珍品であった．発生時期が早いことがなかなか採集されなかった主な原因であるが，道央や道北では決して少ないカミキリではないと思う．ルリヒラタもミドリヒラタも，植林されたカラマツへと食性を転換しているので，これから徐々に増えていくのではないだろうか．アオヒメスギは，道央，道北，道東のアカエゾマツの立ち枯れ上で見られる．札幌でもただ1例手稲山での記録がある．アカエゾマツ以外の針葉樹では見たことがないので，アカエゾマツの分布地を調査すればまだ多くの産地があると思う．ヒメスギ，ビャクシンとも，札幌周辺以南で記録がある．明らかに人為的移入種であり，植林されたスギについてきたものと考えられる．今のところ，スギカミキリの記録はないようである．チャイロチビヒラタはそれほど多くはないが，全道的にみることができる．筆者の後輩が，北大構内のノブドウから大量に羽化させたのに驚いた経験がある．

オオトラは，本州に比べればやや多いものの，やはりなかなか採集できない．札幌周辺でも食痕は時々見かける．ただ道南では記録もないようだし，食痕も見たことがない．本州産とは形態的に若干異なるようである．トラフは多くないながらも全道的に産する．ムネモンチャイロトラは，道央以東でカンバ類の枯れ枝や，伐採木上でよく見かける．日が陰ると樹皮の隙間にもぐり込む習性があり，カンバ類の樹皮をめくるとつがいでたびたび見つかる．

ヤナギトラ，クワヤマトラ，オクエゾトラの近縁の3種の分布についてはまだ分からないことが多い．オクエゾトラはまだ日高，旭川でしか採集されていないが，大雪山系にも当然分布しているであろう．そのとき，ヤナギトラとの関係はどうなのか，またクワヤマトラとの関係はどうなのか，分布上だけではなく，生態的見地からも興味はつきない．ぜひそのあたりの調査を進めてもらいたい．

ウスイロトラ，ツマキトラは全道的に多産する．クビアカトラは全道的に記録はあるが，かなり局地的である．ムネマダラトラは苫小牧周辺で記録はあるようだが，筆者は標本を確認していない．

コトラは分布地では個体数が多いものの，かなり局地的である．シラケトラは全道的に分布するが，それほど普通種と言うわけではない．シロオビトラは今のところ記録がないが，道南には分布している可能性がある．キンケトラは全道的にごく普通である．さて1987年凄いニュースが伝わってきた．筆者の後輩が，キョクトウトラを材から出したというのである．詳しい話はよく分からないが，追ってその後輩から発表があるであろう．今のところ知床半島でしか採集されていないが，大雪山等の高山帯にも分布しているのではないだろうか？

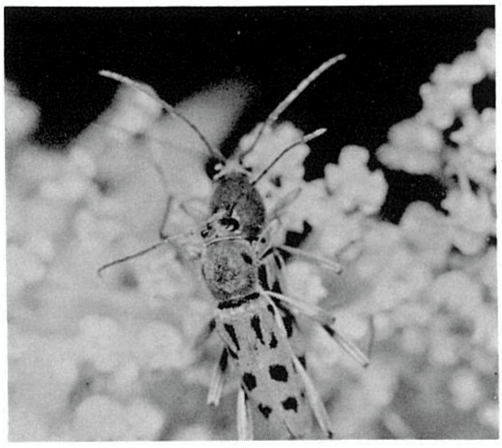


図3. 花上で交尾するムツボシアオコトラカミキリ．

アカネトラ，キスジトラ，エグリトラ，クロトラはどこでも見ることができる．ムツボシアオコトラは，今のところ足寄周辺と朱鞠内が確実な産地であるが，まだ産地は増えると思う．ハセガワトラの採集例も少ないが，ブドウの材採集をすれば，もっと記録は増えるであろう．フタオビミドリトラは奥尻島と積丹半島の記録があるようで，明らかに海流に乗って分布を広げた例である．トウホクト

ラは札幌周辺と道央で局地的に採集されている．しかしそれほど少ないものではないようで，藻岩山では大型の個体がイタドリの花上で大量に採集されている．ホソトラ，ヒメクロトラ，トゲヒゲトラは全道的に花上に多い．

シロトラは全道的に多いが，シロヘリトラは札幌周辺と道央で採集されているのみである．しかし分布地では花上や，イヌエンジュの衰弱木上によく見られ，個体数はそれほど少なくない．スギノアカネトラは，札幌周辺以南の植林されたスギの立ち枯れで採集されている．今まで採集された個体はすべて黒化型である．トガリバアカネトラは標本を確認していない．マツシタトラは全道的に分布する．エゾトラも全道的に分布するが，やや局地的で，分布地でも年による個体数の差が大きい．

ホタルは苫小牧で採集されていると言う．もし採集されている方があれば，発表をお願いしたい．ヘリグロベニはあまり多くないが，全道的に分布するようである．

7.　フトカミキリ亜科

1987年聞いたもう1つのビッグニュースとして，フタスジゴマフが大量に採集されたらしい．これもまた詳しいことは筆者の後輩から発表があるであろう．マダラゴマフは最近採集されたという話を聞いたことがない．他のゴマフの類は全道的に多いが，本州産と形態的に少しずつ異なっているものが多い．今後調査すべきであろう．

コブスジサビは奥尻島のみ，クビジロは札幌周辺のみで採集されているようである．ヒシは少なく，稚内での記録以外に確実な採集例を知らない．シナノクロフは全道的に多い．ヒトオビチビは晩夏につる性植物のビーティングで採集されている．サルナシからの脱出も確認されており，個体数も本州以南ほど少ないものではない．シロオビチビは全道的に多い．

フサヒゲルリは，筆者は分布する可能性が高いと考えている．本州では環境が悪化してきている高山性の湿地帯も北海道にはまだ多くが良好な状態で残っている．積極的な調査を期待したい．ケマダラは各地に多い．

サビカミキリ族の種は，記録のあるものはすべて普通種であるが，本州産とはやはり少しずつ形態的に異なった感を受ける．調査してみたいところである．アカガネは秋に新鮮な個体が多いところから，やはり成虫越冬するのであろう．

エゾ，イタヤは，河原等のヤナギ類の多いところを捜せばもっと記録は増えると思う．ヒゲナガ，シラフヨツボシヒゲナガ，ヒメヒゲナガは全道に，ヒメシラフヒゲナガは道東に産するが，シラフヒゲナガは多分産しないであろう．ビロウド，ニセビロウド，センノキ，ヒゲナガゴマフは普通に，ヤハズは少ないが，全道的に産する．ゴマダラ，チャボヒゲナガは札幌周辺以南に稀に産する．

ムネホシシロは局地的に採集されている．林中のヤマグワを捜すより，桑畑を捜してみることが新分布地を捜す近道であろう．エゾナガヒゲは札幌周辺ではニガキの材上等に少なくないが，道東にはなぜか記録がない．セミスジコブヒゲも，札幌周辺でわずかに採集されているのみである．ハイイロツツクビは全道的に分布するが少なく，ハンノキ類の細い枯枝で時々採集される．*Rhopaloscelis* 属3種，カッコウ，チビコブは全道的に普通である．チビコブには，ツルウメモドキ等に集まる白色の小型のタイプと，オヒョウに集まる黒色の大型のタイプの2種類があるようである．その他にも針葉樹で採集されるタイプがあると言うが，確認していない．ドイ，クモノスモンサビは，全道的に晩秋にも採集される．カッコウ，チビコブ，ハイイロツツクビを含めて，成虫越冬しているのだろうか？　少なくとも上記の種類は，ごく普通に春にも秋にも採集できる．シロオビドイも秋に針葉樹から採集された．

カラフトモモブトは大雪山周辺に多い．筆者は，釧路市内や朱鞠内でも採集したことがあるので．

図 4. 十勝支庁三股の土場の風景.

道東，道央に広く分布している可能性が高い．ナカバヤシモモブトは全道的に分布するが少ない．ゴマダラモモブトは，針葉樹で採集されたものと，広葉樹で採集されたものとでは見た感じがかなり異なる．調査が必要であろう．トゲバ，ホウノキトゲバは各所に普通に産する．ケシの類7種は，ケシとヨコグロケシを除けば全道的に普通種である．しかしヨコグロケシも本州ほど珍しいものではなく，道東に多い．札幌周辺でもオヒョウの細枝でかなりまとまって採集されたこともある．ケシは道南で針葉樹から稀に採集されているのみであるが，それほど少ないものとは思われないので注意して捜してみて欲しい．

大珍品だったキボシマダラも，筆者が吉川賢氏の示唆によって芦別市頼城のヤナギの生枝より羽化させてから，一挙に普通種になってしまった．いまでは，道央から道北，道東にかけてかなりの数が採集されている．札幌周辺には分布していないようである．トホシは全道的にそれほど少なくはないようである．河川沿いのヤナギ類の多いところなら，標高の低い地域でもかなりの数を採集することができる．ムネモンヤツボシは札幌以南に分布し，サルナシの葉上で時折見かける．ニセヤツボシはハルニレやオヒョウの生葉のスイーピングで全道的にかなり確実に採集できる．シナ，ヤツメ，ハンノアオ，ハンノキは道内どこでも，かなり多産する．しかしヤツボシは道内には産しないであろう．逆に，アサは今でも大麻が自生している地域が見られることでもあり，分布しているかもしれない．

キモン，オニグルミノキモン，ジュウニキボシ，シラホシ，カツラ，ヘリグロリンゴは全道的に多産する．ヨツキボシは札幌以南に多い．キクスイ，クロニセリンゴ，リンゴは道央や，札幌周辺でわずかな記録があるのみである．

以上おおざっぱに北海道のカミキリムシの分布について述べた．考えてみればこの 10 年間で北海道のカミキリムシのファウナは大きく書き換えられた．今回筆者の知る限りの事は書いたつもりであるが，埋もれている記録や，筆者の見落とした記録も当然あるであろう．

文頭でも述べたが，北海道にはまだ未調査の地域が限りなくある．と言うよりも調査されている地域はほんのわずかである．特に道南と道北の調査が不足している．多くの新記録，未記録もこれから各地で出るであろう．どんな小さな記録でもかまわない．できるだけ多くの発表をお願いしたい．

さらに加えれば，北海道は一つの地域として見るにはあまりにも広大である．森，浅野，岡本の3氏が試みられたように，各支庁別にカミキリムシの分布を調べる時期が来ていると筆者は考えている．そのためには珍種のデータももちろん大切ではあるが，それにもまして普通種のデータが大切である．この場を借りて読者の方々にご協力をお願いしたいと思う．

最後にこの文が，少しでも今後の調査の踏台になるならば幸いである．

(東京都江東区東砂 8-6-2-1106)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 25–29, June 15, 1988

東北地方のカミキリ相

草 刈 広 一

日本海要素のカミキリ

日本列島のなかで，冬の豪雪が植生や植物の分布に与える影響や，それに伴う動物の特徴的な生態分布，すなわち日本海要素の研究をするうえで，南北に長いゆえに同経度上での比較が可能な東北地方ほどめぐまれた地方はみあたらない．植物に直接依存して生活するカミキリの分布には，特にこの面で興味をひかれる．

田添・大桃 (1985) は，福島県会津地方が，ホソコバネカミキリ属の 3 種，ヒメハナカミキリ属の 4 種，クモマハナ，トホシハナ，チャイロヒメコブハナ，フタスジカタビロハナなどの県内の特産種 24 種 (ただしフタスジカタビロハナは大野 1978, 国道 115 自然環境調査報告，が吾妻山からも記録している) を含むハナカミキリ亜科を中心とする山地性種で構成されていることを示している (表 1).

佐藤・加納 (月刊むし，1984) は，秋田県東南部山地帯でのエゾトラ，トウキョウトラ，ヒゲジロホソコバネ，クロルリハナ等の記録に加え，カエデノヘリグロハナ，ミヤマルリハナの豊産は田沢湖周辺のクリストフコトラのそれとともに特筆される，としている．

山屋・佐藤 (越佐昆，1983) は，新潟県湯沢町元橋周辺のカミキリ相について，低標高地でありながら，亜高山帯の針葉樹林を主なハビタットとする種 (カラマツ，キジマトラ，シラフヒゲナガなど) が採集され，裏日本特有の貧弱な針葉樹林帯にも針葉樹林をホストとするカミキリが立派に生活を展開しているものと考えられる，と述べている．

山屋・片桐 (長岡科博，1985) は，新潟県長岡市のカミキリの概要のなかで，ヨコヤマヒゲナガやヌバタマハナなど典型的なブナ帯に分布の中心を有する種が得られること，苗場山という後背地を控え，より高標高地に分布の中心を有する種が下降分布する可能性のある湯沢町八木沢には，コヨツスジハナ，クロホソコバネなどの特にブナ帯上部を好む種は八木沢には侵入していないこと，などの点

表 1. 福島県におけるカミキリムシ科甲虫の地域別種数 (田添・大桃，1985).

亜 科 名	会津地方	中通り地方	浜通り地方	県全体
ノコギリカミキリ亜科	3	3	3	3〔 3〕
クロカミキリ亜科	1	1	1	1〔 1〕
ヒラタカミキリ亜科	8(2)	5	5	8〔 4〕
ホソカミキリ亜科	1	1	1	1〔 1〕
ハナカミキリ亜科	78(21)	56(1)	50(3)	82〔 45〕
カミキリ亜科	55(7)	52(1)	62(6)	70〔 43〕
フトカミキリ亜科	98(9)	98(1)	93(4)	112〔 77〕
合 計	244(40)	216(3)	215(13)	277〔174〕

( )内は各地域の特産種数，〔 〕内は各地に共通して記録された種類数

表 2. カミキリ相亜科別種数の比較 (山屋・片桐, 1985).

	長岡市東山	長岡市西山	長岡全域	湯沢町八木沢	佐渡島
調査地の標高	10～770 m	10～340 m	10～770 m	550～650 m	0～1,170 m
ブナ林の残存度	狭小	無		自然度の高いブナ林がある	狭小 (高標高地の一部に局在)
ホソカミキリ亜科	1(1.2)	1(1.8)	1(1.0)	0(0)	1(0.8)
ノコギリカミキリ亜科	2(2.5)	2(3.5)	2(2.1)	3(2.5)	3(2.5)
クロカミキリ亜科	1(1.2)	1(1.8)	1(1.0)	0(0)	1(0.8)
マルクビカミキリ亜科	1(1.2)	1(1.8)	2(2.1)	0(0)	2(1.6)
ハナカミキリ亜科	15(18.5)	6(10.5)	15(15.6)	41(33.6)	20(16.4)
カミキリ亜科	23(28.4)	16(28.1)	30(31.3)	27(22.1)	40(32.8)
フトカミキリ亜科	38(46.9)	30(52.6)	45(46.9)	51(41.8)	55(45.1)
総種数	81	57	96	122	122

数字は種数, ( ) 内は%

表 3. 早池峰～南ア 8 地域に分布するカミキリから得た 7 つの分布型の亜科別構成比 (%) (草刈, 1982 未発表).

亜科名	北海道～屋久島	対象8地域	I	II	III	IV	V	VI	VII
ハナ	25.8	30.1	36.2	47.8	43.6	0	15.7	9.3	46.7
カミキリ	27.1	25.2	19.8	21.7	17.9	33.3	23.5	37.0	33.3
フト	42.1	39.9	38.8	26.1	23.1	66.6	58.8	50.0	20.0
その他	5.0	4.9	5.2	4.3	15.4	0	2.0	3.7	0
種数			116	23	39	9	51	54	30
(%)			(35.6)	(7.1)	(12.0)	(2.8)	(15.6)	(16.6)	(9.2)

から, 長岡市のカミキリ相は亜科別構成比から, (古くから強く人為的活動の影響を受けている) 佐渡島に極似するが, ブナ帯の昆虫群集を基調としたもので, 現在の種数 (特にハナカミキリ亜科) の少なさは人為活動の影響に起因することを指摘するとともに, 温帯林保存度の指標種群 (バロメーター) として, ハナカミキリ亜科の占有率が有効であることを示している (表 2).

草刈 (1982・未発表, 結論を山昆虫誌, 1983 へ発表) は, 山形・福島県境の吾妻山のカミキリ相を, 早池峰山, 会津檜枝岐, 日光, 上信越高原, 扉峠, 北ア, 南アの 7 地域と比較した際, 分布型から,

I····8 地域すべてに分布する種

II····南ア, 北ア, 扉峠, 上信越の中部山岳地帯に限り (8 地域の中ではの意, 以下同) 分布する種

III····中部山岳地帯から日光, 檜枝岐まで分布がのびている種

IV····日光と檜枝岐のみ分布する種

V····早池峰山に分布せず, 吾妻山から得られた種

VI····I～V 群以外で, 早池峰山と吾妻山の両地域に分布する種, 及び早池峰山のみに分布する種

VII····吾妻山の北の早池峰と, 南の 6 地域のいずれかに分布する種

の 7 群に分け, このうち II 群, VII 群, III 群のハナカミキリ亜科の占める割合が 8 地域の平均を大

表 4. 日光とその近隣のカミキリムシの比較 (森島, 1986).

	表日光	奥日光 京浜昆虫同好会 1967	栃木県 県立博物館 1984	栗 山 村	湯の花 衣笠・藤田 1977
ノコギリカミキリ亜科	3(1.3%)	4(1.7%)	4(1.5%)	3(1.5%)	3(1.3%)
クロカミキリ亜科	1(0.4%)	1(0.4%)	1(0.4%)	1(0.5%)	1(0.4%)
マルクビカミキリ亜科	8(3.4%)	6(2.5%)	9(3.3%)	5(2.4%)	7(3.1%)
ホソカミキリ亜科	1(0.4%)	1(0.4%)	1(0.4%)	1(0.5%)	1(0.4%)
ハナカミキリ亜科	72(30.9%)	81(34.3%)	77(28.3%)	74(35.9%)	71(31.3%)
カミキリ亜科	54(23.2%)	47(19.9%)	67(24.6%)	41(19.9%)	53(23.3%)
フトカミキリ亜科	94(40.3%)	96(40.7%)	113(41.5%)	81(39.3%)	91(40.1%)
計	233 (100%)	236 (100%)	272 (100%)	206 (100%)	227 (100%)

きく上回っていることを示すとともに (表 3), 主題の Ⅶ 群 30 種のうち, 亜高山性種 (キジマトラ, シララカハナ, シロヘリトラ, コヨツスジハナ) と南方系の種 (タキグチモモブトホソ) を除く温帯林帯中～上部の種 25 種の内訳として, 檜枝岐に分布する種が 4 種 (サドチビアメイロ, クロヒラタ, ニセハイイロハナ, キモンハナ) いるのに対し日光に分布する種がまったくないことを指摘し, 日光と檜枝岐のファウナの違いをあげているが, その異なった日光と檜枝岐両地域に分布し, 早池峰にも分布する 16 種 (ヤマトキモンハナ, ホソガタヒメハナ, ベニバハナ, オオハナ, カエデノヘリグロハナ, モモブトハナ, ヒゲブトハナ, ヒゲジロホソコバネ, エゾトラ, カンボウトラ, コトラ, シラオビトラ, ヤツボシ, ニセヤツボシ, ブロイング, ヨコグロケシ, キクスイモドキ) を注目している.

中村 (東北の自然, 1985～86) は, 福島市北方山地において, 上記 16 種のうち, ヤマトキモンハナ, カエデノヘリグロハナ, ヒゲジロホソコバネ, カンボウホソトラ, ヤツボシ, ブロイニングの 6 種を記録している.

森島 (日光の動植物, 1986) は, 日光と隣接地域とのカミキリ相の比較において, 日本海要素の代表種とされるミワヒメハナが栃木県栗山村で得られたため栗山村が日本海型に属することを示す糸口となりそうなこと, サドチビアメイロやイガブチヒゲハナ, ムモンベニなどが年平均 50 cm 最深積雪量の等深線とほぼ一致して日本海型の分布を示す昆虫であり, これらが日光に分布しないことは日光が太平洋型に属すると考えられること, をあげるとともに, クワサビの種内変異の状況などから, なおかつ東北と関東との間に, 何らかの一線があること, この差異を高桑 (1978) は関東地方におけるウルム氷河期以後の地史的, 気候的要素にその原因を求めていること, などを考察・紹介している.

以上, 最近の研究成果から, 日本海要素について示唆的な報告を抜粋させていただいた. 一般に日本海要素生物の分布は, 東北地方では北に行くに従い太平洋側にも分布が広がっている例が多い. カミキリではどうであろうか. また, 日本海要素生物の成りたちの基本については堀田 (植物の分布と分化, 1974) に詳しいが, 最近, 東北地方でも, カミキリの依存する植物についてきめ細かな検討が行われつつあり, 例えば上野 (東北植研発表資料, 1984) は, 宮城県に分布する日本海要素植物の分布型として, 高山型 (20 種), 東北山地型 (18 種), 内陸型 (9 種), 広範型 (7 種), 隔離型 (2 種), 沿岸型 (4 種) などに分類している. カミキリの前掲のような考察も, 各地のカミキリ相がかなり判明してきたために可能になったわけであるが, 草刈 (1982 未発表) に代表されるような分布型の機械的な操作から脱却して, 個々のカミキリのホストや訪花植物に密着したきめの細かい検討に入る段階にきているものと思われる.

人間の営みとカミキリ相の変化

前掲に種名をあげた種のなかで，実際にどの種が日本海要素昆虫なのかは今後に待ちたいが，現在の調査で充分に調べたとしても，潜在的なカミキリ相というものがあり，その解明は困難であることが読みとれる．すなわち，今ある地域にある種が多くて他の地域に少なかったとしても，それが原植生に対応した地域固有の差なのか，あるいは人間の諸活動が生じせしめた雑木林に代表される妨害極相 (disclimax) により増減した差なのか，不明なまま比較されている．

四季の変化にとんだリズミカルな，自然保護のシンボル的な雑木林．しかし，小面積といえども20～25年に一度皆伐され，毎年しば刈りや落葉かきが行われる雑木林というものが，どれほどの多様な生物を維持しうるのか，という観点からデータを集積する必要を感じている．今のところ，平地における高度な利用によってできている雑木林では，トウキョウトラ，ヨツボシチビヒラタ，クビアカルリヒラタ，ホタル，ムモンベニ，クロツヤヒゲナガコバネ，クリストフコトラ，ヨコヤマトラなどのカミキリが増加し，ルリボシが減少，山地の雑木林では，ホウノキトゲバ，クビアカトラなどが増加，オオアオ，カンボウトラ，ヒゲナガゴマフなどが減少する傾向があるのではないかと感じている．また，窪木 (インセクタリウム，1983) はシロスジカミキリは人間による雑木林の管理・育成の中でうまく調和し生きてきたこと，林が荒れると少なくなること，を示した．

カミキリのフェノロジー

これらの解明のためにも，東北地方の潜在的極相林といわれるブナ林に依存するカミキリの調査は，ブナ原生林がどんどん減少している今，急ぎたい仕事の一つである．その際，フェノロジー (生物の季節現象，生物の季節的律動) 的概念をぜひ重視したい．「フェノロジーは地域自然の基本的な性格であり」，森林を構成する個々の種をみた場合，「なぜ，ある種は特定の開花期や結実期，早いまたは遅い開芽や落葉期を選んだのだろうか」という疑問を解こうとする学問でもあり，例えば「花期の早いものほど，開花期間は短く，特に花期の遅いつる植物で，開花期間が長くなっている傾向がある．こうした生育形と花期および開花期間は，訪花性昆虫と密接な関連を持っており，おもしろい生態学的な問題と思われる」(いずれも渡辺，長野植研会誌 1981 より)．表 1～4 のような亜科別の分析や山屋・片桐 (1985) の温帯林保存度のバロメーターとしてのハナカミキリ亜科の利用も，この点からも論議されるとおもしろそうである．

またフェノロジーの一つのテーマとして，残雪による影響，すなわち「日本海型ブナ林では，高木に比べ低木の展開が，10～20 日も遅れることが報告されている」(平吹，日生態会誌 1984)．まだびっしりと雪におおわれたその上の，鮮やかなブナの新緑のコントラストには，誰しも感動する．この現象がカミキリのフェノロジーやひいてはファウナの構成にどのような影響を与えるのであろうか．

さいわい，まだ日本海沿岸と太平洋沿岸 (金華山以外にも本土にも) にわずかに残っているブナ林の集録作業や，山地のブナ原生林におけるフェノロジーのアンケート調査などが，「東北の自然」誌上で28号より始まる予定なので，それらに紹介されるブナ林のカミキリ相の調査を進んで行って，報告していただければ幸いである．

東西縦断山脈の影響

東北地方の地図をひろげて気が付くことは，南北に縦走する出羽，奥羽，北上一阿武隈の 3 つの山地に対して，出羽山地と奥羽山脈を結ぶ東西に横断するうねりが 7 つほど認められる点である．これ

らのうねりのうち，河川によって分断されていない3つのうねり，すなわち南から飯豊—吾妻ライン，鳥海—栗駒ライン，白神—十和田ラインが，生物の南北移動のバリアーとして過去，及び現在まで働いていなかっただろうか．特に飯豊 (2,128 m) と吾妻 (2,035 m) を結ぶラインでは，1,000 m を下回っている地点が1カ所のみであり，その南には大河・阿賀野川が平行して流れている．カミキリではヨツボシ，ミドリ，キイロトラ，ベニなどがあてはまるかもしれないが，このラインの存在が北麓にもたらしている豪雪の影響が分布をはばんでいるだけかもしれず，それらを区別していく必要がある．

河川の影響

白畑・黒澤 (東北の自然，1986) は，山形県の昆虫相形成に及ぼした最上川の影響をさまざまな角度から考察している．そのうち，山地性の種類の平野部への進出の例としてカラカネハナ，内陸平野部産昆虫の海岸平野部への進出の例としてブドウトラを，それぞれあげている．

他の，飛島の昆虫相に及ぼした影響，暖地性昆虫の内陸地方への侵入，砂礫地性または荒蕪地性種の遡上，遺存種などの例にはカミキリはあげられていないが，このような観点から，東北地方の他の河川についても検討してみるとおもしろそうである．

分化型生物からみた東北

「いずれの分化型 (↔分散型) 生物にしても，東北地方については西南日本～中部地方に比べ，広分布様相を示し，多少の変異はあるものの，分化に乏しいという感があった．‥‥これが地史的なもの (例えば北上山地は第三紀から連続して陸域であったこと) によるものなのか，気候的なもの (緯度差による寒暖や乾湿)，またその複次的なもの (日本海要素) によるのか」(冨永，1985)．

カミキリではコブヤハズカミキリ属が分化型生物の好例とされていたが，「東北の自然」で連載されている上記の冨永で始まった“分化型生物からみた東北”のシリーズでは，窪木 (1985) によりヒメハナカミキリがとりあげられ，本稿で問題にしてきたブナ林や日本海分布の問題を論じている．

(米沢市通町 5-5-11)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 30–33, June 15, 1988

関東地方のカミキリ相

露木繁雄

関東地方は本州のちょうど中央に位置し，南東側の一角を広く占めている．このような位置にあること自体，カミキリをはじめとするファウナの特性の一要素といえる．

ご存知のように関東地方は日本で最も広い関東平野が広がり，いわゆる平地と称される部分が全面積の半分近くを占めている．日本の他地域でこれだけ平地の割合が大きいところはなく，関東地方のファウナに大きな影響を与えているといえそうだ．

一方山地へ目を向けてみると，隣接する中部地方とは違い 3,000 m 級の山は 1 つもなく，最高峰は日光白根山の 2,578 m で，2,500 m を越える山は他にわずか浅間山を数えるのみである．したがって，いわゆる高山帯と言える地域は，ハイマツが見られる那須山塊，温泉ヶ岳，女峰山を中心とした日光山塊，至仏山から武尊山，平ヶ岳から朝日岳，谷川岳を経て本白根に至る三国山脈の各山頂部付近，湯の丸山など浅間山塊の頂上部など，ごく限られた部分に点々と存在するだけである．ここでは便宜上，関東地方を 3 つのブロックに分けてカミキリ相を考えたい．1 つは伊豆諸島及び房総半島南部等の沿岸部，2 つは平野部から低山帯，3 つめはそれ以上の標高をもつ地域である．

伊豆諸島のカミキリ相については，最後に簡単に触れることとする．

1. 平地から低山帯にかけてのカミキリ相

この地域は植生から，常緑広葉樹を中心としたヤブツバキクラス域と考えてもよい．この地域の植生は，ほとんどが人為的な手を加えられた二次林や畑地，あるいは市街地（住宅・工場地）などとなって，自然植生はごく限られた特殊な場所（例えば社寺林といった）に存在するにすぎない．

しかしながら，このわずかに残された植生に依存しているカミキリも，うれしいことに関東地方ではまだ生存している．その代表的な種としては，ベーツヒラタカミキリが挙げられる．本種はシイなどの大木の枯死部に寄生するが，関東平野の自然植生として広く分布していた植物であるため，ベーツヒラタカミキリも，おそらく古くは平野部に広く棲息していたものであろう．

平野部を主体に分布しているカミキリとしては，大型のウスバ，ノコギリ，ミヤマ，キマダラ，シロスジ，クワ，ゴマダラ，キボシ，マツノマダラなどのほか，スギ，ヨツボシ，アメイロ，カッコウメダカ，タイワンメダカ，スギノアカネトラ，タケトラ，ベニ，カノコサビ，キボシチビ，ワモンサビ，ハイイロヤハズ，クモガタケシ，ルリ，アサ，リンゴ，ニセリンゴが挙げられる．

関東の平野部で注目される種としては，タテジマ，アオキクスイであろう．

タテジマカミキリは，関東地方でも野外越冬するカミキリとして有名だが，寄主植物であるカクレミノやセンノキといったウコギ科植物の枝上で越冬するのはもちろん，関東地方（神奈川県内）でもヒサカキなど他科の各種の樹木上でも越冬していることが確認されている．

アオキクスイは 1950 年に東京都府中市で得られたものを最後に，近年記録は全く途絶えてしまっている．本種も，日本で普通にみられる同属のキクスイカミキリやヨーロッパでの同属の多くの種が草本を食していることからみても，草本を host としていることは疑う余地はなかろう．神奈川県の中央林間で本種が採集されたときの状況は，ヨモギ?のようなキク科植物の葉上にいたものであり，戦前，

小仏峠—景信山間では，ヤマタバコ(キク科)と思われる群落があり，毎年確実にその場所で得られたという話も聞いている．いずれにせよ30数年もの間本種の記録はないが，草本しかもキク科植物を中心に調査すれば，この広い関東平野のどこかにまだ棲息しているのを再発見できる可能性は充分にある．

2.　中山帯から高山帯にかけてのカミキリ相

平野部とは違い，自然植生が残っている地域で，カミキリの棲息するのに好適な，バラエテイーに富んだ環境となっている．この地域は落葉広葉樹を主体にしたブナクラス域が大半を占め，その上部にコケモモ—トウヒクラス域の亜高山性針葉樹林帯が広がり，オオシラビソを中心にコメツガ，トウヒなどが分布する．さらに那須・日光山塊，三国山地，浅間山塊の 2,000 m を越える山々のごく頂上部のみに点々とハイマツ群落域の高山植生帯がみられる．秩父山地のハイマツ帯は関東地方からわずかに外れている．

ブナクラス域は樹種も豊富で，関東地方ではよく自然植生が残されていることもあって，この地域のカミキリ相は種類数，個体数ともまことに多様である．

ノコギリカミキリ亜科では，コバネカミキリがブナなどの立ち枯れにみられ，夕刻ものすごいスピードで飛び回るのを見たことがある．

マルクビカミキリ亜科は，すべての種が針葉樹食いのため，亜高山性針葉樹林帯を中心とした分布パターンを持つ種がほとんどだが，アカマツ，クロマツに依存する種でヤブツバキクラス域に分布するタイプもある．このためブナクラス域にももちろん棲息するが，主体はこの地域から外れている種が多い．この中で，シナノサビは，比較的近年，例えば神奈川県西丹沢の箒沢や奥多摩の御岳など，従来考えられていたところより，ずっと低標高地域にも分布していることが確認され，今後関東各地で調査が進めば，案外面白い結果が得られるかもしれない．もう 1 つケブカマルクビは，関東地方では奥多摩の記録が唯一のものであるが，食樹のネズミサシを精査すれば追加記録も充分期待できる．

ハナカミキリ亜科やカミキリ亜科は多士済済であるが，関東地方では，何が分布しているかではなく，何が分布していないかがよく問題にされる．例えばハナカミキリではモモブトハナ，イガブチヒゲハナ，コウヤホソハナ，タケウチホソハナ，カミキリ亜科ではクロヒラタ，トラフホソバネ，オニヒゲナガコバネ，カエデヒゲナガコバネ，クビアカトラなどが挙げられる(関東地方の一部に分布するものも含む)．これらの種の分布パターンをみると 1 つはいわゆる裏日本 (日本海要素) 分布型のグループで，モモブトハナ，クロヒラタ，オニヒゲナガコバネがこのグループに含まれる．これらは関東地方でも奥鬼怒や尾瀬等日本海要素の濃い地域には分布している．その他の種は西方から分布を伸ばしたように見えるが，なぜか関東地方を飛び越してしまったように映る．しかしイガブチヒゲハナ，コウヤホソハナ，タケウチホソハナ及びカエデヒゲナガコバネは，食樹による影響がこれらの分布に大きく関わっているように思える．トラフホソバネとクビアカトラに関しては，なぜこのような分布パターンとなっているのか，現在のところ合理的な理由は見出しにくい．

フトカミキリ類では分布上興味ある種は意外に少ない．多くの種が食樹・食草に依存しているため，host があれば分布し，なければ分布しないといった単純なパターンが多い．強いて挙げればカラフトヒゲナガ，ヒメシラオビとエゾナガヒゲといったところであろう．前 2 種はカエデヒゲナガコバネと同様，アカマツ等マツ類を host とする仲間で，カラフトヒゲナガは近年それでも茨城県や埼玉県の平野部でも発見されているが，ヒメシラオビは関東地方の記録は数えるほどしかなく，福島県や長野県などでは比較的よく見かけることを考えると，関東の平野部の調査不足というだけでは片付けられない理由がありそうだ．

エゾナガヒゲは日光の記録が関東地方唯一のもの．ニガキを食することが知られているが，ニガキそのものは例えば東京都高尾山などにも分布し，関東地方ではそれほど珍しい木ではない．またいわゆる裏日本分布型とも違う独特な分布パターンを示す種として興味深いし，こういった分布パターンの解析からひいては昆虫地理学への何らかのヒントが得られることも期待できる．

関東地方のブナクラス域及びコケモモ—トウヒクラス域での気になるカミキリをピックアップしてみると，前述の種を除いて次のようなものが挙げられる．

ハナカミキリではオトメクビアカハナ，フタスジカタビロハナ，キモンハナ，トホシハナ，*Pidonia* 類，シララカハナ，クロサワヘリグロハナなど．

オトメクビアカハナは南アルプスの仙丈岳付近で多産する以外は少なく，特に関東地方では尾瀬及び菅沼など数例の記録があるのみである．本種の他地域での棲息状況から，標高や植生を考えると，三国山地 (特に草津白根周辺) や浅間山塊での棲息の可能性は高い．フタスジカタビロハナとキモンハナは，おそらく朝鮮半島経由で日本に入った種であろう．朝鮮系と考えられる種は日本では独特の分布パターンを示すものが多い．トホシハナは群馬県での記録があるが，確実な採集例を知らない．会津駒ケ岳には確実に棲息しているので，日光山塊の高い山の頂上部や，平ケ岳から四阿山までの山々の山頂近くには分布している可能性がある．神奈川県の記録もあるがこれは偶産であろう．

Pidonia 類も注目に値する．シラネヒメハナの変化 (後腿節が黒くなるタイプと黒くならないタイプの分布)，セスジヒメハナの亜種 *kurosawai* と基亜種との関係，*P. signata*, *P. suzukii*, *P. tsukamotoi* は関東地方に分布しないか等々，*Pidonia* には関東地方でもまだ多くの問題が残されている．

シララカハナは，本州では典型的な高山性の種で，早池峰山以外では北アルプス常念岳での数例を除くと 1–2 例の記録があるのみ．関東地方では群馬県大水上山での記録があり，奥利根の山々での追加記録が期待される．クロサワヘリグロハナは北海道から九州まで全国的に分布している割に記録は局所的である．1986 年にはキハダの立ち枯れに飛来することが判明したので，従来のような花だけの採集より，さらに確実に分布の確認ができるようになるだろう．

カミキリ亜科・フトカミキリ亜科で注目される種は，シラホシヒゲナガコバネとオニヒゲナガコバネ，ムモンベニ，フサヒゲルリ，コブヤハズ類，オオシロ，ゴマダラモモブトとミヤマモモブトといったところであろう．

シラホシヒゲナガコバネは日光での記録がオニヒゲナガコバネか本種か不明で，関東地方に分布するかどうかは微妙である．3,000 m 級の山がないと分布の可能性は薄いであろう．オニヒゲナガコバネは関東地方では奥鬼怒のみで記録されている．本種はクロヒラタと似た分布をしているので，関東地方の低地域での発見は困難と思われる．

ムモンベニはカシワ，クリなどに寄生するが，関東地方でのカシワの名所？は榛名山が知られている．しかし榛名山のカシワはわずかな調査だが，食害のあとがなく，もし棲息していても個体数はきわめて少ないものと思われる．

フサヒゲルリは本州中部での記録を近年全く聞かない．環境がそれほど変わらないのに，いなくなってしまう不思議な現象がみられるが，人の目には分からない程度の変化にも耐えられないほど適応力の弱い種なのかもしれない．しかし，ごく狭い範囲でもよい環境があれば棲息している可能性は高く，関東地方では長野原線を中心とした地域には，まだ生き残っているのではないだろうか．

コブヤハズ類については詳しい解説が数多く出されているので省略するが，浅間山周辺や足尾山地の調査はまだ不足している．コブヤハズに興味のある方はぜひこの地域の調査をお願いしたい．

オオシロの記録は戦前に横浜と日光から，それに戦後は群馬県や埼玉県からの記録があるが，日光

の記録は鞘翅の白い紋の縁に切れ込みがなく単純なものとの記述がある．日本での他の記録はすべて通常のものであることと，戦前は台湾から多くの標本が入っていたことなどを考えると，何らかの手違いで，台湾産の標本が日光産と間違われた可能性もある．主たる host のムクノキも一応関東地方まで分布しているし，新潟県の姫川付近ではケヤキを食していることも考え合わせると，関東全域で発見される可能性がある．

ゴマダラモモブトとミヤマモモブトは，ミヤマモモブトの原産地，日光山塊あたりでは区別も容易だが，例えば富士山では両者の区別がかなり困難である．また，2,000 m を越える高地でゴマダラモモブトを採集すると，色彩，形態ともミヤマモモブトと区別しにくい個体が出現するので注意が必要だ．

3.　沿岸部及び伊豆諸島のカミキリ相

関東地方の沿岸部，特に房総半島先端部や三浦半島は，カミキリ相も一風変わっている．房総半島のムネモンアカネトラやトゲヒゲトビイロは隔離分布の例として有名だが，それ以外にもコゲチャサビやウスアヤも関東地方では房総半島だけで棲息が確認されている．両半島部のみに分布している種としてはリュウキュウヒメがあり，コゲチャサビ，ウスアヤそれにケブトハナも合わせてその分布の先端が両地域まで延びている．その他に沿岸部を主な分布域としている種は，ヨツスジトラ，フタオビミドリトラ，ホシベニなどである．

三浦半島では，ムネマダラトラの記録が注目される．神奈川県では内陸には記録がなく，三浦半島(含城ヶ島) だけに棲息している．本種も暖かい地方に分布を持つ種で，伊豆諸島にも分布していることを考えれば，この方面から三浦半島へ分布を延ばしたとみるのが妥当であろう．半島部ではないが，東京湾内の横須賀側からわずか数百メートルしか離れていない小さな猿島に，ハスオビヒゲナガが棲息しているのも驚異である．

伊豆諸島のカミキリ相については，関東地方とはまったく異質なものでもあり，また多くの人が言及しているので，ここではごく簡単に触れてみたい．

コゲチャヒラタ，トゲウスバ，クロソンホソハナ，ツマグロアメイロ，チャイロヒメ，ツヤケシヒゲナガコバネ，キュウシュウチビトラ，ヤエヤマトラ，アラカワシロヘリトラ，ハネナシサビ，アヤモンチビ，キイロアラゲ，リュウキュウルリボシが，関東地方の本土側では棲息していない．これらの種は屋久島から琉球列島にかけて，どこかに必ず分布している．この点だけを見ても，伊豆諸島と南西諸島との関係は濃いと言える．キュウシュウチビトラ，シナノクロフ，*Rhodopina*，ビロウド，ニセビロウド，ヤハズ，ドイ，ケシカミキリは，島の特色である変異幅が大きいものの代表であろう．これらは種の範囲を考察するのに格好な材料であり，伊豆諸島は適当なフィールドと言えよう．

関東地方のカミキリ相全体の特色は，本州のちょうど中央付近であることからも当然と言えるが，北方型と南方型が混棲していること，裏日本タイプは全般的に少なく，局限的に分布していること．平野部には社寺林を中心に残存種がみられること，沿岸部には南方型の種が入り込んでいること，等が挙げられよう．

関東地方にはカミキリ愛好家も多く，全般的には調査が進んでいる地域ではあろうが，全地域を見渡してみると，よく調べられているのはごく限られた場所のみであることがわかる．特に群馬県と新潟・長野県境地域，妙義山から南の三国山地，足尾山地，奥秩父，那須山塊，八溝山などは，ほとんど調査されていないと言っても過言ではない．しかも調査するに値する地域でもあるので，今後精力的な調査を期待するものである．

(逗子市逗子 7-1-24)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 34–37, June 15, 1988

中部地方のカミキリ相

湯沢宣久

中部地方は本州の中央部に位置し，太平洋側—黒潮，日本海側—対馬海流の影響をまわりから包み込まれるように受け，一方内陸部では日本の屋根と言われる北・南・中央アルプスとそれに連なる2,000～3,000 m 級の山々を有し，南部では伊豆半島山地部にまで北方系要素を延ばしている．

平野部–低山地にかけてのカミキリ相

この地域は常緑広葉樹を中心にしたヤブツバキクラス域で，平野部・半島部・島からなる沿岸地域と，日野川・根尾川・天竜川流域などに見られる内陸部まで入りこんだ地域の2タイプが見られる．前者は太平洋側海岸部では，防風林・社寺林がほとんどだが，日本海側ではカゴノキなど暖帯林系の樹木も見られ，加えて海岸線近くまで二次林がよく残っている．後者では地形などの関係上，二次林の開発がされにくい地域で，特に成長した二次林地域はカミキリの棲息地として好環境である．

ヤツボシハナは，広く平野部より高山帯まで分布する種で，普通ヤツボシ型は高標高地に出現するが，豊橋市東部（標高 40～50 m）においても著しくヤツボシ型の出現率の高い地域があり，以前より知られている．しかし，現在に至っても，種，亜種の問題から当地周辺及び他地域における同傾向の有無など課題を多く残している．キイロミヤマは，太平洋側・豊橋市・瀬戸市・浜松・寸又峡・伊豆などに，また日本海側では黒部峡谷・福井市に記録がある．

オガサワラチャイロ・ヨコヤマヒメ・ヒゲナガヒメ・ヤマトチビコバネ・ヨツスジトラ・ウスアヤ・クロオビトゲムネ・ズマルトラなどは海流性の広がりを見せたカミキリで，その分布も一部例外はあるものの島・半島・平野～低山地に局所的に分布する．なお，日本海側では，海に面した山地までの距離が短いため，南方系の種が山地帯でも記録されている．フタオビミドリトラも海流性のものだが，島・半島・平野から九頭竜川流域福井勝山市，天竜川流域長野上伊那まで入り込んでいる．

テツイロヒメ・カノコサビ・ムネホシシロ・フタホシサビも南方系種であるが人為的に広がった可能性が高く，ムネホシシロは愛知県では養蚕に伴うクワの移植で尾張地域～東三河一帯に広がった．

図 1．渥美半島のヤブツバキクラス域の樹相．

キュウシュウチビトラは，福井小浜市・三方町などと高山市・愛知猿投山で報告されており，太平洋沿岸においては記録を聞かない．

ズマルトラ・ヒゲナガヒメルリは沿海域に分布するパターンと，イッシキキモンを加え岐阜西濃地域に見られる2つがあり，

鈴鹿・伊吹山脈で分断される西日本との通路を関ヶ原が果しているように思える．しかしケブトハナ・タキグチモモブトホソの内陸部の記録は両山脈の西で止まっている．

ラミーは，穂積 (1979) が述べたように福井・愛知・静岡・神奈川・千葉の各県に棲息が認められているが局所的で，中部地方以東では点的な記録に過ぎず，カラムシ・ムクゲ・シナノキなど食草(樹)をもう一度チェックしてみる必要がある．

中山帯のカミキリ相

この地域は，スギ・ヒノキなどの植林が多く見られる一方，自然林または手のあまり加えられていない二次林も多く，樹量・樹種とも豊富で，それに伴いカミキリの量・種類とも最も多い地域となっている．植生はブナクラス域が中心でその中にモミ・ツガなど一部の針葉樹が生育する．

ケブトハナは鈴鹿山脈藤原岳・滋賀霊仙山・福井高浜町・伊豆半島及び神奈川湘南地方に記録があるが，同じ海岸線を有していながら愛知県では記録がない．幼虫はクサギ・アカメガシワの生木枯死部を食すことが知られており，同県内にも少なくない樹種だけに記録される可能性はある．太平洋側で比較的調査の進んでいる愛知県において記録がなく，分布自体はより東にまで広がっている，いわゆる“飛びこし”の種は他にズマルトラ・ウスアヤ・クロオビトゲムネ・ヒゲナガヒメルリなどがあり，また愛知県を東限，あるいはより東まで記録があるが飛び離れているものにキュウシュウチビトラ・ヒメアヤモンチビ・ヤマトチビコバネなどがあり，単にこの 2 つだけを考え合わせても分布を広げた時代と，海流の方向，規模など今となっては計り知れないものがあったように思われる．

ヘリウスハナ・ヘリグロホソハナ・トガリバホソコバネは幼虫がタンナサワフタギに食入することが知られており，愛知面の木峠周辺，長野清内路峠周辺，静岡天城山などでは同所の材より 3 種が見出される．ヘリウスハナはサワフタギに食い入り山地帯にまで棲息圏を広げている．

アカムネハナは，立山弥陀ケ原と美ケ原，入笠山，川上村など中部信濃地方に記録があり，多産地とされた川上村と似た環境はそれほど少なくなく，調査しだいで十分発見の余地はある．

ヒメハナカミキリ類では，太平洋側岐阜，長野まで分布するトサヒメハナ，中部山岳西域まで入りこんだイヨヒメハナなど興味深い．

ヒメヨツスジハナの分布の中心は南アルプス南側にあり，北側では長野戸台，木曽谷，他に愛知段戸などに記録がある．クロサワヘリグロハナは南アルプス・長野伊那地方・木曽谷などで局地的に記録され，隣接する岐阜・富山両県でも十分可能性があり，これからの調査を期待する．

ミヤマホソハナは中部地方全域に分布し，ハコネホソハナは愛知段戸，南ア，長野伊那谷，八ケ岳，島々谷，扉峠，戸隠山，松川谷，新潟などに記録があるが，浅間山塊，北ア西・北部，木曽谷，岐阜，富山などにはっきりしたものはない．最近記載されたニセハコネホソハナは木曽谷を中心に北は島々谷，南は南ア東俣までのトウヒクラス域に分布するが，北ア西・北部，岐阜，富山などの記録はない．

ホソコバネカミキリ類は，ブナクラス域を中心にクロホソコバネ・オオホソコバネ・ヒゲジロホソコバネが分布し，局所的だがクワ・ヤマグワにオニホソコバネが，前記したとおりタンナサワフタギにはトガリバホソコバネが見られる．カラフトホソコバネは長野安曇村，木曽御岳，南アルプスのトウヒクラス域で記録されたものの北アルプス北・西部からはまだ発見されていない．

シナノサビは長野扉温泉付近，静岡寸又峡温泉など上部にトウヒクラス域を控えた地域では，ブナ～ヤブツバキクラス域にまで記録があり，そういった場所では分布の可能性を残している．ケブカマルクビは，長野松本市周辺，飯田市近郊，愛知南東部，静岡，山梨河口湖町で記録されたが，愛知のものは一部，植木用に栽培されていたネズミサシから採集されており，人為的な広がりも考慮しながら

詳しい調査が望まれる．

ムネアカメダカは長野・新潟県境の葛葉峠付近に記録があるのみだが，幼虫の食樹であるエゾエノキは温帯林帯に広く分布しており，この地域での精査の必要があろう．サドチビアメイロは原産地の佐渡島，それに長野市，松本市扉，上伊那長谷村，南アルプス，愛知豊根村，富山神通峡など広範囲に点々と記録されている．ウスゲアメイロについては，基準標本に指定された佐渡島相川産の 1 頭のみでこれからの調査が待たれる．ツシマアメイロは，当地方では軽井沢で記録があるのみだが，対馬ではケヤキのスイーピングで多数が得られており，前 2 種と同じく食樹，生活状況，分布圏など問題があるが一つの手がかりとなろう．クロサワヒメコバネは福井高浜町，長野小谷村で採集された．クロツヤヒゲナガコバネは以前は得られる個体数も少なく，春のターゲットでも高位にランクされていたが，幼虫の食樹が知られてからは各地で棲息が報告された．中部地方では福井，石川，新潟，山梨の 4 県からは未報告だがおそらく近いうちには出揃うであろう．コボトケヒゲナガコバネは，岐阜，長野，佐渡島，山梨に局所的に記録がある．幼虫の食樹としてアブラチャン，クリ，ミズキなども報告されているがミツバウツギにほぼ依存すると思われ，ミツバウツギ分布圏での詳しい調査を望む．

ヨツボシシロオビゴマフは長野木曽福島，松本市扉温泉，愛知猿投山から記録がある．幼虫はモミ・ツガの枯れ枝を食樹とし，二次林中にあるモミ・ツガを調べることにより産地が追加できると思う．フタスジゴマフは長野伊那谷に記録があり，伊那市内の萱ではオニグルミより羽化脱出しており，オニグルミを精査することにより，まず隣接する木曽谷，伊那谷南部の広がりを期待したい．

フサヒゲルリは長野市，入笠山北部，木曽谷，山梨，岐阜高山市東部に記録があるが最近はほとんど採集されていない．産地が湿地のため，ちょっとした変化にも左右され開発の手も入りやすく，食草ユウスゲの衰弱，枯死も原因と思われるが，何の変化もなく見える産地でも見られなくなったことから，他にも原因を考えざるを得ない．

タコサビは主に東北地方に分布域を持つ種で，クワサビと混同されている可能性も十分あり，特に新潟県産の個体の再検討が必要だろう．

コブヤハズ類はセダカコブヤハズ・コブヤハズ・マヤサンコブヤハズ・タニグチコブヤハズ・フジコブヤハズの 5 種類が分布し，その分布はマクロ的には十分明らかにされたが，より狭範囲での棲息圏の究明，棲み分け，同所的に分布する地域での交雑など残された問題も多い．

シラフヨツボシヒゲナガは，分布圏を北海道以北に持つ種だが長野県より 2 例があり，1 頭は木曽福島の貯木場，もう 1 頭は松本市扉温泉で，どちらも偶産の確率が高い．しかし，エゾハイイロハナのような例もあり決めつける訳にもいかない．

ヤツボシシロは，木曽御岳山麓開田村で採集し草間博士に同定をお願いしたが，後は対馬，岡山でも記録された．中部地方では開田村以外では見つかっておらず，しかも戦後移植されたと思われるズミに寄生することなど人為的に入ったと考えられる．またズミは同地周辺に多く見られるもののほんの一角でしか見つかっておらず，御岳山麓の精査が必要であろう．

ケシカミキリは全国的に広く分布している種であるが，研究者の訪れることの特に多い長野県内に記録がないのはまったく解せない．ソボリンゴは近年になって食樹がツツジ類と判明し，記録も増えてきた種である．中部地方では岐阜，富山，石川からは報告がないが，本種が食入している材の根際には赤褐色粒状の糞が積っており，それを目安とすれば見つけやすい．

亜高山-高山帯のカミキリ相

この地域は，最も自然林が色濃く残っているのだが，伐採に伴う林道の延長，白山，立山，南アルプ

スなどの観光におもきを置いた山岳自動車道，各地スキー場の整備など人為的に手の加えられる機会も多い．しかしこのことで自然林では見つけにくい種を発見できたり，伐採木や衰弱木に集まる種の一時的な増加とその後の減少を明確に感じることができる．植生は落葉広葉樹のブナ，ミズナラ，カンバ類を中心とするブナクラス域上部から天然カラマツ(カラマツの樹皮が厚く，肌が太いマツ類のようにひだ状になるもの)，トウヒ，コメツガ，シラビソを中心とするコケモモ—トウヒクラス域を主体としてその上部にハイマツ帯を設ける．カミキリも針葉樹，広葉樹それぞれに依存するもの，また，その両方に依存するものなどバラエティに富んでいる．

図 2. 木曽御岳のトウヒクラス域の樹相.

エゾハイイロハナは，長野戸隠山，徳本峠，木曽御岳，南アに記録があり，コケモモ—トウヒクラス域を残す山地帯に広く分布すると思われる．オトメクビアカハナとシララカハナは中部地方では典型的な高山性カミキリだが，前種が南ア・北アなど中部 (一部関東) 地方のハイマツ帯に広く分布するのに対し，北方に分布圏を持つシララカハナは北アルプスに数頭の記録があるのみである．

ヒメハナカミキリ類ではハクサンヒメハナ，シナノヒメハナ，フイリヒメハナ，タカネヒメハナ，ウスイロヒメハナ，ミヤマヒメハナ，ミチノクヒメハナ，クロヨコモンヒメハナ，オヤマヒメハナなどがあり，シナノヒメハナとフイリヒメハナの混棲地の有無，タカネヒメハナは木曽駒や御岳，北アルプスには分布しないのか，ハクサンヒメハナは御岳や乗鞍にはいないのかなど疑問は多い．

カラフトホソコバネは 1972 年南アルプス大井川上流東俣で初めて採集された後，奥日光，安曇村，木曽御岳と記録された．幼虫の食樹もトウヒ，コメツガ，天然カラマツなどがわかり，他地でもこれらを中心とするコケモモ—トウヒクラス域に分布しているものと思われる．

ミドリヒメスギは 1969 年に南アルプス二軒小屋で採集されたものを基に記載された後，前種とほぼ重なる分布を示し，奥日光，安曇村，木曽御岳と天然カラマツの残る地域で記録された．

カラマツカミキリは日光で採集された個体により 1984 年に記載された．前 2 種と同じような分布を示すが，木曽御岳からは記録がない．これらの 3 種は分布，食樹ともに非常に似ており，これは起源，日本への侵入経路，侵入時代がほぼ同じであったことを想像させる．他に似た分布を示すものにシラホシヒゲナガコバネやオニヒゲナガコバネなどがある．

アカガネカミキリは東北地方に広く分布圏を持ち，三国山地西部の志賀高原岩菅山，笠岳がその西限とされているが，もう少し南部の浅間山塊まで広がる可能性も残されている．なお，富山東礪波郡で記録されたものは低標高地でもあり，誤同定か偶産であろう．

中部地方は，平野や低山地では暖流の影響を受け，また標高が上がるに伴い北方系の色を濃くするというように，変化に富む自然環境を備え，本州に産するカミキリのほとんどを圏内に温存している．しかし好採集地を多く有するためデータがそこに片寄る傾向が強い．近年になって地域単位，県単位のリストが発表されているが片寄りの補正には十分でなく，各地元研究者の研鑽奮起に期待したい．

(名古屋市緑区大高町門田 19)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 38–43, June 15, 1988

近畿地方のカミキリ相*

岩　田　隆太郎

1. はじめに

近畿は兵庫県，大阪府，京都府，滋賀県，奈良県，和歌山県，三重県より成る地方である．北部は中部山岳や中国山地に連なる山地を擁し，南部は地質構造上，四国と連なる紀伊半島を擁して日本列島の気候の多様さの縮図的な様相を呈し，カミキリファウナにもこれが反映している．

以下ファウナ解明の状況を概観すると，まず兵庫県については高橋 (1961; 1964) のリストや辻 (1972) の概説等があるが，新たなリストの必要性が痛感されている．滋賀県は本地方中，カミキリ相の調査が最も遅れている県であり，新保・保積 (1979) のリストを見る限り，調査の余地が存分に残されている．大阪府については，目下筆者等の手により市町村別のリストと全種の分布地図の作成が計画されている．また京都府，奈良県については水野・常喜・岩田 (投稿中) による総まとめが完成している．和歌山県 (奈良, 1982), 三重県 (川原・大川, 1981) は一応リストが発行されている．

以下，府県内の地域別にカミキリ相の特徴およびその代表的採集地と，そこに産する種について述べて行き，近畿地方全体のカミキリ相の概要を明らかにする．

2. 兵　庫　県

兵庫県は近畿地方の中で最も気候の変化に富み，その分カミキリ相も変化に富む．

(1) 県最北部，日本海沿岸の低地は，島嶼性のものが得られる可能性が高い．(2) 県北西部，氷ノ山，扇ノ山，鉢伏山等を頂とする山地は，これらの山々の他，赤西渓谷，音水渓谷，横行林道，坂ノ谷林道，福定等の有名採集地が多く，ヒラヤマコブハナ，フタスジカタビロハナ，シコクヒメコブハナ，ニッコウヒメハナ (ssp. *ohbayashii*)，シラユキヒメハナ，トサヒメハナ，ミワヒメハナ (前種と混棲)，ヒゲブトハナ (1♀, 福定, 13. VIII. 1982, 石井正雄採集)，カエデノヘリグロハナ，クロサワヘリグロハナ (1♀, 赤西, VI. 1982, 大垣誠採集)，セアカハナ，オニホソコバネ，ベーツヤサ，タカオメダカ，サドチビアメイロ，クロサワヒメコバネ，タケウチヒゲナガコバネ，ホソツヤヒゲナガコバネ，スネケブカヒロコバネ，ヤノトラ，キジマトラ，アカネキスジトラ，フタオビミドリトラ，タキグチモモブトホソ，シラフヒゲナガ，ヒメビロウド，ヨコヤマヒゲナガ，エゾナガヒゲ，ムネホシシロ，ジュウジクロ，キバネアラゲ，クロオビトゲムネ，亜種不詳のハンノアオ，イッシキキモン，ホソリンゴ等の注目すべき種を産し，特にブナ林と桑畑が面白い．(3) 豊岡盆地～丹後山地西部 (出石郡) ではベーツヒラタ，ムネホシシロ等が，(4) その南東の氷上郡東部はテツイロハナ他が知られる程度．(5) 県中央部の段ケ峰，三国岳を中心とする山地はツマキトラ，ムネホシシロ等が知られ，中国山地の最東端部としての性格を示している．(6) 県南西部，播磨地方の低山地はケブカマルクビ，(7) 同瀬戸内沿岸はヨツスジトラの多産が知られる．(8) 瀬戸内沖の家島諸島については今後の調査に待つところが大きい．(9) 県南東部の多紀郡 (篠山盆地) ではソボリンゴが知られる．(10) 神戸市及び阪神地方は能勢地方西部，六甲山地などを擁し，よく調査された地域で，猪名川町のクリチビ，六甲山系のセダカコブヤハズ (ssp. *gibber*)，芦屋市住宅街のチャコマフ (移入種) 等が著名である．摩耶山はマヤサンコブヤハズ，ヒメアヤモンチビ，ニセシラホシ等の模式産地 ("Moon Temple") であるが，前 2

* 近畿地方カミキリムシ分布資料 (4)

者はその後の記録を全く聞かない．(11) 淡路島は，セダカコブヤハズ (ssp. *gibber*) の他はトゲヒゲトビイロ，チャイロヒメ等の島嶼性種が目立つ．

3. 大　阪　府

本府は概して近畿の他府県と比べて環境の破壊が著しいが，その反面調査が最もゆきとどいており，文献記録，未発表採集例合わせて約 230～240 種 (内約 10 種が偶産) が見出されている．

(1) 淀川以北の北摂一帯ではまず箕面公園が挙げられ，戸沢 (1932), 大倉，他 (1965) のリストも出て，戦前より関西一の有名採集地として知られてきたが，その後の開発で昆虫が減少したとされて久しい．この他，島本町天王山西山麓，高槻市摂津峡，茨木市銭原，箕面市下止々呂美，豊能町初谷渓谷，同妙見山，同高代寺山南山麓，池田市東山町などの採集地が知られ，ケブカマルクビ (茨木市)，ヤマトチビコバネ (下止々呂美，模式産地は池田市)，アカアシオオアオ (全域多産)，クリサビ (下止々呂美)，ヒメシラオビ (下止々呂美)，ソボリンゴ (池田市東山町では多産) 等を産し，他に府下未記録種のタテジマ (高代寺山，1♂, 31. VII. 1983, 伊藤武採集) の採集例もあり，さらに移入種のラミーが全域に多産する．(2) 淀川以南の中央平野部で注目に値する種は，ケブトハナ (天王寺区，東住吉区)，テツイロヒメ (東住吉区，堺市，他)，フタオビミドリトラ (東住吉区)，アカアシオオアオ (堺市仁徳天皇陵，最近は絶滅?) であり，特にテツイロヒメの分布は地史上興味深い．(3) 府東部の生駒山地では，チビコブ (lex., 29. IV. 1970. 塩崎明生採集) 等の種が得られている．(4) 府南部の紀泉山脈では，槇尾山，犬鳴山，岩湧山 (トワダムモンメダカ，1ex., 25. V. 1974, 元方義夫採集；クビシロ，2exs., 12. VII. 1965, 前田洋一採集；ホソヒゲケブカ，1♂1♀, 7. VII. 1958, 岡田武通採集；ヒゲナガヒメルリ，11exs., 21. VII. 1986, 岩田隆太郎他採集)，和泉葛城山 (シロチビコブ，2exs., 16. VI. 1985, 加藤敦史採集；セミスジニセリンゴ，1♀, 同日，岩田隆太郎採集)，牛滝山，金剛山 (ニセヨコモンヒメハナ，数例，1983～1986；ヒゲシロハナ，1ex., 18. VII. 1969, 望月寛人採集) 等の採集地を擁している (カッコ内は府下初記録)．この山系のセダカコブヤハズは，(1) の北摂山地と亜種を異にするとされている．

4. 京　都　府

京都府は兵庫県同様南北に細長いが，南端に海を欠く分ファウナが限定される．

(1) 京都市平野部～府南端に至る南山城地方では，和束町鷲峰山 (セダカコブヤハズ)，宇治田原町 (ヤマトチビコバネ，シロスジドウボソ)，京都市東山山系 (ケブトハナ，アオ)，天王山東部 (クビアカモモブトホソ，ソボリンゴ) 等の採集地が知られる．南部は未調査地域が多い．(2) 京都市左京区，北区，及び北桑田郡の山間部は広義の「北山」と言われ，中国山地と中部山岳の 2 つの異質なファウナの接点として注目に値する．その北東端，美山町京大芦生演習林は，ヒラヤマコブハナ，シコクヒメコブハナ，シラユキヒメハナ，フタオビミドリトラ，エゾトラ，フトキクスイモドキ (*Asaperda* sp.) 等，実に多くの種を産することで知られ，中国山地との関連も見られる．この他北山では佐々里峠 (ムナコブハナ，サドチビアメイロ，クリストフコトラ，フトキクスイモドキ)，大悲山 (ムナコブハナ)，杉峠 (ヨツボシチビヒラタ，トウキョウトラ，ヒトオビチビ) 等の採集地が知られる．またオオトラの模式産地は京都近辺とされ，大悲山等ではモミに食痕は見られるものの，タイプに次ぐ採集例はいまだない．(3) 亀岡市と船井郡より成る亀岡盆地とその周辺の山地，及び (4) 綾部市，福知山市，夜久野町より成る福知山盆地は，調査があまりなされていない．(5) 丹後地方東部は舞鶴市でベーツヒラタ，ヤノトラ，シロヘリトラ (移入種?) 等が得られ，(6) 奥丹後半島を含む丹後地方西部では，太鼓山や近畿地方最北端の経ケ岬等でホシベニ，ナカバヤシモモブト，ホソリンゴ等が得られている．(7) 日本海沖の島嶼は冠島のみが調査されており，*Ceresium* 3 種，キイロメダカ，ニッポンモモブト

コバネ (模式産地), キュウシュウチビトラ, ヨツスジトラ, チャバネホソリンゴ (分類学的に再検討が必要) 等が得られ, 非常に特異なファウナとなっている. (5) 及び (6) の海岸部でもこれらのものが得られるはずであり, 他の小島もあわせて今後の調査を期待したい.

5. 滋 賀 県

滋賀県は中国山地, 紀伊半島, 両白山地の 3 つのファウナの流れが遭遇する所で, 近畿地方のファウナにおいて中部山岳の要素を検出する上で極めて重要な県である.

(1) 湖西地方南部 (大津市中央部～安曇(あど)川流域) は, 京都府の (2) 北山地域の延長と見なされ, 比良山地 (ムナコブハナ, ヒラヤマコブハナ, シラユキヒメハナ), 及び朽(くつ)木村が採集地として知られる. (2) 湖西地方北部は次々項の伊吹山地との関連上興味深いが, 調査は極めて不充分である. (3) 湖東地方低地一帯及び琵琶湖内島嶼についても同様に知見は乏しい. (4) 伊吹山地は動物地理学上東日本と西日本を分けるスタイネガー線がその上を走り, 近畿地方のファウナに中部山岳以東に特有の種の名をつらねることを可能ならしめる唯一の地域である. 伊吹山ではヒラヤマコブハナ, ムネアカヨコモンヒメハナ (近畿唯一の産地) 等の採集例がある. (5) 鈴鹿山脈はセダカコブヤハズが著名である. (6) 県南部 (大津市南部～水口(みなくち)丘陵一帯) も特筆すべき種の記録は少なく, 調査不足の感がぬぐえない.

6. 奈 良 県

奈良県は紀伊半島中央部に位置し, 県南部には本邦一の年間降水量を誇る中～高山地帯を擁し, いわばレリックとしてこれら山地及び低山地の春日山に残存している珍種も多い. こういった分布は太古のファウナを推定するうえで極めて重要である.

(1) 県北西部の生駒及び金剛山地の東側は典型的な低山地のファウナを有する. (2) 奈良盆地は社寺林の保存状態が良く, 大和郡山市のエゾナガヒゲ等, 興味深い記録が見られる. (3) 笠置山地 (奈良盆地の東) では, その北西端の奈良市奈良公園及び春日山の知見が大部分を占める. この地はヤマトヒメハナ (模式産地), ルリハナ (他所のものより際立って大型), オオハナ, ジャコウホソハナ, ベーツヤサ, キイロミヤマ, キイロメダカ, ヤマトチビコバネ, クロサワヒメコバネ, チャイロチビヒラタ, オオトラ, ヤマトシロオビトラ (模式産地), エゾトラ (特産亜種), クビアカモモブトホソ (模式産地), ヒメアヤモンチビ, シロスジドウボソ, ヒゲナガゴマフ, クロオビトゲムネ, ヒゲナガヒメルリ, カスガキモン (模式産地) 等の注目すべき種を産することで非常に著名である. さらにチャイロヒメコブハナ, マダラゴマフ等の種も各 1 例ながら得られており, 低山地として驚異に値する. この地域では他に天理市福住でオオハナ, 桜井市与喜山でミヤマルリハナが得られている程度で, 今後春日山以外の採集地の開拓が望まれる. (4) 飛鳥地方南方の竜門岳, 高取山, 多武峰(とうのみね)等より成る山地も興味深い. このうち多武峰は石井正雄氏により, *Anaglyptus* sp., ホシベニ, フタスジゴマフが得られた. 土地の持つ深い歴史ともあいまって, これらの記録は何かしら神秘的でさえある. (5) 室生より南東の高見山地に至る宇陀郡の山々は重要であるが, 調査は不充分である. (6) 県南東部, 国見山より大台ヶ原山に至る台高山脈は大峰山系に次ぐ標高の山脈である. 大台ヶ原山近辺ではマツシタヒメハナ, ミヤマヒメハナ (ssp.), イヨヒメハナ, ヘリグロホソハナ, ヒゲブトハナ, ムナミゾハナ, タケウチホソハナ, オニホソコバネ, トガリバホソコバネ等を産する. (7) 大峰山系は紀伊半島最大の山脈で, 前者とはファウナをやや異にし, この相違は注目に値する. オオミネヒメハナ, マホロバヒメハナ, マツシタヒメハナ, ヨコモンヒメハナ (近畿地方唯一の産地), ヘリグロホソハナ等, ハナカミキリが面白い. この山脈の北端の川上村柏木はゴマフキマダラ, ホソヒゲケブカ, ヒゲナガヒメルリ等の模式産地とされている. (8) 荒神岳, 伯母子(おばこ)岳, 護摩壇山等を含む十津川以西の山地は前 2 項に次ぐ県第 3 の山塊であり,

ニッコウヒメハナ (ssp. *stephani*), ヒゲジロホソコバネ (模式産地) 等の記録がある. (9) 県南西部, 十津川～熊野川以西の牛廻山～果無山脈は調査が不充分であるが, 本県のセダカコブヤハズ (ssp. *shibatai*) と和歌山県南部産の ssp. *nankiensis* との関係を論じるうえで興味が持たれる地域である.

7. 和 歌 山 県

本県は近畿地方で最も南方的色彩の濃い所であり, 生物地理学にいう本州南海岸線が海岸線の少し内側を通り, その南側の沿岸部に特に興味が持たれる. しかしその北側の山地帯にも決して劣らず興味深い種が分布し, 全体として魅力のある地域と言えよう.

(1) 県最北部の紀泉山脈南側は, 県全体から見ると魅力に乏しい. (2) 紀ノ川流域～和歌山市周辺の低地部では, 特に海に近い和歌山市内で島嶼性のヨコヤマヒメ, テツイロヒメ等の多産が見られる. 友ケ島も興味深く, カノコサビが最近得られた. (3) 高野山より箕峠, 護摩壇山, 城ケ森山, 竜神温泉, 牛廻山に至る山系は県随一の標高を誇る地である. 高野山近辺ではハイイロハナ, イガブチヒゲハナ, タケウチホソハナ, コウヤホソハナ (模式産地), ナカネアメイロ, クビアカモモブトホソ (2♀♀, IV. 1980, 大垣誠採集) 等が, また箕峠, 護摩壇山 (いずれも本県側), 八斗蒔の一帯ではオオクボ, ケブトハナ, ヒラヤマコブハナ, シコクヒメハナ, トサヒメハナ, ヒゲジロホソコバネ, クロサワヒメコバネ, ヤマトシロオビトラ, エゾトラ (亜種不明), タキグチモモブトホソ, トゲムネホソヒゲ, ヒトオビチビ, ヨコヤマヒゲナガ等が得られている. また八斗蒔でのコゲチャサビの記録, 及び護摩壇山での 1975～1977 年秋季におけるカスリチビのタイプシリーズやヨツボシシロオビゴマフを含むフトカミキリ亜科の記録 (桑原, 1979) は特筆に値する. (4) 那賀(なが)郡南東部から長峰山脈, 有田川中流より白馬山に至る県北部の一帯では, 竜門山のクビアカハナ (f. *hayashii*), 生石ケ峰のニセハイイロハナ, カエデヒゲナガコバネ, ヒメアヤモンチビ, イッシキキモン等が特筆される. (5) 日高川中流より竜神村南部虎ケ峰に至る低山地は, 虎ケ峰のモンクロベニの記録が知られる程度. (6) 有田市より白浜町に至る海岸沿いと, その間に点在する半島, 小島嶼や平野部にも南方性の種 (ヒゲナガヒメ, ベーツヤサ, キュウシュウチビトラ, タテジマ, ホシベニ等) を産し, 他に日ノ岬～御坊市近辺はクビアカハナ, モンクロベニの多産で名高い. また有田市ではヤマトトゲバの唯一の記録がある. (7) 西牟婁(むろ)・東牟婁両郡に跨る大塔山及びそのすぐ西の法師山を中心とする山地も非常に興味深い地域である. 調査は大塔山が中心で, オオクボ, ハイイロハナ, キイロメダカ, ヒトオビチビ, キイロアラゲ, ミヤマモモブト (ssp. ?) 等の記録ないし採集例があり, 他にその近傍の将軍山 (クロソンホソハナ, スネケブカヒロコバネ), 安川林道 (ニッポンモモブトコバネ), 大倉畑山 (クビアカモモブトホソ) も採集地として知られている. しかし何といってもこの地域の代表は特化したセダカコブヤハズ (ssp. *nankiensis*) であり, 大塔山南方の谷あいが産地として知られる. (8) 日置川(ひきがわ)町～新宮市に至る海岸沿いとその間の小島嶼及び紀伊大島は, 本州の太平洋沿岸中でファウナが最も海流の影響をうけやすい地域と考えられ, すさみ町江須崎ではケブトハナが得られ, さらに各地に点々とタケウチヒゲナガコバネ, フタオビミドリトラ, アヤモンチビ (本州唯一の産地) が分布, 紀伊大島ではホシベニ, イボタサビ, カノコサビが得られている. (9) 大雲取山, 那智山等を中心とする山塊では, 那智山でセダカコブヤハズ (ssp. *nankiensis*) が得られている. (10) 東牟婁郡の 2 カ所の飛地は, 北山峡, 瀞(どろ)八丁を含み観光で名高いが, 三重, 奈良及び本県の県境が複雑に走り, 特に本県の地域をそれとして記録することが少なく, 県単位で分布を論じる観点からすると, この整理が今後の課題となっている.

8. 三　重　県

三重県は近畿地方では南北に最も細長く, 北は中部山岳のファウナの要素を近畿地方に招き, 南は奈良県, 和歌山県とともに紀伊半島を成し, これに島嶼性とされる要素が重なって一体となり, かく

して近畿地方中ファウナの多様性の点でおそらく兵庫県を上回ることが推測される．また奈良県，和歌山県同様に，海洋性と考えられる種が意外と内陸深くに，いわばレリックとして存在し，この点が分布論や採集活動をおもしろくしている．また本県のセダカコブヤハズは，亜種の区別が困難で，北近畿と南近畿のファウナが当地で融合していることを物語っているとも考えられる．

(1) 県最北端に位置する養老山地は近畿と東海を分かつ重要な地域であるが，ほとんど未調査である．(2) 伊勢平野北部，すなわち員弁(いなべ)郡北部～木曾川河口より鈴鹿市～亀山市に至る低地平野部ではクビアカハナ (鈴鹿市)，ホシベニ (四日市市，鈴鹿市) 等が知られる程度．(3) 鈴鹿山脈は，マヤサンコブヤハズ等を産することにより滋賀県伊吹山地の南延としての性格を見せ，その一方で一部の南方系種の存在により，次々項の布引山地や後述の台高山脈東域とも関連を見せて興味深い．採集地としては，藤原岳 (ケブトハナ，クリイロチビケブカ，ゴイシモモブト，ホソリンゴ)，福王山 (クリチビ)，朝明渓谷 (トウキョウトラ，フチグロヤツボシ)，御在所山 (ムナコブハナ，ヒメアヤモンチビ)，湯ノ山温泉 (ヒラヤマコブハナ，セダカコブヤハズ)，野登山 (ジャコウホソハナ，セダカコブヤハズ) といった所が知られる．(4) 水口丘陵南部～上野盆地～名張市北部の低地一帯では，上野市のマルモンサビ，ホシベニ等が知られる他は知見に乏しい．(5) 布引山地より美杉村北部～名張市南部に至る山脈は，鈴鹿山脈と台高山脈を結ぶ重要地点であり，赤目 (エゾナガヒゲ)，大洞山 (ヒラヤマコブハナ)，比津 (ベーツヤサ)，青山高原 (モンクロベニ)，笠取山 (ヒラヤマコブハナ)，経ケ峰 (カエデヒゲナガコバネ，セダカコブヤハズ，ホシベニ) 等の採集地が知られる．(6) 伊勢平野南部，すなわち安芸(あげ)郡～津市より二見町に至る低地平野部は，同平野北部よりも海流の影響を受けやすく，かつ自然林の保存状態もよい．津市ではベーツヒラタ，カノコサビ，タテジマ，伊勢市の神社境内ではベーツヒラタ，キイロミヤマ，ヒメアヤモンチビ，さらにはヒゲナガ，ヨコヤマヒゲナガといった意外な種が得られている．(7) 志摩半島より大内山川に至る低山地では，知見がその最北東端の伊勢市内の山に集中しており，朝熊(あさま)山ではクビアカモモブトホソが得られたと聞いている．大宮町滝原宮はトガリバホソコバネの記録で知られる．(8) 鳥羽市より南島町に至る沿岸地帯及び答志島等の島嶼では，鳥羽市のベーツヒラタ，タテジマが知られる程度．(9) 一志郡南部，飯南(いいなん)郡北部，松阪市西部より成る高見山地とその延長部では，その北麓に位置する美杉村三重大学平倉演習林～三峰(みうね)山が県下一のカミキリムシ採集地として知られる．オオクロ，ハイイロハナ，イヨヒメハナ (ヨコモンヒメハナとして記録)，トサヒメハナ，オオハナ，キヌツヤハナ，トワダムモンメダカ，サドチビアメイロ，クロサワヒメコバネ，ムネマダラトラ，キンケトラ，フタオビミドリトラ，タキグチモモブトホソ，ヒメアヤモンチビ，セダカコブヤハズ，クリイロシラホシ，ヨコヤマヒゲナガ，キイロアラゲ (模式産地，1 例のみ)，ゴイシモモブト，カスガキモン，カツラ，ホソリンゴ等の記録を有する．その他では美杉村北畠神社のクビシロが知られる程度であろう．(10) 台高山脈東域 (国見山，大台ケ原山東部，大杉谷，奥香肌峡温泉，大内山村，尾鷲市北部を含む山地) は隣接する奈良県高山部との関連で興味深い地域である．飯高町蓮(はらす)ではツマキトラ，ホウノキトゲバ，大台ケ原山 (本県側) ではオオクボ，ムナミゾハナ，イガブチヒゲハナ，セダカコブヤハズ等，大杉谷ではケブトハナ，クロソンホソハナ等が記録されており，南方と北方が融合したファウナを示す．(11) 尾鷲市南部より瀞峡に至る県南部の山地は，尾鷲市矢ノ川峠のヒメヨツスジハナの記録がある．(12) 紀伊長島町～南牟婁郡の沿岸低地及びその沖の島嶼は，ベーツヒラタ，テツイロヒメ (紀伊長島町，熊野市)，フタオビミドリトラ，タテジマ等を産し，また紀伊長島町大島のホソリンゴは注目に値する．

9. 考　　察

近畿地方におけるカミキリ相の位置づけをみるために，ここで本地方の *Pidonia* 及びコブヤハズカ

ミキリ属 (*Mesechthistatus*+*Parechthistatus* で 1 属とするのが妥当?) を論ずることとする．*Pidonia* 中，中部山岳が分布の中心となっており，かつこれが近畿地方に押し出され (拡大)，もしくは取り残された (残存) 形で分布しているものに，マツシタヒメハナ (氷ノ山，大台ケ原山，大峰山系)，ミヤマヒメハナ (大台ケ原山，ssp.)，ヨコモンヒメハナ (大峰山系，平倉)，ムネアカヨコモンヒメハナ (伊吹山地)，ニセフタオビノミハナ (大峰山系) が挙げられ，一方四国に分布の中心があり南近畿に残存(?)しているものに，マホロバヒメハナ (大峰山系)，シコクヒメハナ (護摩壇山) が，さらに北近畿に分布の中心があり中国山地にも若干進出しているものに，シラユキヒメハナ (氷ノ山，京都北山，比良山地) がある．一方ニッコウヒメハナは亜種分化の見られる種であるが，兵庫県音水渓谷のもの (ssp. *ohbayashii*) が中部山岳西部と亜種を同じくする一方，伯母子岳のそれ (ssp. *stephani*) は四国と同じものである (窪木，1983)．ところが同様に亜種分化の見られるイヨヒメハナでは，大台ケ原山のものは四国より中部山岳のものにより近いという．以上より，中部山岳と中国山地に北近畿を仲介としてつながりが想像される一方，紀伊半島は四国よりも中部に近しいファウナを持つということになる．一方セダカコブヤハズの ssp. *shibatai* の分布は紀伊半島中部～近畿中央部から中部山岳南部に及び，四国とは明瞭に一線を画し，この種にとってはスタイネガー線よりは紀伊水道～鳴門海峡の方が敷居が高いように見える．(なお，近畿においてはセダカコブヤハズとマヤサンコブヤハズは同年同所にて採集されたことがなく，両種が分布するとされる兵庫県摩耶山，箕面市，京都府北山でも，種間雑種例を除いて同時混棲は見出されていないことを付け加えておく．)　一方ヒメヒゲナガの紀伊半島のものは四国産 (ssp. *shikokensis*) に近いようであり，*Pidonia* やコブヤハズとは反対の例となっている．

かくして紀伊半島の位置づけ，もしくは紀伊水道の生物地理学的重要性が問われることになる．上述以外で紀伊半島と四国山地の関係を示すものとしては，オオクボ，クロソンホソハナ等があるが，それらの性格づけとともに，今後の研究に待つところが大きい．

本編に繰り返し登場したのが太平洋岸，及び日本海岸沿いに分布する海洋性あるいは島嶼性種である．しかし，これらのうちケブトハナ (大阪府豊能町，箕面市，京都市東山区，和歌山県護摩壇山麓)，ヨコヤマヒメ (兵庫県赤西渓谷，大阪府箕面市，茨木市)，ヒゲナガヒメ (奈良市春日山，京都市上賀茂)，タケウチヒゲナガコバネ (兵庫県赤西渓谷)，フタオビミドリトラ (兵庫県赤西渓谷，三重県平倉，和歌山県大塔山)，タテジマ (京都市左京区) 等は，それぞれこのように意外と内陸にまで分布を拡張しており，この場合耐寒性及び海岸線の後退がカミキリの分布における重要な要素として指摘される．またこれらと同じ海洋性ながら，原生林または保存状態のよい自然林が必須というものもあり，クロソンホソハナ，キイロミヤマ，ヒメアヤモンチビ，キイロアラゲ，ホソリンゴ等がそれに当たる．エゾナガヒゲは HAYASHI (1960) の指摘するように系統的には南方系のようであるが，近畿地方では兵庫県北西部の山地以外では兵庫県八鹿町近辺，同宝塚市，京都府舞鶴市，奈良県大和郡山市，三重県赤目にて各 1 例得られたのみで，まことに奇妙な分布パターンと言わねばならない．

近畿地方はこの他，シロヘリトラ (舞鶴市)，チャゴマフ (芦屋市)，キボシ (全域)，ラミー (北近畿) 等の移入種の定着も多く，調査におもしろみが尽きない．

末筆ながら，本稿を執筆するにあたりいろいろとご助言，情報提供を賜った石井正雄，大垣誠，大平廣士，奈良一，的場績，水野弘造，吉川文弘博士他の諸氏，ならびに日頃ご指導を賜っている草間慶一博士，林匡夫博士に厚くお礼申し上げる次第である．

(大阪府茨木市紫明園 11-C-705)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 44–49, June 15, 1988

中国地方のカミキリ相

山　地　　治

中国地方は本州の西端に位置し近畿地方と接し，四国・九州とは瀬戸内海を隔てて近接している．地形的に見ると，瀬戸内海の島々，山陽側の平野部，標高 400～800 m の中国高原（吉備高原・石見高原），標高 1,000～1,200 m の山頂を持つ中国山地（冠山を中心とする西中国山地と道後山・大山・氷ノ山を含む東中国山地），山陰側の平野部及び松江地塁～島根半島・隠岐諸島等から成り立っている．ここでは山陽側の平野部（主に岡山平野）～吉備高原～中国山地～山陰側平野部～島根半島周辺～隠岐諸島と見て行き，後で宮島・瀬戸内海の島々に触れてみたい．

1. 山陽側平野部

山陽側の平野では岡山平野が最大の平野であるが，近代の干拓による割合が大である．また，古来人間の活動の盛んな地域であり，本来の植生であるシイノキや常緑カシ類は社寺林としてわずかに残されているだけで，大部分は市街地，耕作地となっており，丘陵地の林は二次林のアカマツ林やコナラ・アベマキ等の林となっている．

この地域に分布しているカミキリは，ウスバ・ノコギリ・ニセノコギリ・クロハナ・ヤツボシハナ（ツマグロハナ）・クロ・サビ・アオスジ・ミヤマ・キマダラヤマ・ヨツボシ・ヨコヤマヒメ・カッコウメダカ・ミドリ・ヒメスギ・シロオビチビヒラタ・キスジトラ・タケトラ・エグリトラ・ヒメクロトラ・ヨツスジトラ・ベニ・ホタル・ゴマフ・ナガゴマフ・カタジロゴマフ・キクスイモドキ・ハイイロヤハズ・トガリシロオビサビ・アトジロサビ・アトモンサビ・ワモンサビ・キボシ・ゴマダラ・マツノマダラ・センノキ・ビロウド・シロスジ・クワ・ケシ・アトモンマルケシ・クモガタケシ・シラオビゴマフケシ・ラミー・ヤツメ・リンゴ・ホソキリンゴ・キクスイ・ルリ等である．記録の少ないものでは，オオシロの古い採集例が山口・広島・岡山の市街地より点々とあるが，最近のこの地域からの記録は聞かない．ベーツヒラタ・ホシベニは山口・広島の平野部に分布している．カノコサビ・イボタサビは岡山平野の丘陵地で記録されている．5 月になると岡山平野の市街地で時折モンクロベニが採集されることがあるが，これは数 km 離れた発生地から飛来して来るものと思われる．

2. 吉備高原南部（アカマツ林）

平野から吉備高原に移る接点付近の丘陵地は花崗岩質の土壌と少雨，過去の伐採のくり返しによってアカマツ林となっている所が多い．標高 50～200 m ほどのこのようなアカマツ林は従来カミキリ相も貧弱であると思われていたが，アカマツ，ネズミサシ等に依存しているカミキリが独特の相をなしている．ケブカヒラタ・クビアカハナ・ケブカマルクビ・ヨツボシシロオビゴマフ・キボシチビ・カラフトヒゲナガ・マツノマダラ・ヒメシラオビ・スジマダラモモブト・ナカバヤシモモブト・ケシ等がそのメンバーである．ケブカヒラタは史跡等のアカマツの大木の残っている地域で発見されている．岡山県を原産地とするケブカマルクビはその後各地で記録されたが，中国地方では山陽側吉備高原中部以南に分布しているようである．現在本州でのみ記録されているが，この種は小豆島にも分布している．クビアカハナは一時的に多産することがあり，アカマツやネズミサシの花にも訪花するが，むしろ日影のアカマツ伐採枝に集まるのを見ることが多い．ヨツボシシロオビゴマフはアカマツ伐採枝に集まる．キボシチビはアカマツについた古い枯枝より発生するようである．以上の 2 種は関東地方

等ではモミを食樹としているが，中国地方ではアカマツを食べている．このことを考えると，まだ他に意外な種が発見される可能性のある環境と言える．ただこの地域は最近の松枯れによってアカマツ林自体がほとんど消失したり，農薬散布によって大きな影響を受けていると思われ，実際岡山市と宮島で農薬散布後地面に落下していたヨツボシシロオビゴマフが拾われている．山陽側低地の代表的な環境であるのでより細かい調査が望まれる．

3. 吉備高原

吉備高原に入ると，高原上面はアカマツ林が続いているが，河川に臨む斜面にはコナラ・アベマキ等の雑木林が多くなる．この地域はこれら雑木を利用したシイタケ栽培が盛んである．栽培用の原木を得るため，冬期これらの林を伐採することにより伐採跡地に細枝等が残され，これらから発生するカミキリが多い．モンクロベニがその代表であろう．成虫はコナラ・ナラガシワ・アベマキ等の切株から生じたひこばえに集まり後食する．なかでもナラガシワが好まれるようである．多くのひこばえがあっても特定の株に集中する傾向がある．成虫はひこばえ上で交尾すると，比較的太い伐採枝に産卵し，2年後に脱出した新成虫はその近くの新たな伐採跡地まで移動し，ひこばえに集まる．

その他広葉樹を食樹とするカミキリが多い．ムネアカクロハナ・ヤツボシハナ・ミドリ・キイロトラ・シラケトラ・トゲヒゲトラ・ホタル・チャイロホソヒラタ・ヤマトチビコバネ・ドウボソ・シロスジドウボソ・ドイ・クモガタケシ・ガロアケシ・シラオビゴマフケシ・ヒメヒゲナガ・ヨツキボシ等である．

吉備高原中部～中国山地にかけての同様な伐採跡地にはクリストフコトラ・トウキョウトラ・ヨツボシチビヒラタが見られる．比較的自然林の残されている地域には上記の種に加えて，ミヤマルリハナ・ズマルトラ・アカジマトラ・ハイイロツツクビ・ムネモンヤツボシ・オニグルミノキモン・ハスオビヒゲナガ等が見られる．カエデヒゲナガコバネは岡山県の高梁川流域付近より西に広く分布している．それに対して，コボトケヒゲナガコバネ・ホソツヤヒゲナガコバネは吉備高原中部から中国山地にかけて点々と分布しているが，産地は限定されているようである．

この地域の中でも岡山県臥牛山は山頂に松山城があり，長らく伐採をまぬがれてきたため，全山モミ・カヤを含む原生林となっている．このため特殊な種類を産し，周囲の地域よりもむしろ遠く離れた奈良県の春日山とよく似たカミキリ相をなしているようである．ヤマトヒメハナ・ベーツヤサ・キイロメダカ・クビアカモモブトホソ・マダラゴマフ等の春日山と共通の珍種をはじめ，ベーツヒラタ・クビアカハナ・ミヤマルリハナ・カタキハナ・ベニバハナ・サドチビアメイロ・ヤマトチビコバネ・カエデヒゲナガコバネ・オダヒゲナガコバネ・オオアオ・ヨツボシチビヒラタ・ズマルトラ・ヨコヤマトラ・トウキョウトラ・アカジマトラ・ヒメアヤモンチビ・ヒトオビチビ・ヒゲナガ・イボタサビ・ヒゲナガヒメルリ・ソボリンゴ等を産し，暖地性の遺存的分布種が多い．中国地方の低山で 140 種ものカミキリを産する地域は他にないものと思われる．

図 1．臥牛山山頂（石垣修復のためモノレールが敷かれている）．

4. 中 国 山 地

中国山地は江川を境として冠山を中心とする西中国山地と，道後山・大山・氷の山を含む東中国山地とに分かれている．中国山地の特徴として，800～1,200 m にブナ帯があり，その上部にコメツガ等の針葉樹林やナナカマド等の高山性の広葉樹林が発達していないことがあげられる．そのため中部地方から四国・九州に分布しているムナミゾハナ・イガブチヒゲハナ・タケウチホソハナ・ヘリグロホソハナ・トガリバホソコバネ・シコクヒメハナやチュウジョウヒメハナ・マホロバヒメハナに対応する *Pidonia*・オオマルクビヒラタ・オオトラ・ゴマフキマダラ・シナ等の分布を欠く．しかしこの地域は中国地方の中でカミキリの最も豊富な地域となっており，西中国山地・東中国山地共に 200 種を超す種が分布している．両山地に共通に分布するカミキリでは，テツイロハナ・ヒラヤマコブハナ・フタスジカタビロハナ・チャイロヒメコブハナ・セアカハナ・ヒゲブトハナ・クロサワヘリグロハナ・オニホソコバネ・オオホソコバネ・クロホソコバネ・ヒゲジロホソコバネ・トラフホソバネ・サドチビアメイロ・クロサワヒメコバネ・スネケブカヒロコバネ・チャイロホソヒラタ・チャイロチビヒラタ・クリストフコトラ・ヨコヤマトラ・タチキグモモブトホソ・ヒトオビチビ・フサヒゲルリ・セダカコブヤハズ・マルバネコブヒゲ・イッシキキモン・カスガキモン・カツラ・ソボリンゴ・ホソリンゴ等がある．

フタスジカタビロハナは 5 月中旬ヤマシャクヤク花上に現れる．チャイロヒメコブハナはカツラの木に集まり，広島・兵庫県下ではかなり多いようであるが岡山でも記録された．*Necydalis* はオニホソコバネ・クロホソコバネは両山地において数例でしかないが，オオホソコバネ・ヒゲジロホソコバネは前 2 種に較べて広く分布している．スネケブカヒロコバネは二次林にも適応できる種のようで，最近分布を拡げているように思える．フサヒゲルリは山口・広島県境松の木峠と大山桝水原で記録されているが，現在両産地での生息は否定的である．最近大山周辺で記録されたが，草原性の本種が絶滅しないようにするため相当の配慮が必要であろう．セダカコブヤハズは，大山・扇ノ山・氷ノ山に分布するダイセンコブヤハズ，広島県比婆山付近のヒメコブヤハズ，山口県に分布するチョウシュウヒメコブヤハズの 3 亜種に分類されているが，中国山地には広く分布するようなので各亜種の分布は，吉備高原の石灰台地に分布している型や隠岐島後の型等含めて，今後調査される必要がある．カツラは中国山地全般に赤斑の発達したいわゆるコジマベニスジ型の個体が多いが中部地方と変わらない個体もいる．ハンノアオも四国・九州の亜種と同じものと思われ，このような傾向はチャイロヒメコブハナやシナノクロフにも見られるようである．

図 2．中国山地花知山から人形峠方面を望む．

東中国山地にのみ分布していると思われる種は，オオクボ・ムナコブハナ・ニッコウヒメハナ・ヘリモンヒメハナ・ムネモンヒメハナ・ヨコモンヒメハナ・シラユキヒメハナ・ミワヒメハナ・アカアシオオアオ・ヤノトラ・アカネキスジトラ・アカジマトラ・フタスジゴマフ・ムネホシシロ・エゾナガヒゲ・カッコウ・キバネアラゲ・チャバネクロツツ・ブロイニング・ハンノキ等がある．ニッコ

図 3. 高鉢山の土場（現在は木は切り出されていない）.

ウヒメハナは，鳥取県高鉢山の 1 例のみ，近くの兵庫県赤西でオオバヤシヒメハナがこれも 1 例記録されている．ヘリモンヒメハナとムネモンヒメハナは氷ノ山・扇ノ山・沖ノ山・後山の山塊のみ，シラユキヒメハナは大山～京都まで分布している．ミワヒメハナは東中国山地では普通種であるが，西中国山地ではトサヒメハナに代置されるようである．トサヒメハナは，東中国山地でも分布しており，兵庫県赤西ではミワヒメハナと混棲している．ヨコモンヒメハナは大山のみで記録されている．アカネキスジトラは鳥取県高鉢山で記録されているが，兵庫県赤西・氷ノ山でも得られている．今のところ東中国山地の特産種である．

同様に西中国山地にのみ分布していると思われるものにイヨヒメハナ・クロルリハナ・マダラゴマフ・ツチイロフトヒゲ・ハラアカコブ等があり，山口県下にはこの他に九州との関係を思わせる種が多く分布しており，華山ではニセハイイロハナ・トゲヒゲトビイロ・ベーツヤサ・キュウシュウチビトラ・タキグチモモブトホソ・クロオビトゲムネ・シマトゲバが，滑ではクロソンホソハナ・タケウチヒゲナガコバネ・キイロアラゲが，野戸呂ではモウセンハナ・クビアカモモブトホソが，寂地山ではニッポンモモブトコバネ・キイロアラゲが，また平野部では小野田市でチャイロヒゲビロウドが，下関火の山でウスアヤ・アヤモンチビが記録されており，中国地方の中でも南方系カミキリの分布する地域になっている．

話を再び両山地に戻すと，チビコブグループは，サワフタギ類に多いシロチビコブとオオカメノキ等より得られるチビコブが山地帯に分布しているが，シロチビコブの方がより低標高に分布し，どちらか 1 種しか産しない地もある．東中国山地ではこの他にもう 1 種が分布している．キクスイモドキに似て全体黒色の個体が両山地から得られており，西中国山地ではキクスイモドキと混棲していないというが，東中国山地の大山では両者は混棲しているようである．ミヤマケシに似た種が両山地に分布しておりキッコウモンケシとの関係が注目される．ヒメミヤマケシ？に似た無紋の種が西中国山地より得られている．ピックニセハムシは♂の上翅の黒化する型が現れるが，特に西中国山地ではその傾向が強いようである．大山は古くからカミキリの好採集地であり 180 数種のカミキリが記録されているが，ピックニセハムシハナの分布は欠くようである．また，ルリボシカミキリは西中国山地及び東中国山地東部（高鉢山～氷ノ山付近）の記録は多いが，大山付近では非常に少ないようである．東中国山地最西部での記録はある．

5. 山陰側平野部

山陰側の平野部は山地が海岸に迫っているため，一般に平野の面積は小さく，砂丘の発達している地域もある．そのような地域ではクロマツの植林があり，一部自然のクロマツ林もあるようである．クビアカハナ・ヨツボシシロオビゴマフがこのような地域から記録されている．クビアカハナはこのような海岸から大山のブナ帯でも時折得られ生息範囲は広いようである．社寺林等樹相の豊かな場所では，タブノキ・シイが多く，ホシベニ・タテジマが多い．ベーツヒラタ・ウスバ・ノコギリ・ミヤ

マ・ヒゲナガヒメ・タケトラ・クスベニ・ハイイロヤハズ・ラミー等が分布している．

6. 松江平野～島根半島

松江平野～島根半島にかけては山陰平野部の中でも他地域に見られないカミキリが分布している．オオハナとキイロミヤマは中国地方でもこの地域にのみ分布している．他にベーツヒラタ・ニセハイイロハナ・ベニバハナ・ヨコヤマヒメ・アオ・カンボウトラ・ヨツスジトラ・フタオビミドリトラ・モンクロベニ・アヤモンチビ・クビジロ・タテジマ・シロスジドウボソ・セダカコブヤハズ・イタヤ・カラフトヒゲナガ・ホシベニ・イボタサビ・キュウシュウトゲバ・アサ等の記録がある．特に島根半島海岸部のアヤモンチビ・キュウシュウトゲバの分布は対馬海流の影響と思われ注目される．アサカミキリは中国地方でも第 2 次大戦前は多産地もあったようであるが，最近の記録は聞かない．松江ではラミーよりラミーカミキリとともに得られているので，ラミーに近いカラムシ・アザミ類，ヨモギ類等他地方で最近記録されている食草も調査すれば再発見の可能性はある．

7. 隠 岐 諸 島

隠岐は日本海上に浮かぶ大小 7 つの島の総称であるが，最大の島である島後の記録が多い．島後の大満寺山の標高が 608 m ではあるが，130 種近くが記録されていて中国山地と共通の山地性のカミキリも多い．コバネ・カラカネハナ・ヨコモンヒメハナ？・シコクヒメハナ・キベリクロヒメハナ・チビハナ・チャボハナ・ミヤマクロハナ・ニンフハナ・ヤツボシハナ・ヨツスジハナ・サドチビアメイロ・カエデヒゲナガコバネ・コジマヒゲナガコバネ・スネケブカヒロコバネ・ルリボシ・オオアオ・ヤノトラ・ムネマダラトラ・ズマルトラ・ウスイロトラ・クビアカトラ・キンケトラ・フタオビミドリトラ・タキグチモモブトホソ・ハスオビヒゲナガ・セダカコブヤハズ・タカサゴシロ・キバネアラゲ・トゲバ・ホソモモブト・ハンノオオルリ・アサ・シラホシキクスイ・ヘリグロリンゴ等が分布している．対馬海流の影響か暖地性の種も分布していて，ベーツヒラタ・キュウシュウチビトラ・ヨツスジトラ・アヤモンチビ・ホシベニ等であるが，いずれも中国地方との共通種である．

亜種以下のレベルでは，ヤツボシハナがすべてヤツボシ型を示すのに対して，中国地方では氷の山の 1 例を除いてすべてツマグロ型である．オキノアサカミキリとされたものは未熟個体かもしれないので除くと，クビアカトラは上翅基部の白紋の消失する個体が現れ，*kadowakii* とされているが，同様な個体は中国山地でも稀に現れるようである．ヘリグロリンゴは中国地方では原型のみ産するようであるが，隠岐ではムナグロ型も産す．セダカコブヤハズは翅端が鋭くなくコブも弱い等の特徴がある．全般的に考えると，標高の低い島でありながら山地帯のカミキリが多く分布しており，暖地性の種もわずかながら産す．カミキリ相としては現在の中国山地の相に極似しているが，ヤツボシハナ，ヘリグロリンゴ等現在の中国山地帯よりさらに寒地性を示す種も分布している．最近中国地方全般に分布を拡げたと思われるラミーは隠岐には産しないようである．

8. 宮島他瀬戸内海の島々

宮島は面積約 30 km² の瀬戸内海に浮かぶ小島であるが，88 種ものカミキリが記録されており山地性の種も多い．これは，厳島神社の社叢林として保護されてきたことと，地質学的には冠山山地の南西端に当たるためと思われる．ケブカヒラタ・オオヒメハナ・ヒゲジロハナ・ミヤマホソハナ・ベニバハナ・マルクビケマダラ・トゲヒゲトビイロ・キイロメダカ・カエデヒゲナガコバネ・オダヒゲナガコバネ・ヤマトチビコバネ・ニイジマトラ・ズマルトラ・キュウシュウチビトラ・フタオビミドリトラ・ヨツボシシロオビゴマフ・ヒメアヤモンチビ・キボシチビ・シロスジドウボソ・ホシベニ・イタヤ・ヒゲナガ・セミスジコブヒゲ・イボタサビ・ナカバヤシモモブト等が分布している．広島県内で宮島だけ記録されている種も多く，トゲヒゲトビイロ・キイロメダカ・ヤマトチビコバネ・キュウ

シュウチビトラ・ヨツボシシロオビゴマフ・キボシチビ・ヒゲナガがそうである．特に山地性の種と思われるヒゲナガカミキリの広島県内における唯一の確実な産地であることは，岡山県における臥牛山と同様に周囲から消えてしまったカミキリの残存地として，かつての中国地方のカミキリ相を考えるうえで重要な地域である．

瀬戸内海の他の島々は宮島ほど調査されていないが，屋代島よりヒシ・タカサゴシロが，広島市似島よりワモンサビ・キボシ・アトモンマルケシ・クモガタケシが，向島よりニセノコギリ・ノコギリ・サビ・クロ・マルクビケマダラ・ヨコヤマヒメ・ヒゲナガヒメ・トガリシロオビサビ・ゴマダラ・シロスジ・クワ・スジマダラモモブトが，生口島よりマルクビケマダラが，六口島よりニセノコギリ・クワ・シロスジ・クモガタケシ・リンゴが報告されているが，その他大多数の島は採集者の訪れることもなく現在に至っていると思う．中国地方において最も調査の遅れている地域であろう．島において樹相の貧弱なことと，海流の影響による南方系カミキリがあまり期待できないことがその原因であろうが，マルクビケマダラがこの地域でのみ記録されていることも考えると，瀬戸内海の島々の調査抜きには中国地方のカミキリ相は最終的には語れないだろう．案外四国との関係で意外な発見があるかもしれない．

9. 終　り　に

中国地方のカミキリは平地・低山帯では開発等によってほとんど原型を留めていないものと思われるが，わずかに残された地点より本来の姿をうかがうことができる．むしろアカマツ林や周期的伐採による人為的な環境に適応した種が特徴的なカミキリ相をなしている．山地帯においては高山性の種は分布していないが中山帯の種は多い．中国地方特産の種は少なく，わずかにアカネキスジトラがあるだけであるが，この種は行政区分で言えば近畿地方にも分布していることになる．東中国山地と西中国山地ではカミキリ相の若干の相違が見られ，山口県下では九州からの分布のつながりを思わせる種が平地～山地帯にいくつか分布しているが，西中国山地全体に分布を広げている種が少ないようなことは興味深い．同様に，中部地方からの分布のつながりと思われる種は東中国山地ではヘリモンヒメハナとムネモンヒメハナの 2 種がその東部の高地にのみ分布しているが，それより西への分布はとぎれている．大山のツマグロヒメハナとともに中国山地では最も高山性の種といえるであろう．両山地の他のカミキリ相の違いは，単に位置関係の差によるものと思われないものも多く，調査不足の可能性も考えられるが，他に何か原因があったのかもしれない．隠岐は標高の低い島であるにもかかわらず山地性のカミキリが多く，現在の中国山地帯に分布している種とすべて共通であるが，より寒地性を示す型も産する．対馬海流の影響と思われる暖地性の種も産するが少ない．いずれにしても，過去中国地方との分布のつながりが切れた時点から，中国地方のカミキリ相があまり変っていないことの傍証になるのではあるまいか．

人為的分布と思われるものに最近記録されたハラアカコブカミキリがある．シイタケの原木としてナラガシワやコナラ等の材が広く九州方面まで取引されているようであるので，今後思わぬ種が突然得られるということもあると思われる．最近もモンクロベニ発生地の材が大分県へ引き取られたこともあり，中国地方産の個体が他地方で発生するという事態も起きているのかもしれない．本種を含め，従来から分布していたものかどうか見きわめるような調査も今後は必要となってくるであろう．中国地方のカミキリ相は現在変化し続けており，最近記録されなくなった種も多く，一部には分布を拡げつつある種もあるようである．

(岡山市芳賀 5116-11)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 50–53, June 15, 1988

四国地方のカミキリ相

小笠原　隆

近畿，中国，九州地方に三方を囲まれた四国地方は，日本本土の西南部に位置するが，これらの地方とはすべて海によって隔てられており，ファウナを論じるうえでは都合のよい地域であると言える．しかし，国土面積に占める山地の割合が 9 割にも達し，しかもその大半が私有地であることと，温暖多雨な気候条件であることが古くよりこの地域の林業を発達させ，人工林が多く自然林の少ない地域となっている．地質学的には，中央構造線を境として，西南日本内帯の北四国と，同外帯の南四国に分けられるが，最高峰の伊予石鎚山 (1,982 m) や，阿波剣山 (1,955 m) を中心とした脊梁山脈は南四国に属し，北四国では，香川・徳島県境の讃岐山地と愛媛県の高縄山系が 1,000～1,200 m クラスの山地を形成しているにとどまり，南四国と比べて平野部の占める割合が大きくなっている．

四国地方の植生については，基本的には沿岸部の照葉樹林帯から，落葉広葉樹林帯を経て亜高山域の針葉樹林帯までの幅を持ち，照葉樹林帯でも，南端沿岸部では亜熱帯的要素が強くなり，他の地域とは趣を異にした植物景観を示している．四国地方のカミキリ相についても，これらの植生によく対応したファウナを示しているものの，先述の通り，人工林の割合がきわめて大きく，ファウナに与える影響は計り知れないものがある．

さて，四国地方のカミキリ相を論じるにあたり，ここでは便宜上，植物相によって，1. 亜熱帯照葉樹林区，2. 暖帯広葉樹林区，3. 落葉広葉樹林区以上の山地帯，の 3 区に分けて考えてみたい．

1. 亜熱帯照葉樹林区

地域的には亜熱帯の景観を示す四国南端沿岸部の高知県室戸岬周辺と，足摺岬から愛媛県の南予地域一帯が含まれる．四国でも最も温暖な地域で，ヤブツバキ，タブ，ヤブニッケイ，イスノキ，ウバメガシ，トベラ等を主体として，一部ではアコウ，ビロウといった熱帯色豊かな植物も見られる．この地域のカミキリ相としては，四国平野部の基本ファウナの中に，かなりの南方系の種が入り込んだ特色あるファウナを示しており，四国地方ではこの地域でしか見られないものも少なくない．

コゲチャヒラタは，足摺岬と黒尊から記録されており，足摺岬では屋久島同様，イスノキの樹皮下から記録されているが，その後の追加記録はないようである．オガサワラチャイロは，1973 年に足摺岬で発見されたが，その後の調査でヤブニッケイを食樹とすることが判明し，食害樹の採取により多数が得られている．トゲヒゲトビイロは，1936 年の原記載以来，四国では 50 年間にわたって追加記録がなかったが，最近愛媛県鹿島から再発見され，その分布生存が確認された．ケブカトラは，室戸岬でのみ見られ，岬先端部の海岸段丘崖斜面に自生するナギに寄生し，個体数は多い．足摺岬周辺ではいまだに発見されておらず，自生のナギに食害された形跡が認められないことから，分布はしていないものと思われる．コゲチャサビは，足摺岬における 1957 年の初記録以来，30 年間追加記録がないままである．南方系の種で，長きにわたって追加記録のみられない種については，かつて琉球方面より分布を拡大して四国に到達したものの，様々な条件の中で四国の環境に適応できず，今日では絶滅してしまったのではないかとも思える．そういった意味で，四国は記録地ではあっても，分布地ではないという考え方が正しいのかもしれない．しかしながら，先述のトゲヒゲトビイロの例もあり，再

発見に期待したい．リュウキュウルリボシは，土佐清水市布岬に産し，カミキリ生態図鑑の中でも紹介されている．なお，1985 年に四国初記録のクビアカモモブトホソが採集されたのも同地である．

これらの他，この地域を特色付ける種として，*Ceresium* 属 4 種，ツヤケシヒゲナガコバネ，キュウシュウチビトラ，ケナガ，アヤモンチビ，アトモンチビ，キュウシュウトゲバ，クロオビトゲムネ等が挙げられよう．また，今日の分布状況から判断して，ムネスジウスバ，クロモンキイロイエ，コブバネゴマフ，サビアヤ，ウスアヤ，オビレ，オキナワサビ等が四国南端に分布する可能性も充分に考えられる．

なお，西南四国内陸部の高知県黒尊や愛媛県成川渓谷では，クロソンホソハナ，ベーツヤサ，リョウブモモブトヒメコバネ，シマトゲバといった稀種が記録されており，この区域と次の区域の中間的なファウナを示していると言えよう．

2.　暖帯広葉樹林区

南端を除く四国沿岸部から低山地にかけての広い地域で，シイを主体とした植生を示すものの，その立地が人里に近いこともあって古くより人手の入った所が多く，現在ではわずかな保護林や社叢林でのみその林相をうかがうことができる．この区域に産するカミキリで，特に四国を特徴付けるような種はほとんど見られず，日本全土，あるいは西南日本に広く普通に産する種が主体となっている．

四国が原産地のトゲウスバは，松山市杉立，香川県琴平山，徳島県蒲生田岬での採集例が多いものの，ほぼ全域に分布し，夜間燈火に飛来したものが得られている．ケブカヒラタは，長い間四国からの記録がなかったものの，本州でその採集法が判って以来，低地の社叢林を中心に各地から発見され，我々愛好家の怠慢さと，既成概念の恐しさを露呈する好例となった．タケウチヒゲナガコバネは高知市筆山に多産し，ミミズバイの枯材から羽化脱出してくるが，不思議なことに，成虫発生期に付近のシイ等の花をすくってもその姿を見ることは少ない．アカアシオオアオは，1950 年頃までは松山市に確実に分布していたが，その後 35 年以上も追加記録がなく，クヌギ林の見られなくなった今では，その姿を消してしまったのかもしれない．乱開発による犠牲者の好例と言えよう．

本来のファウナには見られなかった種が，その後人為的に移入され，その地に土着してしまうことがある．北四国の一部地域に見られるマルクビケマダラ，チャイロホソヒラタ，チャゴマフ等は，近年四国に土着したものと考えられ，特に前 2 種は，その繁殖力の強さからみても，今後さらに分布域を拡大していくものと思われる．一方，こうした結果，すでに分布拡大を終えた種としてキボシが挙げられよう．本種は 1950 年代に北四国へ移入されたものと思われ，1970 年代には南四国へも分布を拡大して，現在ではほぼ四国全域の平野部から低山地にかけた広い地域に分布している．

また，現在ではまだ記録されてはいないものの，例えばチャイロヒゲビロウドは，低地のニワトコを調査することにより，まず間違いなくその分布が確認されるだろうし，ケブカマルクビが北四国に産することも充分に考えられる．先述の例のごとく，人為的な移入によってテツイロヒメが愛媛県か香川県から発見されることも予想され，具体的なターゲットを定めて，既成概念にとらわれない調査を実施すれば，生活圏に近い区域であるとはいえ，必ずや新たな発見が生まれることであろう．

3.　落葉広葉樹林区以上の山地帯

四国ではおおむね 700～800 m から上の地域で，モミ・ツガ帯からブナ帯にかけての広い範囲と，一部 1,700 m 以上の亜高山域に見られるダケカンバ・シコクシラベ帯までが含まれる．カミキリ相としては，西南日本外帯地域との共通性が高く，種レベルの特産品はほとんど見られない．

四国を原産地とするオオクボは，ブナ帯を中心にほぼ全域に分布し，各種広葉樹枯枝のビーティングで得られるほか，石鎚山の土小屋周辺でダケカンバの生木樹幹上に多数が見られる点は興味深い．ハナカミキリ亜科では *Pidonia* 属がおもしろく，四国を原産地としたものだけでも，ニッコウヒメハナ ssp. *stephani*, マホロバヒメハナ，シコクヒメハナ，イシヅチヒメハナ，イヨヒメハナ，トサヒメハナ，チュウジョウヒメハナの 7 種が挙げられる．近年，ニセフタオビノミハナが発見されたとの話もあり，*Pidonia* を調査するだけでも，なかなか興味深いフィールドと言えよう．シコクヒメコブハナは本州でカツラのひこばえに集まる生態が判明してからは，四国でも同様の採集法でかなり得られるようになり，以前ほどの珍稀なイメージはなくなってきた．

ハナカミキリ亜科の中で，分布が予想されながらも記録のなかった種のうち，ヒメヨツスジハナが石鎚山と剣山から発見されたが，四国の個体は本州の個体ほど明瞭な特徴を持たず，後肢脛節の基半も黒化の傾向を示すなど，ヨツスジハナ四国亜種の小型の個体に酷似し，注意を要する．ムナコブハナ，ヤマトキモンハナ，ヌバタマハナ，コヨツスジハナ等についても，記録のないのが不思議なくらいで，ヒメヨツスジハナ同様，今後の発見に期待したい．九州でわずかな記録のあるキベリカタビロハナについても，その分布を否定する材料はないはずである．クロサワヘリグロハナは，小田深山ほか数カ所から少数の記録があるにすぎないが，福島県でキハダに飛来する生態が判明した 1986 年に，徳島県下でも同様の生態が確認され，キハダが食樹の本命として注目されている．

人気グループの *Necydalis* 属からは，現在までに 5 種が記録されているが，オニホソコバネは石鎚山における 1 例のみで，各地のクワ畑を調査してみる必要があろう．クロホソコバネは，剣山や石鎚山で比較的よく見られるが，特に ♂ では赤味の強い個体が混じる．

カミキリ亜科では注目に値する種も少なく，他地方に比べ貧弱な内容となっている．しいて挙げれば，サドチビアメイロ，クロサワヒメコバネ，チャイロチビヒラタ，オオトラ，エゾトラなどが興味深いところである．梶ケ森で得られたニッポンモモブトコバネなどは，まったく予測し得なかった面白い記録と言えよう．オオトラは，剣山と石鎚山から数例の記録があるものの，食害されたウラジロモミを発見することは稀で，個体数はそれほど多くないもののようである．高知市の記録は，搬入された食害樹から発生したものと考えるのが妥当であろう．

フトカミキリ亜科からは，最も多い 135 種ほどが記録されているが，研究課題の多いグループでもある．フタスジゴマフは，黒尊と剣山の 2 例，計 4 頭の採集記録しかなく，きわめて稀で，後者はクルミ類の伐採枝より同時に 3 頭得られており，生態的には本州産と共通でありながらも別亜種とされている．本種の 2 亜種の形態差が食樹の違いによるものなのか，地域差によるものなのかは判然としないが，今後の展開としては，中山帯のオニグルミの調査とともに，低地帯のクロマツの調査を並行して実施し，四国産の分類学上の位置付けを明確にする必要があろう．*Asaperda* 属については，まだまだ問題点が多く，現在四国地方のカミキリの中でも，最も研究余地の残された一群であると考えられる．小田深山を原産地とするニセシナノクロフは，同様の個体が徳島県や高知県下でも見つかっており，一般のシナノクロフとは連続的なつながりを見せる傾向があるなど，外見だけでの区別は難しい．キクスイモドキ系の小型，短太のものと，トゲムネホソヒゲとの関係についても同様である．*Asaperda* 属は，*Pidonia* 属同様，生態面をふまえた分類が必要なグループなのかもしれない．

人気の高いコブヤハズグループの 1 種セダカコブヤハズは，ブナ帯下部以上のほぼ全域に分布し，讃岐山地のものが別亜種とされているが，脊梁山地との接点付近の調査が不十分である．本州のように秋期の調査で発見されることは少なく，6～8 月の採集例が最も多い．キイロアラゲは，徳島県の中山帯から記録されたものが唯一であるが，これはむしろ例外として考えるべきと思われ，今後はむし

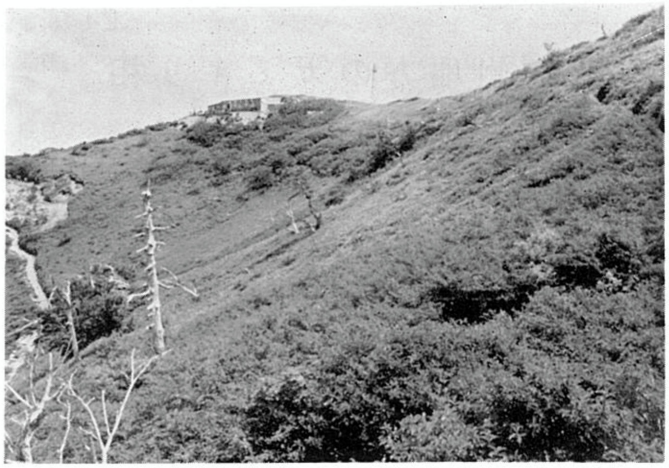


図 1. 剣山の山頂付近.

ろ低山地のカラスザンショウより発見される可能性の方が高い．チビコブとシロチビコブに関しては；調査が不十分ではあるものの，2 種とも分布しているようで，シロチビコブの方は室戸岬のような沿岸部でも見つかっているが，標高 800～1,000 m 付近のタンナサワフタギ，シキミ，ソヨゴの枯枝のビーティングで発見されることが多い．

さて，高知県から発見されたカスリチビのニュースは，あまりに予想外のことでおおいに驚かされたが，このようなニューフェースなら大歓迎である．産地が不明確な点が残念ではあるが，分布することが判って探せば，再発見もそう遠くはないものと思われる．ミヤマモモブトについては，過去いろいろと議論されてきたが，四国のものは本州産とは別のグループを形成しているようで，詳細な検討が望まれる．石鎚山，小田深山，剣山，工石山等の他，成川渓谷のような意外な場所からも発見されている．

カミキリ大図鑑の中で独立種として取り扱われたクロキモンは，キモンとの関係において今後さらなる検討を要するものと思われるが，例えば夏期剣山で採集される個体がほとんど例外なくクロキモンである点や，両種が同一材より羽化することのない点等は，クロキモンがキモンとは別の独立種であることを示唆しているようにも思える．一方，これらとはまったく別に，最近剣山で発見された黒色無紋のスマートな *Menesia* 属の 1 種 (未発表) は，今のところ四国特産の新しい種である可能性が高い．イッシキキモンは，四国地方においても局所的分布を示す種で，以前は産地にさえ行けば，たいていその美しい姿を拝むことができたが，最近はいずれの地においても減少の一途をたどり，かつての大産地であった梶ケ森においても，食痕すら見ることができなくなってしまった．

四国地方のカミキリ相は，西南日本外帯の基本ファウナの中に，一部南方系の種が南端沿岸部に，また若干の北方系の種が深山地帯に入り込んだ複雑なファウナを示しており，今日までに約 310 種が記録されている．また，人為的に移入されて四国地方に分布を拡大したものも認められ，一方では自然移入 (流木等) によって，思わぬ南方系の種が沿岸部で見つかることも予想される．山地帯においても，ヒメヨツスジハナやカスリチビの例のごとく，新たな発見が期待できるうえに未調査地域も多く，これからますます楽しみな地域のひとつと言えよう．

(〒230 横浜市鶴見区東寺尾 1-30-40-207)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 54–57, June 15, 1988

九州地方のカミキリ相

入江平吉

日本本土の南西端に位置する九州地方は，特に島嶼や沿海は温暖な気候で，シイノキ，タブノキ，イスノキなどを主体にした常緑広葉樹が繁茂し，平地から低山地にかけても常緑広葉樹林帯（ヤブツバキクラス域）が広がっている．ところが，平野部はほぼ開墾され，社寺林にその名残りを留めるくらいになっている．低山地も人為的影響を強く受けて，二次林やスギ，ヒノキの造林地となり，良好な森林は少ない．

九州地方には 2,000 m を越える山はなく，最高峰は屋久島の宮之浦岳の 1,935 m である．ところが屋久島はこの小文の範囲外で，九州本土の最高峰は九重山塊の共に 1,787 m の九住山とも大船山ともいわれていたが，近年中岳説も出てきてよく分らない状態である．その他，阿蘇山塊や九州山地（脊梁山地）に 1,500 m を越える山がある．

ブナは温帯を代表する樹種で，九州地方では 1,000 m より少し低い所から自生が見られる．九州地方は最高所でも夏緑広葉樹林帯（ブナクラス域）の範囲を出ない．この地域は，ブナ，ミズナラ，ミズキ，カエデ類，シナノキ，ホウノキ，ヒメシャラなどの広葉樹と，モミ，ツガ，ハリモミなどの針葉樹とが混生した森林を形成している．しかし，九州山地と九重山塊では植生がかなり異なり，九重山塊ではほとんど針葉樹が混じらない点が特異である．これは，九重山塊が極相林に達してない若い森林のためだという説がある．

ここでは，九州地方を 3 つに分けてカミキリ相を考えてみたい．その 1 つは南西諸島を除いた島嶼部，2 つめは沿海から低標高山地，3 つめは九州地方では最も高いブナクラス域である．

1. 島嶼のカミキリ相

九州本土の周りの多くの島嶼の中には，対馬，男女群島，甑島列島のように固有の種や亜種が確認されていたり，五島列島や壱岐でもカミキリ以外では固有の変化をした種が知られていたりで，重要な地域が多い．中でも対馬は，古くより多くの採集者が渡島し，多くの報告がある．

対馬のカミキリ相は，温暖地の種と寒冷地の種が同所的に分布する点が興味深い．九州本土から未発見か高地帯に棲息する種としては，オオマルクビヒラタ，チビハナ，キモンハナ，カタキハナ，ホソコバネ（模式標本 1 頭の記録だけ），ツシマアメイロ，ヤマトチビコバネ，ホソツヤヒゲナガコバネ，カエデヒゲナガコバネ，オオアオ，チャイロチビヒラタ，カンボウトラ，ヤツボシシロなどがある．逆に温暖地の種としては，コゲチャヒラタ，オガサワラチャイロ，ケナガ，ニッポンモモブトコバネ，フタオビヒメサビ，キイロアラゲ，クロオビトゲムネ，シマトゲバなどがある．固有種の中にもツシマサビ，ツシマハネナシサビのような南方系の種も見られる．

対馬のカミキリ相の特徴の 1 つに，大陸と日本では対馬だけに棲息している種が挙げられる．この例としては，ミスジヒメハナ，アオバホソハナ大陸亜種，カンボウトラ大陸亜種，ゴマフ大陸亜種，ハラアカコブ（九州本島へも移入），チョウセンシロ，ヨスジアオ，ホソキリンゴ大陸亜種などがある．

固有種としては，コゲチャヒラタ亜種，チャイロヒメハナ亜種，ヨツスジハナ亜種，カタジロゴマフ亜種（この亜種は伊豆諸島三宅島からも知られている），キクスイモドキ亜種，ツシマサビ，ドウボソ亜

種，ニイジマチビ亜種，ナカジロサビ亜種，ツシマハネナシサビ，セダカコブヤハズ亜種，ビロウド亜種，ニセビロウド亜種，ツシマケシ，ツシマゴマフチビなどがある．対馬の固有の種や亜種は軽微な変化をしたものがほとんどである．ツシマゴマフチビは，日本では対馬だけに分布する属である．

その他，対馬に棲息する注目すべき種として，クロソンホソハナ，タケウチヒゲナガコバネ，スネケブカヒロコバネ，ヤノトラ，クビアカモモブトホソ，モンクロベニ，フタスジゴマフ，ヒメビロウド，キバネアラゲ，ミヤマケシ，ヒゲナガヒメルリ，ホソリンゴなどといった種を挙げられる．

対馬以外の島嶼の場合は，比較的近年になってようやく目を向けられはじめた．甑島列島や男女群島からも新種が発見されたりしているので，今後調査に訪れる者の増加が予想される．

甑島列島からは，ホソハナ，タケウチヒゲナガコバネ，ニッポンモモブトコバネ，ムモンチャイロホソバネ，フタスジゴマフ，アトモンチビ，コシキハネナシサビ (固有種)，シモフリナガヒゲ，セミスジコブヒゲ固有亜種，シマトゲバなどが注目される．また男女群島からは，メシマキイロトラ，カタジロゴマフ亜種，メシマキンケ，ハネナシチビ亜種，トガリシロオビサビ亜種，ビロウド亜種，ニセビロウド亜種，ヤハズ亜種，メシマコブヒゲなどの固有種が知られている．

天草諸島や五島列島からは，特に注目すべき種は知られていない．今後の調査の進捗に伴い，注目すべき発見もあると思う．

平戸島では，コゲチャヒラタ，トガリバホソコバネ，オガサワラチャイロ，リョウブモモブトヒメコバネ，セダカコブヤハズなどが注目される．トガリバホソコバネは本来はブナクラス域に棲息している種であるが，平戸島では安満岳 (標高 535 m) の頂上附近のクロキに寄生している．リョウブモモブトヒメコバネは，九州本土からは未発見の種である．セダカコブヤハズは対馬の亜種に似ているが，それとも異なる．

玄海灘の沖ノ島からは，ムモンチャイロホソバネ，セダカコブヤハズなどが知られている．前者は東南アジアから南西諸島にかけて広く分布し，さらに九州本土に及んでいる．原産地の長崎の他，鹿児島と宮崎の両県下，下甑島から記録がある．

2.　沿海から低山地にかけてのカミキリ相

この地域はヤブツバキクラス域で，常緑広葉樹 (照葉樹) が繁茂している．

南部九州の沿海，特に岬などの気候の温暖な場所に，南方系の種が遺存している点が注目される．この例として，コゲチャヒラタ，クロモンキイロイエ，オガサワラチャイロ，ムネスジウスバ，リュウキュウヒメ，チャイロヒメ，ニッポンモモブトコバネ，カノミドリトラ，ケブカトラ，ケナガ，コブバネゴマフ，フタオビヒメサビ，アトモンチビ，サタサビ，サビアヤ，ムツボシシロ，シモフリナガヒゲ，オキナワサビ，シマトゲバ，オオムラサキ，リュウキュウルリボシなどがある．

平地から低山地にかけて主に棲息するもののうち，注目すべき種としては次のようなものがある．ただし，前に挙げたものとの厳密な区別は困難な種がある．ウスリーオオ，トゲウスバ，ケブカヒラタ，ヒイロハナ，ベーツヤサ，トゲムネミヤマ，マルクビケマダラ，トゲヒゲトビイロ，テツイロヒメ，キイロメダカ，サツマヒメコバネ，ツヤケシヒゲナガコバネ，ムモンチャイロホソバネ，アカアシオオアオ，スギ，ズマルトラ，ヤノトラ，キュウシュウチビトラ，サツマスギノアカネトラ，クビアカモモブトホソ，チャゴマフ，フタスジゴマフ，ヒメアヤモンチビ，チャイロヒゲビロウド，ムネホシシロ，キバネアラゲ，オビレ，ナカバヤシモモブト，クロオビトゲムネなどである．

沿海から低山地を主な棲息地としているカミキリのうち，特記すべき種として次のようなものがある．

本土最南端の佐多岬は，南方系のカミキリの棲息地として古くから知られていた．クロモンキイロイエ，オガサワラチャイロ，カノミドリトラ，サタサビなどの産地の限られた種が棲息している．採集といえば，山地帯や特産種の多く棲息している島に目を向けがちである．今後，南部九州の保存の良い常緑広葉樹林を調査することによって，コゲチャヒラタ，トゲウスバ，サツマヒメコバネ，ムモンチャイロホソバネ，ケブカトラ，キイロアラゲといった稀種の新産地の発見が期待できる．

マルクビケマダラ，アカアシオオアオ，クビアカモモブトホソ，ムネホシシロ，キバネアラゲなどは，中北部に局地的に記録されている．

ウスリーオオ (宮崎県)，トゲムネミヤマ (長崎県島原半島)，チャゴマフ (福岡・長崎両県)，それにハラアカコブは，人為的に侵入した種と考えられる．以前は福岡市の港の近辺に限られていたハラアカコブは，最近大船山の頂上でも記録され，九重山や別府方面では完全に定着してしまった．チャゴマフも最近では，福岡県の宝満山や城山といった自然度の高い地域からも知られていて，分布を拡大しているように見える．ラミーも人為的な侵入種だと言われている．海岸ではハマボウ，低地では主にカラムシやムクゲ，山地では主にハルニレやシナノキの葉を後食し，至る所に棲息している．

福岡市の沿海で得たクロトラは頑強な体形で，宮崎県の内陸部で得たクロトラと異なり，ヤエヤマトラによく似ている．クロトラとヤエヤマトラの関係は，よく分らない点がある．

スギやチャイロヒゲビロウドの分布は，北部九州に限られている．フタモンアラゲは福岡県犬鳴山の 1 例の記録があるだけで，追加記録が望まれる．

3. 夏緑広葉樹林帯のカミキリ相

九州山地などには，まだ原生林が広く残っている．また，熊本県阿蘇から大分県九重，さらに別府方面の高原地のカシワやクヌギの疎林からも注目すべき種が知られている．

夏緑広葉樹林に棲息する種の中から興味深い種として下記のようなものがある．キュウシュウオオクボ，テツイロハナ，ヒラヤマコブハナ，モモグロハナ，キベリカタビロハナ，チャイロヒメコブハナ，ヤマトヒメハナ，キュウシュウヒメハナ，シコクヒメハナ，ヤノヒメハナ，イシヅチヒメハナ，ヒミコヒメハナ，イヨヒメハナ，チビハナ，ヘリグロホソハナ，ヒゲブトハナ，ヤマトキモンハナ，ヌバタマハナ，ミヤマルリハナ，イガブチヒゲハナ，コヨツスジハナ，ヒメヨツスジハナ，カタキハナ，カエデノヘリグロハナ，クロサワヘリグロハナ，ハコネホソハナ，クロソンホソハナ，オニホソコバネ，オオホソコバネ，ヒゲジロホソコバネ，トワダムモンメダカ，タカオメダカ，ナカネアメイロ，サドチビアメイロ，クロサワヒメコバネ，ヒコサンヒゲナガコバネ，オダヒゲナガコバネ，カエデヒゲナガコバネ，スネケブカヒロコバネ，オオアオ，チャイロチビヒラタ，ヨツボシチビヒラタ，クリストフコトラ，ヤマトシロオビトラ，ムモンベニ，モンクロベニ，マダラゴマフ，シナノクロフ，ツチイロフトヒゲ，ヒメビロウド，ヨコヤマヒゲナガ，エゾナガヒゲ，ジュウジクロ，チビコブ，シロチビコブ，ハイイロツツクビ，チャバネクロツツ，ホウノキトゲバ，ブロイニング，アサ，ヒゲナガヒメルリ，クロキモン，オニグルミノキモン，カスガキモン，イッシキキモン，キバネニセリンゴ，ジュウモンジニセリンゴ，ソボリンゴ，ホソリンゴなどで，これに広分布の普通種を加えると，実に豊富な種が棲息している．

主に山地を棲息の場とする種の中には，ムナコブハナ，キベリカタビロハナ，ヌバタマハナ，コヨツスジハナ，ヒメヨツスジハナ，キジマトラ，チャバネクロツツ，ブロイニングなどのように，飛び離れて九州本土に分布する種がある．ムナコブハナは近畿，中国の一部と九州地方に分布する稀種である．雲仙岳，九重山，霧島山などの山頂で，上昇気流の吹上げが確実な採集法だったが，最近になっ

て阿蘇山仙酔峡で，1 度にかなり得られている．これは，阿蘇山に産する特異なハンノキカミキリ (通称ベニハンノキ) を狙って行かれた方が，飛翔中のムナコブハナを得られたものである．キベリカタビロハナは，九州山地の椎矢峠附近で得られた 2 頭があるだけの稀種である．キジマトラは九重山から記録されているが，きわめて疑わしい．植林されたスギ以外は，針葉樹をほとんど交えない九重山塊に，針葉樹を食樹とするキジマトラが棲息しているとは思えない．

阿蘇山や九重山のカシワ，クヌギの疎林にモンクロベニ，ムモンベニ，ヨツボシチビヒラタ，クリストフコトラ，クリサビ，チャバネクロツツなどが棲息している．

九州の山地帯には，中央構造線に沿って分布を延している種が見られる．シコクヒメハナ，ヘリグロホソハナ (九州産は特産亜種)，イガブチヒゲハナ，トガリバホソコバネなどがそれである．ヒミコヒメハナ，クロキモン (長野が原産地，しかしその後本州から未採集) のように，本州に達してない種もある．ヤマトキモンハナ，クリストフコトラは，それとは逆に四国を欠く種である．

チビコブとシロチビコブは，九重山塊や九州山地では同所的に分布するが，シロチビコブはもっと低い山地にも棲息している．またサワフタギやタンナサワフタギの枯枝で容易に得られるが，チビコブはなかなか得難い種である．屋久島ではヤシャブシ，本州ではトウヒ類やケヤマハンノキなどといったように，来集する植物が判明すればもっと得やすくなるだろう．

日本産カミキリ大図鑑，日本鞘翅目学会編，講談社 (1984) によれば，カエデヒゲナガコバネとコボトケヒゲナガコバネの混棲地は知られていないということである．ところが筆者は，九州山地の椎矢峠附近の宮崎側で，1 本のカエデの花をすくってこの両種とコジマヒゲナガコバネの 3 種を得ている．

九州本土固有種には，キュウシュウオオクボ，チャイロヒメコブハナ亜種，キュウシュウヒメハナ，イシヅチヒメハナ亜種，ヘリグロホソハナ亜種，ヒコサンヒゲナガコバネ，シナノクロフ亜種，セダカコブヤハズ亜種，キバネニセリンゴ，ジュウモンジニセリンゴなどがある．

キュウシュウオオクボは最近オオクボと区別された種で，九州山地から大隅半島にかけて分布している．チャイロヒメコブハナ亜種とシナノクロフ亜種は，九重山塊と九州山地に分布している．ヘリグロホソハナ亜種は九重山塊からも記録があるが，その棲息は疑わしい．九州山地には広く分布しているが，野外で成虫を得ることは難しい．幸いなことに，タンナサワフタギの枯木を持ち帰っておくことにより，容易に成虫を得ることができる．セダカコブヤハズは，山地帯を中心に広範に分布しているが，地方変異と個体変異が著しくて，興味深いために人気が高い．

ヒコサンヒゲナガコバネは，現在のところ福岡と大分県境の英彦山塊の特産で，犬ガ岳，英彦山，障子ガ岳などから記録がある．4 月下旬から 5 月上旬にカエデ類の花で得られているが，個体数は少ない．英彦山は古くより好採集地として知られ，したがってよく調査されている．ミヤマルリハナ，チャイロチビヒラタは，九州本土では英彦山塊以外からは未記録である．

ジュウモンジニセリンゴは，九重山塊黒岳山麓男池附近が，本種の唯一の産地となっている．この種は 5 月のハルニレの萌芽とともに発生し，その葉を後食に集まる．前胸に十字型の特異な斑紋とカツラのような上翅を有する変った種である．九重山塊から記録のあるカツラは，もしかしたらジュウモンジニセリンゴの誤同定かもしれない．

採集となると，1 日は 1 日だからどうしても珍種が期待できる有名採集地に偏りがちである．したがって，調査の進んでない地域も多い．珍稀種狙いに終始せず，もっと調査的な採集意欲が望まれる．

(福岡県粕屋郡宇美町宇美 3125)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 58-63, June 15, 1988

南西諸島のカミキリムシ

槇　原　　寛

1. はじめに

南西諸島は九州本土から台湾にかけ奄美，沖縄島を中心に約 60 の島嶼より構成されている．カミキリムシは約 110 属 240 種ほど記録され，亜熱帯的気候のため大半の種が東洋的色彩の濃い種類である[1]．そして，南西諸島のカミキリムシを特徴づけるのは，本土とは違ったファウナの構成，特異な地理的変異・分布をする種類・群の多いことである．そこで，筆者は南西諸島のカミキリムシ相の特徴を正確に把握するため近隣地域との比較を行った．

2. カミキリムシ相の構成と他地域との比較

1)　亜科に属する種類数による比較 (表 1)

南西諸島の各島嶼において日本本土と比較して大きく異なるのはハナカミキリ亜科の種が非常に少なく，カミキリ亜科，フトカミキリ亜科の種の比率が高いことである．この傾向は小さな島ほど強くなっている．また，日本本土では見られない最も原始的といわれるニセクワガタカミキリ亜科の種がいることである．そして，南西諸島の各島嶼での亜科の種構成は中国とよく似ていて，特に奄美大島，沖縄島，屋久島など大きな島ほどこの傾向は強くなっている．これは日本本土の亜科の種構成がソビエトとほぼ同じで，旧北区系要素が優占している[5]のに対し，南西諸島のカミキリムシ相は中国と同じく東洋系要素が多く入っている結果だと思われる．というのは，中国のカミキリムシは 2,000 種以上記録されているが，東北部には種類は少なく大半の種は南，西南部に分布し，東洋的色彩の濃いものばかりだからである．

表 1. 南西諸島およびその近隣地域のカミキリムシ各亜科の種類数と比率（槇原・斉藤，1987）.

地域名	種類数	Parandrinae	Prioninae	Spondylinae	Aseminae	Disteniinae	Lepturinae	Cerambycinae	Lamiinae
日本本土	473	0 (0)	6 (1.3)	1 (0.2)	12(2.5)	2 (0.4)	138(29.2)	124(26.2)	190(40.2)
対馬	172	0 (0)	6 (3.5)	1 (0.6)	3 (1.8)	1 (0.6)	18(10.5)	65(37.8)	78(45.3)
奄美大島	128	1 (0.8)	5 (3.9)	1 (0.8)	1 (0.8)	0 (0)	10(7.8)	47(36.7)	63(49.2)
屋久島	127	0 (0)	7 (5.5)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	15(11.8)	44(34.3)	58(45.7)
沖縄島	117	0 (0)	4 (3.4)	1 (0.9)	1 (0.9)	0 (0)	7 (6.0)	41(35.0)	63(53.8)
石垣島	106	1 (0.9)	4 (3.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2.8)	35(33.0)	63(59.4)
西表島	89	1 (1.1)	3 (3.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.1)	30(33.7)	54(60.7)
徳之島	86	0 (0)	3 (3.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (4.7)	31(36.0)	48(55.8)
中之島	65	0 (0)	3 (4.6)	1 (1.5)	1 (1.5)	0 (0)	1 (1.5)	17(26.1)	42(64.6)
与那国島	52	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	16(30.8)	36(69.2)
沖之永良部島	39	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (2.6)	8 (20.5)	30(76.9)
黒島（鹿児島県）	37	0 (0)	2 (5.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	11(29.7)	26(70.3)
宮古島	31	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10(32.3)	21(67.7)
南大東島	8	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (37.5)	5 (62.5)
韓国	261	0 (0)	5 (1.9)	1 (0.4)	6 (2.3)	1 (0.4)	63(24.1)	80(30.7)	105(40.2)
中国（台湾含む）	2198	2 (0.1)	71(3.2)	1 (0.05)	23(1.0)	8 (0.4)	272(12.4)	639(29.1)	1182(53.8)
ソビエト	382	0 (0)	4 (1.0)	1 (0.3)	13(3.4)	1 (0.3)	107(28.0)	108(28.3)	148(38.7)

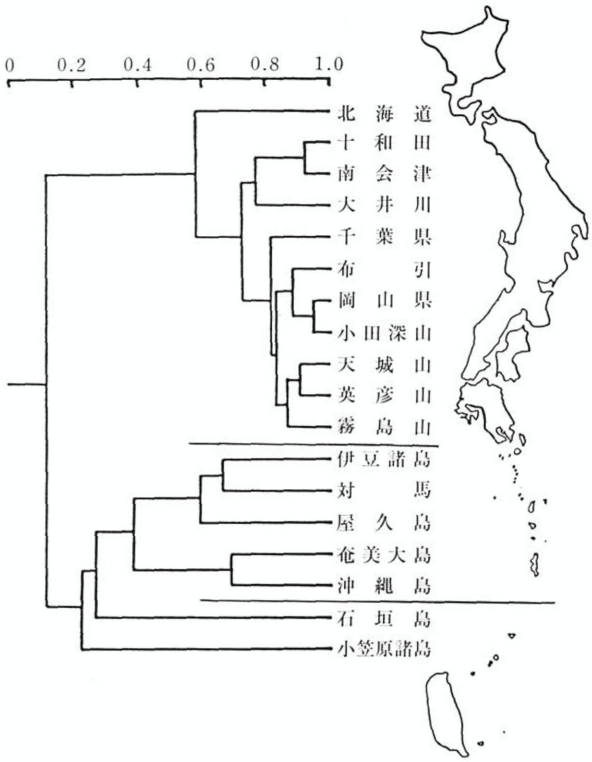


図 1. 各地域間の共通種率 (NSC) に基く群分布.

2) 共通種率に基づく比較

南西諸島の主要な島と近隣他地域と共通種率 (Nomura-Simpson's Coefficient, 略して NSC, NSC $=c/b\,(a>b)$; a, b‥‥2 地域の各々の種数, c‥‥共通種数) で比較し, その結果をマウントフォード法により群分析してみた (図 1). その結果, 南西諸島は日本本土とはあまり共通性がなく, はっきりと群別される. そして南西諸島の中では奄美大島と沖縄島の間に最も共通性が高い. そして沖縄島以北の地域と石垣島方面とはかなりのギャップがあり[2], 種構成が異なっていることを示した.

3. 特殊な地理的変異・分布などを示す種ないし種群

1) 特殊な地理的変異を示す種群

(1) イシガキゴマフカミキリ種群 (図 2)

イシガキゴマフカミキリ (以下, すべての種はカミキリを略す) *Mesosa yonaguni* HAYASHI は, 先島諸島で最も普通に見られるカミキリムシであるが島ごとに体の斑紋, 形態が異なる. そして宮古島南部にのみ分布するアシナガゴマフ *M. praelongipes* KUSAMA et IRIE はイシガキゴマフに最も近縁であり, その種を区別する形態的特徴は, 上翅, 脚, 第 7 腹節, ほほの長さに現れる. これらの特徴はイシガキゴマフにおいて島ごとに変化し, 特に石垣島から東側, 石垣島→多良間島→宮古島と連続変異傾向が見られる. そしてアシナガゴマフの形態的特徴はすべてこの変異傾向の延長上にくるものである. 宮古島は平坦な島で, 普通種で食性もほとんど同じこの 2 種を隔てる物理的障壁など何もないが, アシナガゴマフは南部にのみ分布し, 両種の混棲地域は, 筆者の詳細な調査からも発見できなか

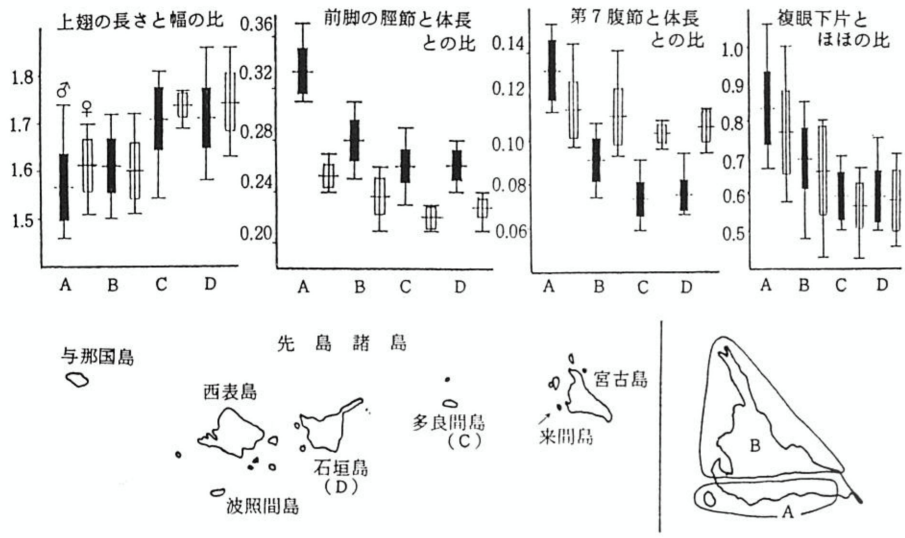


図 2. イシガキゴマフカミキリ種群の地理的変異.

った．これらのことからイシガキゴマフは石垣島方面から宮古島に 2 度侵入し，最初に入ったものがアシナガゴマフへと分化し，その後侵入したものと分布域を分けていると想定される．なお西表島のものは石垣島のものとほとんど変わらず，波照間島，与那国島ではまた別の変異性を示している．

(2) ハネナシサビカミキリ (図 3)

ハネナシサビカミキリの名は後翅が退化して飛翔能力を失っているところに由来する．この種群の地理的変異の最大の特徴は後翅の退化に伴い，上翅の形態が変化するところにある．そして島ごとに後翅の退化状態が異なるため著しい形態変異を示している．この種群は異所的に分布し，沖縄島のオキナワハネナシサビ *Pterolophia* (*Pseudale*) *obovata* (HAYASHI), 奄美大島のオオシマサビ *P.* (*P.*) *oshimana* BREUNING, 対馬のツシマハネナシサビ *P.* (*P.*) *adachii* (HAYASHI) と伊豆諸島の御蔵島のオオキハネナシサビ *P.* (*P.*) *izumikurana* (HAYASHI) の 4 種が知られている．そして，この他にも命名されていない種が沖縄島以北の南西諸島の一部と下甑島にいる．この種群は台湾の山地にも分布しており，台湾では標高の低い所のものほど後翅の退化が進んでいるという変異傾向がある．これを南西諸島にあてはめてみると奄美大島から沖縄島にかけて分布するものにこの傾向が見られる．この地域の各島の最高地点の標高は奄美大島 694 m, 徳之島 645 m, 沖之永良部島 246 m, 沖縄島 498 m で後翅の退化状態も標高とほぼ一致する．その他の島嶼のものはその分布，形態から見て，これら奄美～沖縄にかけての島嶼から，海流による流木とともに分布をひろげ定着し，形態変化をとげたと推定されている[7]．

2) 特異な地理的分布をする種

沖縄島では近縁種が南北にわかれて分布している種類がいくつか見られる．そして，南か北かどちらかの一部地域で混棲地帯がある．

(1) 南部に混棲地帯のある種類

フタモンサビ *Ropica caenosa* (MATSUSHITA) とゴマフサビ *R. loochooana loochooana* (MATSUSHITA) の 2 種は沖縄本島南部で混棲している．すなわちフタモンサビは沖縄島北部から南部に分布

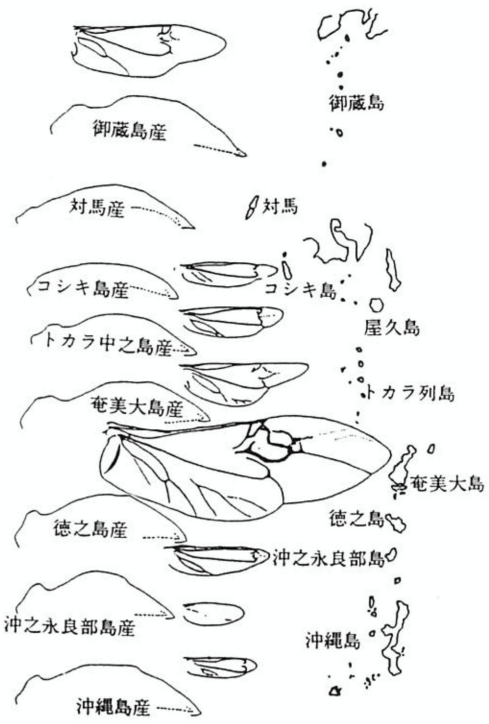


図 3. ハネナシサビカミキリ種群の地理的変異，各地域の上翅側面図と後翅の退化状態.

し，南部では比較的自然植生の残っている知念半島に見られ，首里にもいるが非常に少ない．これに対してゴマフサビは南部でも自然植生のほとんど残っていない摩文仁や首里では数多く見られる．なお，ゴマフサビは沖縄島南部から宮古群島に分布している．

（2） 北部に混棲地帯のある種類

センノキ *Acalolepta luxuriosa kuniyoshii* HAYASHI とキンケビロウド *A. permutans okinawana* (GRESSITT), ムツボシシロ *Olenecamptus indianus* (THOMSON) とイツボシシロ *O. bilobus* (FABRICIUS)[3] アマミリンゴ *Oberea shibatai* HAYASHI と *O.* sp. (クスノハイイロリンゴと呼ばれていた種) などであり，いずれも前者が北部に，後者が南部から北部にかけて分布している．そして北部では前者が優占している．

3） 単為生殖をする種

フタホシサビ *Ropica honesta* PASCOE は南西諸島ではトカラ中之島以南に分布し，東南アジアの島嶼に広く見られる．そしてこの種は雌しか見つからず，しかも雌生殖器はかなり退化して交尾のうは縮み，受精のう管は細く，もろくなり使用不能になっている．そのため，まだ染色体を調べてはいないが雌だけで単為生殖を営んでいるのは間違いない[4~6]．この種に対応する両性生殖をする種はタイリクフタホシサビ *R. dorsalis* SCHWARZER で本州，台湾，ラオス，ネパールなどから知られている (図 4)．フタホシサビはタイリクフタホシサビから分化したことは確かであろうが，その分化要因はまだはっ

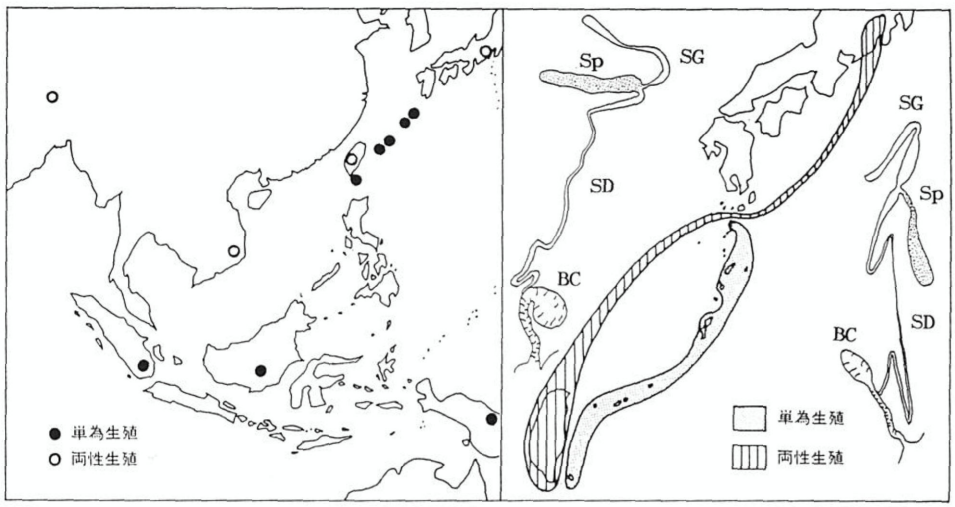


図 4. フタホシサビカミキリ（単為生殖）とタイリクフタホシサビカミキリ（両性生殖）の分布図とその雌生殖器，BC：交尾のう，SD：受精のう管，Sp：受精のう，SG：受精のう腺（槇原，1986）．

きりしない．しかし，その分布状態から考えて高温に対する適応現象によったとも推定される．

4. 南西諸島のカミキリ相の起源

島嶼におけるカミキリムシを含む穿孔虫類の移動分散は海流，河川による流木の影響が大きい．また陸化の時期が長ければ当然のことながら森林の発達に伴い移動分散，定着が起ったと考えられる[9]．南西諸島の場合，このどちらもが関与しているようである．ここでは後者は取り上げず前者について述べてみよう．

海流による流木の漂着や人為的な木材の移動でしかカミキリムシの移動分散の手段がなかった地域に小笠原諸島がある．小笠原諸島（火山列島も含む）には40種のカミキリムシが分布しているが[10]，このうち4種は確実に人為的に入ったもので残りの36種のうち，小型種であるフタツメケシカミキリ属 *Phloeopsis*，オガサワラカミキリ属 *Boninella* を除いた28種についてみると，そのうち24種が南西諸島に同種ないし，近縁種が分布している[10]．そしてオガサワラカミキリ属5種も南西諸島に分布するケシカミキリ亜属 *Sciades* (*Miaenia*) から分化した可能性もあり，ほとんどの種が南西諸島を起源としている．しかもよく調べてみるとその多くは奄美・沖縄島のものと類縁性がある．このことは小笠原諸島へはかつて，黒潮の影響で南西諸島中部から，流木とともにかなりのカミキリムシが侵入し，定着したことを示している．そのため，小笠原諸島は島の面積の割に種数が多く，それぞれの島の生物相は種の供給源である大陸からの距離とその島の面積に大きく影響されるというマッカーサーとウィルソンの説とはあわない．南西諸島，伊豆諸島などの島嶼のカミキリムシ種数と島の面積との関係を見ると（図5），伊豆諸島の島が面積の割には種類が多い．これは伊豆諸島が黒潮に洗われる地域であると同時に本州の河川の影響も受け，南西諸島方面と本州系のカミキリムシが侵入，定着できた結果と考えることができよう．ところで南西諸島では前述したように沖縄島と先島諸島の間に共通種率においてギャップが見られる．中国の大河，揚子江の河口はかつては現在の宮古島と沖縄島の間にあったといわれている[11]．そのため南西諸島の沖縄島以北のカミキリ相は揚子江と黒潮の影響を同時に

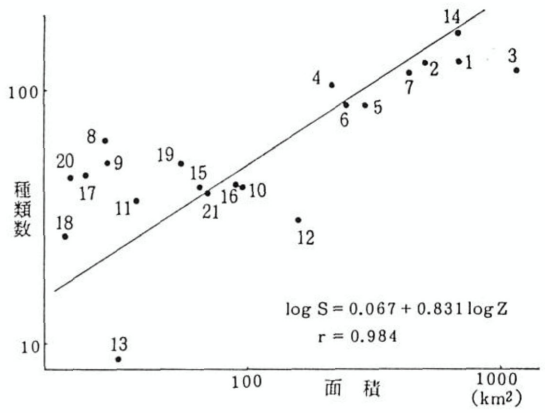


図 5. 島の面積とカミキリムシの種数の関係

1. 奄美大島，2. 屋久島，3. 沖縄島，4. 石垣島，5. 西表島，6. 徳之島，7. 種子島，8. トカラ中之島，9. 与那国島，10. 沖之永良部島，11. 鹿児島県黒島，12. 宮古島，13. 南大東島，14. 対馬，15. 小笠原諸島，16. 伊豆大島，17. 伊豆新島，18. 神津島，19. 三宅島，20. 御蔵島，21. 八丈島（野淵・槇原，1987）.

受けてかなりの部分が構成されたため，先島諸島と共通種が少ないと考えることができる．

5. おわりに

これまで南西諸島のカミキリ相について，中国本土と関連が深いこと，特殊な地理的変異・分布をする種が見られることなど，その概要を簡単にのべたが，とてもこのような文面では足りるような内容のものでもない．そして，今後，中国大陸の資料が増すにつれ，南西諸島のカミキリ相の成立の歴史も明らかになっていくと信ずる．

引用文献

1) MAKIHARA, H., 1980. Cerambycid fauna of the Ryukyus (Coleoptera). Abstr. XVI. *Int. Congr. Ent.* 26.
2) ——— 1981. Cerambycid fauna of Japan (Coleoptera). Proc. XVII. *IUFRO World Congr. Division*, (2): 633.
3) 槇原　寛，1982. 2 種のムツボシシロカミキリ．月刊むし，(135): 5-7.
4) ——— 1985. 2 種のフタホシサビカミキリ．月刊むし，(170): 25-27.
5) ——— 1985. 日本産フタホシサビカミキリ *Ropica* 属．甲虫ニュース，(67/68): 1-6.
6) ——— 1986. 1 種ではなかったカミキリムシのこと．インセクタリウム，**23**(4): 16-22.
7) ——— 1988. ハネナシサビカミキリの地理的変異と分布．日本の甲虫，pp. 141-152. 東海大学出版会，東京.
8) 槇原　寛・斎藤秀生，1987. 極東アジアの中の対馬のカミキリ相．対馬の自然．対馬自然資源調査報告書，pp. 187-227.
9) 野淵　輝・槇原　寛，1984. 穿孔虫の移住の手段と軌跡．日本昆虫学会 44 回大会講要，pp. 62-64.
10) ———・——— 1987. 穿孔虫の移動分散．昆虫と自然，**22**(2): 2-10.
11) 米倉伸之，1987. 対馬周辺地 (海) 域における第 4 紀後期の古地理と古気候．対馬の自然．対馬自然資源調査報告書，pp. 11-20.

(盛岡市下厨川字鍋屋敷 72 林業試験場東北支場)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 64–71, June 15, 1988

「日本のカミキリ相」を解明するための文献紹介

穂 積 俊 文

はじめに

私は「都道府県別カミキリムシ科目録要覧」を，「昆虫と自然」**14**(12); **14**(13), 1979 に記述し，305 篇のカミキリ目録を簡単な解説を加えて紹介した (以後は前報と略記す). 今回は 1979 年以後の 50 種以上の目録を主体にし，県ごとに重要な目録を紹介し，どのような文献を渉猟したらよいかを述べたい．前報で紹介した目録の中で，重要なものは再掲した．

§1. 本土篇 (原則として 50 種以上の目録)

1. 北海道: 北海道を石狩平野で 2 分する生物地理学上の説があり，河野広道は蝶や虻でこの分布境界線を論じている (北方昆虫記: 楡書房, 1955). しかしカミキリでこれを論説した報文は見当らない．種名をあげた目録は前報で 10 篇をあげた．今回は下記の通り．

穂積俊文，1981, Jezoensis (8): 87–91; 1982, 同誌 (9): 41–42. 1981 年までの文献 145 篇の目録を作り，疑問種も解説して北海道で記録されたカミキリは 216 種と記述した．神田英治，1980, さやばね (5): 9–11, *Pidonia* 分布と植物フローラを解説している．斎藤龍司他 3 名，1975, エゾカミキリ (自費出版)，155 種．佐々木恵一・川田光政，1979, Jezoensis (6): 37–42, 59 種．渡辺英行，1979, 蝦夷白蝶 (10): 89–100, 69 種; 1980, 同誌 **11**(1): 41–72, 166 種．佐藤雅夫，1980, Jezoensis (7): 83–85, 83 種．森　正人他 2 名，1986, ちくばききり (1): 1–51, ハナカミキリ亜科のみ 52 種．国兼正明，1974, 北海道南部の蝶: 259–262, 道南の目録で文献引用多く，117 種.

「北九州の昆虫」には採集記の次の 8 篇がある．緒方靖哉・大桃定洋，1976, **22**(3): 85–94．井手芳郎・宮崎　能，1976, **23**(1): 9–16, 109 種．大桃定洋・西山　明，1982, **29**(2): 121–130, 99 種．緒方靖哉・大桃定洋，1985, **32**(3): 133–140, 77 種．足立一夫，1985, **32**(3): 175–184, 78 種．芦田　久，1986, **33**(1): 39–48, 126 種．松田勝毅，1986, **33**(3): 183–188, 65 種．有田敬助，1986, **33**(3): 189–195.

2. 青森県:　下山健作，1964–1965, 昆虫学評論 **16**(2); **17**(1); **17**(2) に 3 回に分けて連載してあある．前報で紹介したように，以後の天牛研究にしばしば参考文献として重要視された．187 種.

西沢登志樹他 3 名: 1978–1984, Celastrina (1)–(13), 5 回に分け久渡寺・座頭石の目録，129 種．青森県立郷土館からも調査報告書が出ている．津軽半島 (1982, 101 種), 下北半島 (1981–1985, 73 種) が下山健作・阿部　東らにより報告されている．短報は「Celastrina」,「月刊むし」に見られる.

3. 秋田県: 佐藤福男・加納彦一，1984, 月刊むし (161): 13–20; 同誌 (162): 13–19, 181 種．二川宣也ほか，早稲田生物 (21): 39–42, 15 種.

4. 岩手県: 露木繁雄他 2 名，1981, 月刊むし (127): 5–12; 同誌 (128): 3–9, 180 種．平野修一他 2 名，1979–1982, 岩手蟲乃會會報 (2), (4), (8) に 3 回に分け発表，計 124 種だが継続発表予定．短報は「岩手蟲乃會會報」や「月刊むし」にある.

5. 山形県: 前報では黒沢良彦 (1942) と板垣輝彦 (1973) を紹介した．調査の少ない県である．

丸山　清，1979, Coreana (23): 19–27, 66 種．短報は「山形昆虫同好会々誌」,「Coreana」,「月刊

むし」などにある．

6. 宮城県：調査の少ない県である．

草刈広一，1983・1984，山形昆虫同好会々誌 (12): 17-20; 同誌 (13): 36，計 60 種．小目録は平野幸彦 (神奈川虫報 (58): 45-63, 1972) と保谷忠良 (みやぎインセクト (5): 1-6, 1983).

7. 福島県：有名な檜枝岐があり，この地の報文が目立ち，前報では小倉健夫・渡辺　健 (1976)，衣笠恵士・藤田　宏 (1977)，下川信幸 (1977) を紹介した．

市川恭治・海野孝司，1986，静岡の甲虫 **4**(1·2): 17-27, 87 種のレポートあり，檜枝岐以外では，田添京二・大桃定洋 (1977) を前報で紹介したが，その続報を発表している．1985，月刊むし (174): 16-23; 同誌 (175): 21-28，計 215 種．中村　司，1985-1986，東北の自然 (10)-(14)，5 回に分けて連載してあり，計 166 種．短報は「月刊むし」，「福島生物」などにある．

8. 栃木県：県立博物館刊「栃木県のカミキリムシ」(1984) が完備した目録で，33 名の資料提供者があり，271 種が確認されている．これの追加訂正，県下各地の短報や小目録が「インセクト」には少なくない．

9. 茨城県：前報では日置正義 (1973)，大和田博 (1976)，久保田正秀 (1977) を紹介したが，調査不十分な県である．「るりぼし」がカミキリ特集号を企画している (るりぼし 11 号に予告あり)．

久保田正秀，1980，おけら (50): 281-293, 151 種．藤原尚樹・大桃定洋，1982，おとしぶみ (11): 21-27, 80 種．

10. 群馬県：前報では 3 篇を紹介したが調査不十分な県である．次の 2 篇が最近発表された．

須田　亨，1985，群馬県動物誌: 305-355, 170 種．中林博之・中村裕之，1985，越佐昆虫同好会々報 (60): 33-45, 154 種．短報は大変少ない．

11. 埼玉県：前報で紹介した斎藤良夫 (1978) が基本的目録であろう．秩父連山があるのに 199 種とは不十分である．最近 2 篇の自治体調査報告書あり．

斎藤良夫，1981，寄居町，71 種．寺山　守，1982，熊谷市，26 種．藤多文雄，1985，昆虫と自然 **20** (9): 23-24; 同誌 **20**(10): 28-29，合計 57 種．「寄せ蛾記」，「月刊むし」などに短報や小目録がある．

12. 東京都：前報では藤村俊彦 (1954)，丸岡　宏 (1961)，小宮次郎 (1967) の目録を紹介した．以後 20 年間ほとんど書かれていなかったが，最近は自治体の調査報告書が目立つ．

須田孫七，1982，青梅市，67 種．新里達也，1984，大田区，23 種．新里達也，1986，板橋区，67 種．短報は「月刊むし」，「多摩虫」，「うすばしろ」などに見られる．

13. 千葉県：短報や小目録は「月刊むし」，「昆虫と自然」，「千葉県動物誌基礎資料」，「冬虫夏草」などに見られる．最近は次の 2 篇がある．

山崎秀雄，1980，千葉生物誌 **30**(1): 1-22, 169 種．種類数は少ないが文献を網羅してある．羽島祐之，1983，清澄 (10): 29-36, 46 種．

14. 神奈川県：前報では草間慶一 (1954)，山上　明 (1978) を紹介した．

露木繁雄他 3 名，1981，神奈川県昆虫調査報告書: 419-454, 250 種．基本的目録である．短報や小目録は「神奈川虫報」，「月刊むし」に多いが，最近は「かまくらちょう」にも見られる．

15. 新潟県：前報では 2 篇を紹介し，特に小池　寛 (1953-1961, 209 種) の業績を述べた．その後は発表が乏しかったが，最近多くの目録が現れた．

槇原　寛，1981-1986，越佐昆虫同好会々報 (51): 1-24; 同誌 (53): 69-70; 同誌 (62): 54-60，合計 150 種．中林博之，1981，越佐昆虫同好会々報 (51): 25-33, 84 種．山屋茂人・佐藤達生，1983，越佐昆虫同好会々報 (56): 39-48, 104 種．山屋茂人，1984-1985，長岡市立科博研報 (19): 19-40; 越佐昆虫同好

会々報 (59): 38; 同誌 (61): 12, 3 回に分けて発表，合計 129 種．「越佐昆虫同好会々報」，「長岡市立科博研報」，「NKH」，「月刊むし」などに短報や小目録がある．

16. 富山県: 前報では田中忠次 (1971) を紹介した．これをもとにして「富山県の昆虫」(富山県昆虫研究会編，1979) が発行された．カミキリ (田中忠治担当) は 170 種で調査は十分でない．その後，常楽武男，北村征三郎，川原　誠，根来　尚らが追加し，「Amica」，「Amica 通信」，「富山市科学センター研報」，「有峰の自然」などに短報や小目録が詳しく発表されている．

17. 石川県: 前報では高羽正治他 3 名 (1978) を紹介した．それ以後まとまった目録はない．「とっくりばち」，「月刊むし」などに短報が散見される．

18. 福井県: 前報では井崎市左衛門 (1959)，佐々治寛之 (1976) の中程度目録を紹介した．本県は有力な同好会がない．しかし熱心な人々が協力すれば立派なものができる．これを証明したのが「福井県昆虫目録」(1985) で，カミキリは佐々治寛之・斎藤昌弘が 246 種を記録した．追加は「月刊むし」，「昆虫と自然」などに見られる．

19. 山梨県: 前報では 6 篇を紹介したが，作成者は地元の人ではない．県の中心的存在の甲州昆虫同好会は蝶屋が主体であったが，最近カミキリ屋が育ち，ついに地元の人々が全県をまとめた．

白須英樹他 11 名，1986，山梨の昆虫 (26): 689-724, 300 種．これが基本的目録だろう．中村　光，1979，山梨の昆虫 (9): 209-236, 61 種．池田清彦，1980，山梨県の野生動物: 171-180, 256 種．宮下泰典，1982，山梨の昆虫 (17): 434-437, 60 種．藤森克彦，1984，山梨の昆虫 (22): 534-541, 106 種．短報は「山梨の昆虫」，「月刊むし」に見られる．

20. 長野県: 採集地に恵まれていて，前報では 6 篇を紹介した．その後，松本むしの会編「図説長野県のカミキリムシ」(1981, 329 種) が発行され，決定版ともいえる．

河路掛吾，1983，佳香蝶 **35** (136): 61-67, 130 種．「まつむし」には伊藤尚武，早川広文の小目録，短報がある．長野県は全国から採集者も来たり，短報などは全国の同好会誌に見られる．

21. 静岡県: 前報では 7 篇紹介したが，種類数の多い目録が目立つ．その後も多くの目録が出た．

草間慶一，1979，静岡県の生物: 111-119, 300 種が基本的目録である．平井克男，1978，駿河の昆虫 (101): 3005-3013, 72 種．大庭俊司，1979・1980，駿河の昆虫 (104): 3079-3088; 同誌 (108): 3195-3026，合計 135 種．原木直美，1981，駿河の昆虫 (114): 3356-3358, 76 種．伊藤徳造，1981，佳香蝶 **33** (128): 52-57, 141 種．短報や小目録は「駿河の昆虫」，「静岡の甲虫」，「月刊むし」などに見られる．

22. 愛知県: 前報では 5 篇ほど紹介した．その後も各地の目録が出たが，全県下のものはない．

穂積俊文，1979，佳香蝶 **31** (120): 54-63, 220 種．原田緒津夫，1979，鳳来寺山自然科学博物館々報 (8): 21-27, 237 種．竹内克豊，1980，渥美半島の昆虫: 18-22, 46 種．竹内克豊他 2 名，愛知県豊根村の動物: 231-285, 216 種．湯沢宜久，1980，佳香蝶 **32** (121): 1-10; **32** (124): 49-60, 67 種の幼虫と蛹．その他犬山市 (大竹　勝，1982, 51 種)，岡崎市 (竹内克豊，1986, 82 種) の市史もある．短報や小目録は「佳香蝶」，「三河の昆虫」，「虫譜」，「月刊むし」などに見られる．

23. 岐阜県: 前報では 2 篇を紹介したが，その後も調査が進んだ．

野平照雄，1982，岐阜県の昆虫: 445-469, 237 種．この目録が基本で「啓蟄」(**4** (11): 11-16, 1986) に 28 種が追加発表され，計 262 種．杉山　勉他 2 名，1979，岐大農学部研報 (42): 1-13, 98 種．短報や小目録は「啓蟄」，「佳香蝶」，「月刊むし」に見られる．

24. 滋賀県: 前報では疑問種のある目録を 2 篇紹介した．調査不十分な県である．

武田　滋，1983-1986, Came 虫 **2** (2)-30 (本誌は途中から通号になる)に毎号採集記録を載せ，31 号 (1987) にそのまとめを発表した．163 種．「Came 虫」，「月刊むし」に短報を時々見る．

25. 三重県: 前報では 6 篇を紹介し，昆虫相解明の盛んな県である．

川原　誠・大川親雄，1981，ひらくら **25**(1): 1–51, 235 種．これが基本的目録で考察もなされている．また県下各地の自然環境調査報告書も多い．島地岩根，1980，伊勢神宮境内，75 種．市橋　甫他 3 名，1982，尾鷲地区，98 種．生川展行他 7 名，1984，比奈知ダム，60 種．「ひらくら」，「佳香蝶」，「月刊むし」などに短報や小目録が見られる．

26. 和歌山県: 前報で紹介したように奈良一 (1967–1976) が南紀生物 **9**(1)–**18**(1) の間に 4 回に分けて 248 種を記録した．その後大きな目録はない．現在「Kinokuni」に奈良一が数種ずつ解説を連載中，他の人々が短報や小目録を掲載している．

27. 奈良県: 前報では谷　幸三・冨永　修 (1975) の目録を紹介した．春日山や大台山系には採集家は来るが短報が多く，「月刊むし」などに見られる．

山本雅則，1979，Sakaiensis **16**(2): 128–184, 130 種．調査不十分の県である．

28. 京都府: 前報では渡辺弘之 (1976) のみ紹介し調査不十分と説明した．その後各地の目録が出た．

緒方　健，1979，Microcosm (6): 35–54, 93 種，さらに同誌 (8): 16–18 で 9 種追加．谷　寿一他 2 名，1979，Microcosm (6): 3–28, 1979, 62 種，さらに同誌 (10): 29–40 で 2 種追加．谷　寿一他 3 名，1981，Microcosm (11): 11–20, 160 種．一瀬政人・安井謙二，1985，Insect 丹後・若狭 (32): 3–5, 145 種．短報や小目録は「Insect 丹後・若狭」，「月刊むし」に見られる．

29. 大阪府: 前報でも記したが調査不十分である．古い目録も併せて紹介する．

仲田元亮，1982，能勢の昆虫，甲虫の部，下巻: 154–338, 126 種 (兵庫県も含む)．小田覚造，1946–1947，昆虫科学 **4**(2): 32–42；同誌 **5**(1): 27，合計 111 種．林　匡夫，1967，箕面山の動物相調査 (大阪府刊): 159–165, 110 種．短報や小目録は「月刊むし」，「昆虫と自然」に見られる．石浜宣夫，1978–1979，昆虫と自然 **13**(6)；同誌 **14**(14) が最近の貴重な報文である．

30. 兵庫県: よく調べられた県で，前報でも 10 篇を紹介した．

高橋　匡，1980，Iratsume (4): 13–27, 200 種．磯部昌弘，1981，Iratsume (5): 28–35, 81 種．黒田　収，1982，てんとうむし (8): 13–26, 222 種．加野　正，1982–1985，Iratsume (6): 77–79；同誌 (8·9): 130–139, 140–148．また大阪府で記した仲田元亮のレポート (1982) にも兵庫県が含まれている．短報や小目録は「きべりはむし」，「てんとうむし」，「Iratsume」などに見られる．

31. 鳥取県: 好採集地の高鉢山と伯耆大山の目録が多く，前報で 6 篇を紹介した．

那須　敏・山地　治，1976–1984，すずむし (113)–(119), 6 回に分け 193 種．渕上和之他 2 名，1980，Vitae (23): 12–21, 67 種．木本哲郎，1983，Vitae (24): 11–13, 82 種．井上敏明，1979–1982，ゆらぎあ (2), (4), (6), 100 種，未完．短報や小目録が「すかしば」，「ゆらぎあ」，「月刊むし」などにある．

32. 島根県: 前報では藤村俊彦 (1966)，曾田貞滋 (1974, 1977) の 2 氏の活躍を紹介した．その後は労作なく，調査が不十分と思われる．

和泉　作，1985，すかしば (23): 11–16；同誌 24: 5–7, 72 種．短報や小目録は「すかしば」に多い．

33. 岡山県: 前報で 8 篇を紹介したが，その中の「岡山県の昆虫」(倉敷昆虫館編 1978, 241 種) が基本的目録である．その後は目録発表は少ない．

平田信夫他 3 名，1984，岡山県立短大研究紀要 (28): 11–18, 103 種．短報や小目録は「すずむし」，「月刊むし」などに見られる．

34. 広島県: 活発な県で，前報で 4 篇を紹介したが，その後も目録発表が多い．

中村慎吾・小阪敏和他 4 名，1970–1984，比和科博研報 (13)，広島虫の会々報 (15), (16), (17), (19), (21), (22), (23) と 8 回に分けて総まとめ，合計 235 種．これが基本的目録であるが，他に地区ごとの目

録も多い．中村慎吾，1977，比和の自然：255–294，130 種．秋山美文，1984–1986，広島虫の会々報 (23–25)，連載で計 74 種．中尾進治，1984，北九州の昆虫 **31** (2)：119–122，62 種．中尾進治，1986，北九州の昆虫 **33** (1)：53–64，141 種．矢野立志他 2 名，1986，広島虫の会々報 (25)：1–16，193 種．短報や小目録は「広島虫の会々報」に多い．

35. 山口県：前報では 6 篇を紹介した．なかでも田中　馨 (1975，228 種) が基本的目録であろう．以後は次の 1 篇のみである．短報はほとんど見られない．

北村英忠，1984–1986，北九州の昆虫 **31** (2)：123–124；同誌 **31** (3)：138；同誌 **33** (1)：49–52，合計 81 種．

36. 香川県：前報で 3 篇を紹介したが，今回は紹介すべきものなし．短報なども少ない．

37. 愛媛県：前報で 6 篇を紹介したが，それ以後は山岡の目録があるのみ．

楠　博幸・菅　　晃，1978，愛媛県立博物館研報 (9)：1–55，272 種．これは前報で紹介したが基本的目録である．短報は「月刊むし」などに見られる．山岡幸雄，1986，愛媛の昆虫 (7)：11–28，82 種．

38. 徳島県：前報では 10 篇も紹介したが，調査十分とは言い切れず，その後もめぼしい目録はない．

吉田正隆，1978，高越山の自然：70–74，128 種．短報や小目録は「月刊むし」に見られる．

39. 高知県：前報では小島圭三他 3 名 (1962)，別府隆守他 15 名 (1968)，中山紘一 (1977) を紹介した．これらは県下各地域をまとめてあり，さらに吉永清夫・中山紘一，1978，昆虫と自然 **13** (10)：20–23 では県全体の概論が書かれている．最近の目録は次の 3 篇．

中山紘一・吉永清夫，1981，げんせい (40)：11–23，139 種．中山紘一，1985，げんせい (47)：3–27，200 種．中山紘一，1986，げんせい (49)：9–16，122 種．短報や小目録は「月刊むし」，「げんせい」，「げんせい通信」，各地の学術調査報告などにある．

さて四国のカミキリ分布を調べるには次の文献を見られるとよい．これには 266 篇の文献目録と種のカミキリの県別分布表が書いてある．

穂積俊文・小笠原隆，1985，げんせい (46)：19–35；同誌 (47)：27．

40. 福岡県：最も活発で採集目録も多い．前報では 16 篇を紹介した．カミキリ屋も多い県である．

山脇好之，1984，Korasana **22** (1·2)，1–12，53 種．南　雄二他 2 名，1984，Korasana **22** (1·2)，12–23，140 種．山脇好之，1984，北九州の昆虫 **32** (1)：17–24；**33** (2)：79–84，計 101 種．短報や小目録は「北九州の昆虫」，「Korasana」に多い．

41. 佐賀県：前報では江口純正・緒方　健 (1973) の 1 篇のみ紹介した淋しい県であったが，最近はカミキリ屋も現れて賑やかになった．

伊藤達美，1982，北九州の昆虫 **29** (3)：187–191，94 種．高橋隆信他 2 名，1985，佐賀の昆虫 **16**：39–43，75 種．大塚建之，1986，佐賀の昆虫 **17**：95–100，78 種．緒方　健他 3 名，1986，佐賀の昆虫 **18**：117–140，64 種．

また今坂正一 (1981–1986) は多良岳甲虫目録を「こがねむし」に分割掲載したが，佐賀県側の記録も少々含まれている．短報や小目録は「佐賀の昆虫」，「佐賀むし通信」などにある．

42. 長崎県：前報で 4 篇を紹介したが，その後も今坂正一氏の活躍が目立つ．

今坂正一・岩崎伝次，1974–1981，こがねむし **12** (1)；北九州の昆虫 **20** (2)；北九州の昆虫 **28** (1) に 3 回に分け連載，合計 144 種．今坂正一，1981–1986，こがねむし (38)，(39)，(45)，(47) と 4 回に分け連載，合計 108 種．阿比留巨人・今坂正一，1983，こがねむし (42)：35–44，1986；同誌 (47)：27–42，合計 73 種．短報や小目録は「北九州の昆虫」，「こがねむし」，「長崎県生物学会誌」などに見られる．

43. 熊本県：前報で紹介した直海俊一郎・直海晶二郎 (1977，235 種) が基本的目録である．

中尾進治，1981，北九州の昆虫 **28** (1)：49–52，57 種．今坂正一，1982，熊本昆虫同好会報 **28** (2)：1–

15, 1984; 同誌 **29**(2): 1-14, 合計 79 種. 松嵜誠之, 1983, 北九州の昆虫 **30**(1): 63-65, 49 種. 松嵜誠之, 1983, 北九州の昆虫 **30**(2): 135-140, 86 種. 立川喜一, 1984, 熊本昆虫同好会報 **30**(2): 10-14, 56 種. 今坂正一他 2 名, 1985, 熊本昆虫同好会報 **30**(3): 1-32, 78 種. 短報や小目録は「熊本昆虫同好会報」,「Korasana」,「北九州の昆虫」などに見られる.

44. 大分県: 前報では祖母山や九重の目録を中心に 5 篇を紹介した. その後は各地の目録が見られるようになったが, 県全体のまとめはない.

岩本常夫・佐々木茂美, 1979, 二豊のむし (4): 5-16, 59 種. 今坂正二, 1980, 二豊のむし **5**: 1-84, 55 種. 岩本常夫・佐々木茂美, 1982, 二豊のむし (8): 19-30, 59 種. 木本哲郎, 1983, Vitae (24): 3-10, 66 種. 南　雄二・津田勝男, 1984, 北九州の昆虫 **31**(1): 29-38, 146 種. 佐々木茂美, 1984, 二豊のむし (12): 17-75, 116 種. 短報や小目録は「二豊のむし」,「北九州の昆虫」,「日田市立博物館報」などで見られる.

45. 宮崎県: 前報では 5 篇紹介したが, 南北に 2 分して書いた永井あつしのが基本的目録であろう.

永井あつし (1970-1972) は前報で紹介したように県北部目録 191 種を記録した. その後は, 永井あつし, 1980, タテハモドキ (15): 29-77, 175 種. 県南地区をまとめてある. 山脇好之, 1981, 北九州の昆虫 **28**(2): 111-118; 同誌 **28**(3): 159-166, 合計 189 種. 短報や小目録は「タテハモドキ」,「北九州の昆虫」などにある.

46. 鹿児島県: 前報では 4 篇を紹介したが, 坂元久米雄・嶋　洪 (1965) は基本的目録であろう.

15 年後さらに詳しく調べた総括目録が発表された. 田中和臣・津田勝男, 1980, Satsuma **29**(84): 164-225, 232 種. 短報や小目録は「Satsuma」,「月刊むし」などに時々見られる.

§2. 島嶼篇 (小目録を含む)

47. 沖縄県の島々

前報は 21 篇を紹介したが, その中で SAMUELSON & GRESSITT (1965), 小宮次郎 (1972), 高良鉄夫・東　清二 (1973), 東　清二・槇原　寛他 (1976) が基本的目録で, 新種や新亜種記載に林　匡夫 (1962-1963) がある. その後も色々な人が目録を書いている. しかし地元の「琉球の昆虫」(沖縄昆虫同好会機関誌) は, カミキリの報文が大変少ない.

沖縄本島: 入江平吉, 1980, 北九州の昆虫 **27**(2): 91-100, 70 種. 竹内幸夫, 1984, 北九州の昆虫 **30**(3): 201-206, 53 種. 慶良間列島: 小倉直樹, 1983, 月刊むし (154): 39, 10 種. 久米島: 平松広吉, 1978, 甲虫ニュース (43): 4, 15 種. 伊良部島: 小倉直樹, 1978, Elytra **6**(1): 43, 5 種. 石垣島: 入江平吉, 1979, 北九州の昆虫 **25**(3): 133-138, 89 種. 基本的目録であり,「月刊むし」,「北九州の昆虫」などに短報や小目録がある. 竹富島: 矢野立志, 1976, Elytra **3**(1·2): 31, 13 種. 小浜島: 露木繁雄, 1981, 月刊むし (130): 37-38, 2 種. 波照間島: 入江平吉, 1978, 北九州の昆虫 **24**(3): 95-96, 26 種. 出口可能, 1981, 月刊むし (119): 22-23, 18 種. 与那国島: 岩橋　正, 1974, 北九州の昆虫 **20**(2): 31-34, 26 種. 尖閣諸島: 白石　哲・荒井秋晴, 1980, 尖閣諸島調査報告書: 60-63, 6 種. 南大東島: 堤　隆文, 1978, Elytra **6**(2): 67-68, 5 種.

48. 鹿児島県の島々

前報では 41 篇を紹介した. やはり奄美大島, 屋久島などが多い. 以下重要な目録のみ紹介するが,「月刊むし」,「北九州の昆虫」,「Satsuma」などには, 採集記, 小目録, 短報などが多い.

種子島: 森　一規, 1984, Satsuma **33**(92): 106-126, 119 種. これが基本的目録である. 屋久島: 小宮次郎, 1980, 月刊むし (112): 3-18; (113): 7-19, 合計 138 種. 中根猛彦, 1984, 屋久島の自然: 587-

631, 143 種．この 2 篇が基本的目録であり，小宮のは生物地理的考察が書き加えてある．短報や小目録は各誌に見られる．口永良部島: 伊藤　淳・守屋健次，1975, 月刊むし (50): 24-27, 37 種．トカラ列島: 入江平吉・草間慶一，1976, 月刊むし (59): 9-16, 58 種が基本的目録である．短報や小目録は前報で 3 篇を紹介したが，他に北九州の昆虫 **27**(1) や **29**(1), 月刊むし (186), (190), (193), (194) などに見られる．特に 194 号の森・藤田 (1987) は 23 種を記録している．喜界島: 槇原　寛，1973, 筑紫の昆虫 **14**(2): 3-16, 17 種．藤田　宏，1986, 月刊むし (182): 40, 10 種．奄美大島: 前回は 9 篇を紹介した．その中で林　匡夫 (1962), 守屋爽一 (1971), 森島直哉 (1977) などが基本的目録であろう．鈴木重豊，1982, あかぼし (1): 2-16, 73 種も参考になる．採集記や小目録は各誌に見られる．枝手久島: 楠井善久，1983, 越佐昆虫同好会々報 (56): 8. 徳之島: 前報で紹介した杉野広一・高桑正敏 (1974), 下村　徹・杉野広一 (1974) のみである．沖永良部島: 前報で紹介した梅林満智也 (1960) が基本的目録であろう．以後は伊藤敏仁，1986, 月刊むし (179): 42, 3 種がある．与論島: 岩田隆太郎，1983, 月刊むし (154): 38, 4 種．この報文が唯一のようだ．甑列島: 前報では田中　洋 (1974), 吉田喜美明 (1976) を紹介した．基本的目録に下記のがある．入江平吉，1981, 北九州の昆虫 **28**(3): 127-131, 61 種．黒島: 前報で紹介した槇原　寛 (1977), 山脇好之 (1978), 藤田　宏 (1978) が主要目録であり，以後は報文が乏しい．

49. 東支那海・玄界灘の島々

まず長崎県生物学会の刊行物をあげねばならない．「男女群島の生物 (1973)」,「対馬の生物 (1976)」,「壱岐の生物 (1977)」,「五島の生物 (1978)」である．それぞれに次の総括的目録がある．山口鉄男他 5 名 (男女群島，10 種)，白水　隆他 2 名 (対馬，165 種)，浦川虎郎他 2 名 (壱岐，33 種)，宮田　彬他 3 名 (筑前沖ノ島，20 種)，今坂正一他 2 名 (五島，50 種)．

それ以外の文献は槇原　寛，1980, Esakia (15): 49-73, 19 種，男女群島．山脇好之・堤　隆文，1984, 北九州の昆虫 **31**(3): 139-142, 9 種，男女群島．槇原　寛，1980, 月刊むし (117): 53-58, 対馬．入江平吉，1982, 北九州の昆虫 **29**(2): 111-119, 119 種，対馬．荒巻健二他 2 名，1983, Korasana **21**(1·2): 22-28, 14 種，筑前沖ノ島．

次に上記以外の島々の目録を紹介してみよう．福岡市小呂ノ島: 城戸克弥，1986, 北九州の昆虫 **33**(2): 65-69, 8 種．福岡県能古島: 角田浩之，1984, Vitae (25): 23-25, 6 種．佐賀県神集島: 高橋隆信，1986, 佐賀の昆虫 (18): 160, 11 種．佐賀県馬渡島・加唐島: 緒方　健・野村周平他 2 名，1980-1984, 佐賀の昆虫 (10): 62-67; 同誌 (10): 67-68; 同誌 (12): 55-68; 同誌 (15): 73-80; Vitae (25): 21-23, 合計 38 種．平戸島: 松尾照男，1983, 北九州の昆虫 **30**(2): 81-88, 76 種．長崎県上阿値賀島・黒子島: 松尾照男，1982, こがねむし (39): 15-16, 5 種．天草下島: 今坂正一，1979, こがねむし (34): 17, 34 種．太田恭司，1982, 北九州の昆虫 **29**(3): 133-138, 75 種．太田の報文は基本的目録と見てよい．佐賀県松島，北九州市白島は前報以後，特に追加する目録はない．

50. 日本海の島々

隠岐: 門脇久志，1977・1983, すかしば (7): 15-38; (20): 3-20, 127 種．基本的目録で，ほぼ完備したものと見なしてよい．飛鳥: 桜井俊一，1981, 昆虫と自然 **16**(4): 41; **16**(14): 12-13, 合計 29 種．これはよく調べられた基本的目録である．他に前報の白畑孝太郎・黒沢良彦 (1972) と大木　裕，1983, 月刊むし (144): 33, 13 種がある．山口県見島，京都府冠島，福井県雄島，佐渡島，粟島は前報以後，特に紹介すべき文献はない．

51. 北海道の島々

短期日の採集が多く，前報では小目録を 6 篇紹介した．その後も報文がある．

利尻島: 佐藤雅夫・楠井善久, 1984, *Jezoensis* (11): 114-116, 43 種. 総まとめの目録である. 他に野中啓史他 13 名, 1986, 早稲田生物 (22): 56-67, 15 種. 礼文島: 長尾　康, 1985, 月刊むし (178): 37-38, 5 種. 奥尻島: 秋山秀雄, 1984, 月刊むし (161): 40, 17 種.

52. 伊豆諸島

関東のカミキリ屋が出掛け多くの報文があり, 前報では 15 篇を紹介した. その中でも重要なものは小宮次郎他 3 名, 1972, 月刊むし (18): 2-9. 高桑正敏, 1979, 月刊むし (104): 35-40. 藤田　宏, 1979, 月刊むし (104): 42-43. 長谷川澄雄, 1984, 青ヶ島の生活と文化: 147-169, 9 種. 短報や小目録を藤田　宏, 伊藤敏仁が, しばしば「月刊むし」に書いている. また小笠原諸島は採集規制が厳しいためか, ほとんどレポートを見ない.

53. 太平洋の島々

島が少ないこともあるが, 伊豆諸島を除くとほとんど調査がない. 前報では 4 篇を紹介した.

横須賀市猿島: 大場信義・楠井善久, 1979, 猿島の自然: 77-108, 24 種. 藤田　宏, 1981, 月刊むし (122): 34, 2 種. 熱海市初島: 草間慶一・市川恭治, 1982, 静岡の甲虫 **1**(2): 1-14, 1987; 同誌 **5**(1·2): 21-23, 合計 15 種. 徳島県海部郡出羽島・竹ヶ島: 村上構三・黒田祐次, 1979, 徳島昆虫 (5): 2-11, 28 種. 高知県宿毛市鵜来島・姫島: 沖の島・柏島を含めた 4 島はすでに岸井　尚他 2 名 (1960) が記録している. その後も調査報告がある. 中山紘一, 1982, 高知県西南諸島学術調査書: 133-149, 鵜来島 2 種, 姫島 6 種. 大分県南海郡沖黒島: 三宅　武他 5 名, 1987, 二豊のむし (18): 57-58, 11 種.

54. 瀬戸内海の島々

淡路島: 前報で Parnassius に堀田　久 (1971-1977) が連載したのを紹介したが, その後も堀田　久, 1977-1979, 同誌 (19), (21), 金田昌士, 1977-1981, 同誌 (19), (23), (25), 高橋寿郎 (1979, 同誌 (21) が追加報告し, 合計 81 種. 和歌山市友ヶ島: 乾風　登他 2 名, 1983, 友ヶ島学術調査 (和歌山市刊): 253-274, 9 種. 兵庫県家島群島: 上田尚志, 1981, きべりはむし **9**(1): 9-18, 19 種. 香川県与島・櫃石島: 豊嶋　弘, 1980・1981, 一般国道 30 号 (香川県) 自然環境調査報告書, 昭和 54 年度, 昭和 55 年度, 4 種. 広島県向島: 小阪敏和, 1986, 広島虫の会々報 (25): 55-57, 12 種. 広島県宮島: 小阪敏和他 4 名, 1984, 広島虫の会々報 (23): 1-12, 88 種. 総括的目録である.

前報で紹介した小豆島や山口県大島の記録はその後は見あたらない.

§3. 種の文献目録

動物の種ごとの文献目録には大野正男の労作がある. カミキリは 2 種あり, 東洋大学紀要教養課程篇 (自然科学) に掲載され, 29 号, pp. 69-107 にラミーカミキリ 404 篇 (1985). 30 号, pp. 21-49 にベーツヒラタカミキリ 227 篇 (1986).

おわりに

冒頭に記したように,「昆虫と自然」に目録要覧を書いてから, すでに 8 年を経過した. 前報では題名, 主要なカミキリ種名や疑問種も記述したが, 今回は簡単に記して紹介した. 前報に比し県全体をまとめた目録がふえ, 分布調査が盛んになり喜ばしい傾向となった. 本土の県は, 1 県 250 種前後が限度であるが, 中部山岳地帯を含む県は 300 種前後である.

擱筆にあたり貴重な紙面を与えて下さった編集者の方々や別刷を御恵送下さった方々に感謝する.

(愛知県小牧市小牧 1 丁目 578)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 72–93, June 15, 1988

東京都高尾山のカミキリムシ

藤　田　　宏

Cerambycid Beetles from Mt. Takaosan, Tokyo, and its Neighborhood

Hiroshi FUJITA

はじめに

東京都八王子市の高尾山は，低山ながら古くからカミキリムシの好採集地として有名で，関西の春日山（奈良県）と並ぶ名所としてその知名度は非常に高い．

筆者も中学生時代から高校生時代にかけての 1967～1971 年頃は，春先のカエデの花すくいから始まって，夏の燈火採集，秋～冬の材採集と季節を変えてずいぶん通いつめた時代があった．1971 年頃，自分なりの高尾山のカミキリリストを作り，そのリストをコピーして，通い始めたばかりの木曜サロン（上野）へ行って，並み居るカミキリ屋の諸先輩方に向って「高尾山のカミキリをまとめてみたいのでご協力をお願いしたい‥‥」と頼んだことがあった．今思えば，名だたる旧京浜のカミキリグループのメンバーに対して一高校生がずいぶん厚かましいことを言ったような気がするが，サロンのメンバーはこの海のものとも山のものともしれない高校生に全面的に協力して下さることになり，高桑正敏氏を通じて各人が集めていたデータをそれぞれ 1～数枚，長い人では 10 枚近くのレポート用紙に書きこんで，参考資料として提供して下さった．木曜サロンは，非常に好意的でおおらかな人達の集団だったのである．

しかし，その後の 17 年間，高尾山のカミキリリストが世に出ることがなかったのはご存知のとおりである．ひとえに私の怠慢のせいで，この間，資料を入れた袋を見るたびに気になってはいたものの，とりまとめる時間もないままに時が過ぎ去ってしまった．高尾山のカミキリについては，1961 年に Insect Magazine 53 号に丸岡　宏氏が“高尾山のカミキリ”というタイトルで書かれた名文があるが，これは随筆風の紹介文でリストや各々の採集データは付されていない．高尾山が全国的に有名な山であるにもかかわらず，この丸岡氏の報文以来まったくカミキリのまとまったリストが出なかったのは，以上の経緯からも明らかなようにほとんど私の責任である．

このたび，草間慶一先生の退官記念論文集を出すにあたって，従来のこの種の論文集とはすこし違った，あまり固苦しくなく草間先生らしいものを作ろうと，幹事が集まって企画会議が設けられた．その折に筆者は，リスト作りが大好きな草間先生だから，この際，東の高尾山と西の春日山（春日山もなぜかまとまったリストが出ていない）という東西の超有名産地のリストを作ってみてはどうかと進言した．春日山の方は色々な事情で箕面に変わったようであるが，高尾山の方だけでもこの機会にまとめ，長年の宿題をなんとかしたいと思って筆をとったしだいである．

本文をまとめるにあたって，丸岡　宏，奥村　尚，高桑正敏，窪木幹夫，粂久仁雄，伊藤正雄，海老原裕之，酒井　香，木村欣二，宮原道則，露木繁雄の諸氏には，長い間貴重な資料を埋もれさせてしまったことを心からお詫びするとともに，改めてお礼申し上げたい．また，今回新たに文献や資料などでご助力いただいた黒沢良彦先生をはじめ，池田清彦，秋山秀雄，山本光人，平山洋人，斎藤秀生の各

氏，標本写真を撮影して下さった猪又敏男氏に深く感謝申し上げたい．

研　究　史

高尾山は都心から近く手軽に行ける山のためか，古くから昆虫愛好者が入っていたようで，蝶などでは100年近く前の1885年(明治18年)頃から高尾山に関する報告が見られるようである．

カミキリに関しても古い報文があると思われるが，残念ながら筆者の手元には戦前の文献がほとんどなく，時間的な制約もあって今回はほとんど調べることができなかった．したがって，以下にあげるカミキリのリストや記述は，主として戦後の高尾山についてまとめたものと考えていただければ幸いである．

戦後になってからの文献としては，一般誌として「新昆虫」，「昆虫と自然」，「月刊むし」，甲虫の専門誌として「甲虫ニュース」，「Elytra」，「さやばね」，地元の同好会誌として京浜昆虫同好会(現在休会中)の「Insect Magazine」，「はばたき」などの雑誌を参照した．これらのバックナンバーを調べてみて，高尾山に関する報文が意外なほど少ないのに驚いたが，「Insect Magazine」(一部に見ることのできない号があった)には比較的多くの報文が見られ，かなり参考になった．この他に，ごく少部数発行されたのみの印刷物ではあるが，パラナスピアカミキリクラブによる「Paranaspia」[1972]には，“高尾山のカミキリ(ナイター)”として10ページにわたって斎藤秀生・斎藤秀秋両氏が燈火採集で得たカミキリをまとめたものがあり，出現期と個体数をグラフに示しながら解説している．

しかし，高尾山に関するカミキリの報文は1960～1970年頃がひとつのピークだったようで，1970年代から1980年代にかけては散発的な報告があるだけの淋しい状態が続いている．文献上に発表されているデータが少ないため，今回のリストは同好者各位から寄せられたデータを基に作成した．

扱った地域とカミキリ相の特徴

一口に“高尾山”といっても，実際には徒歩で歩きまわることのできる周辺地域をも含めて指すことが多い．本稿では，高尾山本山(標高約600 m)を中心として，その周辺地域も含めたカミキリ相を対象とした(図6参照)．この中でもっとも標高の高い所は景信山(標高727 m)の山頂で，ルリボシカミキリやニイジマトラカミキリなど，高尾山本山ではほとんど見ることのできない山地性の種を産し，カミキリ相はやや異なっている．景信山から明王峠を越え，陣馬山(標高857 m)へ登るハイキングコースもあるが，この方面については除外した．

これら高尾山とその周辺の地域からは，今回173種のカミキリが確認された．この173種という数字とその内容について，すこし考えてみよう．

標高600 mほどの山で173種(日本産全カミキリの約1/4)ものカミキリを産する所は全国にも少なく，これは高尾山の自然がまだ比較的よく残されていることを示している．173種の中にはいわゆる珍品も多く，ヒラヤマコブハナ，トワダムモンメダカ，タカオメダカ，コボトケヒゲナガコバネ，ヤマトシロオビトラ，ヨツボシシロオビゴマフ，キボシチビ，ヨコヤマヒゲナガなど，20年ほど前であれば高尾山へ行かなければほとんど見ることのできなかった種も多い．タカオメダカ，コボトケヒゲナガコバネ，ヨコヤマトラ，ヨツボシシロオビゴマフの4種はいずれも高尾山周辺を原産地として記載された種である．また，ニセノコギリ，ツシマムナクボ，アオスジ，キイロミヤマ，カノコサビ，タテジマ，イボタサビ，ヒゲナガヒメルリなどの暖地性カミキリが多く記録されている一方，低山であるにもかかわらず，コバネ，オオクロ，オオハナ，ルリボシ，ニイジマトラ，ゴマダラモモブトなど，本州では通常中山帯に見られる山地性カミキリを産し，これらが交錯して豊かなカミキリ相を織り成

している．かつて丸岡宏氏は，高尾山を“カミキリの博物館の様な姿を呈している‥‥”と評されたが，当時はまさに宝庫といった趣きがあった．

しかし，ここ20年の間に日本のカミキリ界はめざましい進歩をとげた．カミキリ屋は増え，珍品の生態も次々に解明され，それにともなって分布の知見も大幅に塗り替えられた．高尾山の名物だったカミキリ達もアッという間に全国各地で採れるようになり，もはや高尾山へ行かなければ見ることのできないカミキリは1種もなくなってしまった．

加えてこの20年間で虫屋の“足”も大きく変わった．すなわち，電車に揺られて昆虫採集に行く時代からマイカー時代への変化である．自動車を使うことによりカミキリ屋の行動範囲も一気に広がり，各地で好採集地が発見されていくなか，高尾山はしだいに色褪せた採集地になってしまった．国定公園に指定され，昆虫採集をすることが煩わしくなってきたこともこれに拍車をかけたが，現在のカミキリ屋にとって，高尾山はかつてほど魅力のある山ではなくなったことは確かである．

今，改めて高尾山のカミキリの顔ぶれをながめてみると，思ったよりたいしたことがないと感じる人が多いかもしれないが，これも時代の流れというものだろうか．昔なら大変な珍品の顔ぶれも，周囲の状況がわかってくれば，自然林の残っている状態から考えて産することが当然な種がほとんどであった．もっとも，高尾山のまわりの山は絶望的に切り開かれてスギの植林地と化してしまっているから，自然林が残っている山はないに等しい．そういう点から考えれば，やはり高尾山は東京近郊の低山で，昔ながらの姿を今もなお維持している最後の楽園と言うことができるだろう．

高尾山およびその周辺のカミキリリスト

本リストは高尾山本山のみに限らず，大垂水峠（おおだるみとうげ），小仏峠（こぼとけとうげ），景信山へかけての山塊，旧甲州街道沿いの裏高尾町や込縄（こみなわ）などの山麓部一帯を含めた地域から採集されたカミキリのリストである．各種の解説は，和名，学名，高尾山付近における成虫の出現期や生態など，採集データ，の順となっている．採集データは多くをあげると繁雑になるので，原則として1例をあげるのみにとどめた．出現期は多くのデータから得られた幅を示し，採集地点も特にことわりのない種は高尾山周辺のほぼ全域に産することを意味する．文献から引用したデータは“　”でくくり，その出典と参考文献の番号を付記した．なお，和名および学名は原則として「日本産カミキリ大図鑑」(1984) に従った．

1. ウスバカミキリ　*Megopis* (*Aegosoma*) *sinica* (WHITE)

6～8月．燈火によく飛来する．昼間は各種広葉樹の洞中に潜んでいるものが見つかる．1♂, 18. VI. 1961, H. MARUOKA leg.

2. ノコギリカミキリ　*Prionus insularis* MOTSCHULSKY

7～8月．燈火によく飛来する．昼間はブナ大木の割れ目などに潜む．1♂, 1. VIII. 1971, H. FUJITA leg.

3. ニセノコギリカミキリ　*P. sejunctus* HAYASHI

7～9月．燈火によく飛来する．昼間はモミの立ち枯れ樹皮下に潜む．8月下旬～9月上旬の晩夏に多い．2♂♂1♀, 30. VIII. 1986, H. FUJITA leg.

4. コバネカミキリ　*Psephactus remiger* HAROLD

7月．高尾山では稀種で採集例は数例のみ．1♀, 7. VII. 1963, H. MARUOKA leg.

5. クロカミキリ　*Spondylis buprestoides* (LINNÉ)

6～9月．燈火によく飛来する．夕方から夜間にかけて，マツ類の倒木上に多く見られる．3♂♂3♀♀, 13. VII. 1963, H. EBIHARA leg.

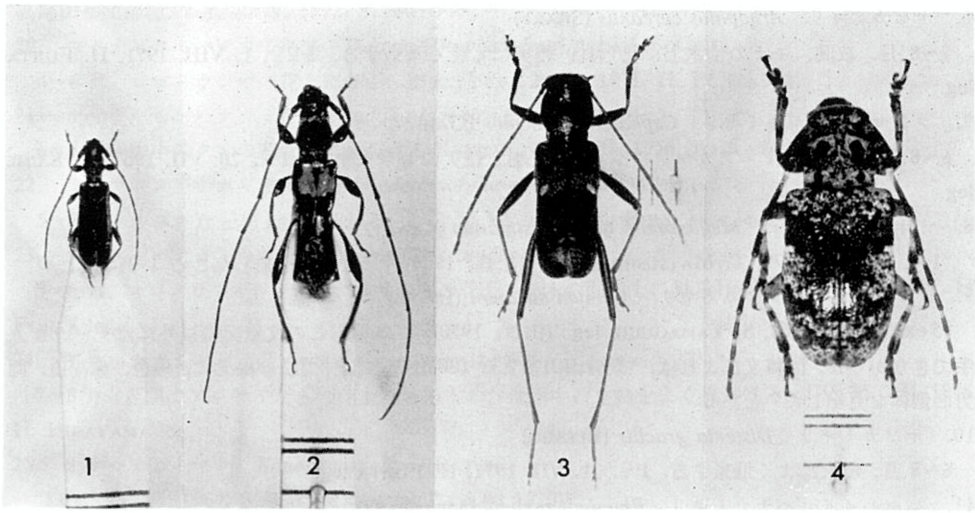


図 1. 高尾山周辺を原産地として記載された4種のカミキリ：1. タカオメダカカミキリ　2. コボトケヒゲナガコバネカミキリ　3. ヨコヤマトラカミキリ　4. ヨツボシシロオビゴマフカミキリ.

図 2. 春先にヒラヤマコブハナカミキリの採集者が集まる山麓の込縄林道.

図 3. コナラが伐採されだしたために突然クリストフコトラカミキリが見つかった込縄の尾根.

図 4. サクラやカエデの花にヤマトシロオビトラカミキリなどが多い日影沢の入口付近.

図 5. モミが多く，オオトラカミキリの食痕や脱出孔がよく見られる日影沢の林道.

6. サビカミキリ *Arhopalus coreanus* (SHARP)

7～8 月．夜間，モミの倒木上に見られ，燈火にもよく飛来する．2♀♀, 1. VIII. 1971, H. FUJITA leg.

7. ツシマムナクボカミキリ *Cephalallus unicolor* (GAHAN)

6～8 月．夜間，モミ・アカマツの倒木に見られ，燈火にも飛来する．1♀, 20. VII. 1967, K. KUME leg.

8. オオクロカミキリ *Megasemum quadricostulatum* KRAATZ

"1♂, 29. VII. 1979, T. MATSUSHIMA leg." (松島，1980)[36] 燈火に飛来したこの 1 例のみ．

9. オオマルクビヒラタカミキリ *Asemum striatum* (LINNÉ)

"5 exs., 3. V. 1962, S. YAMAGUCHI leg" (山口，1970)[27] 本種もこの文献記録以外にはデータを入手できなかった．同報文によれば，"景信山山頂より 100 m 下の松林で松の根元に，黒色，赤褐色，両方の個体を見出した" とある．

10. ホソカミキリ *Distenia gracilis* (BLESSIG)

6～8 月．燈火によく飛来する．1♀, 31. VII. 1971, H. FUJITA leg.

11. ニセハイイロハナカミキリ *Rhagium pseudojaponicum* PODANÝ

3～5 月．冬期にモミやアカマツの立ち枯れ，倒木の樹皮下で越冬中のものがよく採集される．3 exs., 9. III. 1969, M. MIYAHARA leg.

12. ヒラヤマコブハナカミキリ *Enoploderes bicolor* OHBAYASHI

4～5 月．ケーブルカー清滝駅付近，込縄，裏高尾一帯などの山麓部で採集されている．発生の早いものは 4 月上旬 (もっとも早い例で 4 月 8 日) から姿を現わし，4 月 20 日前後にピークとなり，飛翔中の個体が目につくようになる．1♂, 27. IV. 1976, H. FUJITA leg.

13. フタコブルリハナカミキリ *Stenocorus coeruleipennis* (BATES)

5～7 月．ガマズミ，ミズキ，キイチゴ，クリなどの花に集まるが少ない．ミズキ生木の樹幹や枝に止まっていることもあり，燈火に来た例もある．1♀, 24. VII. 1970, K. KUME leg.

14. モモグロハナカミキリ *Toxotinus reini* (HEYDEN)

5～6 月．薬王院や高尾山頂付近などで，日陰の葉上に見られる．1♂, 21. V. 1961, H. MARUOKA leg.

15. キバネニセハムシハナカミキリ *Lemula decipiens* BATES

4～5 月．カエデ，コゴメウツギなどの花上に多い．16 exs., 29. IV. 1967, H. EBIHARA leg.

16. ヒナルリハナカミキリ *Dinoptera minuta* (GEBLER)

4～5 月．カエデの花上にもっとも多く，サクラ，ガマズミ，コナラなどの花上にも見られる．4 exs., 29. IV. 1967, H. EBIHARA leg.

17. オオヒメハナカミキリ *Pidonia* (*Pidonia*) *grallatrix* (BATES)

5～6 月．コゴメウツギの花上に多い．燈火 (以下，単に "燈火" とある種は燈火に来た例が少数あることを示す). 11 exs., 4. VI. 1967, H. FUJITA leg.

18. セスジヒメハナカミキリ *Pidonia* (*Cryptopidonia*) *amentata* (BATES)

4～6 月．ヤマザクラ，カエデ，ヤマブキ，ガマズミなどの花上に見られる．1♂, 3. VI. 1972, H. HIRAYAMA leg.

19. コトヒメハナカミキリ *P.* (*C.*) *lyra* M. KUBOKI et K. SUZUKI

5 月．日影沢から高尾山へ 20 分ほど登った地点で，ウツギ類の花上から得られた下記の 1 頭のみ．

高尾山初記録種．1♂, 20. V. 1972, S. Saito leg.

20. フタオビノミハナカミキリ　*Pidonia* (*Omphalodera*) *puziloi* (Solsky)

4～6 月．コゴメウツギの花上に多い．燈火．1 ex., 26. V. 1971, H. Fujita leg.

21. ヤマトキモンハナカミキリ　*Judolia japonica* (Tamanuki)

6～7 月．山中のクリの花などに見られるが少ない．1♂, VII. 1956, A. Kato leg.

22. ミヤマクロハナカミキリ　*Anoploderomorpha excavata* (Bates)

5～7 月．ミズキなど花上に見られる．1♀, 1. VI. 1974, H. Hirayama leg.

23. ツヤケシハナカミキリ　*Anastrangalia scotodes* (Bates)

5～6 月．コゴメウツギ，ミズキ，クリなどの花上，モミの倒木上に見られる．1 ex., 4. VI. 1967, H. Fujita leg.

24. アカハナカミキリ　*Corymbia succedanea* (Lewis)

7～8 月．夏期にアジサイなどの花上にいるもの，飛翔中のものをよく見かける．1♀, 25. VII. 1975, H. Hirayama leg.

25. オオハナカミキリ　*Konoa granulata* (Bates)

"1 ex., 24, VI. 1969, S. Tachikawa leg." (酒井, 1970)[26]

"1♀, II. 1975 (幼虫採集) ～V. 1975 (羽化), T. Aoki leg." (青木, 1979)[35]

高尾山における本種の記録は上記の 2 例のみ．前者は東京農業大学昆虫学研究室の立川周二氏が，裏高尾の日影沢入口付近でヒメジョオンの花に来ていた個体を採集したもの．後者は青木隆氏が山頂近くの 4 号研究路で，地面に横倒しになっていた直径約 1 m, 長さ 25～26 m のモミ朽ち木中からカミキリの幼虫を掘り出したところ，後日に本種が羽化したもの．

奈良県の春日山では本種は比較的多産するようだが，関東では平地～低山帯に本種が産する例を他に知らない．6～7 月にモミなどの多い所の花を探せば追加例が出るかもしれない．

26. ムネアカクロハナカミキリ　*Leptura dimorpha* Bates

5～6 月．コゴメウツギ，バラなどの花上に見られる．1♂1♀, 24. V. 1964, H. Ebihara leg.

27. ヤツボシハナカミキリ　*Leptura* (*Leptura*) *arcuata mimica* Bates

5～8 月．コゴメウツギ，クリなどの花上に見られる．1♂, 23. VI. 1975, H. Hirayama leg.

28. ヨツスジハナカミキリ　*Leptura* (*Leptura*) *ochraceofasciata* (Motschulsky)

5～7 月．クリなどの花上にいるもの，飛翔中のものを見かける．燈火．1♀, 4. VI. 1967, H. Ebihara leg.

29. カタキハナカミキリ　*Leptura* (*Pedostrangalia*) *femoralis* (Motschulsky)

5～6 月．ミズキ，クリなどの花上に見られる．肩部のみが黄色の普通型もいるが，上翅の黄紋が発達した型の比率が高い．1 ex., 7. VI. 1970, M. Kuboki leg.

30. オオヨツスジハナカミキリ　*Leptura* (*Megaleptura*) *regalis* (Bates)

7～8 月．高尾山頂，小仏～景信山方面に多い．1♀, 7. VIII. 1962, H. Ebihara leg.

31. タテジマハナカミキリ　*Strangaliella shikokensis* (Matsushita)

6～7 月．クリなどの花上に見られるが少ない．1 ex., 24. VII. 1970, K. Kume leg.

32. ニンフホソハナカミキリ　*S. nymphula* (Bates)

5～6 月．コゴメウツギ，クリなどの花上に見られる．燈火．2 exs., 1. VI. 1969, H. Fujita leg.

33. ミヤマホソハナカミキリ　*Idiostrangalia contracta* (Bates)

6 月．クリ，ホタルブクロなどの花上に見られる．1♀, 11. VI. 1967, M. Takakuwa leg.

34. ベニバハナカミキリ *Paranaspia anaspidoides* (BATES)

6月．飛翔中のもの，朽ち木に止まっているものが採集されているが稀．ケーブルカー清滝駅付近，薬王院，相模湖方面などでの採集例がある．1♂, 3. VI. 1972, H. HIRAYAMA leg.

35. アオスジカミキリ *Xystrocera globosa* (OLIVIER)

7月．燈火に飛来するが稀．1♂, 2. VII. 1961, H. MARUOKA leg.

36. ミヤマカミキリ *Massicus raddei* (BLESSIG)

7～8月．燈火に飛来する．1♂, 17. VII. 1969, H. FUJITA leg.

37. キマダラカミキリ *Aeolesthes* (*Pseudaeolesthes*) *chrysothrix* (BATES)

6～8月．燈火によく飛来する．アカメガシワの花に来た例もある．1♀, 14. VII. 1964, H. EBIHARA leg.

38. キイロミヤマカミキリ *Margites* (*Margites*) *fulvidus* (PASCOE)

7～8月．燈火に飛来するが稀．夜間にウラジロガシの半立ち枯れから採集された例がある．1♂, 22. VII. 1961, S. KONDO leg.

39. トビイロカミキリ *Allotraeus* (*Allotraeus*) *sphaerioninus* BATES

5～7月．ガマズミなどの花上に見られる．アブラチャンの枯れ枝を持ち帰ると多数羽化する．燈火．1♂, 8. VI. 1971, M. FUKAMACHI leg.

40. ヨツボシカミキリ *Stenygrinum quadrinotatum* BATES

6～7月．燈火によく飛来するほか，クリなどの花上に見られる．1 ex., 23. VII. 1970, H. FUJITA leg.

41. アメイロカミキリ *Stenodryas clavigera* BATES

6～7月．ミズキ，クリ，ヤマボウシ，アカメガシワなどの花上に見られ，燈火にも来る．1♀, 14. VI. 1958, K. KIMURA leg.

42. トワダムモンメダカカミキリ *Stenhomalus lighti* GRESSITT

5～7月．冬期にキブシの細い枯れ枝を削ると，材中で成虫越冬をしているものがよく見つかる．コゴメウツギの花上からの採集例もある．1 ex., 1. XII. 1968, M. MIYAHARA leg.

43. タカオメダカカミキリ *S. takaosanus* OHBAYASHI

5～7月．日陰にあるカエデ，コゴメウツギ，ナナカマドなどの花上から採集されるが，分布は山頂付近のイヌブナ林に限られる．冬期，地面に落ちた細いイヌブナの枯れ枝を削ると，材中で成虫越冬しているものがよく見つかる．1 ex., 20. V. 1966, M. TAKAKUWA leg.

44. タイワンメダカカミキリ *S. taiwanus* MATSUSHITA

5～6月．サンショウの枯れ枝などに見られる．燈火．1 ex., 27. VI. 1970, M. KUBOKI leg.

45. カッコウメダカカミキリ *S. cleroides* BATES

5～6月．アケビの枯れづるなどに見られる．燈火．2 exs., 16. VI. 1974, H. HIRAYAMA leg.

46. ナカネアメイロカミキリ *Obrium nakanei* OHBAYASHI

6～7月．燈火に飛来するが少ない．1 ex., 27. VI. 1970, M. KUBOKI leg.

47. オダヒゲナガコバネカミキリ *Molorchus gracilis* HAYASHI

4～5月．カエデ，コゴメウツギなどの花上に見られ，周囲にモミ（食樹）の多い所で咲いている花には特に個体数が多い．4♀♀, 12. V. 1968, H. EBIHARA leg.

48. コジマヒゲナガコバネカミキリ *M. kojimai* (MATSUSHITA)

4～6月．カエデ，コゴメウツギなどの花上に見られる．キブシの枯れ枝を持ち帰るとよく成虫が出

てくる．ミズキへの産卵例もある．1♀, 18. IV. 1972, H. FUJITA leg.

49. コボトケヒゲナガコバネカミキリ　*M. kobotokensis* OHBAYASHI

4～5 月．カエデ，コゴメウツギ，ミツバウツギなどの花上に見られる．ミツバウツギの枯れ枝を持ち帰るとよく成虫が出てくる．1 ex., 23. IV. 1969, M. MIYAHARA leg.

50. クスベニカミキリ　*Pyrestes haematicus* PASCOE

7 月．アカメガシワ，ミズキなどの花上に見られる．1 ex., 2. VII. 1961, H. MARUOKA leg.

51. ルリボシカミキリ　*Rosalia* (*Rosalia*) *batesi* HAROLD

5～7 月．景信山方面で採集されているが稀．高尾山本山での採集例は聞かない．1 ex., 31. V. 1959, H. MARUOKA leg.

52. ミドリカミキリ　*Chloridorum* (*Leontium*) *viride* (THOMSON)

5～7 月．コゴメウツギ，ガマズミなどの花上に見られる．1 ex., 5. VI. 1968, M. MIYAHARA leg.

53. アオカミキリ　*Schwarzerium quadricolle* (BATES)

6～7 月．薬王院付近や裏高尾で飛翔中のものなどが採集されているが稀．1♀, 27. VII. 1970, H. FUJITA leg.

54. ヒメスギカミキリ　*Callidiellum rufipenne* (MOTSCHULSKY)

4～5 月．春先にスギの伐採木などに多く見られる．3 exs., 30. IV. 1968, M. MIYAHARA leg.

55. ビャクシンカミキリ　*Semanotus bifasciatus* (MOTSCHULSKY)

“1♂, 15. IV. 1969, H. MARUOKA leg.” (丸岡, 1970)[25]　採集例はこの 1 例のみと思われる．表参道でヒバの材上にいるものが採集された．

56. スギカミキリ　*S. japonicus* (LACORDAIRE)

4～5 月．春先にスギの樹皮下に見られる．黒化型も採集されている．1 ex., 29. IV. 1966, M. TAKAKUWA leg.

57. チャイロホソヒラタカミキリ　*Phymatodes* (*Phymatodes*) *testaceus* (LINNÉ)

5～6 月．裏高尾など山麓部の薪にかなり多く見られたが，最近は薪を使わなくなったためかそれほど多くない．1♂, 30. V. 1975, H. HIRAYAMA leg.

58. アカネカミキリ　*Phymatodes* (*Poecilium*) *maaki* (KRAATZ)

5 月．ブドウの枯れづるに多い．1 ex., 26. V. 1971, H. FUJITA leg.

59. ヨツボシチビヒラタカミキリ　*P.* (*P.*) *quadrimaculatus* GRESSITT

丸岡 (1961)[8] に，“6 月から 7 月にかけてはコナラ，ナラで少ないながら採れる” とある．

60. シロオビチビヒラタカミキリ　*Phymatodes* (*Paraphymatodes*) *albicinctus* BATES

5 月．ブドウの枯れづるに多い．5 exs., 26. V. 1971, H. FUJITA leg.

61. オオトラカミキリ　*Xylotrechus villioni* (VILLARD)

“1♀, 25. IX. 1932, T. IIDA leg.” (神谷・大林, 1937)[1]　公表されている採集記録はこの 1 例のみと思われるが，この当時 (約 50 年前) には他に 2 例採集例があると聞いている (いずれも 9～10 月にかけての採集例)．近年になってまったく採れた話を聞かなかったが，ここ数年，日影沢入口付近のモミで，多数の本種の食跡・飛孔が確認されている．現在でも確実に生息していると思われるので，9 月中旬～10 月上旬頃にモミの立木や倒木，周囲の花上には注目する必要がある．本種の記録をたどると，中山帯では 7～8 月の採集例が多く，標高が低い所ほど 9～10 月の秋期の採集例が多いような気がする．

62. トラフカミキリ　*X. chinensis* (CHEVROLAT)

7～8 月．クワの生木に見られる．1 ex., 31. VII. 1958, K. KIMURA leg.

63. ニイジマトラカミキリ *X. emaciatus* BATES

7 月．景信山方面で採集されている．1♀, 25. VII. 1975, H. HIRAYAMA leg.

64. ブドウトラカミキリ *X. pyrrhoderus* BATES

8 月上旬．小仏，景信山方面で採集されている．

65. クリストフコトラカミキリ *Plagionotus christophi* (KRAATZ)

4～6 月．1984～1985 年に込縄林道でコナラの新しい伐採木から多数採集された．込縄以外での記録はない．14♂♂ 15♀♀, 1. V. 1985, H. FUJITA leg.

66. ヤマトシロオビトラカミキリ *Kazuoclytus lautoides* (HAYASHI)

4 月下旬～5 月上旬はヤマザクラ・カエデの花上に，5 月中～下旬はコゴメウツギの花上に見られる．花に飛来する時間は午前 9 時から 11 時半頃までで，その後は急速に減少してほとんど飛来しなくなる．幼虫はモミの枯れ枝を食べるので，秋～冬に食跡のある枯れ枝を持ち帰ると春に成虫が出てくる．1 月の採集例 (庄田, 1970)[23] があるので成虫越冬と思われる．ケーブルカー清滝駅付近，稲荷コース，日影沢入口付近，小仏 (断食道場) など，採集されている所は局地的．1 ex., 29. IV. 1966, M. TAKAKUWA leg.

67. シラケトラカミキリ *Clytus melaenus* BATES

5～7 月．コゴメウツギ，ガマズミなどの花上に見られる．1 ex., 28. V. 1966, M. TAKAKUWA leg.

68. キンケトラカミキリ *C. auripilis* BATES

4～6 月．カエデ，ミズキ，コゴメウツギ，ガマズミなどの花上，ケヤキの倒木にいるものが採集される．主な食樹はケヤキだが，ツルウメモドキ，アブラチャンからも羽化した記録がある．17 exs., 19. IV. 1969, M. KUBOKI leg. (ケヤキの材中より)

69. アカネトラカミキリ *Brachyclytus singularis* KRAATZ

4～5 月．カエデ，ニワトコなどの花上，ブドウの枯れづるに見られる．1 ex., 29. IV. 1966, M. TAKAKUWA leg.

70. キスジトラカミキリ *Cyrtoclytus caproides* (BATES)

5～8 月．ミズキ，ガマズミ，クリなどの花上に見られる．1 ex., 23. VI. 1968, M. MIYAHARA leg.

71. ヨコヤマトラカミキリ *Epiclytus yokoyamai* (KANO)

4～5 月．ヤマブキ，カエデ，コゴメウツギ，ミズキなどの花上，クリの枯れ枝などに見られるが少ない．ケーブルカー清滝駅付近，稲荷山コース，ケーブルカー高尾駅付近，4 号研究路，込縄，蛇滝入口，小仏 (断食道場)，御衣霊園などで採集例がある．1♀, 28. IV. 1957, S. TSUYUKI leg.

72. エグリトラカミキリ *Chlorophorus japonicus* (CHEVROLAT)

4～7 月．ガマズミ，クリなどの花上に見られる．1♀, 17. IV. 1974, H. HIRAYAMA leg.

73. クロトラカミキリ *C. diadema* (MOTSCHULSKY)

6～7 月．薪や花上で採集されるが少ない．1 ex., 30. VI. 1967, K. KUME leg.

74. タケトラカミキリ *C. annularis* (FABRICIUS)

7 月．裏高尾方面で採集されている．

75. ホソトラカミキリ *Rhaphuma xenisca* (BATES)

6～7 月．クリなどの花上に見られる．キブシ，クルミ，スギからの羽化例がある．燈火．1 ex., 23. VI. 1968, M. MIYAHARA leg.

76. ヒメクロトラカミキリ *R. diminuta* (BATES)

4～5 月．カエデ，コゴメウツギなどの花上に見られる．1 ex., 29. IV. 1969, H. Ebihara leg.

77. キイロトラカミキリ　*Demonax* (*Grammographus*) *notabilis* (Pascoe)

5～7 月．クリの花上，ケヤキの枯れ枝や各種の薪上に見られる．1 ex., 16. VI. 1984, S. Tsuyuki leg.

78. トゲヒゲトラカミキリ　*Demonax* (*Demonax*) *transilis* Bates

4～6 月．カエデ，コゴメウツギなどの花上に見られる．スギの倒木への産卵例がある．1 ex., 25. V. 1968, M. Miyahara leg.

79. シロトラカミキリ　*Paraclytus excultus* Bates

4～6 月．カエデ，コゴメウツギ，クリなどの花上に見られる．燈火．1 ex., 23. V. 1971, H. Fujita leg.

80. アカジマトラカミキリ　*Akajimatora bella* (Matsumura et Matsushita)

9～10 月．ケヤキの枯れ枝を持ち帰って羽化させた例が多いが，野外でも葉上に止まっていたもの，飛翔中のもの，燈火へ来たものなどが採集されている．1 ex., 17. IX. 1969, Ohtsubo leg.

81. トガリバアカネトラカミキリ　*Anaglyptus niponensis* Bates

4～6 月．カエデ，コゴメウツギの花上に多い．コナラ，ツルウメモドキからの羽化例がある．1 ex., 25. V. 1968, M. Miyahara leg.

82. マツシタトラカミキリ　*A. matsushitai* Hayashi

5～6 月．コゴメウツギ，ミズキ，コバノガマズミなどの花上に見られる．1♀, 18. V. 1958, K. Kimura leg.

83. ホタルカミキリ　*Dere thoracica* White

4～6 月．カエデ，コゴメウツギ，クリなどの花上に見られる．コナラ，クヌギなどの薪にも多い．1 ex., 5. VI. 1968, M. Miyahara leg.

84. ヘリグロベニカミキリ　*Purpuricenus* (*Sternoplistes*) *spectabilis* Motschulsky

4～6 月．カエデ，クリなどの花上に見られる．センノキの枯れ枝から羽化した例がある．1♂, 30. V. 1975, H. Hirayama leg.

85. ベニカミキリ　*P.* (*S.*) *temminkii* (Guérin-Méneville)

5～6 月．クリなどの花上やタケに見られる．5 月上旬に，旧甲州街道方面などの小さなタケ林に入ると，青緑色のタケの幹を紅色の本種が這いまわっている様子を見ることができるが，色彩の対照が鮮やかで美しい．1♀, 28. VI. 1970, H. Fujita leg.

86. シロオビゴマフカミキリ　*Falsomesosella* (*Falsomesosella*) *gracilior* (Bates)

5～7 月．ヌルデ，クリなどの枯れ枝に見られる．アブラチャン，ツルウメモドキ，クワからの羽化例がある．1 ex., 25. V. 1968, M. Miyahara leg.

87. ヨツボシシロオビゴマフカミキリ　*Mesosa* (*Mesosa*) *mediofasciata* Breuning

4～7 月．モミの倒木上で採集されるが，太い幹から出ている直径 4～5 cm の枝の，つけ根の部分に止まっていることが多いという．筆者は残念ながらまだ本種を採集したことがないが，採集した人の話では，静止している時の本種は樹皮や木の凹凸と非常にまぎらわしく，かなり注意していても見逃すことがあるらしい．夜間にモミの倒木上で採集された例もあり，*Mesosa* 属は夜間に活動する種が多いことから，本種も夜間に樹上を這いまわり，昼間はほとんど静止しているのかもしれない．1960 年代中頃には，稲荷コースの右側斜面に本種の発生していた巨大なモミ倒木があり，この木で採集したという人が多いが，最近はまとまって採れたという話を聞かない．しかし，日影沢方面などにもモミの大きな倒木が少なくないので，4～6 月頃にこれらの木をじっくり腰をおちつけて眺めれば採集でき

るものと思う．

本種は紀伊半島では秋口に新鮮な個体が採集されるという．高尾山でも持ち帰ったモミの枯れ枝から8月4日に1♂が羽化した例があり(一般に枯れ枝を採集して飼育した場合，野外よりも早く羽化脱出する傾向にあるので，この個体は野外ならもっと遅く出たと考えられる)，さらに4月中旬に本種が野外で採集された例もある．これらの例を考えると，本種はコブヤハズカミキリ類などのように秋口に羽化脱出し，野外で成虫越冬をしてから，春～初夏に活動をしている可能性もあり得る (*Mesosa* 属で野外成虫越冬する種としてはタテスジゴマフカミキリが知られている)．

5 exs., 3. VI. 1967, M. TAKAKUWA leg.

88. ゴマフカミキリ *Mesosa* (*Mesosa*) *myops* (DALMAN)

5～8月．各種広葉樹の薪，枯れ枝に多い．1♀, 4. VI. 1967, H. EBIHARA leg.

89. カタジロゴマフカミキリ *Mesosa* (*Perimesosa*) *hirsuta* BATES

6～8月．各種広葉樹の薪，枯れ枝に多い．燈火にもよく飛来する．1♀, 11. VIII. 1963, H. EBIHARA leg.

90. ナガゴマフカミキリ *Mesosa* (*Aphelocnemia*) *longipennis* BATES

6～8月．各種広葉樹の薪，枯れ枝に多い．ツルウメモドキからの羽化例がある．1 ex., 3. VI. 1967, M. TAKAKUWA leg.

91. タテスジゴマフカミキリ *M.* (*A.*) *senilis* BATES

5～7月．山頂周辺のイヌブナに見られる．1♀, 19. VII. 1969, K. KUME leg.

92. シナノクロフカミキリ *Asaperda agapanthina* BATES

4～7月．各種広葉樹の枯れ枝に多い．2♂♂, 4. VI. 1967, H. EBIHARA leg.

93. キクスイモドキカミキリ *A. rufipes* BATES

5～6月．コナラ，ブナなどの枯れ枝に見られる．1 ex., 16. VI. 1962, S. TSUYUKI leg.

94. カノコサビカミキリ *Apomecyna* (*Apomecyna*) *naevia* BATES

7～8月．八王子市から山麓部一帯にかけて採集されているが少ない．

95. コブスジサビカミキリ *Atimura japonica* BATES

5～6月．ヌルデの枯れ枝，枯れづるに見られる．1 ex., 29. IV. 1962, S. TSUYUKI leg.

96. クビジロカミキリ *Xylariopsis* (*Xylariopsis*) *mimica* BATES

6～7月．ツルウメモドキの枯れ枝に見られる．燈火．1 ex., 14. VI. 1958, M. SUZUKI leg.

97. ヒシカミキリ *Microlera ptinoides* BATES

4～6月．各種広葉樹の枯れ枝，特にクリの枯れ枝に多い．1 ex., 25. V. 1968, M. MIYAHARA leg.

98. クリチビカミキリ *Sybra* (*Microzotale*) *kuri* OHBAYASHI

4～7月．山麓部でクリの枯れ枝に見られる．5月中～下旬に多い．1 ex., 30. VI. 1966, K. KUME leg.

99. キボシチビカミキリ *Sybra* (*Sybra*) *flavomaculata* BREUNING

6～8月．山頂周辺のモミ枯れ枝に見られる．燈火．1 ex., 24. VIII. 1967, K. KUME leg.

100. シロオビチビカミキリ *Sybra* (*Sybrodiboma*) *subfasciata* (BATES)

5～8月．ミズキなどの枯れ枝に見られる．1 ex., 1. VIII. 1966, M. TAKAKUWA leg.

101. タテジマカミキリ *Aulaconotus pachypezoides* THOMSON

"1 ex., 12. VI. 1952, M. YAMAMOTO leg." (山本, 1953)[8] 本種の高尾山における記録はこの1例のみ．裏高尾(小仏)キャンプ場付近で，フジマメのビーティングにより得られた個体．

102. ハスオビヒゲナガカミキリ　*Cleptometopus bimaculatus* (BATES)

6～7 月．キイチゴ，ハナイカダ，ミズキの枯れ枝に見られる．1 ex., 17. VI. 1970, M. KUBOKI leg.

103. ドウボソカミキリ　*Pseudocalamobius japonicus* (BATES)

5～7 月．タマアジサイ，サワアジサイの枯れ枝に見られる．2 exs., 4. VI. 1967, H. EBIHARA leg.

104. ニイジマチビカミキリ　*Egesina* (*Niijimaia*) *bifasciana* (MATSUSHITA)

5～7 月．フジの枯れづるなどに見られる．1 ex., 14. VI. 1953, H. HATTORI leg.

105. アトジロサビカミキリ　*Pterolophia* (*Pterolophia*) *zonata* (BATES)

5～9 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．燈火．1 ex., 28. V. 1967, H. FUJITA leg.

106. クリサビカミキリ　*P.* (*P.*) *castaneivora* OHBAYASHI et HAYASHI

5～7 月．クリの枯れ枝に見られる．燈火．3 exs., 14. V. 1980, H. FUJITA leg.

107. ヒメナガサビカミキリ　*P.* (*P.*) *leiopodina* (BATES)

5～7 月．込縄などの山麓部に多い．2♂♂1♀, 1. VI. 1979, H. NAKABAYASHI leg.

108. エゾサビカミキリ　*P.* (*P.*) *tsurugiana* (MATSUSHITA)

6～7 月．ブナなど各種広葉樹の枯れ枝に見られる．2 exs., 9. VII. 1974, H. HIRAYAMA leg.

109. マルモンサビカミキリ　*P.* (*P.*) *angusta* (BATES)

6～8 月．ホウノキなど各種広葉樹の枯れ枝に見られる．1 ex., 28. VI. 1970, H. FUJITA leg.

110. アトモンサビカミキリ　*P.* (*P.*) *granulata* (MOTSCHULSKY)

4～7 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．1 ex., 30. IV. 1969, M. MIYAHARA leg.

111. トガリシロオビサビカミキリ　*P.* (*P.*) *caudata* (BATES)

5～8 月．フジの枯れづるなどに見られる．フジ，イチジク，ツルウメモドキからの羽化例がある．1 ex., 31. VII. 1971, H. FUJITA leg.

112. ナカジロサビカミキリ　*Pterolophia* (*Ale*) *jugosa* (BATES)

4～7 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．ブナからの羽化例がある．1♂, 17. IV. 1972, H. FUJITA leg.

113. ワモンサビカミキリ　*Pterolophia* (*Hylobrotus*) *annulata* (CHEVROLAT)

5～8 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．1 ex., 17. VII. 1969, H. FUJITA leg.

114. ハイイロヤハズカミキリ　*Niphona* (*Niphona*) *furcata* (BATES)

6～7 月．枯れたタケに見られる．1 ex., 15. VII. 1965, T. HANATANI leg.

115. イタヤカミキリ　*Mecynippus pubicornis* BATES

6 月．燈火に来たものなど 2 例のみ．高尾山では稀種．1♀, 18. VI. 1961, H. EBIHARA leg.

116. ヒゲナガカミキリ　*Monochamus* (*Monochamus*) *grandis* WATERHOUSE

6～9 月．燈火によく飛来する．夜間にモミの立木 (衰弱木) や倒木をよく這いまわっている．2♂♂3♀♀, 15. VII. 1962, H. EBIHARA leg.

117. マツノマダラカミキリ　*M.* (*M.*) *alternatus* HOPE

7～8 月．燈火に飛来する．1♂, 21. VII. 1970, H. FUJITA leg.

118. ヒメヒゲナガカミキリ　*M.* (*M.*) *subfasciatus* (BATES)

5～7 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．クリ，ミズキからの羽化例がある．1♂, 22. VII. 1962, Y. TAKAHASHI leg.

119. ゴマダラカミキリ　*Anoplophora* (*Anoplophora*) *malasiaca* (THOMSON)

6～8 月．燈火に飛来する．1♀, 20. VII. 1952, H. MARUOKA leg.

120. センノキカミキリ *Acalolepta luxuriosa* (BATES)

7～8 月．燈火に飛来する．1♂, 21. VII. 1970, H. FUJITA leg.

121. ビロウドカミキリ *A. fraudatrix* (BATES)

6～8 月．夜間に各種広葉樹や針葉樹の倒木上に見られ，燈火にもよく飛来する．クルミからの羽化例がある．1♀, 27. VII. 1970, H. FUJITA leg.

122. チャイロヒゲビロウドカミキリ *A. kusamai* HAYASHI

6～7 月．薪などで採集されている．2 exs., 26. VI. 1962, K. KUME leg.

123. ニセビロウドカミキリ *A. sejuncta* (BATES)

6～8 月．燈火によく飛来する．夜間にモミの倒木に見られる．2♀♀, 3. VI. 1972, H. FUJITA leg.

124. ヒメビロウドカミキリ *A. degener* (BATES)

8 月．小仏～景信山方面で採集された 1 例があるのみ．1 ex., 4. VIII. 1957, 採集者不明

125. ヤハズカミキリ *Uraecha bimaculata* THOMSON

4～6 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．アブラチャンからの羽化例がある．1 ex., 18. VI. 1961 T. OKUMURA leg.

126. キボシカミキリ *Psacothea hilaris* (PASCOE)

7～10 月．クワの生木などに見られ，燈火にもよく飛来する．1♂, 20. VIII. 1975, H. HIRAYAMA leg.

127. ヨコヤマヒゲナガカミキリ *Dolichoprosopus yokoyamai* (GRESSITT)

7～9 月．ケーブルカー高尾駅周辺の燈火に飛来する．2♂♂, 13. VIII. 1962, Y. TAKAHASHI leg.

128. チャボヒゲナガカミキリ *Xenicotela pardalina* (BATES)

5～7 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．ミズキ，イチジクからの羽化例がある．燈火．1♂, 14. VI. 1958, K. KIMURA leg.

129. クワカミキリ *Apriona japonica* THOMSON

7～8 月．燈火に飛来する．2 exs., 2. VII. 1961, H. MARUOKA leg.

130. シロスジカミキリ *Batocera lineolata* CHEVROLAT

6～8 月．クヌギ，コナラなどの生木に見られ，燈火にも飛来する．2♀♀, 13. VII. 1963, H. EBIHARA leg.

131. ヒゲナガゴマフカミキリ *Palimna liturata* (BATES)

7～8 月．ブナの生木に見られ，燈火に来た例もあるが高尾山では稀種．1♂, 11. VIII. 1963, H. EBIHARA leg.

132. セミスジコブヒゲカミキリ *Rhodopina lewisii* (BATES)

5～6 月．クリ，ミズナラ，コナラ，ナラ，モミなどの枯れ枝，薪に見られる．燈火．3 exs., 30. VI. 1963, K. KUME leg.

133. フタモンアラゲカミキリ *Rhopaloscelis maculatus* BATES

6～8 月．ミズキ，コナラなどの枯れ枝に見られる．8 exs., 25. V. 1975, H. HIRAYAMA leg.

134. フタオビアラゲカミキリ *R. bifasciatus* KRAATZ

6～8 月．ミズキ，キブシなど各種広葉樹の枯れ枝に見られる．1 ex., 26. V. 1967, S. TSUYUKI leg.

135. ヒトオビアラゲカミキリ *R. unifasciatus* BLESSIG

4～7 月．ヌルデなどの枯れ枝に見られる．1♂1♀, 26. V. 1971, H. FUJITA leg.

136. カッコウカミキリ *Miccolamia cleroides* BATES

4～6 月．春先，各種広葉樹の枯れ枝に見られる．1 ex., 19. IV. 1969, M. KUBOKI leg.

137. チビコブカミキリ　*M. verrucosa* BATES

4～5 月．春先，ミズキなど各種広葉樹の枯れ枝に見られる．2 exs., 22. IV. 1968, K. SAKAI leg.

138. ホソヒゲケブカカミキリ　*Eupogoniopsis tenuicornis* (BATES)

6～7 月．キブシからの羽化例がある．燈火．1♂1♀, 13. III. 1973 (キブシの枯れ枝採集)～30. IV. 1973 (羽化), T. SHIMOMURA leg.

139. ドイカミキリ　*Mimectatina divaricata* (BATES)

4～5 月．ニワトコ，ミズキ，オニグルミ，キリなどの枯れ枝に見られる．1 ex., 29. IV. 1954, S. TSUYUKI leg.

140. イボタサビカミキリ　*Sophronica obrioides* (BATES)

6～8 月．燈火に飛来する．テイカカズラからの羽化例がある．1 ex., 28. VI. 1970, M. KUBOKI leg.

141. ネジロカミキリ　*Pogonocherus* (*Eupogonocherus*) *seminiveus* BATES

5 月．タラノキの枯れ枝に見られるが，高尾山での採集例は少ない．3 exs., 14. V. 1961, H. MARUOKA leg.

142. スジマダラモモブトカミキリ　*Acanthocinus griseus* (FABRICIUS)

6～8 月．燈火によく飛来する．夜間，モミの倒木に多数這いまわっている．2♂♂, 27. VII. 1969, H. FUJITA leg.

143. ナカバヤシモモブトカミキリ　*Leiopus guttatus* BATES

6～7 月．燈火に飛来する．1 ex., 27. VI. 1970, M. KUBOKI leg.

144. ゴマダラモモブトカミキリ　*L. stillatus* (BATES)

6～7 月．ブナの枯れ枝などに見られる．1 ex., 15. VI. 1969, M. ITO leg.

145. トゲバカミキリ　*Rondibilis* (*Eryssamena*) *saperdina* (BATES)

7～8 月．コナラなど各種広葉樹の枯れ枝に見られる．1 ex., 1. VIII. 1966, M. TAKAKUWA leg.

146. ホウノキトゲバカミキリ　*Rondibilis* (*Rondibilis*) *sapporensis* (MATSUSHITA)

5～7 月．ホウノキの枯れ枝に見られる．7 exs., 31. V. 1967 (ホウノキの枯れ枝採集) ～19. VII. 1967 (羽化), K. KIMURA leg.

147. キッコウモンケシカミキリ　*Exocentrus testudineus* MATSUSHITA

5～8 月．ミズキ，ブナなどの枯れ枝，フジの枯れづるなどに見られる．1♂, 4. VI. 1967, H. EBIHARA leg.

148. ガロアケシカミキリ　*E. galloisi* MATSUSHITA

6～7 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．燈火．1 ex., 3. VI. 1967, M. TAKAKUWA leg.

149. アトモンマルケシカミキリ　*E. lineatus* BATES

6～8 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．クリ，センノキからの羽化例がある．燈火．1 ex., 17. VII. 1969, H. FUJITA leg.

150. クモガタケシカミキリ　*E. fasciolatus* BATES

5～8 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．燈火．2 exs., 1. VIII. 1966, M. TAKAKUWA leg.

151. シロオビゴマフケシカミキリ　*E. guttulatus* BATES

6～8 月．各種広葉樹の枯れ枝に見られる．燈火．1♀, 8. VII. 1981, N. KOBAYASHI leg.

152. ケシカミキリ　*Sciades* (*Miaenia*) *tonsus* (BATES)

6～8 月．クリ，ミズキなどの枯れ枝に見られる．1 ex., 4. VI. 1962, S. TSUYUKI leg.

153. ルリカミキリ *Bacchisa* (*Bacchisa*) *fortunei* (THOMSON)

5～6月．ナシなどの葉上に見られる．1 ex., 22. VI. 1952, Y. YOSHIDA leg.

154. ムネモンヤツボシカミキリ *Saperda* (*Saperda*) *tetrastigma* BATES

6月．ゴトウヅルの生葉，枯れづるに見られ，燈火に来た例や飛翔中のものを採集した例もあるが稀．1978年に矢野立志氏がゴトウヅルの枯れづるから多数羽化させている．1 ex., 29. VI. 1974, K. KAWADA leg.

155. フチグロヤツボシカミキリ *Pareutetrapha eximia* (BATES)

5～6月．ホウノキの葉上や倒木上に見られる．山頂周辺で採集されているが，日影沢入口や御衣霊園など山麓部にもいる．1♂, 19. V. 1955, A. IBARAGI leg.

156. ヤツメカミキリ *Eutetrapha ocelota* (BATES)

4～8月．燈火によく飛来する．1♀, 25. VII. 1975, H. HIRAYAMA leg.

157. ハンノキカミキリ *Cagosima sanguinolenta* THOMSON

5～7月．飛翔中のものなどが採集されているが，高尾山での採集例は少ない．1♂, 30. V. 1962, Y. TAKAHASHI leg.

158. アサカミキリ *Thyestilla gebleri* (FALDERMANN)

7月．アザミの葉や茎にいるものが採集されていたが，最近の採集例を聞かない．周辺の扇山や相模湖方面でも採集されている．

159. ヒゲナガヒメルリカミキリ *Praolia citrinipes* BATES

6～7月．アブラチャンの葉上に見られる．4♂♂ 3♀♀, 25. VII. 1975, H. HIRAYAMA leg.

160. オニグルミノキモンカミキリ *Menesia flavotecta* HEYDEN

5～6月．オニグルミの葉上に見られる．燈火．2 exs., 10. V. 1969, M. KUBOKI leg.

161. シラホシカミキリ *Glenea* (*Glenea*) *relicta* PASCOE

5～7月．各種葉上に見られる．1 ex., 23. VI. 1968, M. MIYAHARA leg.

162. ニセシラホシカミキリ *Pareutetrapha simulans* (BATES)

6月．ヤブツバキの葉上に見られる．1 ex., 7. VI. 1970, M. KUBOKI leg.

163. シラホシキクスイカミキリ *Eumecocera gleneoides* (GRESSITT)

5～6月．つる性の枯れ枝にいたものと，ホウノキの葉上に止まっていたものが採集されているが，高尾山では稀な種らしく，この2例以外に採集例を聞かない．1♂, 18. VI. 1961, H. MARUOKA leg.; 1♂, 27. V. 1973, T. SHIMOMURA leg.

164. セミスジニセリンゴカミキリ *E. trivittata* (BREUNING)

5～7月．燈火によく飛来する．ツルウメモドキからの羽化例がある．1♀, 24. V. 1975, H. HIRAYAMA leg.

165. アオキクスイカミキリ *Phytoecia* (*Phytoecia*) *coeruleomicans* BREUNING

50年近く前に採集された1例のみ．本種は栃木県中禅寺産のタイプ標本の他に，東京都府中市(♂)，神奈川県中央林間(♀)，東京都小仏峠(♀)の各1例，計4頭が採集されているにすぎない．かつて小仏峠付近において，ヤマタバコ(キク科)から毎年のように見い出されていたという話があるが，未確認．1♀, 小仏峠, 11. VI. 1939, T. SUGIYAMA leg.

166. キクスイカミキリ *P.* (*P.*) *rufiventris* GAUTIER

5～6月．ヨモギ，ハルジョオンの葉上に見られる．1 ex., 9. V. 1971, H. FUJITA leg.

167. ヨツキボシカミキリ *Epiglenea comes* BATES

5～8 月．ヌルデの葉上に見られる．1 ex., 16. VI. 1963, H. EBIHARA leg.

168. ヘリグロリンゴカミキリ　*Nupserha marginella* (BATES)

6～7 月．草むらを飛翔中のものがよく採集される．1♀, 17. VII. 1969, H. FUJITA leg.

169. ヒメリンゴカミキリ　*Oberea hebescens* BATES

4～6 月．アブラチャンの葉上に見られる．1 ex., 1. V. 1958, Y. YOSHIDA leg.

170. リンゴカミキリ　*O. japonica* (THUNBERG)

5～6 月．飛翔中のものが採集されている．1 ex., 11. VI. 1967, M. OBIKA leg.

171. ニセリンゴカミキリ　*O. mixta* BATES

5～6 月．スイカズラなどの葉上に見られる．3 exs., 15. VI. 1969, M. ITO leg.

172. ホソキリンゴカミキリ　*O. inclusa* PASCOE

5～7 月．飛翔中のものが採集されている．1♂, 24. VI. 1951, Y. YOSHIDA leg.

173. ホソリンゴカミキリ　*O. nigriventris* BATES

6～7 月．景信山周辺の草むらでよく採集される．クリの花上でも採集されている．1 ex., 16. VII. 1962, T. OKUMURA leg.

不明種および疑問種など

次の各種は文献上高尾山から記録されているか，あるいは採集例を聞いた種であるが，今回の高尾山周辺産カミキリリストに入れることを保留した種である．以下に述べるように，その後の調査で明らかに分布していないことが判明した種と，将来分布が確認される可能性がある種に分けられる．

a. ナガバヒメハナカミキリ　*Pidonia* (*Pidonia*) *signifera* (BATES)

草間 (1966)[14] の表によれば高尾山に産することになっている．

b. チャイロヒメハナカミキリ　*Pidonia* (*Mumon*) *aegrota aegrota* (BATES)

草間 (1966)[14] の表によれば高尾山に産することになっている．

上記 2 種は比較的標高の低い山地でも採集されることがあり，高尾山にも分布していそうな種であるが，過去何 10 年かにわたり非常に多くのカミキリ屋が訪れているのにかかわらず，上記のリスト以外にはまったく採集例を聞かない．草間 (1966) のリストにはナガバヒメハナは“やや少ない”，チャイロヒメハナは“普通”とあるが，他産地の例から考えれば，この両種は産するとすれば春先にカエデやコゴメウツギなどの花から普通に見つかるはずである．高尾山のこれらの花は，訪れる人が多いために全国でももっとも多くのカミキリ屋がすくっているにもかかわらず，両種は 1 頭も採集されていない．産しないとは言いきれないが，少なくとも“普通”にいるとは以上のことから考え難い．今回，草間先生にお問い合わせしたところ，両種とも高尾山のラベルが付いた標本がないとのことなので，新たな採集例が出るまでは保留することにした．

c. ミワヒメハナカミキリ　*Pidonia* (*Cryptopidnnia*) *miwai* (MATSUSHITA)

ミワヒメハナカミキリとして寄せられたデータが若干あるが，いずれもセスジヒメハナカミキリか，あるいはコトヒメハナカミキリの誤りと思われる．

d. テツイロヒメカミキリ　*Ceresium sinicum* WHITE

かつて海老原裕之氏から寄せられたデータの中に“*Ceresium* sp. (テツイロヒメ?), 1 ex., 16. VI. 1963”という例があり，高尾山の採集例は他にないので確認のためにお問い合わせしたところ，標本がなく，25 年近く前のことなので記憶も定かでないとのことであった．同氏と相談の結果，今回は一応リストから除外することにしたが，周囲の分布から考えれば産する可能性は高い．

e. カエデヒゲナガコバネカミキリ *Molorchus ishiharai* OHBAYASHI

「新しい昆虫採集」(上) (1958)[6] の高尾山の採集案内中に，カエデの花から本種が採れるとあるが，この記述はコボトケヒゲナガコバネカミキリが記載 (大林，1963) される以前のものであるため，近似の本種と混同されていたものであろう．本種は高桑 (1978) にもあるように関東地方を飛び越して分布している種で，関東地方からの確実な採集例はない．

f. キジマトラカミキリ *Xylotrechus zebratus* MATSUSHITA

「新しい昆虫採集」(下) (1959)[7] の“日本産カミキリ類の生態と採集法一覧表”の中では高尾山に産することになっているが，本種は高標高地のトウヒ～コメツガ帯に分布する種で，高尾山のような低山に産する例は他にない．高尾山産の標本も現存していないようなので，新たな採集例が出るまでは保留することにした．

g. ズマルトラカミキリ *X. lautus* (MATSUSHITA)

長尾 (1970)[21] による元八王子町からの採集例があるが，この記録に使用された個体はヒメクロトラカミキリであった．本種は中部以南に分布する種で，関東地方における確実な記録はまだない．

h. フタオビミドリトラカミキリ *Chlorophorus muscosus* (BATES)

採集されたという話は聞かれたが，標本が確認できなかったので保留した．武蔵野市あたりまでは採集例があるので，高尾山にも分布している可能性はある．

i. クロキクスイカミキリ *Stenostela nigerrima* (BREUNING)

「日本産カミキリ大図鑑」(1984)[42] で指摘されているように，本種の小仏峠における記録はアオキクスイカミキリの誤りであった．

この他にも，ピックニセハムシハナ，キイロメダカ，マルクビケマダラ，ソボリンゴなどが採れたという噂を聞いたが，いずれも確認できなかった．

これら以外にも分布していそうで欠けている種はいくつかあり，例えばケブカヒラタ，アカアシオオアオ，トウキョウトラ，ヨスジトラ，スギノアカネトラ，ホシベニ，イッシキキモンなどは将来高尾山から発見されるかもしれない．今回，173 種のリストを掲げたが，実際には 180 種前後が産するものと推測される．

おわりに

高尾山およびその周辺は，1967 年 (昭和 42 年) 12 月 11 日に明治 100 年を記念して“明治の森・高尾国定公園”に指定された．これにともなって，登山道などに“植物や動物，昆虫を採らないように‥‥”と書かれた立看板が置かれるようになり，高尾本山を訪れる虫屋はめっきり少なくなった．

しかし，今回のリストを作成するにあたって詳しく調べたところ，高尾山の国定公園内には特別保護地区はまったくないことがわかった．国立公園や国定公園の中は「普通地域」と「特別地域」，さらに「特別保護地区」に分けられているが，自然公園法によれば昆虫採集が規制を受けるのは最後の特別保護地区に限られている．高尾山国定公園内の区分は図 7 のとおりで，全域が特別地域 (第 1 種から第 3 種に分けられ，植物などの採集には規制がある) になっているが，特別保護地区はどこにもない (特別保護地区は枯れ葉や枯れ枝すら持ち帰ることができないほど厳格なものなので，観光施設を作りまくっている高尾山に指定されている訳がないが‥‥)．また，国の公園指定とは別に，八王子市の条例として動植物の採集が規制されているという噂も聞いたので，八王子市教育委員会の文化財保護課および公園課に問い合わせたところ，そのような条例はないとの返事であった．

したがって，高尾山で昆虫採集を行った場合，一般の観光客などに注意 (?) を受けたりして不愉快

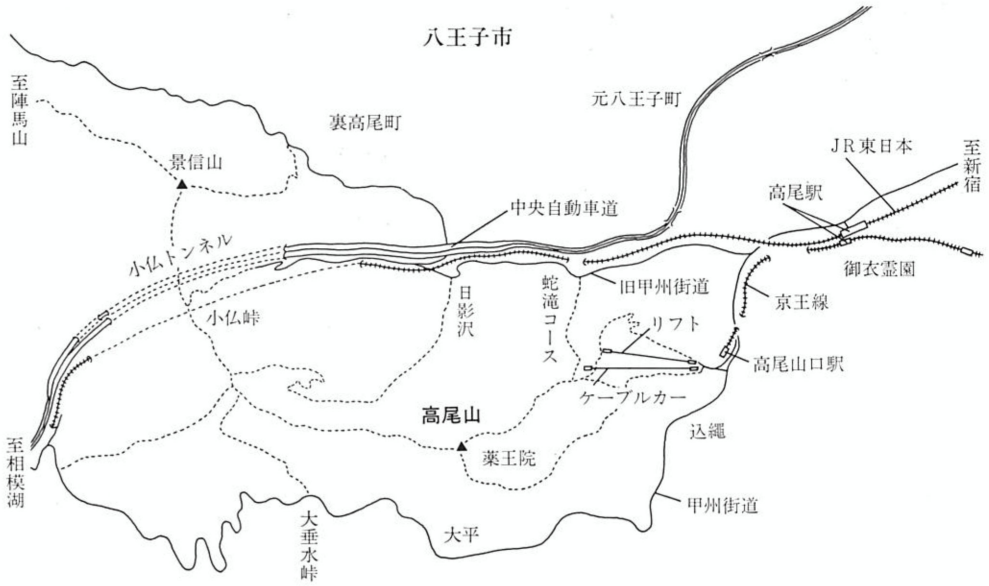


図 6. 高尾山およびその周辺の概念図.

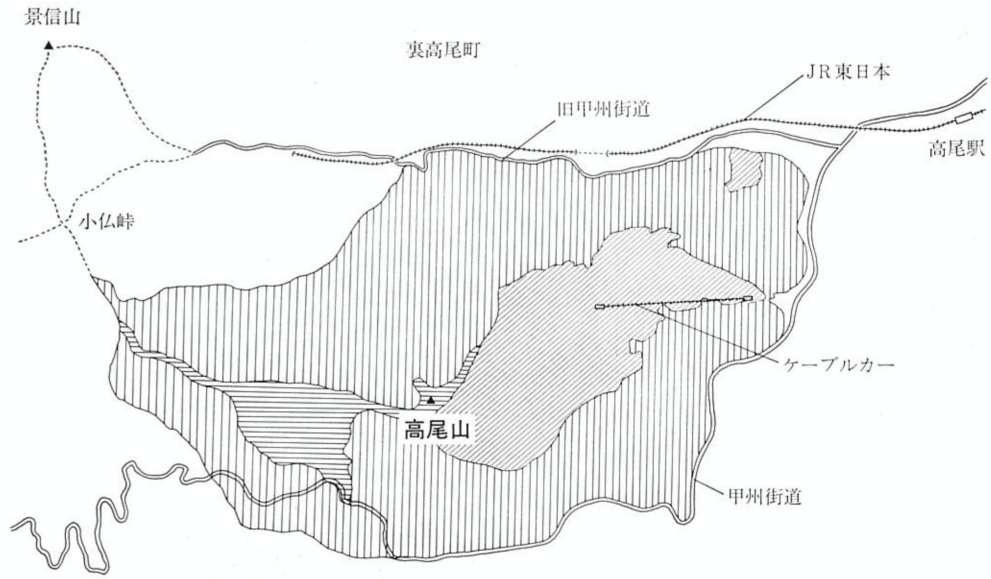


図 7. 高尾山国定公園の特別地域区分図: ////// 第 1 種特別地域, ≡≡≡ 第 2 種特別地域, |||||| 第 3 種特別地域. (この地図は東京都建設局公園緑地部に保管されている資料をもとに作成したもの. 1967 年以前の古い地図を使用しているため, リフトも京王線高尾山口駅も中央自動車道もなく, 原図では高尾駅もまだ浅川駅となっている).

な目に会うことがあるかもしれないが，法的な規制は何もない訳だから，採集に関してとやかく言うことは筋違いの根拠のない行為であろう．

そもそも昆虫採集を短絡的に自然破壊と結びつける現在の一部の自然保護運動家 (?) には困ったものである．筆者も以前に高尾山で日本野鳥の会の団体とだいぶ口論したことがあったが，「鳥をやっている者は皆観察をしているのだから，虫も観察するだけにとどめるように‥‥」と言う．鳥と昆虫を同一次元で論じる非科学性には恐れいるが，こういった手合いは，自然保護という精神的なことと，生物の調査や研究，保護という現実的に処理しなければならないことの違いも，鳥と昆虫の違いがわからないのと同様に頭の中で整理されておらず，話をしても疲れるだけのことが多い．

高尾山に産するとしてあげた 173 種のカミキリのうち，採集によっていなくなった，あるいは個体数が減少した種が 1 種でもあるだろうか？ 1 種もないのである．173 種のうち，現在はもしかしたらいなくなっているかもしれない (ここ 10 数年以上採集例がない) 種に，ヒメビロウド，アサ，アオキクスイの 3 種があげられるが，これらはいずれも草を食う草原性のカミキリで，草原の状態が変わればすぐいなくなる，環境の変化にもっとも打撃を受けやすい種である．リストにも触れてあるように，ヒメビロウドは 30 年以上前に，アオキクスイは 50 年近く前にいずれもただ 1 頭ずつが採集されているだけである．アサについても，今回確実な採集データを入手できなかったほどで，筆者は高尾山そのもので得られた標本を見たことがない．虫を 1〜数頭採ったからといって絶滅する訳はないから，以上の 3 種がもし高尾山からいなくなっていたとしても，その原因が採集でないことは明白である．

高尾山の昆虫が減っているのは，住宅地の増加，観光開発，そして中央自動車道ができたことが原因であるのに，その責任の一端を昆虫採集に押しつけようというのは，一部の自然保護運動家 (?) の無知や行政側の自然保護指導の怠慢をごまかす一手段からきていることで，責任転嫁もはなはだしい．

今回作った 173 種のリストは，主に関東地方に在住しているアマチュアのカミキリ屋諸氏の過去数 10 年に及ぶ実績をまとめたものであるが，これだけのリストをこれらの人々の力ぬきに作ることは，どんなアセス会社にも，また専門の学者にも不可能であり，アマチュアの長い採集の積み重ねがあって初めて作り得る内容のものである．採集者がいなければ，高尾山にどんな虫がどのようにいるのか，いったい誰が調べるというのだろうか．

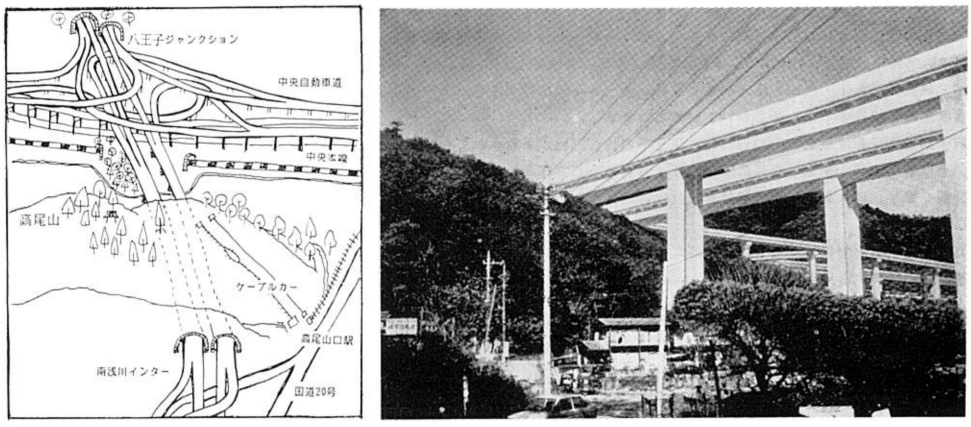


図 8. 左: 圏央道の建設予定図 (“圏央道のアセス案に対する意見書提出についての御願い” より引用) 右: 裏高尾ジャンクション付近の橋梁予想図 (建設省アセス案より引用).

今，高尾山は中央自動車道に続いて，大きな開発の危機に面している．1985年あたりから騒がれている圏央道（首都圏中央連絡道路）の建設事業がそれで，圏央道と中央自動車道を結んで相互に乗り入れ可能にするため，裏高尾から南浅川にかけて，ちょうどケーブルカーやリフトの下あたりをぶちぬく感じで大きなトンネルを作り，蛇滝近くには敷地面積だけでも 16 ヘクタール（後楽園球場の 4 倍くらいの大きさ）の巨大なジャンクションが作られるという．

1986 年 7 月に建設省から環境影響評価書（アセス）案が出されたが，地元住民や自然保護団体の猛烈な反対に会って一時停滞しているようである．筆者もこのアセス案のコピーを読んだが，カミキリは 24 種（内訳はミヤマ，ゴマダラ，シロスジ，リンゴ，ヒメリンゴ，ハイイロヤハズ，ニイジマトラ，キイロトラ，ビロウド，ベニ，キボシ，ヨスジハナ，ヨコヤマトラ，オオハナ，オオクロ，ヒシ，アカジマトラ，ヒラヤマコブハナ，コボトケヒゲナガコバネ，コジマヒゲナガコバネ，キバネニセハムシハナ，ヒコヤマヒゲナガ（ヨコヤマヒゲナガ?），ハイイロ（ニセハイイロハナ?））しか記録されておらず，その中になぜかオオハナやオオクロなどの高尾山では数頭しか採れていない種が入っている．参考文献の欄に「月刊むし」などがあげられているので，おそらく同誌の短報などをつなぎ合わせて作った間に合わせのリストであろう．高尾山は，6～7 月の好シーズンには 1 日で 50 種近いカミキリを採ることも可能な山であるのに，24 種とは‥‥．どんな“調査”をしたのか目に見えるようである．一番心配されるのは，トンネルが豊富な地下の水脈を壊し，高尾山が“乾いた山”になって，植物が弱ったり枯れたりして貧弱化し，それに対応して虫もいなくなることであるが，いずれにしても圏央道ができれば高尾山の自然は大幅に失なわれるだろう．

圏央道建設にからめて，周辺地域の開発の動きも活発化している．例えば，春先にヒラヤマコブハナを採りに来る人が多いことで有名な込縄一帯は，圏央道ができて地価があがることをみこして，熊谷組などの企業がすでにほとんどの土地を買い占めたと言われている．圏央道ができれば周辺の開発規制もゆるむので，この一帯の山をつぶして団地にする計画らしい．高尾周辺は JR 東日本と京王線が乗り入れているため，駅から近い所の地価は都会並みである．込縄は高尾山口駅から歩いて 10～15 分，高尾山口駅から新宿まで快速特急でわずか 45 分という便利さなので，団地作りなどには有望な土地となろう．何の変哲もなかったひなびた込縄の林道が，3～4 年前から急に伐採されだしたのは多くの虫屋が知るところである．コナラの林がバサバサと切り開かれたために，突然高尾初記録のクリストフコトラ（コナラを食樹としている）が見つかりだした．込縄のハゲ山化は年々進んでいるが，この背景には以上のような一連の事情が関係していると思われる．

「高尾山でクリストフコトラが採れた!」と喜んでばかりいられない．込縄の山そのものがなくなる前の，カミキリ屋への最後のプレゼントかもしれないのだ．

参考文献（都合により年代順とした．また［ ］内に簡単な内容紹介を記した）

1. 神谷一男・大林一夫，1937．日本の天牛（二）．日本の甲蟲，**1**(2): 89-95.［オオトラカミキリの解説中に，高尾山で 1932 年 9 月 25 日に飯田俊武氏によって採集された 1♀ が記録されている］
2. 青木淳一，1950．異常型 3 題．新昆虫，**3**(10): 12.［1949 年 8 月 4 日に高尾山で採集したオオヨツスジハナカミキリの黒化型を報告］
3. 山本光人，1953．表紙写真（タテジマカミキリ）．*Insects Magazine*, (20).［表紙写真にタテジマカミキリの写真があり，表紙裏の説明文に高尾山で採集された標本である旨が記されている］
4. 藤村俊彦，1957．邦産ヤツボシハナカミキリの変異について．新昆虫，**10**(3): 12-20.［日本産のヤツボシハナカミキリの変異を詳しく検討した中で，f. *modicenotata* の図に高尾山産を使用している］
5. 福井勇三郎，1957．甲虫の分布 2 題．新昆虫，**10**(12): 30.［1956 年 5 月 4 日に高尾山麓でケヤ

キの枯れ枝に静止していたキンケトラカミキリを採集したことを報告]
6. 京浜昆虫同好会編，1958. 高尾山. 新しい昆虫採集 (上), pp. 170–174. 内田老鶴圃新社，東京. [5 ページにわたる高尾山の紹介の中にカミキリを扱った部分が多く見られる]
7. 草間慶一，1959. 日本産カミキリ類の生態と採集法一覧表. 新しい昆虫採集 (下)，内田老鶴圃新社，東京. [一覧表の備考の中に稀種の産地として高尾山が多くあげられている]
8. 丸岡 宏，1961. 高尾山のカミキリ. *Insect Magazine*, (53): 17–23. [高尾山のカミキリについて季節を追って随筆風に紹介. 冒頭に同山には 160 余種のカミキリが産すると書かれている]
9. 露木繁雄，1962. 1961 年のカミキリ採集記録. *Insect Magazine*, (54): 26–31. [高尾山におけるタカオメダカとヤマトシロオビトラの採集例，生態に関する報告がある]
10. 近藤茂昭，1963. 高尾山での燈火飛来のハナカミキリ. *Insect Magazine*, (59): 43. [ヨツスジハナ (1 頭), オオヒメハナ (13 頭), フタオビノミハナ (2 頭) の燈火飛来例を報告]
11. 奥村 尚，1964. 高尾山のカミキリについて. *Insect Magazine*, (61): 25–26. [カッコウメダカ，ヤマトシロオビトラ，キボシチビ，ヨツボシシロオビゴマフ，イボタサビ，ツシマムナクボ，キマダラの 7 種についての生態を報告]
12. 奥村 尚，1965. フジを食する天牛について. *Insect Magazine*, (65): 6–9. [フジを食樹とするカミキリを 10 種報告した中に，高尾山のフジから羽化したケシカミキリの記録がある]
13. 皆川 望，1966. カミキリムシ 4 稀種の採集記録. *Insect Magazine*, (67): 63–64. [1965 年 9 月 12 日，裏高尾で中央線の線路上を飛んでいたアカジマトラカミキリの採集例がある]
14. 草間慶一，1966. *Pidonia* の分布. インセクトジャーナル, (2): 45–52. [p. 49 の第 4 表によると，高尾山にはナガバヒメハナが“やや少なく”，チャイロヒメハナが“普通”に産することになっている. しかし，この 2 種の高尾山における記録はこの表以外にはまったくない]
15. 福井勇三郎，1967. 高尾山産カミキリ数種. *Insect Magazine*, (69): 70–71. [ニッポンハイイロハナ，ヒラヤマコブハナ，ベニバハナ，キンケトラ，シラケトラ，ヤマトシロオビトラ，セミスジコブヒゲ，ヨコヤマヒゲナガの 8 種の採集例を記録]
16. 福井勇三郎，1967. 東京都内のヒシカミキリ. 昆虫と自然, **2**(6): 36. [高尾山の採集例を記録]
17. 衣笠恵士，1968. 春さきとれるカミキリ. 昆虫と自然, **3**(4): 11–13. [高尾山・奥多摩などを中心に，カエデの花での採集や幼虫 (材) 採集法を紹介]
18. 京浜昆虫同好会カミキリグループ，1968. カミキリの面白い記録 (2). *Insect Magazine*, (73): 57–64. [グループによる執筆の中で，18. に丸岡宏氏は高尾山のツルウメモドキ材中からキンケトラカミキリを採集したことを記録し，19. の松本忠之氏は高尾山から持ち帰ったケヤキの枯れ枝からアカジマトラカミキリが 11 頭羽化したことを記録. 21. の郡山信夫氏は高尾山における 5 月下旬～6 月上旬のヨツボシシロオビゴマフの採集例を記録するとともに，春先に持ち帰ったモミの枯れ枝から 8 月 4 日に同種が 1♂ 羽化したことを報告. 27. の木村欣二氏は高尾山から持ち帰ったアブラチャンの枯れ枝からヒゲナガヒメルリカミキリが羽化したことを記録]
19. 関根浩次，1969. フタコブルリハナカミキリの記録. はばたき, (92): 22. [裏高尾におけるフタコブルリハナ，シラケトラの採集例]
20. 須田孫七，1969. アカジマトラカミキリ東京都高尾山で採集. 昆虫と自然, **4**(9): 30. [1968 年 10 月 6 日，日影沢で葉上に止まっていた 1♂ の採集例]
21. 長尾 悟，1970. ヅマルトラカミキリ羽化の記録. 昆虫と自然, **5**(3): 12. [元八王子町から持ち帰ったサクラの枯れ枝から 1 頭羽化したことを報告]
22. 森祐二郎，1970. 東京都高尾山でヨコヤマヒゲナガカミキリ採集. 昆虫と自然, **5**(3): 17. [2♂♂ の採集例]
23. 庄田達巳，1970. オサ掘りで採れたヤマトシロオビトラカミキリ. 昆虫と自然, **5**(8): 32. [ケーブルカー上駅付近のモンキーパラダイス南側で，1970 年 1 月 15 日にオサ掘りをした折，こぼれる土に混って 1♀ が落ちてきたことを報告]
24. 小坂 隆，1970. 高尾山で採った甲虫数種. 昆虫と自然, **5**(8): 33. [カミキリでは，ヒラヤマコブハナ，ヒシなどを記録]
25. 丸岡 宏，1970. 高尾山でビャクシンカミキリを採る. *Insect Magazine*, (75): 24. [高尾山における同種の唯一の記録]
26. 酒井 香，1970. オオハナカミキリ高尾山で採集される. *Insect Magazine*, (75): 24. [同種の高

尾山における初記録]
27. 山口就平, 1970. 高尾の甲虫3種. はばたき, (97): 33. [カミキリでは, クビジロ, マルクビヒラタを記録. 高尾山のマルクビヒラタはこの採集例のみ]
28. 古見義明, 1970. 東京・高尾山でヨコヤマヒゲナガ採る. 昆虫と自然, **5**(10): 27. [1♂の採集例]
29. 昆野安彦, 1970. 東京・高尾山でハイイロハナカミキリ採集. 昆虫と自然, **5**(10): 31. [1970年3月23日, 金毘羅台のモミ立ち枯れ樹皮下から4頭を採集]
30. 長尾　悟, 1970. ヤマトシロオビトラカミキリの訪花時間について. 昆虫と自然, **5**(11): 30. [午前11時30分に1♂1♀, 午後12時30分に1♂1♀, 午後1時に1♂の各例を記録]
31. 藤田　宏, 1970. 燈火に来たアオタマムシ. 甲虫ニュース, (11): 4. [アオタマムシが燈火に来た例を報告するとともに, 高尾山の燈火採集で同時に得られたカミキリ11種を列記]
32. 京浜昆虫同好会編, 1971. III-28 高尾山. 新しい昆虫採集案内 (I), pp. 184–187. 内田老鶴圃新社, 東京. [4ページにわたる高尾山の紹介があり, カミキリについても多く触れられている]
33. [斎藤秀生・斎藤秀秋], [1972]. 高尾山のカミキリ (ナイター). *Paranaspia*, pp. 1–10. [高尾山の燈火採集で得られたカミキリを, 出現期と個体数をグラフに示しながら解説]
34. 藤田　宏, 1974. カミキリムシ2種の生態記録. 甲虫ニュース, (21/22): 10. [高尾山でキマダラカミキリがアカメガシワの花に来た例を報告]
35. 青木　隆, 1979. 高尾山におけるオオハナカミキリの追加記録. 月刊むし, (94): 30. [高尾山における同種の2頭目の記録]
36. 松島　孝, 1980. オオクロカミキリ高尾山の記録. 月刊むし, (109): 38. [高尾山における同種の唯一の記録. この1♂の他にも, 同日に他の同好者により1♀が採集されていたとある]
37. 和泉敦夫, 1980. 八王子市御衣霊園でヨコヤマトラカミキリを採集. 月刊むし, (114): 37. [2♂♂1♀がクリの枯れ枝のビーティングなどで採集されたことを報告]
38. 新里達也, 1982. 春先の採集地案内/御衣霊園～初沢山. 月刊むし, (133): 13–14. [高尾駅の南側にある同地の春先のカミキリを紹介]
39. 海老原裕之, 1984. 東京都八王子市込縄でクリストフコトラカミキリを採集. 月刊むし, (162): 30. [1♂, 同種の高尾山における初記録]
40. 坂口春典, 1984. 高尾山込縄でクリストフコトラカミキリを採集. 月刊むし, (163): 27. [3♂♂5♀♀の記録]
41. 原島真二, 1984. クリストフコトラカミキリを高尾山麓込縄で採集. 月刊むし, (163): 27. [6月11—12日に採集された3♂♂1♀の比較的遅い採集例と現地における生態写真を紹介]
42. 日本鞘翅目学会編, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 東京.
43. 藤田　宏, 1985. 採集地案内/裏高尾・日影沢のヤマトシロオビトラカミキリ. 月刊むし, (170): 32–34. [ヤマトシロオビトラを中心に日影沢の春のカミキリを紹介]
44. 藤田　宏, 1986. 採集地案内/東京都込縄のクリストフコトラカミキリ. 月刊むし, (181). 30–31. [込縄の同種の採集案内. 1984～1985年のポイントを示す]
45. 森川清志, 1986. カエデ葉上に飛来したヤマトシロオビトラカミキリ. 月刊むし, (185): 43. [同種がカエデの新芽に多数飛来した例を報告]

(〒110 東京都台東区台東 2-29-6)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 94–118, June 15, 1988

大阪府箕面市のカミキリムシ*),**)

岩田隆太郎・西川芳太郎・大垣　誠
和田洋介・山下俊一・八木正道

Cerambycid Fauna of Minoo, Ôsaka Prefecture

Ryûtarô Iwata, Yoshitarô Nishikawa, Makoto Ôgaki,
Yôsuke Wada, Shun'ichi Yamashita & Masamichi Yagi

1. はじめに

本邦における大都市近郊の著名な昆虫の 2 大採集地は，東は東京の高尾山，西は大阪の箕面（みのお）とされて久しい．後者，すなわち大阪府箕面市箕面公園周辺は戦前より国内外の多くの昆虫学者，昆虫愛好家が訪れ，実に多くの昆虫採集記録が当地より生まれ，カミキリムシのみならず昆虫全般の関西一の有名採集地として，我が国の昆虫愛好家でその名を知らぬ者はないとまで言われるに至った．

しかし戦後の著しい環境変化に伴い，当地の昆虫は減少の一途をたどっているとされ，カミキリムシのみに関していえば，今日関西一の座を奈良市春日山近辺に譲り，当地へわざわざ採集に訪れる者はめっきり少なくなってしまった．これには周辺地域の調査が進み，その結果かつては当地のみが産地として知られていた種も，次第により一般的なものとなって行き，当地の価値がその分だけ減じたということも関係していよう．しかし昆虫の棲息環境が狭められている今日，当地の過去から現在に至る採集記録は，現在も進行中の環境破壊を知りかつそれを阻止するうえにも，ますますその重要性を増してきている．

著者の 1 人西川芳太郎は，生来より現在の大阪府箕面市中心部に在住し，この地域の昆虫相の解明のため各種昆虫を採集，記録してきた．一方，岩田隆太郎，大垣　誠等は大阪府全体のカミキリムシ相の解明を計画し，様々な資料の収集を進めてきた．本稿は，前者にとっては「箕面昆虫誌」の一環，また後二者にとってはその仕事の最も重要な基礎資料としてのものであり，西川が大戦前後以来 40 数年にわたって集積してきた当地のカミキリムシの標本，他の 5 名をはじめとする多くの採集家の所蔵標本データ，博物館や大学の所蔵標本データ，及び文献記録をもとに，箕面市全体としてのカミキリムシ相をまとめたものである．

本稿の執筆にあたり標本写真の撮影で協力いただいた大平廣士氏にお礼申し上げる．さらにデータや情報の提供，標本検視等の面で色々とお世話になった，宮武頼夫，金沢　至の両氏（大阪市立自然史博物館），林　匡夫博士（大阪城南女子短大），斎藤寿久博士（箕面公園昆虫館），石井　実博士（大阪府立大，農学部）をはじめとする諸機関の方々，ならびに東　浩司氏，有本久之氏，浦田和義氏，越智輝雄

*) 西川：箕面昆虫誌 (5)
**) 岩田：近畿地方カミキリムシ分布資料 (5)

氏，北山　昭氏，北山健司氏，木村　豊氏，倉田道夫博士，小島一郎氏，塩崎明生氏，田中　勇氏，平野雅親博士，松田　潔氏，望月寛人氏，山下　晶氏，横山　創氏，吉川文弘博士等の甲虫愛好家諸氏，さらには筆者等に当地の標本を恵与された多くの方々に厚くお礼申し上げる次第である．

以下大阪府箕面市産のカミキリムシ，計 157 種をリストアップした．地名はデータの当時のものを用い，[ ] 内に現在の地名表示を記した．また各種につき，箕面に産する旨記した文献を末尾に列挙したが，これは活版などの活字印刷の出版物に限り，謄写版印刷や手書きオフセットのものについては全体として誤記，不鮮明印刷等が目立ち，文献として問題が多いのでこれを取り上げず，必要な場合に限り内容のみを引用するにとどめた．さらに当地の文献記録を引用するについて問題とされる「箕面」の範囲などについて，筆者等の考察を簡単ではあるが末尾に添記した．

なお，ここに記した西川採集の標本はすべて，大阪市立自然史博物館に寄贈の予定であることを付記する．

2.　箕面市産カミキリムシリスト

2.1.　ノコギリカミキリ亜科

（1）　ウスバカミキリ　*Megopis sinica* (White)

—平尾 [箕面], {1 ♂, 7. VIII. 1915, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]; 4 ♂♂, VII. 1933, 関　公一採集 [大阪自博蔵]}　—箕面 [箕面 6 丁目], 1 ♂, IX. 1960, 西川芳太郎採集

[文献：竹内 ('30); 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

（2）　ノコギリカミキリ　*Prionus insularis* Motsch.

—平尾 [箕面], 1 ♂, VII. 1933, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—中止々呂美, 1 ♂, 14. VII. 1968, 八木正道採集

[文献：竹内 ('30); 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 岸 ('67); 西川 ('77); 日浦 ('78); 仲田 ('78; '82); 伊藤他 ('66) による本種の勝尾寺からの記録 2 頭のうちの少なくとも 1 頭は，次種の誤りであった．また次種の記載 (Hayashi, '59) 以前の本種の文献記録は両種を含むようである．]

（3）　ニセノコギリカミキリ　*Prionus sejunctus* Hay.

—箕面, {1 ♂, 28. VII. 1964, 山下　晶採集; 1 ♂, 13. VIII. 1974, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]}　—勝尾寺, 1 ♂, 29-30. VIII. 1966, 伊藤修四郎他採集 [大府大昆虫研蔵] (伊藤他 ('66) により誤って前種として報告されたもの)

[文献：大倉他 ('65; '67)]

2.2.　クロカミキリ亜科

（1）　クロカミキリ　*Spondylis buprestoides* (L.)

—箕面, 高山道, 1 頭, 16. VIII. 1952, 松本清視採集 [大阪自博蔵]　—勝尾寺, 5 頭, 29-30. VIII. 1966, 伊藤修四郎他採集 [大府大昆虫研蔵]　—下止々呂美, 2 頭, 4. VII. 1973, 田中　勇採集　—桜井, 1 頭, VII. 1970, 和田洋介採集

[文献：竹内 ('30); 戸澤 ('32); Matsushita ('33); 林 ('55); 大倉他 ('65; '67); 伊藤他 ('66); 岸 ('67); 西川 ('77)]

2.3.　マルクビカミキリ亜科

（1）　サビムナクボカミキリ (新称)　*Arhopalus coreanus* (Sharp) (旧称：ムナクボカミキリ，サビカミキリ，ムナクボサビカミキリ)

—下止々呂美, 1 頭 30. VII. 1983, 和田洋介採集　—桜ヶ丘 1 丁目, 2 頭, 20. VIII. 1982, 和田洋介

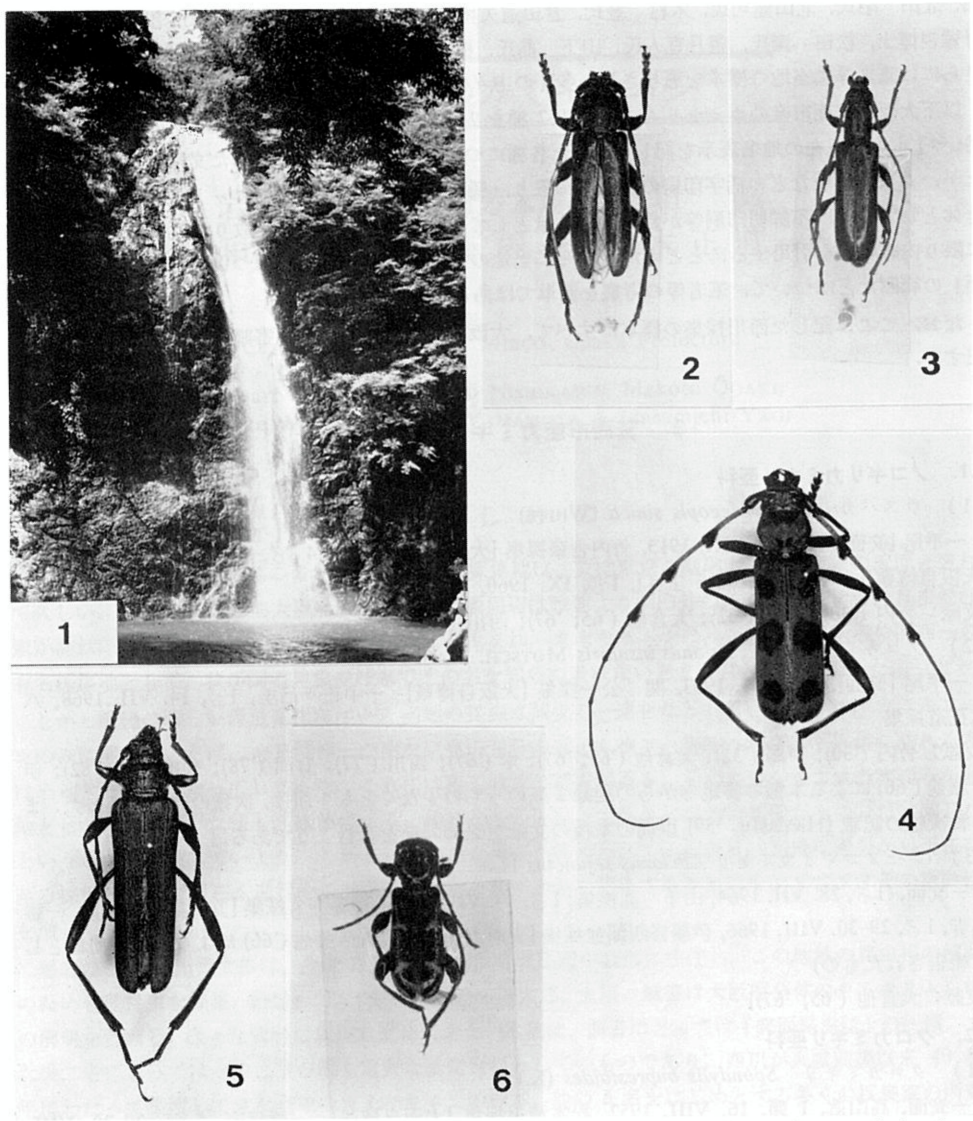
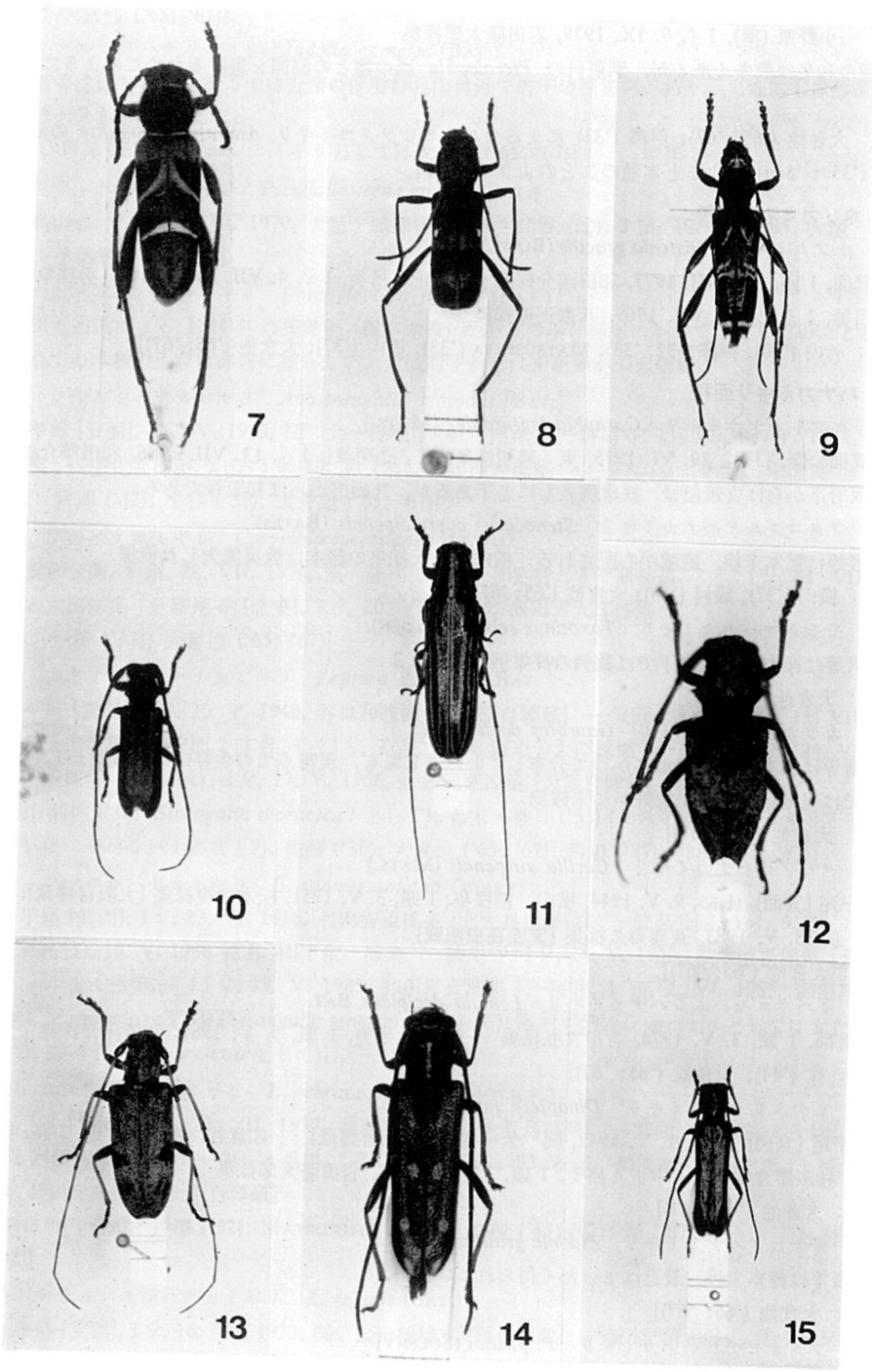


図 1: 大阪府箕面市箕面公園箕面ノ滝 (当地の象徴) (The Waterfall as the symbol of Minoo Park) 図 2～15: 大阪府箕面市の注目すべきカミキリムシ (Noteworthy cerambycid species of Minoo City) 2. マルクビケマダラカミキリ *Hesperophanes campestris* (FALDERM.) 3. テツイロヒメカミキリ *Ceresium sinicum* WHITE 4. ルリボシカミキリ *Rosalia batesi* HAROLD 5. アオカミキリ *Schwarzerium quadricolle* (BAT.) 6. ヨツボシチビヒラタカミキリ *Phymatodes quadrimaculatus* GRESS. 7. アカネトラカミキリ *Brachyclytus singularis* KRAATZ 8. ヨコヤマトラカミキリ *Epiclytus yokoyamai* (KANO) 9. マツシタトラカミキリ *Anaglyptus matsushitai* HAY. 10. フトキクスイモドキカミキリ (新称) *Asaperda* sp. 11. シロスジドウボソカミキリ *Pothyne annulata* BREUN. 12. マヤサンコブヤハズカミキリ *Mesechthistatus furciferus* (BAT.) 13. マルバネコブヒゲカミキリ *Rhodopina integripennis* (BAT.) 14. シラホシキクスイカミキリ *Eumecocera gleneoides* GRESS. 15. クロニセリンゴカミキリ *Eumecocera unicolor* (KANO).


7
8
9
10
11
12
13
14
15

採集　—小野原 (南), 1♂, 9. IX. 1979, 岩田隆太郎採集

本種の和名は数多くあるが，別亜科の *Pterolophia* 属の種との混同を避けるためこのように改称した．

[文献：大倉他 ('65; '67); 戸澤 ('32) によるマルクビヒラタカミキリ *Ase*[*m*]*um amurense* の記録は，関 ('35c; '36a) によると本種のことのようである．]

2.4. ホソカミキリ亜科

(1) ホソカミキリ *Distenia gracilis* (BLESS.)

—箕面, 1 頭, 23. VIII. 1977, 和田洋介採集　—下止々呂美, 1♀, 4. VII. 1973, 田中　勇採集　—中止々呂美, 1♂1♀, 6. VII. 1969, 八木正道採集

[文献：竹内 ('30); 戸澤 ('32; '33); MATSUSHITA ('33); 横山 ('37); 大倉他 ('65; '67)]

2.5. ハナカミキリ亜科

(1) ケブトハナカミキリ *Caraphia lepturoides* (MATS.)

—箕面公園, {3 頭, 29. VI. 1975, 東　隆司採集 [東　浩司蔵]; 1♂, 13. VII. 1986, 和田洋介採集}

大阪府下からは文献記録，採集例ともに若干あるが，箕面市からは初記録である．

(2) フタコブルリハナカミキリ *Stenocorus coeruleipennis* (BATES)

筆者等は標本未検．絶滅が心配される．横山光夫氏採集の標本は戦災焼失した模様．

[文献：横山 ('37); 殿村 ('38); 大倉他 ('65; '67)]

(3) モモグロハナカミキリ *Toxotinus reinii* (HEYDEN)

筆者等は標本未検．府下では数例の採集例が見られる．

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(4) カラカネハナカミキリ *Gaurotes doris* BATES

筆者等は標本未検．当地にかつて分布していたとしても，現時点での生存は非常に疑わしい．大阪府下では当地以外から未記録かつ未確認．

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(5) クビアカハナカミキリ *Carilia atripennis* (MATS.)

—平尾 [箕面], {1 頭, 9. V. 1944, 横山　創採集; 1 頭, 3. V. 1951, 松本清視採集 [大阪自博蔵]}　—箕面, 1 頭 18. V. 1983, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(6) キバネニセハムシハナカミキリ *Lemula decipiens* BAT.

—箕面, 1 頭, 3. V. 1974, 吉川文弘採集　—下止々呂美, 1 頭, 5. V. 1981, 和田洋介採集

[文献：林 ('44); 大倉他 ('65; '67)]

(7) ヒナルリハナカミキリ *Dinoptera minuta* (GEB.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 1. V. 1942, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—如意谷，才ヶ原林道, 2 頭, 19. IV. 1987, 和田洋介採集　—中止々呂美, 1 頭, 29. IV. 1985, 岩田隆太郎採集

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(8) オオヒメハナカミキリ *Pidonia grallatrix* (BAT.)

筆者等は標本未検．最近はまったく得られていない．

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(9) フタオビチビハナカミキリ *P. puziloi* (SOLSKY)

筆者等は標本未検．最近はまったく得られていないようである．

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(10)　マルガタハナカミキリ　*Judolia cometes* (BAT.)

筆者等は標本未検．府下では近傍の能勢妙見山付近で若干の採集例があり，当地にも依然産する可能性は十分ある．

[文献：戸澤 ('32) (ヤツホシカミキリとして); 大倉他 ('65; '67)]

(11)　チャボハナカミキリ　*Pseudallosterna misella* (BAT.)

—高山道，1 頭，17. VI. 1970, 大垣　誠採集　—粟生間谷 (北)，3 頭，10. VI. 1985, 大垣　誠採集

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(12)　ヒメアカハナカミキリ　*Brachyleptura pyrrha* (BAT.)

小田覚造氏による 1944 年の採集例 (標本未検) があるのみ? 当地にかつて分布していたとしても，現時点での本種の生存は非常に疑わしい．大阪府下からは未記録かつ未確認．

(13)　ツヤケシハナカミキリ　*Anastrangalia scotodes* (BAT.)

—平尾 [箕面]，1 ♀，V. 1933, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—勝尾寺，1 ♂1 ♀，23. V. 1982, 越智輝雄採集　—中止々呂美，2 ♂♂1 ♀，19. V. 1985, 和田洋介採集

[文献：戸澤 ('32); 小林 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(14)　アカハナカミキリ　*Corymbia succedanea* (LEWIS)

—箕面公園，5 頭，28. VII. 1974, 東　隆司採集　—如意谷，才ケ原林道，2 ♂♂1 ♀，31. VII. 1983, 西川芳太郎採集　—勝尾寺 (北東)，1 ♂，20. VII. 1975, 西川芳太郎採集

[文献：戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(15)　ムネアカクロハナカミキリ　*Leptura dimorpha* BAT.

—平尾 [箕面]，1 ♀，30. V. 1940, 谷口和義採集 [大阪自博蔵]　—箕面，清水谷，1 ♀，11. VII. 1972, 西川芳太郎採集　—箕面 2 丁目，1 ♂1 ♀，7. V. 1972, 西川芳太郎採集　—勝尾寺，1 ♀，24. VI. 1984, 山下俊一採集　—西山口，1 ♀，27. V. 1966, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

[文献：竹内 ('30) (*Strangalia thoracica*? として); 鈴木・瀧口 ('35) (メスアカハナカミキリとして: あるいはツヤケシハナのこと?); 佐藤 ('36); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('78; '82)]

(16)　ツマグロハナカミキリ　*L. tsumagurohana* OHBAY.

—平尾 [箕面]，1 ♀，23. VI. 1916, 竹内吉蔵採集 [北大昆虫研蔵]　—箕面公園，1 ♂，5. V. 1986 (ハンノキ枯枝)，16. V. 1986 脱出，山下俊一採集　—勝尾寺，1 ♀，14. V. 1950, 松本清視採集 [大阪自博蔵]　—中止々呂美，1 ♂1 ♀，19. V. 1985, 和田洋介採集　—桜井，1 頭，2. VI. 1983, 和田洋介採集

[文献：MATSUSHITA ('33) (*Strangalia tenuicornis* として); 藤村 ('57) (*L. arcuata* として); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77) (*L. arcuata* として)]

(17)　ヨツスジハナカミキリ　*L. ochraceofasciata* (MOTSCH.)

—平尾 [箕面]，1 ♀，20. VII. 1937, 谷口和義採集 [大阪自博蔵]　—箕面，天上谷，1 ♂1 ♀，26. V. 1957, 西川芳太郎採集　—中止々呂美，1 ♂1 ♀，20. VI. 1982, 松田　潔採集　—西之所，3 頭，3. VII. 1976, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

[文献：竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 岸 ('67); 西川 ('77); 仲田 ('78; '82)]

(18)　オオヨツスジハナカミキリ　*L. regalis* (BAT.)

—平尾 [箕面]，1 ♀，16. VII. 1932, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—箕面，清水谷，1 ♀，23. VII. 1961, 西川芳太郎採集　—箕面 [箕面 2 丁目]，1 ♀，7. VIII. 1953, 西川芳太郎採集　—下止々呂美，1 ♀，31.

VII. 1979, 東　隆司採集 [東　浩司蔵]　—中止々呂美, 1♀, 19. VII. 1970, 八木正道採集
[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32) (以上 *Strangalia maindroni* として); 横山 ('37); LEWIS ('39); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(19)　ニンフホソハナカミキリ　*Parastrangalis nymphula* (BAT.)

—高山道, 3 頭, 17. VI. 1970, 大垣　誠採集　—中止々呂美, 23 頭, 13. VI. 1977, 大垣　誠採集
[文献: 大倉他 ('65; '67)]

(20)　コウヤホソハナカミキリ　*Strangalia koyaensis* MATS.

—平尾 [箕面], 1♂, 2. VIII. 1936, T. MIWAKE 採集 [北大昆虫研蔵]

本種は戦前小田覚造氏により能勢妙見山 (大阪・兵庫の府県境) にて得られているようであるが, いちおう大阪府初記録としておく. 当地箕面における現時点での生存は非常に疑わしい.

(21)　ジャコウホソハナカミキリ　*Mimostrangalia dulcis* (BAT.)

筆者等は標本未検. 茨木市にて 1 例得られており, 現在でも当地に分布している可能性は高い.
[文献: 大倉他 ('65; '67)]

(22)　ベニバハナカミキリ　*Paranaspia anaspidoides* (BAT.)

—鉢伏山～止々呂美, 1♀, 22. VI. 1952, 横山　創採集

府下では当地近傍にて現在でも若干得られている.
[文献: 林 ('61); 大倉他 ('65; '67); 小島・林 ('69)]

(23)　キヌツヤハナカミキリ　*Corennys sericata* BAT.

筆者等は標本未検. 最近ではまったく得られていない. 府下では当地以外から未記録かつ未確認.
[文献: 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

2.6.　カミキリ亜科

(1)　アオスジカミキリ　*Xystrocera globosa* (OLIV.)

—箕面公園, 1♂, 25. VI. 1958, 港野尚武採集 [倉田道夫蔵]　—最勝ヶ峰, 1♀, 18. VII. 1966, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 光ヶ谷, 1♀, 20. VI. 1984, 和田洋介採集
[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 横山 ('37); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82)]

(2)　ミヤマカミキリ　*Massicus raddei* (BLESSIG)

—平尾 [箕面], 1♂, 7. VIII. 1915, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]　—下止々呂美, 1♂, 25. VIII. 1982, 西川芳太郎採集
[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(3)　キマダラカミキリ　*Aeolesthes chrysothrix* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1♀, 3. VII. 1936, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—下止々呂美, 1 頭, 7. V. 1972, 和田洋介採集
[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(4)　マルクビケマダラカミキリ　*Hesperophanes campestris* (FALDERM.)

—箕面 6 丁目, 1 頭, 24. VII. 1982, 西川芳太郎採集　—箕面 8 丁目, 平和台, 1 頭, 21. VII. 1982, 加藤琢磨採集 [和田洋介蔵]

箕面市のみならず大阪府初記録にあたる. 府下では他に大阪市内と府北部市街地の採集例を若干検している.

(5)　トビイロカミキリ　*Allotraeus sphaerioninus* BAT.

—粟生間谷 (北), 1♂2♀♀, 16. VII. 1987, 大垣　誠採集

戦前に村田忠行氏が当地にて本種を得た旨の小田覚造氏のメモがあるが，事実上大阪府初記録である．

(6)　ヨツボシカミキリ　*Stenygrinum quadrinotatum* BAT.

—箕面, 1 頭, 28. VI. 1976, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]　—箕面 [箕面 6 丁目], 1 頭, 15. V. 1966, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 1 頭, 24. VI. 1983, 田中　勇採集　—西之所, 1 ♀, 23. VI. 1979, 塩崎明生採集　—桜井, 1 頭, 5. VI. 1978, 和田洋介採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(7)　アメイロカミキリ　*Stenodryas clavigera* BAT.

—箕面, 落合谷, 1 頭, 11. VI. 1967, 山下　晶採集　—下止々呂美, 1 ♀, 12. V. 1977, 松田　潔採集　—中止々呂美, 1 頭, 7. VI. 1987, 和田洋介採集　—石澄, 1 頭, 3. VII. 1983, 和田洋介採集

[文献: 仲田 ('82)]

(8)　ヨコヤマヒメカミキリ　*Ceresium holophaeum* BAT.

—中止々呂美, {2 頭, 7. VII. 1979; 5 頭, 10. VII. 1982}, 八木正道採集

[文献: 八木 ('81)]

(9)　ヒゲナガヒメカミキリ　*C. longicorne* PIC

—下止々呂美, 3 頭, 21. III. 1980 (クリ枯枝), 31. V. 1980 脱出, 山下　晶採集　—中止々呂美, {17 頭, 21. VII. 1979; 1 頭, 10. VII. 1982}, 八木正道採集

[文献: 八木 ('61)]

(10)　テツイロヒメカミキリ　*C. sinicum* WHITE

—如意谷 3 丁目, 1 頭, 14. VI. 1987, 岩田厚子採集 [岩田隆太郎蔵]　—桜井 1 丁目, 1 頭, 12. VI. 1987, 和田洋介採集

箕面市のみならず大阪府北部初記録にあたる．府下では大阪市南部～堺市に多産することが著名で，他に河内長野市，和泉市の採集例を検しているが，淀川以北で得られたことはなく，本種の分布の常識を破るものである．

(11)　タイワンメダカカミキリ　*Stenhomalus taiwanus* MATS.

—中止々呂美, {1 頭, 3. VII. 1976, 八木正道採集; 1 頭, 7. VI. 1987, 和田洋介採集}

[文献: 八木 ('81); 仲田 ('82)]

(12)　カッコウメダカカミキリ　*S. cleroides* BAT.

—中止々呂美, 1 頭, 4. VII. 1987, 八木正道採集　—桜ケ丘, {1 頭, 18. V. 1971; 1 頭, 20. VII. 1971}, 平野雅親採集

[文献: 林・伊賀 ('44)]

(13)　ヤマトチビコバネカミキリ　*Leptepania japonica* (HAY.)

—下止々呂美, 7 頭, IV. 1977 (クリ枯枝), 12. V. 1977 脱出, 松田　潔採集　—中止々呂美, {1 頭, 3. VII. 1976, 八木正道採集; 8 頭, 5. VI. 1983, 松田　潔採集}

局地的な分布を示すが，タイプロカリティー (池田市) に隣接する旧止々呂美村地区では多産する．

[文献: 林 ('49); 林 ('55); 草間 ('59); 草間 ('65); 大倉他 ('65; '67); 木村 ('68); 草間 ('73); 八木 ('81)]

(14)　トラフホソバネカミキリ　*Thranius variegatus* BAT.

—勝尾寺～高山道, 1 ♀, 26. VI. 1985, 大垣　誠採集

箕面市のみならず大阪府初記録にあたる．府下では他に茨木市銭原での採集例 (大垣採集) がある．

(15)　クスベニカミキリ　*Pyrestes haematicus* PASC.

—平尾 [箕面], 1 頭, 5. VII. 1931, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵] —箕面, 政ノ茶屋近辺, 1 頭, 22. VI. 1966, 西川芳太郎採集 —粟生間谷, 山ノ口, 7 頭, 4. VII. 1976, 大垣 誠採集 —粟生間谷(北), 3 頭, 1. VII. 1983, 大垣 誠採集 —下止々呂美, {1 頭, 14. VII. 1968, 八木正道採集; 1 ♀, 19. VII. 1974, 東 浩司採集}

[文献: 小林 ('32) (*Leptoxenus ibidii* ヒゲブトベニカミキリとして); 西川 ('66a); 西川 ('66b); 大倉他 ('67)]

(16) ルリボシカミキリ *Rosalia batesi* HAROLD

—箕面ノ滝, 1 ♂, 25. VII. 1968, 大垣 誠採集

箕面市のみならず, 大阪府初記録にあたる. 府下では他に三島郡島本町で目撃例がある.

(17) ミドリカミキリ *Chloridolum viride* (THOMS.)

—平尾 [箕面], 2 頭, VII. 1933, 矢野由雄採集 [大阪自博蔵] —箕面 [箕面 6 丁目], 1 頭, 22. VI. 1955, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 1 頭, 16. VI. 1974, 東 隆司採集 [東 浩司蔵] —中止々呂美, 1 頭, 5. VI. 1983, 和田洋介採集

[文献: 戸澤 ('32); 横山 ('37); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82)]

(18) アカアシオオアオカミキリ *C. japonicum* (HAR.)

—下止々呂美, {1 ♂ 2 ♀♀, 15. VIII. 1971, 9 ♂♂ 6 ♀♀, 12. VIII. 1979}, 松田 潔採集 —西之所, 1 ♀, 26. VII. 1981, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

[文献: 仲田 ('82)]

(19) アオカミキリ *Schwarzerium quadricolle* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 ♀, VII. 1937, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面, 1 頭, 3. VII. 1986, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵] —箕面 [箕面 6 丁目], 1 頭, 12. VI. 1957, 西川芳太郎採集 —箕面 8 丁目, 平和台, 1 頭, 1. VII. 1984, 加藤琢磨採集 [和田洋介蔵] —高山道, 1 頭, 15. VI. 1958, 西川芳太郎採集

箕面市初記録である. 当地は紅葉をもってその名を知られる観光地であり, 本種の分布は当然予想されていた.

(20) ヒメスギカミキリ *Callidiellum rufipenne* (MOTSCH.)

—平尾 [箕面], 5 頭, V. 1933, 矢野由雄採集 [大阪自博蔵] —箕面, 政ノ茶屋, 8 ♂♂ 3 ♀♀, 11. V. 1975, 西川芳太郎採集 —箕面, 聖天山公園, 3 ♂♂ 4 ♀♀, 28, IV. 1957, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 1 ♂, 7. V. 1970, 松田 潔採集 —桜井 1 丁目, 1 頭, 5. IV. 1987, 和田弘子採集 [和田洋介蔵] —小野原, 1 ♀, 7. IV. 1973, 岩田隆太郎採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 西川 ('58); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(21) スギカミキリ *Semanotus japonicus* (LACORD.)

—平尾 [箕面], 1 ♀, 12. V. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面, 勝尾寺道, 1 ♀, 16. IV. 1954, 松本清視採集 [大阪自博蔵] —高山道, 1 ♀, 30. IV. 1961, 山下 晶採集 —勝尾寺, {2 ♂♂, 24. IV. 1985, 大垣 誠採集; 4 ♂♂ 2 ♀♀, 19. IV. 1987, 和田洋介採集}

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 西口 ('72)]

(22) クビアカルリヒラタカミキリ *Phymatodes testaceus* (L.)

—下止々呂美, 1 ♂, 29. V. 1982, 平野雅親採集 —中止々呂美, 1 頭, 5. VI. 1987, 和田洋介採集

[文献: 平野 ('86)]

(23) チャイロチビヒラタカミキリ *P. vandykei* GRESS.

—平尾 [箕面], 1 頭, 5. VI. 1940, 西村　猛採集 [大阪自博蔵]

[文献: 関 ('44); 大倉他 ('65; '67)]

(24)　アカネカミキリ　*P. maaki* (KRAATZ)

—平尾 [箕面], 2 頭, 20. V. 1934, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—勝尾寺, 5 頭, 24. V. 1986, 岩田隆太郎採集　—中止々呂美, 1 頭, 12. V. 1984, 和田洋介採集

大倉他 ('65; '67) の報告では, 箕面公園北側が産地として図示されている.

[文献: 関 ('35c); 鈴木・瀧口 ('35); 大倉他 ('65; '67)]

(25)　ヨツボシチビヒラタカミキリ　*P. quadrimaculatus* (GRESS.)

—中止々呂美, {1 頭, 12. V. 1984, 和田洋介採集; 1 ♂, 29. IV. 1985, 岩田隆太郎採集}

箕面市初記録, かつ事実上の大阪府初記録に当たる. (小田覚造氏による本種の大阪市内からの採集例は再考を要する.)

(26)　シロオビチビヒラタカミキリ　*P. albicinctus* BAT.

—平尾 [箕面], 1 頭, 1. V. 1942, 西村　猛採集 [大阪自博蔵]　—高山道～箕面公園, 1 頭, 10. VI. 1973, 八木正道採集　—勝尾寺, 2 頭, 30. V. 1981, 越智輝雄採集

[文献: 関 ('35c); 大倉他 ('65; 67)]

(27)　トラフカミキリ　*Xylotrechus chinensis* (CHEVR.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 6. VII. 1940, 島村, S. 採集 [八木正道蔵]

戦前には当地で若干得られたようであるが, 戦後には稀となり, 最近ではまったく得られていないようである.

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67)]

(28)　ブドウトラカミキリ　*X. pyrrhoderus* BAT.

—箕面, 1 頭, 1. IX. 1978, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]　—粟生間谷, 山ノ口, 2 頭, 27. IX. 1985, 大垣　誠採集

箕面市初記録である.

(29)　クビアカトラカミキリ　*X. rufilius* (BAT.)

—政ノ茶屋～勝尾寺, 1 頭, 20. VII. 1975, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 9 頭, 16. VI. 1974, 東浩司他採集 [東　浩司蔵]　—中止々呂美, 1 頭, 20. VI. 1982, 八木正道採集

[文献: 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('78; '82)]

(30)　ズマルトラカミキリ　*X. lautus* (MATS.)

—箕面公園, 1 頭, 9. II. 1986 (ハンノキ枯枝, 割出), 山下俊一採集　—勝尾寺, 3 頭, 20. II. 1978 (アカメガシワ枯枝, 割出), 大垣　誠採集　—中止々呂美, {1 頭, 7. VI. 1981, 八木正道採集; 1 頭, 19. V. 1985, 和田洋介採集}

[文献: 八木 ('81)]

(31)　シラケトラカミキリ　*Clytus melaenus* BAT.

—箕面 6 丁目, 1 頭, 21. VI. 1969, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 5 頭, 15. V. 1983, 和田洋介採集　—中止々呂美, 1 頭, 22. VI. 1985, 八木正道採集

[文献: 東 ('65); 仲田 ('82)]

(32)　キンケトラカミキリ　*C. auripilis* BAT.

—平尾 [箕面], 1 頭, 2. V. 1950, 横山　創採集　—箕面, 箕面ノ滝, {15 頭, 3. III. 1982 (ケヤキ枯幹, 割出), 北山　昭・北山健司採集; 10 頭, 13. IV. 1985 (ケヤキ枯枝, 割出), 和田洋介採集}

きわめて局地的な分布を示し，箕面ノ滝は府下におけるその最も確実な産地である．

[文献：関・末松 ('35); 関 ('35c) (以上 *Chlorophorus minomensis* ミノモトラカミキリとして); 後藤 ('47); 大倉他 ('65; '67)]

(33) アカネトラカミキリ *Brachyclytus singularis* KRAATZ

—平尾 [箕面], 1♂, 25. V. 1932, 福貴正三採集 [大阪自博蔵] (*Clytus fukukii* のホロタイプ) —箕面, 1 頭, 7. V. 1982, 北山 昭採集 —勝尾寺, {3 頭, 24. V. 1986; 67 頭, 24. V. 1986 (ヤマブドウ枯枝), 10. II. 1987～下旬. V. 1987, 脱出}, 岩田隆太郎採集

府下では他に豊能町の 2 例を知るのみである．

[文献：SEKI ('35a); 関 ('35c) (以上 *Clytus fukukii* フクキトラカミキリとして); 大倉他 ('65; '67)]

(34) キスジトラカミキリ *Cyrtoclytus caproides* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 25. VI. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面駅, 1 頭, 16. VI. 1954, 西川芳太郎採集 —勝尾寺, 1 頭, 16. V. 1982, 越智輝雄採集 [松田 潔蔵] —下止々呂美, 3 頭, 28. V. 1983, 和田洋介採集 —上之所, 1 頭, 24. VI. 1968, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

[文献：戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('78; '82)]

(35) ヨコヤマトラカミキリ *Epiclytus yokoyamai* (KANO)

—中止々呂美, 1♀, 13. VI. 1977, 大垣 誠採集

箕面市初記録である．

(36) エグリトラカミキリ *Chlorophorus japonicus* (CHEVR.)

—平尾 [箕面], 3 頭, 25. VI. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —平尾 [箕面 2 丁目], 1 頭, 8. VI. 1951, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 光ケ谷, 2 頭, 26. VI. 1960, 西川芳太郎採集 —中止々呂美, 2 頭, 20. VI. 1982, 八木正道採集 —西之所, 1 頭, 23. VI. 1979, 塩崎明生採集

[文献：大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('78; '82). HEYDEN (1879) が報告した J. REIN 氏による府下からの "*Clytanthus oppositus*" の記録は，当地における本種のものと思われる．]

(37) クロトラカミキリ *C. diadema inhirsutus* MATS.

筆者等は標本未検．当地近傍 (能勢) に 1 例記録があり，当地にも必ず分布しているはずである．

[文献：戸澤 ('32) (*C. motschulskyi* クロトラフカミキリとして; あるいは前種を指す可能性あり); 佐藤 ('36) (*C. dubius* として); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(38) ヨツスジトラカミキリ *C. quinquefasciatus* (CASTELN. & GORY)

—平尾 [箕面], 1 頭, VII. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵]

箕面市初記録である．

(39) タケトラカミキリ *C. annularis* (FABRIC.)

—平尾 [箕面], 1 頭, VII. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面 [箕面 6 丁目], 1 頭, 20. VIII. 1963, 西川芳太郎採集 —勝尾寺, 1 頭, 2. VIII. 1980, 北山 昭採集 —桜井 1 丁目, 1♂, 2. VII. 1984, 和田弘子採集 [和田洋介蔵]

[文献：戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(40) ホソトラカミキリ *Rhaphuma xenisca* (BAT.)

—勝尾寺, 1♂, 8. V. 1982, 越智輝雄採集

箕面市初記録である．

(41) ヒメクロトラカミキリ *R. diminuta* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 12. V. 1916, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵] —箕面, 箕面ノ滝, 4 頭, 3. III.

1982 (ケヤキ枯枝, 割出), 北山　昭・北山健司採集　—勝尾寺, 1 頭, 29. IV. 1985, 岩田隆太郎採集　—青貝山, 1 頭, 3. V. 1967, 西川芳太郎採集　—中止々呂美, 1 頭, 7. VI. 1981, 八木正道採集

[文献: 竹内 ('30); MATSUSHITA ('33); 関 ('35c); 大倉他 ('65; '67)]

(42)　キイロトラカミキリ　*Demonax notabilis* (PASC.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 20. V. 1939, 谷口和義採集 [大阪自博蔵]　—箕面, 箕面ノ滝, 1 頭, 1983 (ケヤキ枯幹), 30. IV. 1983 脱出, 田中　勇採集　—下止々呂美, 40 頭, 20. VI. 1982, 松田　潔採集　—中止々呂美, 6 頭, 20. VI. 1982, 松田　潔採集

[文献: 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(43)　トゲヒゲトラカミキリ　*D. transilis* BAT.

—箕面公園, {1 頭, 23. IV. 1961, 西川芳太郎採集; 2 頭, 9. II. 1986 (ハンノキ枯枝, 割出), 山下俊一採集}　—勝尾寺, 2 頭, 21. V. 1984, 山下俊一採集　—中止々呂美, 1 頭, 29. V. 1983, 松田　潔採集　—西之所, 1 頭, 27. V. 1967, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

[文献: 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('78; '82)]

(44)　スギノアカネトラカミキリ　*Anaglyptus subfasciatus* PIC

—箕面, 1♀, 30. IV. 1977, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]　—高山道, 1 頭, 5. V. 1969, 大垣　誠採集　—勝尾寺, 1 頭, 21. IV. 1977, 大垣　誠採集　—粟生間谷, 奥, 2 頭, 21. IV. 1977, 大垣　誠採集

大倉他 ('65; '67) の報告では鉢伏山南側が採集地点として図示されている.

[文献: 戸澤 ('32) (*Aglaophis colobotheoides* シロヘリトラカミキリとして); 大倉他 ('65; '67)]

(45)　マツシタトラカミキリ　*A. matsushitai* HAY.

—箕面公園, 1♀, 7. IV. 1970 (*Salix* sp. 生木, 樹皮下), 越智輝雄採集 [松田　潔蔵]　—箕面, 1 頭, 26. V. 1976, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]　—高山道, 3 頭, 17. VI. 1970, 大垣　誠採集　—下止々呂美, 1♀, 8. VII. 1987, 大垣　誠採集　—中止々呂美, 1 頭, 29. IV. 1985, 岩田隆太郎採集

事実上の大阪府初記録である. 府下では他に数例が見られる.

(46)　ホタルカミキリ　*Dere thoracica* WHITE

—平尾 [箕面], 7 頭, 2. VI. 1935, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—青貝山, 3 頭, 3. V. 1967, 西川芳太郎採集　—勝尾寺, 1♂1♀, 8. V. 1982, 越智輝雄採集　—如意谷 [如意谷 1 丁目], 7 頭, 3. V. 1959, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 4 頭, 11. X. 1981 (ネムノキ枯枝, 割出), 岩田隆太郎採集　—中止々呂美, 33 頭, 5. VI. 1983, 松田　潔採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(47)　ムモンベニカミキリ　*Amarysius sanguinipennis* (BLESS.)

筆者等は標本未検. 府下では他には唯一能勢町の文献記録があるのみ. 追加記録を望むとすれば成育環境を考慮すると中止々呂美付近であろう.

[文献: 大倉他 ('65; '67)]

(48)　ヘリグロベニカミキリ　*Purpuricenus spectabilis* MOTSCH.

—平尾 [箕面], 1 頭, 17. V. 1917, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]　—箕面公園, 1♀, 21. III. 1986 (枯枝, 割出), 山下俊一採集　—箕面 [箕面 6 丁目], 1♀, 5. V. 1962, 西川芳太郎採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('67)]

(49)　ベニカミキリ　*P. temmincki* GUÉRIN-MÉN.

—平尾 [箕面], 2♂♂1♀, V. 1933, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—箕面 6 丁目, 1♀, 20. V. 1968,

西川芳太郎採集 —勝尾寺, 1♀, 29. IV. 1985, 岩田隆太郎採集 —中止々呂美, 2 頭, 12. V. 1984, 和田洋介採集 —石澄, 1 頭, 23. IV. 1983, 和田洋介採集 —小野原, 1♀, 25. V. 1975, 岩田隆太郎採集
[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 西川 ('58); 大倉他 ('65; '67); 岸 ('67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

2.7. フトカミキリ亜科

(1) シロオビゴマフカミキリ *Falsomesosella gracilior* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 2. VI. 1935, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —中止々呂美, 2 頭, 4. VII. 1987, 八木正道採集
[文献: MATSUSHITA ('33); 関 ('35c); 大倉他 ('65; 67); 西川 ('77) (*Mesosa konoi* ナカジロゴマフカミキリとして)]

(2) ゴマフカミキリ *Mesosa myops japonica* BAT.

—平尾 [箕面], 1♀, 20. VII. 1937, 谷口和義採集 [大阪自博蔵] —箕面, 聖天山公園, 1♂, 28. VI. 1957, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 1 頭, 4. V. 1981, 和田洋介採集 —中止々呂美, 1♀, 20. VI. 1982, 八木正道採集 —西之所, 1 頭, 5. VI. 1966, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]
[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('78; '82)]

(3) カタジロゴマフカミキリ *M. hirsuta* BAT.

—箕面 [箕面 6 丁目], 1♀, 15. VII. 1960, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 1♂, 22. VII. 1969, 朝田武雄採集 [松田 潔蔵] —中止々呂美, 1 頭, 10. VII. 1982, 八木正道採集
[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32); 鈴木・瀧口 ('35); 大倉他 ('65; '67)]

(4) ナガゴマフカミキリ *M. longipennis* BAT.

—平尾 [箕面], 1♀, 8. VIII. 1934, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面 6 丁目, 1♂, 20. VI. 1977, 西川芳太郎採集 —勝尾寺, 2♂♂ 2♀♀, 29-30. VIII. 1966, 伊藤修四郎他採集 [大府大昆虫研蔵] —下止々呂美, 光ケ谷, 2♂♂, 16. VIII. 1970, 西川芳太郎採集 —中止々呂美, 1 頭, 24. VI. 1984, 和田洋介採集 —西之所, 1♀, 23. VIII. 1981, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]
[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32); 大倉他 ('65; '67); 伊藤他 ('66); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(5) シナノクロフカミキリ *Asaperda agapanthina* BAT.

小田覚造氏による当地での採集例があるとされているが, 筆者等は標本未検. 府下からは当地における文献記録以外, 採集例をいっさい見ない. あるいは次々種フトキクスイモドキカミキリ *A.* sp. のこととも考えられる.
[文献: 大倉他 ('67)]

(6) キクスイモドキカミキリ *A. rufipes* BAT.

—平尾 [箕面], {1 頭, 29. V. 1917, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]; 1 頭, 30. V. 1940, 谷口和義採集 [大阪自博蔵]} —高山道, 1 頭, 29. IV. 1955, 西川芳太郎採集 —勝尾寺, 2 頭, 24. V. 1986, 岩田隆太郎採集 —白島, 谷山谷, 1 頭, 4. V. 1969, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 光ケ谷, 1 頭, 9. V. 1976, 西川芳太郎採集 —中止々呂美, 1 頭, 29. IV. 1985, 岩田隆太郎採集 —西之所, 3 頭, 5. VI. 1966, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]
[文献: MATSUSHITA ('33); 関 ('35c); 林 ('55); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('78; '82)]

(7) フトキクスイモドキカミキリ *Asaperda* sp.

—勝尾寺, 1 頭, 23. V. 1980, 大垣 誠採集

本種は岩田・石井 ('86) のいう京都府, 滋賀県, 福井県産の "*Asaperda* sp." と同一と考えられるも

のであり，前種 *A. rufipes* やトゲムネホソヒゲカミキリ *A. tenuicornis* KOMIYA とは明らかに異なり，全身黒色で太短い体型を持つ．

(8)　コブスジサビカミキリ　*Atimura japonica* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 17. V. 1917, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]　—箕面, 落合谷, 1 頭, 18. IV. 1976, 岩田隆太郎採集　—中止々呂美, 1 頭, 29. V. 1983, 八木正道採集

[文献：関 ('35c); 大林 ('41); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82)]

(9)　ヒシカミキリ　*Microlera ptinoides* BAT.

—平尾 [箕面], 1 頭, 16. V. 1916, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]　—箕面, 清水谷, 2 頭, 13. V. 1973, 西川芳太郎採集　—勝尾寺, 2 頭, 24. V. 1986, 岩田隆太郎採集　—下止々呂美, 6 頭, 15. V. 1983, 和田洋介採集　—中止々呂美, 9 頭, 29. IV. 1985, 岩田隆太郎採集　—上止々呂美, 上之所, 1 頭, 20. V. 1984, 和田洋介採集

[文献：竹内 ('30) (*Miccola*[*mia*] *cleroi*[*d*]*es* ヒシカミキリとして); 戸澤 ('32); 戸澤 ('33) (コブヤハズカミキリ (ヒシカミキリ) として); 関 ('35c); 関 ('36b); 平山 ('37) (*Miccolamia cleroides* カッコウカミキリとして); LEWIS ('39); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82). 竹内 ('30) や平山 ('37) のいうものは，平山 ('40) の図説によれば本種のことであることは明らか．]

(10)　キボシチビカミキリ　*Sybra flavomaculata* BREUN.

—下止々呂美, 5 頭, 10. IV. 1983 (アカマツ枯枝), 18–23. V. 1983 脱出, 山下　晶採集　—中止々呂美, 2♂♂1♀, 11. VII. 1979, 八木正道採集　—西之所, 1 頭, 11. VI. 1983, 平野雅親採集

[文献：草間 ('59; '65); 八木 ('81); 仲田 ('82)]

(11)　ハスオビヒゲナガカミキリ　*Cleptometopus bimaculatus* (BAT.)

—高山道, 1 頭, 29. IX. 1986, 大垣　誠採集　—勝尾寺, 1♂, 11. IX. 1982, 大垣　誠採集

箕面市初記録である．隣接する豊能町高山における文献記録がある．

(12)　シロスジドウボソカミキリ　*Pothyne annulata* BREUN.

—勝尾寺, 1 頭, 1. IX. 1980, 大垣　誠採集　—中止々呂美, 1 頭, 5. V. 1969, 大垣　誠採集

[文献：林 ('55); 草間 ('59; '65); 大倉他 ('65; '67); 草間 ('73) (以上すべて *P. silacea* として)]

(13)　ドウボソカミキリ　*Pseudocalamobius japonicus* (BAT.)

—平尾 [箕面], {1 頭, 20. V. 1939, 関　公一採集 [大阪自博蔵]; 1 頭, 16. VI. 1975, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]}　—中止々呂美, 1 頭, 5. VII. 1975, 八木正道採集

[文献：小林 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(14)　ニイジマチビカミキリ　*Egesina bifasciana* (MATS.)

—下止々呂美, 1 頭, 24. VI. 1983, 田中　勇採集　—中止々呂美, 2 頭, 21. VI. 1987, 岩田厚子採集 [岩田隆太郎蔵]

箕面市初記録である．当地近傍の茨木市には多産する．

(15)　アトジロサビカミキリ　*Pterolophia zonata* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 26. VI. 1915, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]　—箕面公園, 1 頭, 21. V. 1967, 西川芳太郎採集　—箕面 [箕面 6 丁目], 1 頭, 5. VI. 1955, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 1頭, 28, V. 1983, 和田洋介採集　—中止々呂美, 1♂1♀, 19. V. 1985, 山下俊一採集　—西之所, 西山口, 2 頭, 27. V. 1966, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

[文献：竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('78; '82)]

(16)　クリサビカミキリ　*P. castaneivora* OHBAY. & HAY.

—下止々呂美, {4 頭, IV. 1977 (クリ枯枝), 12. V. 1977 脱出, 松田 潔採集; 1♀, 27. VI. 1981, 山下 晶採集} —中止々呂美, {2 頭, 21. VII. 1979, 八木正道採集; 11 頭, 5. VI. 1983, 和田洋介採集}

府下では箕面市大字下止々呂美に多産する他は, 豊能町, 能勢町でわずかな採集例が見られるにすぎない.

[文献: 八木 ('81)]

(17) ヒメナガサビカミキリ *P. leiopodina* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 10. VI. 1945, 小田覚造採集 [大阪自博蔵] —箕面, 鉢伏山, 1 頭, 13. VI. 1954, 木船悌嗣採集 [岩田隆太郎蔵] —箕面 [箕面 6 丁目], 1 頭, 30. V. 1960, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 8 頭, IV. 1977 (クリ枯枝), 12 頃. V. 1977 脱出, 松田 潔採集 —中止々呂美, 1 頭, 7. VII. 1979, 八木正道採集 —上止々呂美, 上之所, 1 頭, 20. V. 1984, 和田洋介採集 —西之所, 1 頭, 5. VI. 1966, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

[文献: 仲田 ('78); 仲田 ('82) (*P. angusta* ヒメナガサビカミキリとして)]

(18) マルモンサビカミキリ *P. angusta* (BAT.)

筆者等は標本未検. 当地の他, 府下一帯に採集例が散在するようであるが, 個体数は同属の他の種に比べてはるかに少ない.

[文献: 大倉他 ('65; '67)]

(19) アトモンサビカミキリ *P. granulata* MOTSCH.

—平尾 [箕面], 1 頭, 20. VII. 1937, 谷口和義採集 [大阪自博蔵] —勝尾寺, 1 頭, 25. IV. 1965, 西川芳太郎採集 —青貝山, 東ノ谷, 14 頭, 26. V. 1968, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 1 頭, 11. X. 1981, 岩田隆太郎採集 —西之所, 西山口, 2 頭, 27. V. 1966, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵] —白島, 谷山谷, 1 頭, 3. V. 1973, 西川芳太郎採集 —豊川村, 粟生 [箕面市, 粟生間谷], 勝尾寺口, 1 頭, 15. IV. 1951, 松本清視採集 [大阪自博蔵]

[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32) (以上 *P. rigida* シリジロサビカミキリとして); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('78; '82)]

(20) トガリシロオビサビカミキリ *P. caudata* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 25. VI. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面公園, 1 頭, 22. VI. 1986, 山下俊一採集 —下止々呂美, 1♀, 27. VI. 1981, 山下 晶採集 —中止々呂美, 2 頭, 5. VII. 1975, 八木正道採集

[文献: 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 岸 ('67)]

(21) ナカジロサビカミキリ *P. jugosa* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 10. XI. 1931, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面, 政ノ茶屋, 1 頭, 17. IX. 1972, 西川芳太郎採集 —青貝山, 東ノ谷, 1 頭, 26. V. 1968, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 1 頭, 19. VII. 1974, 東 浩司採集 —西之所, 1 頭, 9. VI. 1984, 平野雅親採集

[文献: 戸澤 ('32); 林 ('55); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(22) ワモンサビカミキリ *P. annulata* (CHEVR.)

—箕面 [箕面 2 丁目], 1 頭, 14. V. 1960, 西川芳太郎採集 —箕面 6 丁目, 1 頭, 26. VII. 1973, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 光ケ谷, 1 頭, 20. VI. 1984, 和田洋介採集 —西之所, 4 頭, 9. VI. 1984, 平野雅親採集

箕面市初記録である.

(23) クワサビカミキリ *Mesosella simiola* BAT.

—平尾 [箕面], {1 頭, 20. VI. 1922, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]; 1 頭, 22. VII. 1945, 関　公一採集 [大阪自博蔵]} —下止々呂美, 2 頭, 10. VI. 1982, 越智輝雄採集
[文献: 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82)]

(24) ハイイロヤハズカミキリ *Niphona furcata* (BAT.)

—平尾 [箕面], {1 ♀, 11. VI. 1918, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]; 1 頭, 19. VII. 1931, 小林桂助採集 [大阪自博蔵]} —船場西, 1 頭, 12. V. 1979, 金谷康弘採集 [和田洋介蔵]
[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(25) ヒメコブヤハズカミキリ *Parechthistatus gibber* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 ♂, 2. VI. 1935, 関　公一採集 [大阪自博蔵] —高山道, 1 ♂, 4. IX. 1977, 小島一郎採集 —箕面, 政ノ茶屋, {1 ♀, 22. VIII. 1950, 横山　創採集; 3 ♂♂, 30. V. 1981, 小島一郎採集} —勝尾寺, {1 ♀, 11. X. 1981, 岩田隆太郎採集; 4 ♂♂, 19. V. 1983, 越智輝雄採集 [松田　潔蔵]}

大阪府北部における採集例は当地の他, 豊能町, 能勢町, 茨木市に限られ, しかも分布はきわめて局地的で,「分布域」というよりはむしろ「ポイント」といった様相を呈する. また当地および豊能町におけるこれまでの採集例は, 次種との競合, 棲み分けを示唆している.

大倉他 ('65; '67) の報告では勝尾寺西側が採集地点として図示されている.

[文献: 戸澤 ('33) (コブヤハズカミキリ (ヒシカミキリ) として); 横山 ('37) (コブヤハズカミキリとして); 中條・林 ('51); 中根他 ('56); 大倉他 ('65; '67); 高桑 ('76; '78); 三宅 ('80)]

(26) マヤサンコブヤハズカミキリ *Mesechthistatus furciferus* (BAT.)

—勝尾寺, 1 ♀, 24. VII. 1973, 浦田和義採集

HAYASHI ('51) は本種の 1 亜種 *meridionalis* ("*Echthistatus binodosus m.*") の記載において, そのパラタイプ ("allotype") を "Minoo Park, Ôsaka-Pref." 産とし, 後に大倉他 ('65; '67) はこれを引用して, "*M. f. meridionalis* ミヤマコブヤハズカミキリ" が箕面山に産するとした. しかし後に HAYASHI ('83) はこのラベルを誤りとした. 本種とおぼしきものが当地に産するとする小林 ('32) の記述は既に関 ('35c) が取り消しており, これらのことから当地に本種が分布するとの考えは一般にはもはや流布せざる所となった. しかし意外にも, やはり本種は当地に産していた. 本種は, 府下からは他に, 豊能町初谷及び妙見山での採集例 (大垣採集) を知るのみである.

[文献: 小林 ('32) (*Echthistatus binod[o]sus* フタコブカミキリとして)]

(27) イタヤカミキリ *Mecynippus pubicornis* BAT.

筆者等は標本未検. 終戦直後の時点で本種は府下では当地と府南部岩湧山北麓の 2 ヵ所が産地として知られていたが, 両地はもとより府下からその後まったく採集例がなく, 絶滅が危惧される.

[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32); 大倉他 ('65; 67)]

(28) ヒゲナガカミキリ *Monochamus grandis* WATERH.

筆者等は標本未検. 最近高槻市北部にて本種が得られており, 当地に今も産することはほぼ確実である. 戸澤 ('32) の報告に本属の大型種 2 種の名が挙げられているのは, 本種の ♂ と ♀ を意味するものと思われる.

[文献: 戸澤 ('32) (*M. g.* ヒゲナガクロカミキリとして, および *M. sartor* シラフヨツボシカミキリとして); 東 ('65) (ヒゲナガクロカミキリとして)]

(29) カラフトヒゲナガカミキリ *M. saltuarius* (GEBLER)

—中止々呂美, 1 ♂, 9. VI. 1968, 八木正道採集

府下での分布域は広いが, 個体数は少ない.

[文献: 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82)]

(30) マツノマダラカミキリ *M. alternatus* Hope

—平尾 [箕面], 1♂, 17. VII. 1936, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面公園, 1♂4♀♀, 5. V. 1986 (アカマツ枯幹), 2-25. VI. 1986 脱出, 山下俊一採集 —勝尾寺, 1 頭, 29-30. VIII. 1966, 伊藤修四郎他採集 [大府大昆虫研蔵] —下止々呂美, 1 頭, 4. VII. 1973, 田中 勇採集

[文献: 小林 ('32) (*M. tesserula* マダラカミキリとして); 大倉他 ('65; '67); 伊藤他 ('66); 岸 ('67); 仲田 ('82)]

(31) ヒメヒゲナガカミキリ *M. subfasciatus* (Bat.)

—平尾 [箕面], 1♀, 6. VI. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面 [箕面 6 丁目], 1♀, 14. VIII. 1961, 西川芳太郎採集 —勝尾寺, 1 頭, 24. II. 1985 (ジャケツイバラ枯幹), 15. V. 1987 脱出, 岩田隆太郎採集 —下止々呂美, 1 頭, 28. V. 1983, 和田洋介採集 —中止々呂美, 1♂, 29. V. 1983, 八木正道採集 —西之所, 1♀, 20. VI. 1979, 塩崎明生採集

[文献: 戸澤 ('32) (ヒメヒゲナガカミキリ, およびスズキヒゲナガカミキリとして); 小林 ('32); 戸澤 ('33); 東 ('65) (以上 2 件スズキヒゲナガカミキリとして); 大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82)]

(32) ゴマダラカミキリ *Anoplophora malasiaca* (Thoms.)

—箕面, 一ノ橋付近, 1♀, 29. VIII. 1957, 西川芳太郎採集 —高山道, 1♀, 27. VIII. 1967, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 1♂, 19. VII. 1970, 八木正道採集 —西之所, 1♂, 3. VII. 1966, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵] —白島 [白島 3 丁目], 1♂, 17. VII. 1966, 西川芳太郎採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 岸 ('67); 西川 ('77); 仲田 ('78; '82)]

(33) センノキカミキリ *Acalolepta luxuriosa* (Bat.)

—平尾 [箕面], 1♀, VII. 1936, 谷口和義採集 [大阪自博蔵]

当地のもので検し得たのは戦前のこの 1 例のみであるが, 戦後の目撃例 (高山道, 西川) がある. 府下では山間部, 丘陵部に広く分布している.

[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32) (以上 *Dihammus luxuriosus* センノカミキリとして); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(34) ビロウドカミキリ *A. fraudatorix* (Bat.)

—平尾 [箕面], 1♀, 16. VII. 1931, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —箕面 [箕面 6 丁目], 1♂, 15. VII. 1960, 西川芳太郎採集 —箕面, 三国ヶ丘, 1♂, 18. VI. 1967, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 光ヶ谷, 1♀, 1. VIII. 1971, 西川芳太郎採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); Matsushita ('33) (以上 *Dihammus cervinus* として); 大倉他 ('65; '67)]

(35) ニセビロウドカミキリ *A. sejuncta* (Bat.)

—箕面公園, 1♀, 16. VII. 1972, 東 浩司採集 —下止々呂美, 1♂, 27. VI. 1981, 山下 晶採集

[文献: 大倉他 ('65; '67)]

(36) ヤハズカミキリ *Uraecha bimaculata* Thoms.

—箕面駅～箕面ノ滝, 1 頭, 3. X. 1982, 竹本卓哉採集 [大阪自博蔵] —箕面, ドライブウェイ, 1 頭, 13. VII. 1985, 山下俊一採集 —下止々呂美, 6♂♂3♀♀, 27. VI. 1981, 山下 晶採集 —中止々呂美, 4♂♂2♀♀, 10. VII. 1982, 八木正道採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(37) キボシカミキリ *Psacothea hilaris* (Pasc.)

—箕面, 1 頭, 26. VII. 1966, 望月寛人採集 —平尾 [箕面 2 丁目], 1♂, 19. IX. 1949; 1♂7♀♀,

16. VI. 1950}, 西川芳太郎採集　—箕面 [箕面 6 丁目], 1♂, 28. VI. 1957, 西川芳太郎採集
[文献: 戸澤 ('32) (キボシカミキリおよびスズキカミキリとして); 大倉他 ('65; '67)]

(38)　ホシベニカミキリ　*Eupromus ruber* (DALMAN)

筆者等は標本未検. 戦前に当地で得られたとされているが, 現在も棲息しているかどうかは不明.
[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(39)　チャボヒゲナガカミキリ　*Xenicotela pardalina* (BAT.)

—高山道, 1 頭, 17. VI. 1956, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 2♂♂ 4♀♀, 30. V. 1971, 松田　潔採集　—中止々呂美, 1♂ 1♀, 10. VII. 1982, 八木正道採集
[文献: 大倉他 ('67); 八木 ('81); 仲田 ('82)]

(40)　クワカミキリ　*Apriona japonica* THOMS.

—箕面～勝尾寺, 3 頭, 28. VIII. 1975, 有本久之採集　—中止々呂美, 2♂♂ 2♀♀, 21. VII. 1979, 八木正道採集　—半町, 3 頭, 24. VII. 1983, 和田洋介採集
[文献: 竹内 ('30) (*A*[*p*]*riona rugicollis* クハカミキリとして); 戸澤 ('32) (*A. rugicollis* として); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(41)　シロスジカミキリ　*Batocera lineolata* CHEVR.

—箕面ノ滝～勝尾寺, 1♀, 13. VIII. 1962, 山下　晶採集　—箕面駅, 1♂, 30. V. 1963, 西川芳太郎採集　—中止々呂美, 2♀♀, 20. VI. 1982, 八木正道採集
[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(42)　オオシロカミキリ　*Olenecamptus cretaceus* BAT.

—箕面ノ滝, {2♀♀, 3. III. 1982 (ケヤキ枯枝), 14. VI. 1982 脱出, 北山　昭採集; 2♂♂, XII. 1982 (枯幹), 7. VI. 1983 脱出, 田中　勇採集}
[文献: 白井 ('39); 東 ('65) (セジロカミキリとして); 大倉他 ('65; '67)]

(43)　セミスジコブヒゲカミキリ　*Rhodopina lewisii* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1♀, 25. VI. 1916, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]　—清水谷, 1♂, 23. VIII. 1977, 和田洋介採集　—下止々呂美, 1♀, 7. VI. 1970, 松田　潔採集　—中止々呂美, 1♂ 1♀, 10. VII. 1982, 八木正道採集

大倉他 ('65; '67) の報告では, 箕面公園南東側が本種の採集地点として図示されている.
[文献: MATSUSHITA ('33) (*Rhodopis lewisi* として); 関 ('35c); 大倉他 ('65; '67) (以上 *Rhodopis lewisi* セミスジカミキリとして); 八木 ('81)]

(44)　マルバネコブヒゲカミキリ　*Rhodopina integripennis* (BAT.)

—箕面, 政ノ茶屋, 1 頭, 13. VII. 1986, 大垣　誠採集　—勝尾寺, 1 頭, 6. VI. 1980, 大垣　誠採集
箕面市初記録である.

(45)　フタオビアラゲカミキリ　*Rhopaloscelis bifasciatus* KRAATZ

—下止々呂美, 1 頭, 9. VII. 1978, 平野雅親採集
[文献: 仲田 ('82); 平野 ('86)]

(46)　ヒトオビアラゲカミキリ　*R. unifasciatus* BLESS.

—平尾 [箕面], 2 頭, 30. V. 1940, 谷口和義採集 [大阪自博蔵]　—高山道, 1 頭, 29. IV. 1955, 西川芳太郎採集　—勝尾寺, {1 頭, 11. X. 1981, 岩田隆太郎採集; 1♂, 3. VI. 1984, 山下俊一採集}　—中止々呂美, 3 頭, 29. IV. 1985, 和田洋介採集　—上止々呂美, 梅ケ谷, 1 頭, 12. VII. 1954, 木船悌嗣採集 [岩田隆太郎蔵]

[文献：仲田 ('82)]

(47) カッコウカミキリ *Miccolamia cleroides* BAT.

戦前に当地で得られたとされるが，筆者等は標本未検．かつてヒシカミキリと混同されていたが，下に掲げた文献はこの両方の名を挙げているので，おそらく誤りはないものと思われる．

[文献：小林 ('32); MATSUSHITA ('33); 関 ('35c); 大倉他 ('65; '67)]

(48) ドイカミキリ *Mimectatina divaricata* (BAT.)

戦前に小田覚造氏により当地で得られたようであるが，筆者等は標本未検．府北部の山地の最近の採集例があるので，当地に今も分布していよう．

(49) コゲチャサビカミキリ *M. meridiana* (MATS.)

—桜，1♀，24. IX. 1975，金谷康弘採集 [和田洋介蔵]

南方系の種であり，偶産記録と考えてさしつかえなかろうが，採集地点の近辺には，沖縄等へ赴き材採集するカミキリムシ愛好家や，木材，植物を取り扱う業者等はいっさい存在せず，その侵入経路はまったくもって不明である．

(50) イボタサビカミキリ *Sophronica obrioides* (BAT.)

—中止々呂美，1 頭，22. VI. 1985，八木正道採集

箕面市初記録である．

(51) ヒメシラオビカミキリ *Pogonocherus fasciculatus hondoensis* OHBAY.

—中止々呂美，1♂，7. VI. 1981，八木正道採集

[文献：八木 ('81); 穂積 ('82); 仲田 ('82)]

(52) ネジロカミキリ *P. seminiveus* BAT.

—平尾 [箕面]，1 頭，25. X. 1936，谷口和義採集 [大阪自博蔵] —下止々呂美，1 頭，9. V. 1982，平野雅親採集

[文献：竹内 ('30); 関 ('35c); 大倉他 ('65; '67)]

(53) スジマダラモモブトカミキリ *Acanthocinus griseus orientalis* OHBAY.

—箕面，1 頭，22. VI. 1969，和田洋介採集 —平尾 [箕面 2 丁目]，1♀，3. IX, 1946，西川芳太郎採集 —小野原，1 頭，18. VI. 1980，熊飼，T. 採集 [木村 豊蔵]

箕面市初記録である．府下では山地に広く分布している．

(54) ガロアケシカミキリ *Exocentrus galloisi* MATS.

—平尾 [箕面]，1 頭，15. VII. 1916，竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵] —下止々呂美，10 頭，IV. 1977 (クリ枯枝)，12 頃．V. 1977 脱出，松田 潔採集 —中止々呂美，5 頭，12. VI. 1983，和田洋介採集 —西之所，1 頭，11. VII. 1969，仲田元亮採集 [大阪自博蔵]

当地からは戦前の小田覚造氏による採集例があるが，事実上箕面市初記録である．

(55) アトモンマルケシカミキリ *E. lineatus* BAT.

—如意谷 3 丁目，1 頭，14. VI. 1987，岩田隆太郎採集 —下止々呂美，1 頭，27. VI. 1981，山下 晶採集 —中止々呂美，{2 頭，7. VII. 1979，八木正道採集；6 頭，12. VI. 1983，和田洋介採集} —西之所，1 頭，11. VII. 1969，中川眞次採集 [大阪自博蔵]

[文献：大倉他 ('65; '67); 仲田 ('82)]

(56) クモガタケシカミキリ *E. fasciolatus* BAT.

—下止々呂美，2 頭，21. VII. 1974，東 浩司採集 —中止々呂美，{1 頭，5. VII. 1975，八木正道採集；1 頭，21. VI. 1987，岩田隆太郎採集}

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(57)　シラオビゴマフケシカミキリ　*E. guttulatus* BAT.

—勝尾寺, 1 頭, 24. VI. 1984, 山下俊一採集　—中止々呂美, 1 頭, 10. VII. 1982, 八木正道採集

[文献：大倉他 ('65; '67)]

(58)　ケシカミキリ　*Sciades tonsus* (BAT.)

—下止々呂美, 9 頭, 5. VI. 1983, 和田洋介採集　—中止々呂美, {20 頭, 26. VI. 1983, 和田洋介採集; 19 頭, 21. VI. 1987, 岩田隆太郎採集}

府北部山地には多く，特に当地の旧止々呂美村地区のクリ畑には多産する．

[文献：八木 ('81); 仲田 ('82)]

(59)　ルリカミキリ　*Bacchisa fortunei japonica* (GAHAN)

—箕面 6 丁目, 1♂1♀, 14. V. 1985, 西川芳太郎採集　—中止々呂美, 1 頭, 29. V. 1983, 八木正道採集

[文献：戸澤 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(60)　ムネモンヤツボシカミキリ　*Saperda tetrastigma* BAT.

戦前に当地で得られたとされているが，筆者等は標本未検．大倉他 ('65; '67) の報告では本種の採集地点として現在の豊能町高山の区域内を図示しており，あるいは箕面市域内の採集例は存在しないのかもしれない．しかし本種の異名に「ミノモムツボシカミキリ」(次節 3. 参照) というのがあり，にわかには本種を当地のリストからは外し難い．

[文献：関 ('35c; '35d; '36c); 東 ('65) (以上 *Cagosima jezoana* ミノモムツボシカミキリとして); 大倉他 ('65; '67)]

(61)　シナカミキリ　*Eutetrapha sedecimpunctata* (MOTSCH.)

戦前に当地で得られたとされているが，筆者等は標本未検．あるいは他の種，例えば次種の誤認の可能性がある．府下では当地に産するとした文献記録以外には，いっさい採集例も記録もない．

[文献：戸澤 ('32) (*E. va*[*rii*]*cornis* として); 大倉他 ('65; '67) (以上 *E. variicornis* として)]

(62)　ヤツメカミキリ　*E. ocelota* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 10. VII. 1937, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—平尾 [箕面公園], 1♀, 1. VII. 1945, 後藤光男採集 [八木正道蔵]　—勝尾寺, 1 頭, 11. VII. 1984, 山下俊一採集

[文献：竹内 ('30); MATSUSHITA ('33); LEWIS ('39); 戸沢 ('65); 大倉他 ('65; '67)]

(63)　ハンノアオカミキリ　*E. chrysochloris* (BAT.)

筆者等は標本未検．府下からは当地に関する下記文献以外には，いっさい記録も採集例もない．

[文献：戸澤 ('32); 東 ('65); 大倉他 ('65; '67)]

(64)　ニセシラホシカミキリ　*Pareutetrapha simulans* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 18. VI. 1933, 関　公一採集 [大阪自博蔵]　—高山道～箕面公園, 1♂, 10. VI. 1973, 八木正道採集

[文献：関 ('35b; '35c); 鈴木・瀧口 ('35) (以上 *Glenea daisenensis* ダイセンカミキリとして); 木村 ('36); 東 ('65) (以上ダイセンカミキリとして); 大倉他 ('65; '67) (以上ダイセンカミキリ＝ヒメキクスイカミキリとして)]

(65)　ハンノキカミキリ　*Cagosima sanguinolenta* THOMS.

—箕面公園, 1 頭, 15. VI. 1958, 港野尚武採集 [倉田道夫蔵]　—如意谷, 才ケ原林道, 5♂♂1♀, 25. III. 1987 (ヤシャブシ生幹), 16. V. 1987 脱出, 和田洋介採集　—外院 3 丁目, {2♂♂4♀♀, 12. VI.

1984, 和田洋介採集; 1♂1♀, 15. V. 1985, 山下俊一採集〕

[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32); 大倉他 ('65; '67)]

(66) ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* (SAUND.)

—箕面, 1♀, 3. VII. 1965, 畑山武一郎採集 [岩田隆太郎蔵] —箕面, 清水谷, 1♀, 23. VII. 1961, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 光ケ谷, 1♂2♀♀, 8. VII. 1979, 西川芳太郎採集 —中止々呂美, 27頭, 12. VI. 1983, 和田洋介採集 —西之所, 1頭, 30. VI. 1967, 仲田元亮採集 [大阪自博蔵] —石澄, 2♀♀, 3. VII. 1983, 和田洋介採集

大倉他 ('65; '67) 及び戸沢 ('65) は箕面ノ滝東側と天上谷を産地として挙げ, もしくは図示.

本種は移入種にして, 当地での定着は 1950 年代中頃と推察される.

[文献: 生谷 ('57); 戸沢 ('65); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('66a; '66b; '77); 岸 ('67); 仲田 ('78; '82); 日浦 ('79)]

(67) キモンカミキリ *Menesia sulphurata* (GEBLER)

—粟生間谷, 奥 (土場), 1頭, 4. VII. 1976, 大垣 誠採集

[文献: 大倉他 ('65; '67)]

(68) シラホシカミキリ *Glenea relicta* PASC.

—平尾 [箕面], 1頭, 19. VI. 1932, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —青貝山, 東の谷, 1頭, 26. V. 1968, 西川芳太郎採集 —勝尾寺, 1頭, 21. VII. 1980, 大垣 誠採集 —下止々呂美, 光ケ谷, 1頭, 26. VI. 1983, 和田洋介採集 —中止々呂美, 6♂♂1♀, 19. V. 1985, 和田洋介採集

[文献: 戸澤 ('32); 小林 ('32); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(69) シラホシキクスイカミキリ *Eumecocera gleneoides* (GRESS.)

—粟生間谷 (北), 2頭, 1980? (*Rhus* sp.? 枯枝), 29. V. -7. VI 頃. 1980 脱出, 大垣 誠採集

大阪府初記録である.

(70) セミスジニセリンゴカミキリ *E. trivittata* (BREUN.)

—下止々呂美, 1頭, 15. II. 1985 (クリ枯幹), 17. IV. 1985 脱出, 和田洋介採集

大阪府初記録である. 府下では他に 2〜3 の採集例が見られる.

(71) クロニセリンゴカミキリ *E. unicolor* (KANO)

—勝尾寺, 1頭, 22. V. 1985, 大垣 誠採集

府下からは既に報告したこの 1 例のみである.

[文献: 岩田 ('85)]

(72) キクスイカミキリ *Phytoecia rufiventris* GAUT. D. COTT.

—平尾 [箕面], 1頭, 17. V. 1917, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵] —箕面 [箕面 6 丁目], 7頭, 29. IV. 1956, 西川芳太郎採集 —青貝山, 1頭, 26. V. 1968, 西川芳太郎採集 —下止々呂美, 3頭, 31. V. 1970, 八木正道採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(73) ヨツキボシカミキリ *Epiglenea comes* BAT.

—平尾 [箕面], 1頭, 7. VI. 1933, 関 公一採集 [大阪自博蔵] —高山道, 1頭, 8. VII. 1973, 西川芳太郎採集 —勝尾寺, 1♂1♀, 24. VI. 1984, 山下俊一採集 —下止々呂美, 光ケ谷, 1頭, 26. VI. 1960, 西川芳太郎採集 —上止々呂美, 梅ケ谷, 1頭, 12. VII. 1954, 木船悌嗣採集 [岩田隆太郎蔵]

[文献: 小林 ('32); 林 ('55); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77)]

(74) ヘリグロリンゴカミキリ *Nupserha marginella* (BAT.)

—平尾 [箕面], 1 頭, 26. VI. 1917, 竹内吉蔵採集 [大府大昆虫研蔵]　—箕面, ドライブウェイ, 1 頭, 13. VII. 1985, 山下俊一採集　—高山道, 1 頭, 27. VI. 1957, 西川芳太郎採集　—勝尾寺, 1 頭, 7. VII. 1985, 山下俊一採集　—下止々呂美, 1 頭, 6. VII. 1969, 八木正道採集　—中止々呂美, 1 頭, 10. VII. 1982, 八木正道採集

[文献: 竹内 ('30); MATSUSHITA ('33); 大林 ('36); LEWIS ('39) (以上 *Oberea marginella* として); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(75)　ヒメリンゴカミキリ　*Oberea hebescens* BAT.

—箕面, 1 頭, 16. VI. 1976, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]　—箕面 6 丁目, 1 頭, 11. VII. 1972, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 1 頭, 20. VI. 1982, 松田　潔採集

[文献: 小林 ('32); 大倉他 ('67)]

(76)　リンゴカミキリ　*O. japonica* (THUNB.)

—箕面, 1 頭, 10. VI. 1974, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]　—箕面 [箕面 2 丁目], 1 頭, 10. VI. 1960, 西川芳太郎採集　—勝尾寺, 1 頭, 11. VII. 1984, 山下俊一採集　—西之所, 1 頭, 20. VI. 1979, 塩崎明生採集

[文献: 竹内 ('30); 戸澤 ('32); MATSUSHITA ('33); 大林 ('36); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77); 仲田 ('82)]

(77)　ソボリンゴカミキリ　*O. sobosana* OHBAY.

—箕面, 1 頭, 20. VI. 1984, 斎藤寿久採集 [箕面昆虫館蔵]　—箕面, 政ノ茶屋, 1 頭, 1. VI. 1977, 大垣　誠採集　—勝尾寺, 1 頭, 20. V. 1987, 大垣　誠採集

大阪府からの初の確実な記録である. 西川 ('77) は本種を当地から報告したが, その報告のもととなった標本 3 例のうち, 1 例はヒメリンゴ, 1 例はニセリンゴカミキリであり, 残りの 1 例 (高山道) は現存せず正体不明, したがってこれは疑問記録とするべきものである. しかし本種は当地に隣接する池田市の東山町に多産し, さらに府下の他の地域でも若干得られており, 分布は低山地～丘陵地に及ぶ.

(78)　ニセリンゴカミキリ　*O. mixta* BAT.

—箕面 [箕面 2 丁目], 1 頭, 14. VI. 1959, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 光ケ谷, 1 頭, 26. VI. 1983, 和田洋介採集　—中止々呂美, 1 頭, 21. VI. 1987, 岩田厚子採集 [岩田隆太郎蔵]

箕面市初記録である.

(79)　ホソキリンゴカミキリ　*O. inclusa infranigrescens* BREUN.

—平尾 [箕面], 1 頭, 11. VIII. 1931, 松下眞幸採集 [北大昆虫研蔵]　—箕面 3 丁目, 1 頭, 13. VI. 1971, 西川芳太郎採集　—高山道, 1 頭, 15. VI. 1958, 西川芳太郎採集　—東坊島 [如意谷], 才ケ原谷, 1 頭, 1. VI. 1969, 西川芳太郎採集　—下止々呂美, 光ケ谷, 1 頭, 26. VI. 1960, 西川芳太郎採集　—西之所, 1 頭, 9. VI. 1984, 平野雅親採集

[文献: 大林 ('36) (以上 *O. vittata* ホソキカミキリとして); 大倉他 ('65; '67); 西川 ('77) (以上 *O. vittata* ホソキリンゴカミキリとして)]

3. 地名について

本稿でいう「箕面市」の範囲及びその呼称について一言ふれておきたい. それは, 箕面の昆虫 (カミキリムシを含む) に関しては周知のごとく実に多数の文献があるが, それらを引用するについて, また現存する古い標本のラベルに記されている地名について, それらの中で従来用いられている「箕面」の範囲が明確でなく, 現在の「箕面市」のそれと矛盾するところがあるのではないかという懸念があ

るからである．もちろん筆者等もこの点について無配慮ではあり得ない．本稿に使用した標本や文献記録は可能な限り現在の箕面市内に限定したつもりではあるが，一部問題のあるものもないではない．

以下その事情と「箕面」の行政的変遷についてふれておきたい．

当地の商業，観光および採集の中心地である「箕面 1～8 丁目」，「大字箕面」，「大字箕面公園」，「温泉町」はかつては大阪府豊島郡平尾村大字平尾であった．1889 年 (明治 22 年) 4 月の時点で現在の大阪府箕面市は次のような行政区画となっていた．

○豊島郡箕面村 (全域) {平尾/西小路/牧落/桜/桜井/半町/瀬川/新稲}
○豊島郡萱野村 (全域) {如意谷/東坊島/西坊島/白島/石丸/稲/芝/西宿/今宮}
○豊島郡止々呂美村 (全域) {上止々呂美/下止々呂美}
○三島郡豊川村 (一部) {粟生 (粟生外院/粟生新家/粟生間谷)/小野原}

1896 年，豊島郡が合併により豊能郡と改称．1948 年 1 月箕面村は町制を敷き，箕面町に変更．同年 8 月萱野村全域と止々呂美村全域は箕面町に吸収合併され，さらに 1952 年，大字平尾は大字箕面と改称，大字牧落より百楽荘が誕生．1956 年 12 月豊能郡箕面町が市制施行にて箕面市となり，ほぼ同時に三島郡豊川村の粟生と小野原を編入して粟生を {粟生外院/粟生新家/粟生間谷} に分割．その後，大字桜と大字半町のそれぞれ一部より大字桜ヶ丘が誕生．さらにその後の住居表示改正の動きにより，これらの大字より現在の箕面 1～8 丁目，温泉町，船場東 1～3 丁目，船場西 1～3 丁目，等が分離し，その他の多くの地域がその宅地密集部のみにつき，大字を廃して「丁目」を付すようになった．

本稿および標本ラベルにはこの他多くの地名が登場するが，そのうち代表的なものについて，その現大字または旧大字との対照を次にまとめておく．

○大字平尾 (箕面)：箕面公園，滝安寺，箕面滝，政の茶屋，天上谷，高山道，清水谷
○大字新稲：六個山，石澄ノ滝，石澄川東岸
○大字如意谷：才ヶ原谷，才ヶ原池
○大字白島：谷山谷
○大字上止々呂美：上ノ所，鉢伏山，青貝山 (東部)
○大字下止々呂美：中止々呂美，西ノ所，光ヶ谷
○大字粟生間谷：勝尾寺，最勝ヶ峰，勝尾寺川，奥

さて，「箕面」の地名であるが，例えば大倉他 ('65; '67) による「箕面山の動物相調査」では，この「箕面山」の範囲を，現在の箕面市大字箕面の大部分，箕面市箕面公園，箕面 8 丁目，温泉町はもとより，箕面市大字如意谷，大字白島，大字外院 (北部)，大字粟生間谷 (西部)，大字上止々呂美 (南部)，さらには驚くべきことに，茨木市泉原 (西部)，豊能郡豊能町高山，同木代 (南部) までをも含むものとし，しかもこれには箕面市大字箕面六個山や同大字下止々呂美は含まれていない．したがってこの文献に関する限り厳密には箕面市の範囲外の記録も含み，本稿に引用され得ないということになる．しかしそのうち箕面市外のものは僅少との判断のもとに，本稿ではこれをあえて引用している．もしこの範囲が，その当時までの昆虫採集家のいわゆる「箕面」あるいは「箕面山」の範囲を反映しているものであるならば，他の多くの文献に見られる「箕面」も，その範囲を再検討せざるを得ないこととなる．しかし今となってはそれは不可能である．結局のところ「箕面」なる地名が徐々に一般的なものとなって来る過程で，現在の認識とは異なった範囲に当てられていたことがあったことを示すものと考えられる．

なおかつては箕面の域外にあったが現在では「箕面市」域の中にカバーされるものとして「勝尾寺」が，かつては箕面村または箕面町の域外にあったにもかかわらず上述の文献のように「箕面」あるい

は「箕面山」に含められ，現在でも「箕面市」域には入らないものとして重要なものに「高山」がある．さらに，「止々呂美」と呼ばれる範囲の一部にも問題がなくはない．すなわち万葉仮名の優雅な名のこの地は，余野川西側の青貝山～長尾山を結ぶ線を他所（豊能郡旧吉川村，池田市伏尾，等）との境界としているが，昔時はもっと広い山林も含めて「止々呂美」とされていた可能性がある．個々の文献記録や標本ラベルの記述につき，このような問題を詳細に再調査することは現時点ではほとんど不可能に近い．

次に「箕面」の読み方．1187 年頃の古文書には当地は「みのお‥」と記され，他に「みのを‥」と歌う古歌もあると聞く．また 1579 年頃の古文書では「箕尾」と記されているという．思うに古来「みのお」の発音が先で，箕尾・蓑尾などの字は後にあてられたもののようである．しかるに昆虫，特にカミキリムシの命名ではミノモトラカミキリ（関・末松，'35: キンケトラカミキリのこと），ミノモサビカミキリ（関，'35c: コブスジサビカミキリのこと），ミノモムツボシカミキリ（関，'36c; 他: ムネモンヤツボシカミキリのこと）という風に奇妙にも「みのも」としたものが見受けられる．これらは「箕面」の文字を擬懐古的にかつ誤謬的に訓じた結果と考えられ，そのこともあって現在ではこれらの和名は廃されている．ここに改めて「みのお」が正しいことを強調しておきたい．

4. 引 用 文 献

東　正雄，1965．京阪神の動物，pp. 109–150. 六月社.
中條道夫・林　匡夫，1951．宝塚昆虫館報，(78): 1–14.
藤村俊彦，1957．新昆虫，**10**(3): 12–21.
後藤光男，1947．近畿甲虫同好会会報，**2**(1): 3.
林　匡夫，1944．関西昆虫学会々報，**14**(1): 22–29.
——— 1949．昆虫学評論，**1**(2): 29–33.
——— 1955．原色日本昆虫図鑑，甲虫編（近畿甲虫同好会編），pp. 19–76, pls. 9–27. 保育社.
——— 1961．原色日本昆虫図鑑，甲虫編，増補改訂版（日本甲虫学会編），pp. 132–190, pls. 41–59, 保育社.
HAYASHI, M., 1951．*Ent. Rev. Japan*, **5**(2): 75–82.
——— 1959．*Ent. Rev. Japan*, **10**(1): 4.
——— 1983．*Bull. Osaka Jonan Women's Jr. Coll.*, **16**: 29–44, pl. 1.
林　匡夫・伊賀正汎，1944．昆虫世界，**48**(567): 126–129.
HEYDEN, L., 1879．*Dt. ent. Z.*, **23**(2): 321–365.
平野雅親，1986．月刊むし，(182): 40–41.
平山修次郎，1937．虫の世界，**1**(9/10): 13.
——— 1940．原色甲虫図譜．三省堂.
日浦　勇，1978．大阪市立自然史博物館展示解説，(4): 53–54.
——— 1979．*Nature Study*, **25**(8): 93.
穂積俊文，1982．月刊むし，(135): 12–13.
生谷義一，1957．新昆虫，**10**(4): 54.
伊藤修四郎ほか，1966．箕面勝尾寺附近の生物生態調査報告書，pp. 15–45.
岩田隆太郎，1985．月刊むし，(178): 33–34.
———・石井正雄，1986．月刊むし，(180): 42.
木村輝夫，1936．関西昆虫雑誌，**4**(2): 47.
木村欣二，1968．甲虫ニュース，(3): 3.
岸　博幸，1967．箕面の自然，その生態学的基礎研究（水野寿彦・水野信彦共編），pp. 67–75.
小林賢三，1932．関西昆虫学会々報，(3): 73–79.
小島圭三・林　匡夫，1969．原色日本昆虫生態図鑑 I. カミキリ編．保育社.
草間慶一，1959．新しい昆虫採集（下）（京浜昆虫同好会編），pp. 361–460. 内田老鶴圃新社.

草間慶一, 1965. 新しい昆虫採集 (下), 増補新版 (京浜昆虫同好会編), pp. 361–488. 内田老鶴圃新社.
——— 1973. 新しい昆虫採集案内 (III) (京浜昆虫同好会編), 付 pp. 1–160. 内田老鶴圃新社.
LEWIS, J. E. A., 1939. *Kansai Konchû Zasshi*, **5**(3): 112–116.
MATSUSHITA, M., 1933. *J. Fac. Agric. Hokkaido imp. Univ.*, **34**(2): 157–445, pls. 1–5.
三宅義一, 1980. 北九州の昆虫, **27**(2): 61–84, pls. 5–6.
中根猛彦他, 1956. 昆虫採集地案内, 近畿地方, pp. 21–25, 京都昆虫同好会.
仲田元亮, 1978. 能勢の昆虫 (1), pp. 233–277, 403–405.
(仲田元亮 (n. d., 1970 ?) 能勢の昆虫 (甲虫). ‥‥発行年代不詳, かつ上の文献に包含されるものなので, ここでは引用しない.)
——— 1982. 増補改訂, 能勢の昆虫, 甲虫の部, 下巻, pp. 154–337.
西口親雄, 1972. 自然と盆栽, (30): 63–68.
西川芳太郎, 1958. 箕面動物漫筆, pp. 46–52, 摂箕書院.
——— 1966a. 昆虫と自然, **1**(8): 11.
——— 1966b. 箕面の生物, **2**(5): 53.
——— 1977. 箕面川ダム自然環境の保全と回復に関する調査研究, 256–317, 大阪府.
大林一夫, 1936. 関西昆虫学会々報, (7): 16–28, pls. 3–4.
——— 1941. 虫の世界, **4**(1/2): 1–8, tab. 3.
大倉正文他, 1965. 箕面山の動物相調査, 150–216, pl. 1, 大阪府農林部.
——— 1967. 箕面山の動物相調査 (改訂版), 124–175, 付図, pl. 大阪府農林部.
佐藤雅夫, 1936. 昆虫界, **4**(25): 192–196.
関 公一 1935a. 昆蟲, **9**(2): 107.
——— 1935b. 昆虫界, **3**(18/19): 369–378.
——— 1935c. 昆虫世界, **39**(451): 99–100.
——— 1936a. 昆虫界, **4**(26): 262–264.
——— 1936b. 昆虫界, **4**(27): 334–336.
——— 1936c. 昆虫界, **4**(28): 374–376, 379–380.
——— 1944. 昆虫世界, **48**(564): 155–156.
SEKI, K., 1935. *Ent. Wld., Tokyo*, **3**(16): 224–225.
関 公一・末松為太郎, 1935. 昆虫世界, **39**(454): 203–205.
白井忠治, 1939. 関西昆虫雑誌, **5**(3): 110–111.
鈴木元次郎・瀧口 浩, 1935. 関西昆虫雑誌, **3**(2): 37–49, pl. 3.
高桑正敏, 1976. 月刊むし, (62): 17–22.
——— 1978. 月刊むし, (86): 5–12.
竹内吉蔵, 1930. 関西昆虫学会々報, (1): 74–77.
殿村 徹, 1938. 虫の世界, **2**(1): 22–23.
戸澤信義, 1932. 大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告, (2) (名勝箕面山), 76–78, pl. 6.
——— 1933. 関西昆虫学会々報, (4): 88–102, pl. 7.
——— 1965. 箕面山の動物相調査, 3–18, 大阪府農林部.
八木正道, 1981. 月刊むし, (129): 36.
横山光男, 1937. 昆虫界, **6**(54): 641–652.

(岩田: 大阪府茨木市紫明園 11–C–705)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 119–125, June 15, 1988

A New *Pidonia* from the Tsushima Islands (Coleoptera, Cerambycidae)

Shusei SAITO

Japan Wildlife Research Center,
3–39–12, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113 Japan

and

Akiko SAITO

3–30–2–715, Tokiwadaira, Matsudo City, Chiba, 270 Japan

Abstract A new species of *Pidonia* closely related to *P. signifera* is described from the Tsushima Islands, Japan, under the name of *P. tsushimana*.

From 1983 to 1985, the authors made a field survey of the cerambycid fauna of the Islands of Tsushima as a part of the faunal and floral investigations conducted by the Nature Conservation Division of the Prefectural Office of Nagasaki. A large number of *Pidonia* specimens were included in the collection thus made. Many of them belong to the two species, *P. aegrota kubokii* and *P. puziloi*, which are common and well known, but about sixty belong to *P. gibbicollis* and a closely similar species hitherto regarded as *P. signifera*.

Pidonia signifera (BATES) is abundant in the three southern main islands of Japan. Though it was recorded from Ussuri and Korea, both HAYASHI (1968) and KUBOKI (1984) excluded them from the distributional range of the species. It is, therefore, interesting from the zoogeographical viewpoint that the species was recorded by HAYASHI (1968) from the Islands of Tsushima lying between Korea and West Japan. After that, however, it had been confused with *P. gibbicollis*, until it was recognized again by IMASAKA (1985), who pointed out that the Tsushima population was somewhat different from the mainland ones. This was confirmed by the present authors in the following year (S. & A. SAITO, 1986), who came to the conclusion that the Tsushima population belongs to a species closely similar to but different from *P. signifera*.

In the present paper, the species in question will be described under the name of *Pidonia tsushimana*.

Before going further, the authors wish to express their hearty thanks to Dr. Shun-Ichi UÉNO of the National Science Museum (Nat. Hist.), Tokyo, for his kind reading and criticizing the original manuscript of this paper, to the authorities of the Nature Conservation Division, Nagasaki Prefecture, for inviting the authors to the faunal investigation of the Islands of Tsushima, and to Messrs. Hiroshi MAKIHARA, Toshio

SENOH and Kazuyuki KAWADA for offering valuable specimens for the present study.

Pidonia (Pidonia) tsushimana S. et A. SAITO, sp. nov.

[Japanese name: Tsushima-hime-hana-kamikiri]

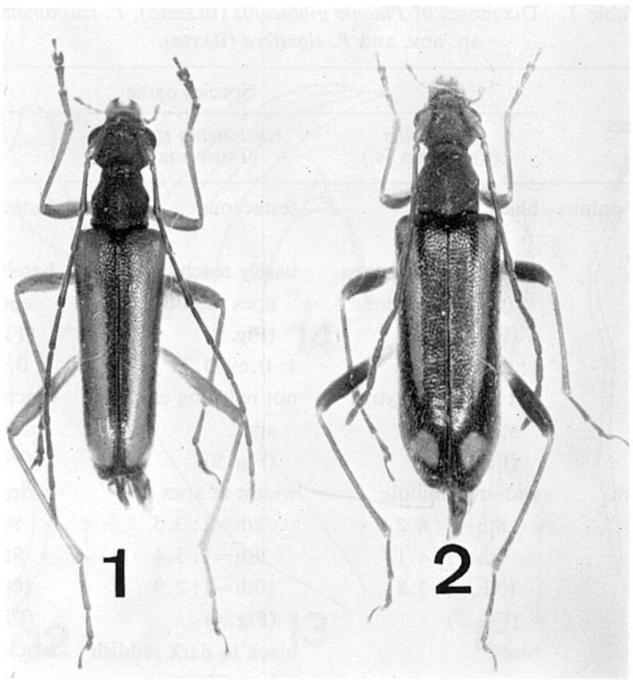
(Figs. 1–2, 4, 8–9, 13–15, 17)

Length: male 6.8–10.3 mm, female 7.5–10.9 mm (from mandibular tip to elytral apices). Breadth: male 1.7–2.5 mm, female 2.0–3.0 mm (across humeral angles of elytra).

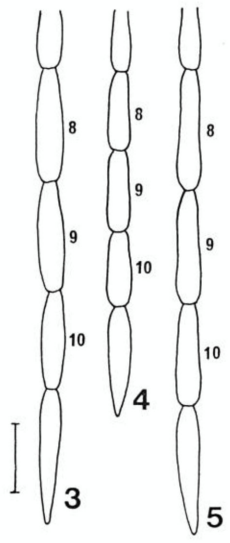
Male. Head entirely black, with mouth-parts testaceous except for apical part of each mandible. Antennae almost testaceous, 1st and 2nd, sometimes also 3rd and 4th, segments completely testaceous, 3rd–10th segments with dark brown apices, last segment brown with dark brown middle part. Prothorax entirely black, scutellum reddish dark brown to black. Meso- and metathoraces black, sometimes with dark brown mesepimeron and rarely posterior part of metathorax. Legs almost testaceous, with apical parts of 1st and 2nd as well as all of 3rd and 4th tarsal segments and claws dark brown. Elytra almost testaceous, with basal margins and apical parts of elytra black, and three black stripes not reaching apices; middle stripe on suture somewhat widened behind scutellum and narrowed in about apical sixth to seventh of elytra, rarely reaching apices; each lateral stripe starting from behind humeral angle and reaching about apical sixth. Abdomen entirely black, either posterior margin or whole of each sternite rarely dark reddish brown excepting black anterior lateral parts.

Head subrectangular, broader across eyes than length (1.5: 1 in large individuals, 1.7: 1 in small ones); surface densely covered with coarse punctures and short testaceous pubescence, bearing a longitudinal furrow extending from frons to vertex along median line; eyes prominent laterally. Antennae slender, barely reaching elytral apex at the middle to apex of 10th segment; 3rd–10th segments widest at apical parts. Pronotum a little longer than width at middle (1.2: 1) (wider in small individuals than in large ones), apparently swollen laterad and constricted both anteriorly and posteriorly, though the base is much wider than apex; disc convex; surface covered with denser and finer punctures than on head, and similarly pubescent to the latter, the pubescence being directed towards the posterior part of disc. Elytra 2.60–2.75 times as long as width across humeral angles, with the disc somewhat depressed on basal three-fourths; surface covered with sparser and larger punctures than on pronotum and with short testaceous pubescence; apex of each elytron narrowly rounded.

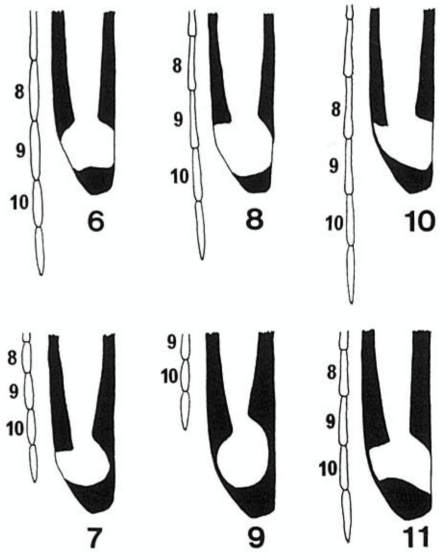
Male genitalia nearly membraneous near base, though gradually sclerotized towards apex. Median lobe regularly and rather strongly arcuate, especially in apical half; viewed dorsally, apical portion rather rapidly narrowed towards conspicuously projected apex. Lateral lobes relatively long, widest at apical fourth and shallowly bilobed at apex in dorsal view, each lobe being very broad and short, with the apex somewhat obliquely truncated and bearing very long terminal hairs.



Figs. 1–2. *Pidonia tsushimana* sp. nov. —— 1, Male; 2, female.



Figs. 3–5. Antennae of female. —— 3, *P. gibbicollis* (BLESSIG); 4, *P. tsushimana* sp. nov.; 5, *P. signifera* (BATES) (scale, 0.5 mm).



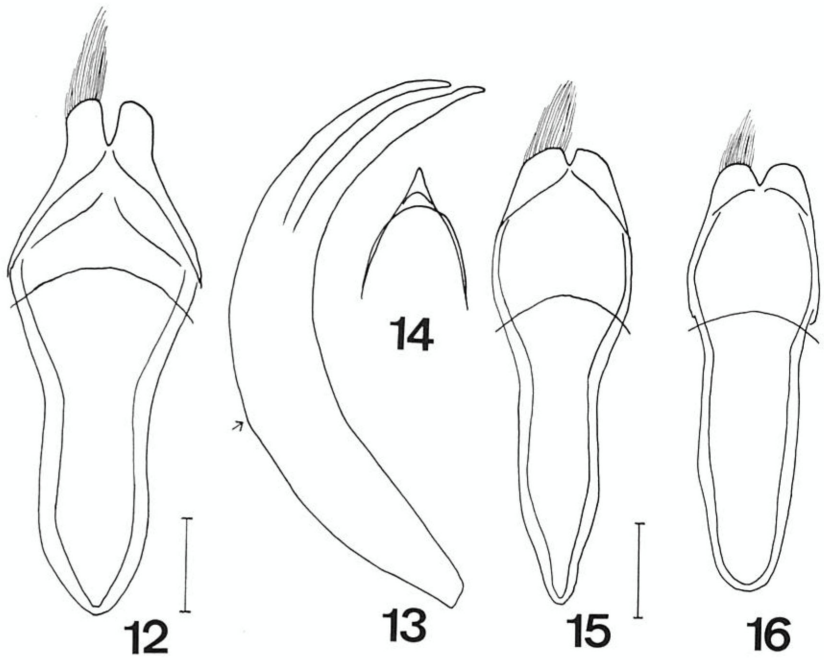
Figs. 6–11. Length of antenna in proportion to elytral length. —— 6, *P. gibbicollis*, male; 7, same, female; 8, *P. tsushimana*, male; 9, same, female; 10, *P. signifera*, male; 11, same, female.

Table 1. Diagnoses of *Pidonia gibbicollis* (BLESSIG), *P. tsushimana* sp. nov. and *P. signifera* (BATES).

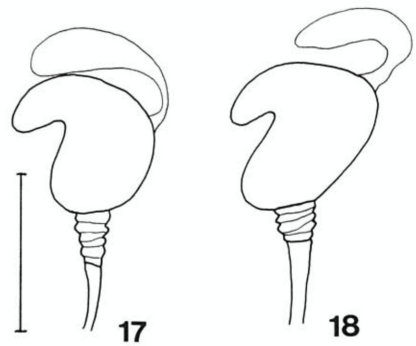
Characters	Species name		
	gibbicollis (Tsushima Is.)	*tsushimana* sp. nov. (Tsushima Is.)	*signifera* (Kyushu)
Apex of maxillary palpus	black	testaceous	testaceous
Antenna			
MALE	reaching elytral apex at 10th segment (Fig. 6)	barely reaching elytral apex at 10th segment (Fig. 8)	barely reaching elytral apex at 9th segment (Fig. 10)
5th: 6th	1: 0.78–0.81	1: 0.69–0.78	1: 0.74–0.76
FEMALE	not reaching elytral apex (Fig. 7)	not reaching elytral apex (Fig. 9)	reaching elytral apex at last segment (Fig. 11)
breadth: length of 8th–10th segments	widest at middle 8th=1: 4.2 9th=1: 4.1 10th=1: 3.8 (Fig. 3)	widest at apex 8th=1: 3.5 9th=1: 3.4 10th=1: 2.9 (Fig. 4)	widest at apex 8th=1: 4.6 9th=1: 4.4 10th=1: 4.0 (Fig. 5)
Scutellum	black	black to dark reddish brown	black
Elytra (breadth: length)			
MALE	middle breadth <33% of elytral length	middle breadth <33% of elytral length	middle breadth <34% of elytral length
FEMALE	middle breadth <43% of elytral length	middle breadth <43% of elytral length	middle breadth <38% of elytral length

Female. Evidently different from male in darker colour and shorter antennae. Head broader across eyes than length (1.4: 1). Antennae evidently not reaching elytral apex; 1st segment dark reddish brown, 2nd and 3rd dark reddish brown to black, other segments completely black; 10th and last segments widest at each middle. Pronotum a little longer than width at middle (1.2: 1) in small individuals, as long as width at middle in large ones. Elytra 2.4–2.7 times as long as width between humeral angles; black circumference, central stripe and lateral stripes frequently joining at apical fourth to fifth. Abdomen bicoloured, almost black with testaceous posterior margin of 1st–4th sternites in the darkest individuals, almost testaceous except for small black anterior lateral portions in the lightest individuals. Legs bicoloured; middle and hind femora testaceous excepting apical one-third to two-thirds black, sometimes middle femora completely testaceous; hind tibiae testaceous to black; tarsi either of the same colour as those in male or black.

Spermatheca lightly sclerotized, swollen and curved, widest at middle, with



Figs. 12–16. Male genitalia of *Pidonia* spp. —— 12, *P. gibbicollis*, lateral lobes in dorsal view (scale: 0.25 mm); 13, *P. tsushimana* sp. nov., median lobe in lateral view; 14, same, apex of median lobe in dorsal view; 15, same, lateral lobes in dorsal view (scale: 0.25 mm); 16, *P. signifera* (from Kyushu), lateral lobes in dorsal view.



Figs. 17–18. Spermatheca of *Pidonia* spp. —— 17, *P. tsushimana* sp. nov.; 18, *P. signifera* (from Kyushu) (scale, 0.25 mm).

spermathecal gland constricted at base; the part continuing to spermathecal duct with some transverse creases.

Type series. Holotype: ♂, Mt. Ohboshi, Mine-machi, Tsushima Is., Nagasaki Pref., 20–23 May 1984, S. SAITO leg. Allotype: ♀, same data as the holotype. Paratypes: 11 ♂, 7 ♀, same data as the holotype, S. SAITO leg.; 1 ♂, 1 ♀, same data as the holotype, A. SAITO leg.; 4 ♂, 7 ♀, same data as the holotype, T. SENOH leg.; 22 ♂, 4 ♀, same locality as the holotype, 6–8 May 1978, H. MAKIHARA leg.; 1 ♂, 1 ♀, same locality as the holotype, 7 May 1979, K. KAWADA leg.; 1 ♀, Mt. Ariake, Izuhara-machi, Tsushima Is., 25 May 1977, T. SENOH leg.; 1 ♀, Ahnagizaka, Izuhara-machi, 23–24 May 1984, S. SAITO leg.; 1 ♀, Mt. Gongen, Izuhara-machi, 24–25 May 1984, S. SAITO leg.

The holo- and allotypes are preserved in the collection of the National Science Museum (Nat. Hist.), Tokyo; the paratypes are distributed to the above collection and to the collections of the authors themselves and of other collectors.

Notes. Most of the specimens examined were collected on the flowers of *Anthrescus sylvestris* (L.) HOFFM. subsp. *aemula* (WORON.) KITAM. and *Viburnum erosum* THUNBERG, except for a few specimens which were found on *Deutzia scabra* THUNBERG.

At first sight, above all in the elytral markings, this new species resembles *P. gibbicollis* from Tsushima and *P. signifera* from various localities in Kyushu, Shikoku and Honshu. It can be distinguished from them by the features shown in Table 1 and Figs. 2–18.

摘　　要

斉藤秀生・斉藤明子: 新種ツシマヒメハナカミキリの記載. —— 筆者らは，1983 年から 1985 年までの 3 か年にかけて，長崎県自然保護課が実施した対馬動植物調査に参加し，昆虫類とくにカミキリムシ科についての調査および解析を行う機会をえた．その中で，これまで本州，四国，九州に広く分布するナガバヒメハナカミキリとして扱われていた対馬の個体群を解析検討した．

ナガバヒメハナカミキリ *Pidonia signifera* (BATES) は，ウスリーや朝鮮半島からも記録されているが，HAYASHI (1968), 窪木 (1984) などではこれらの分布を除いている．したがって，現状では本種は日本特産種となっている．

このような背景の中で，朝鮮半島と九州の間に位置する対馬に本種の分布することは，HAYASHI (前述) によって指摘され，生物地理学的にも重要視されたものの，その後，ミスジヒメハナカミキリ *P. gibbicollis* (BLESSIG) と長く混同されていた経緯があり，とくに検討されることがなかった．近年になって，今坂 (1985) は，ミスジヒメハナカミキリと明らかに異なる種が対馬に生息することを報告し，それをナガバヒメハナカミキリに同定した．しかしその文中で，本州の個体群と対馬の個体群との間には相違があることを述べている．また，斉藤・斉藤 (1986) は今坂を支持した上で，対馬産のミスジヒメハナカミキリとナガバヒメハナカミキリの明白な区別点をまとめた．

最近，対馬の本個体群をさらに検討した結果，本州，四国，九州に分布するナガバヒメハナカミキリとは異なる別の種であることが明らかになったのでここに新種として命名した．

References

BATES, H. W., 1884. Longicorn beetles of Japan. *J. Linn. Soc. London, Zool.*, **18**: 205–262.

HAYASHI, M., 1968–'69. A monographic study of the lepturine genus *Pidonia* MULSANT (1863) with special reference to the ecological distribution and phylogenetical relation (Coleoptera: Cerambycidae). *Bull. Osaka Jonan Women's Jr. Coll.*, **3**: 1–61 (1968), **4**: 69–111 (1969).

IMASAKA, S., 1985. A note on the *Pidonia signifera* from the Tsushima Islands. *Gekkan Mushi, Tokyo*, (117): 16–18. (In Japanese.)

KUBOKI, M., 1984. Lepturinae (*Pidonia*), *In* KUSAMA, K., *et al. The Longicorn-Beetles of Japan in Color*, 173–200. Kodansha, Tokyo. (In Japanese.)

MAKIHARA, H. & S. SAITO, 1987. Cerambycid fauna in Tsushima Island as a part of Far East Asia. *Biogeography of the Tsushima Island*, 187–227. (In Japanese.)

SAITO, S. & A. SAITO, 1986. Studies on the local variation of *Pidonia* II. Tsushima Islands. *Sayabane, Tokyo*, (11): 37–48. (In Japanese.)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 126–132, June 15, 1988

Taxonomic Notes on *Nivellia extensa* (GEBLER) (Coleoptera, Cerambycidae, Lepturinae)

Tôru SHIMOMURA

1–17, Ohi 3-chome, Shinagawa-ku, Tokyo, 140 Japan

and

Ryôji TOYOSHIMA

4–11, Shimoiida-cho, Kita-ku, Nagoya City, 462 Japan

Abstract Two new subspecies of *Nivellia extensa* are described from Japan under the names of *N. e. yuzawai* and *N. e. umbratilis*, together with synonymy of the nominotypical subspecies. The former occurs in central Honshu and the latter in central Hokkaido.

Nivellia extensa (GEBLER, 1841) was described on the material from Altai; however, it is presently known from Siberia, Korea, Sakhalin, N. Europe and Japan. In Japan, it occurs on high mountains of central Honshu and the mountain region of central Hokkaido. KUSAMA and TAKAKUWA (1984) suggested that there are differences in the condition of pronotal pubescence and the length of male antennae between the populations of Honshu and Hokkaido. We have had opportunities to examine the specimens of *N. extensa* from Siberia, through the courtesy of Drs. A. L. LOBANOV and M. L. DANILEVSKY. As the result of the comparison of specimens from Honshu, Hokkaido and Siberia, we came to the conclusion that each population should be regarded as distinctive subspecies. They are described in this paper.

Nivellia extensa extensa (GEBLER)

(Figs. 1, 2, 6, 11, 12, 17, 18, 23 & 26)

Leptura extensa GEBLER, 1841, Bull. Soc. Natur. Moscou, **14**: 613–614.
Leptura (*Anoplodera*) *extensa*: BLESSIG et SOLSKY, 1873, Horae Soc. ent. ross., **9**: 258.
Nivellia sanguinosa var. *extensa*: MULSANT, 1863, Coleopt. Fr. Long. ed. 2, p. 565.
Nivellia sanguinosa var. *extensa*: KRAATZ, 1879, Dtsch. ent. Z., **23**(1): 87.
Nivellia sanguinosa ab. *extensa*: AURIVILLIUS, 1912, Coleopt. Cat., **39**: 202.
Nivellia sanguinosa ab. *extensa*: BOPPE, 1921, Gen. Ins., **178**: 85–86.
Nivellia sanguinosa ab. *extensa*: MATSUSHITA, 1933, J. Fac. Agr. Hokkaido imp. Univ., **34**(2): 196.
Nivellia sanguinosa ab. *extensa*: PLAVILSTSHIKOV, 1936, Fn. URSS, **21**: 316–317, 551.
Nivellia sanguinosa extensa: TAMANUKI, 1942, Fauna Nipp. Ceramb., **2**: 62.
Nivellia extensa: KROGERUS, 1936, Notul. ent., **16**: 21–23, figs. 1, 3 & 4.
Nivellia extensa: MITONO, 1940, Cat. Coleopt. Japan., **94**: 40.
Nivellia extensa: CHEREPANOV, 1979, Ceramb. of North Asia, **1**: 258–262, figs. 152–154.

Nivellia extensa: LOBANOV, DANILEVSKY et MURZIN, 1981, Rev. Ent. URSS, **60**(4): 798.
Nivellia extensa: LEE, 1979, Korean J. Ent., **9**(2): 41.
Nivellia extensa: LEE, 1981, Korean J. Ent., **11**(1): 46.
Nivellia extensa: LEE, 1982, Ins. Koreana, **1**: 18, pl. 3, 38 a, b.
Nivellia extensa: LEE, 1982, Korean J. Ent., **12**(1): 107.

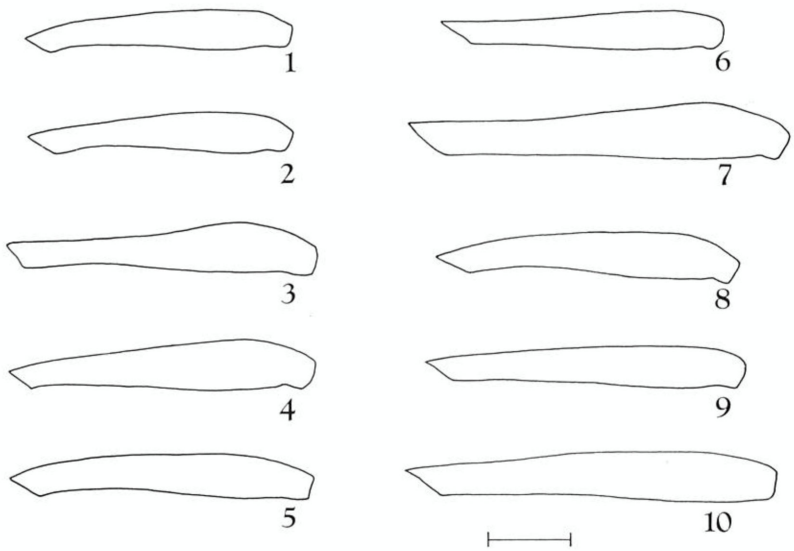
Type locality. "In montibus altaicis" (GEBLER, p. 614). MITONO (1940), KUSAMA (1972), HAYASHI (1960, 1980), LEE (1979, 1982) and KUSAMA & TAKAKUWA (1984) considered it to be Nerchinsk, E. Siberia.

Distribution. Siberia, Sakhalin, Korea, N. Europe.

Specimens examined. 2 ♂♂, USSR, Buriytia (East Baikal region), Tankhoi, 13–VII–1983, T. GALASIEVA lgt.; 1 ♀, USSR, Far East, Sikhote-Alin, 29–VI–1980, V. KUZNETSOV lgt.

Body length: ♂, 11.5–12.0 mm; ♀, 13.0 mm (measured from tips of mandibles to elytral apices); width: ♂, 2.5–2.75 mm; ♀, 2.75 mm (measured between humeral angles of elytra).

The nominotypical subspecies is distinguished from the other subspecies of *Nivellia extensa* described in this paper by the following characters: 1) apical margin of 8th abdominal tergite of male truncate, or barely emarginate and not depressed medially (Figs. 17 & 18); 2) lateral lobes of male genitalia shorter (Fig. 23); 3) male antennae comparatively short, barely reaching elytral apices; 4) oculomalar space narrower.



Figs. 1–10. Hind femur of *Nivellia extensa* ssp. —— 1, 2 & 6, *N. e. extensa* (GEBLER); 3, 4, 7 & 8, *N. e. umbratilis* ssp. nov.; 5, 9 & 10, *N. e. yuzawai* ssp. nov. 1–5: Male, 6–10: female. Scale: 1.0 mm.

Notes. We have examined a defective male specimen from "Kamishisuka", Sakhalin, in the H. KÔNO collection which is preserved in the National Science Museum (Nat. Hist.), Tokyo. This specimen differs from *N. e. extensa* from Siberia, and it is probable that the population of Sakhalin should be distinguished from others as a distinct subspecies after the examination of specimens from Korea and N. Europe. Judging from the figures of male genitalia by KROGERUS (1936), *N. extensa* from Finland may also be separated from the other subspecies of *N. extensa*.

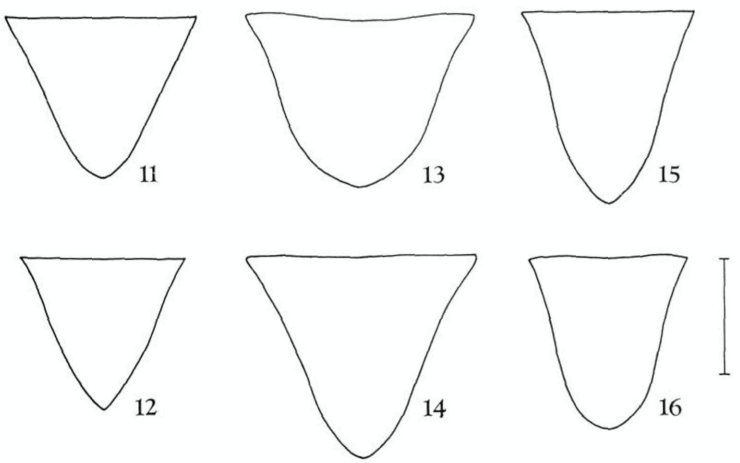
Nivellia extensa yuzawai subsp. nov.

(Figs. 5, 9, 10, 13, 14, 19, 20, 24 & 27)

This new subspecies is distinguished from *N. e. extensa* and *N. e. umbratilis* subsp. nov. by the following characters: 1) frons with a distinct median sulcus which reaches clypeofrontal suture; 2) prothorax with silky whitish pubescence which is longer and denser; 3) elytral pubescence longer and softer near base; 4) different shape of apical median lobe of male genitalia (Fig. 27); 5) apical margin of 8th abdominal tergite of male strongly emarginate and distinctly depressed medially (Figs. 19 & 20).

Body length: ♂, 10.8–12.5 mm; ♀, 13.5–15.5 mm (measured from tips of mandibles to elytral apices); width: ♂, 2.8–3.4 mm; ♀, 3.2–3.9 mm (measured between humeral angles of elytra).

Head densely and coarsely punctured on vertex, though punctures of frons are somewhat finer and sparser than those of vertex, except for a glabrous subtriangular area; oculomalar space slightly broader than in *e. extensa*; frons with a distinct median sulcus which reaches occiput, the sulcus reaching clypeofrontal suture; antennal tu-



Figs. 11–16. Scutellum of *Nivellia extensa* ssp. —— 11 & 12, *N. e. extensa* (GEBLER); 13 & 14, *N. e. yuzawai* ssp. nov.; 15 & 16, *N. e. umbratilis* ssp. nov. Scale: 0.25 mm.

bercles lower at inner ridges than those of *e. umbratilis*, but higher than those of *e. extensa*; antennae distinctly surpassing elytral apices in male, 1st to basal half of 5th segments with pale yellowish pubescence.

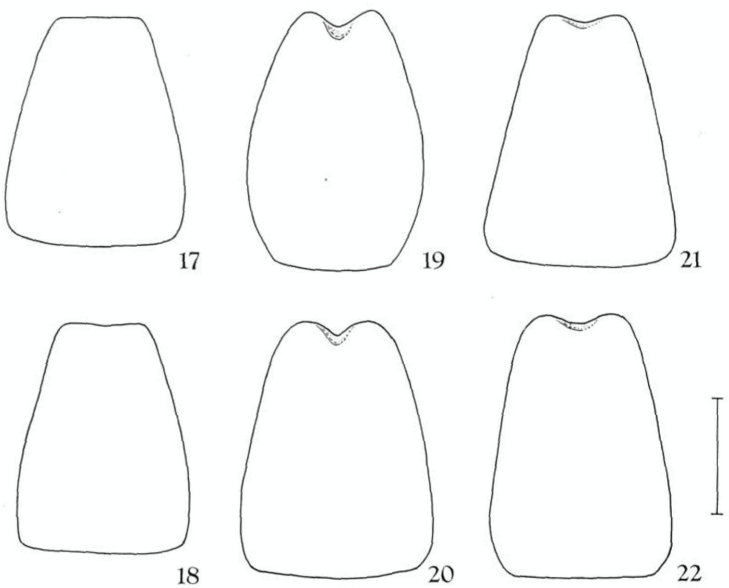
Prothorax distinctly constricted both behind anterior margin and before posterior margin, with an impression at postmedian portion; posterior width distinctly larger than width across lateral tubercles; each lateral side with an obtuse tubercle which is more distinctly rounded at upper middle; surface reticulately punctured, with silky whitish long pubescence. Scutellum of usually broader subtriangle in shape (Figs. 13 & 14).

Elytra rather convex above in rear view, nearly parallel-sided, gradually narrowed towards apices which are obtuse and obliquely truncate; surface finely and sparsely punctured, with pale yellowish pubescence, the pubescence distinctly longer and softer at about basal fourth.

Hind femur weakly swollen near apex (Figs. 5, 9 & 10).

Eighth abdominal tergite of male strongly emarginate on apical margin and distinctly depressed medially (Figs. 19 & 20). In male genitalia, lateral lobes robust though slightly longer (Fig. 24), median lobe gradually narrowed towards apex, but slightly angulate at each side just before apex and weakly pointed medially (Fig. 27).

Type series. Holotype: ♂, Mt. Ontakesan, nr. Hakkaizan, 2,000 m in alt., Kiso-gun, Nagano Pref., Japan, 21–25. VII. 1985, T. SHIMOMURA lgt. (to be deposited in the National Science Museum (Nat. Hist.), Tokyo). Paratypes: 1 ♂, same data as



Figs. 17–22. Eighth abdominal tergite of male of *Nivellia extensa* ssp. —— 17 & 18, *N. e. extensa* (GEBLER); 19 & 20, *N. e. yuzawai* ssp. nov.; 21 & 22, *N. e. umbratilis* ssp. nov. Scale: 0.5 mm.

the holotype; same locality as the holotype: 1 ♂, 26–VII–1984, K. HOSOKAWA lgt.; 1 ♀, 2–VIII–1979, S. YUZAWA lgt.; 3 ♂♂, 24–VII–1986, N. YUZAWA lgt.; 3 ♂♂, 21–VII–1986, R. TOYOSHIMA lgt.; 2 ♂♂, 27–VII–1986, R. TOYOSHIMA lgt.; 3 ♂♂, 1 ♀, 28–VII–1986, R. TOYOSHIMA lgt.; 1 ♂, Mt. Tsubakurodake, Minamiazumi-gun, Hotaka-machi, Nagano Pref., 25–VII–1977, T. MAEJIMA lgt. (coll. T. SHIMOMURA, R. TOYOSHIMA, K. HOSOKAWA & N. YUZAWA).

Distribution. Honshu (Japan).

Notes. This subspecies is rather rare in collections. It is known from the Akaishi Mountain Range and the Hida Mountain Range of central Honshu in coniferous forests of about 2,000 m and upward in altitude. The type series from Mt. Ontakesan was collected on the flowers of *Aruncus sylvester*? growing in sunny places.

Nivellia extensa umbratilis subsp. nov.

(Figs. 3, 4, 7, 8, 15, 16, 21, 22, 25 & 28)

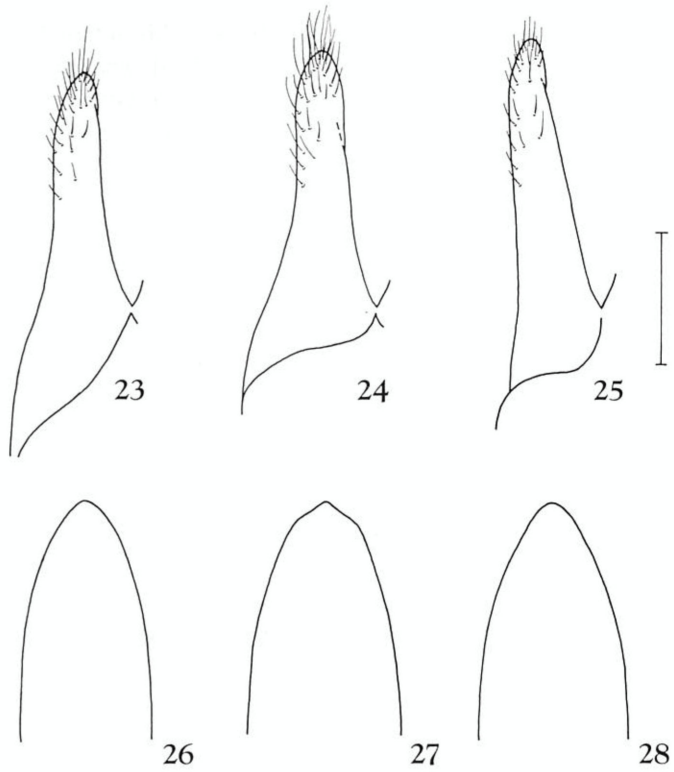
This new subspecies is more closely related to *N. e. extensa* from Siberia than to *N. e. yuzawai* in having the following characters: apical median lobe of male genitalia is similar in shape (Fig. 28); frons with a median sulcus which does not reach clypeofrontal suture; 1st to basal half of 5th antennal segments with brownish pubescence; prothorax with short silky whitish pubescence; elytra less convex above, nearly flat in rear view, with short pubescence uniformly. It differs from *N. e. extensa* in the following respects: 1) apical margin of 8th abdominal tergite of male distinctly emarginate and shallowly depressed medially (Figs. 21 & 22); 2) lateral lobes of male genitalia longer and thinner (Fig. 25); 3) hind femur more distinctly swollen near apex (Figs. 3, 4, 7 & 8); 4) antennal tubercles strongly raised at inner ridges.

Body length: ♂, 11.5–13.0 mm; ♀, 12.5–15.5 mm (measured from tips of mandibles to elytral apices); width: ♂, 2.7–3.0 mm; ♀, 2.8–3.7 mm (measured between humeral angles of elytra).

Head densely and coarsely punctured from frons to vertex, except for a glabrous subtriangular area on frons; oculomalar space slightly narrower than that of *e. yuzawai*; frons with a median sulcus continued to occiput but faded in glabrous subtriangular area; antennal tubercles strongly raised at inner ridges; antennae distinctly surpassing elytral apices, 1st to basal half of 5th segments with brownish pubescence.

Prothorax distinctly constricted both behind anterior margin and before posterior margin, with an impression at postmedian portion; each lateral side with a blunt tubercle which is somewhat angulate in dorsal view; posterior width equal to width across lateral tubercles, or barely larger than the latter; surface reticulately punctured, with silky whitish short pubescence. Scutellum of much narrower subtriangle in shape (Figs. 15 & 16).

Elytra usually less convex above than those of *e. yuzawai* subsp. nov., rather flat in rear view; apices obliquely truncate; surface finely and sparsely punctured, with pale yellowish short pubescence uniformly.



Figs. 23–28. Male genitalia of *Nivellia extensa* ssp. —— 23–25: Left lateral lobe; 26–28: apex of median lobe. 23 & 26, *N. e. extensa* (GEBLER); 24 & 27, *N. e. yuzawai* ssp. nov.; 25 & 28, *N. e. umbratilis* ssp. nov. Scale: 0.25 mm.

Hind femur distinctly swollen near apex (Figs. 3, 4, 7 & 8).

Eighth abdominal tergite of male distinctly emarginate on apical margin and shallowly depressed medially, but emargination of apical margin shallower than that of *e. yuzawai* subsp. nov. (Figs. 21 & 22).

In male genitalia, lateral lobes slightly longer and thinner than those of the other subspecies of *N. extensa* (Fig. 25), median lobe gradually narrowed towards apex (Fig. 28).

Type series. Holotype: ♂, Tokachimitsumata, Tokachi-shicho, Hokkaido, Japan, 28–VII–1983, K. HOSOKAWA lgt. (to be deposited in the collection of the National Science Museum (Nat. Hist.), Tokyo). Paratypes: same locality as the holotype; 1 ♂, 2 ♀♀, 28–VII–1983, K. HOSOKAWA lgt.; 1 ♂, 29–VII–1983, K. HOSOKAWA lgt.; 2 ♂♂, 3 ♀♀, 22, 23–VII–1985, A. YAMASHITA lgt.; 1 ♂, 29–VII–1981, K. YOSHIKAWA lgt.; 1 ♂, 25–VII–1981, T. KINOSHITA lgt.; 1 ♂, 1 ♀, 28–VII–1983, K. KUME lgt. (coll. T. SHIMOMURA, R. TOYOSHIMA, K. HOSOKAWA, A. YAMASHITA, N. YUZAWA & K. KUME).

Distribution. Hokkaido (Japan).

Notes. This subspecies is known from the Ishikari Mountain Region of central Hokkaido. All of the type series were collected on the flowers of *Aruncus sylvester* etc. growing on the banks of rivulets in the mountains near Tokachimitsumata, about 1,000 m in altitude. The type series was mostly collected on the flowers growing in unlighted places under trees.

Acknowledgements

The senior author wishes to express his sincere gratitude to Professor R. ISHIKAWA (Tokyo Metropolitan University) for his kindness in reading through the manuscript and constant guidance, to Mr. M. TAKAKUWA (Kanagawa Prefectural Museum) and Mr. C. HOLZSCHUH (Wien) for their kindness in offering useful comments and co-operation in various ways. The junior author is indebted to Professor M. SATÔ (Nagoya Women's University) for his constant guidance and advice. Many thanks are also due to Dr. M. L. DANILEVSKY (Institute of Evolutionary Morphology and Ecology of Animals, Moscow) and Dr. A. L. LOBANOV (Zoological Institute, Laboratory of Insect Systematics, Leningrad) for their kindness in offering invaluable specimens from Siberia, to Dr. Y. KUROSAWA (Department of Zoology, National Science Museum, Tokyo) for the loan of the specimen from Sakhalin. Further, we thank Messrs. K. HOSOKAWA (Chiryû, Aichi), A. YAMASHITA (Takarazuka, Hyogo), N. YUZAWA (Nagoya) and K. KUME (Tokyo) for their kindness in giving us opportunities to examine valuable specimens used in the present study.

摘　　要

下村　徹・豊嶋亮司：スミイロハナカミキリの知見.——シベリア産，本州産，北海道産のスミイロハナカミキリ *Nivellia extensa* を比較検討した結果，それぞれの個体群に形態的特徴が認められたので本州産と北海道産の本種を新亜種として記載した.

N. e. yuzawai ssp. nov. (本州産) は，前頭にある中央の溝が頭盾前頭縫合線に届く，前胸の柔毛が長く密に生ずる，雄交尾器の陰茎先端部の形，雄の第8腹節背板の先端の形状などによって *e. extensa* と *e. umbratilis* ssp. nov. から区別できる.

N. e. umbratilis ssp. nov. (北海道産) は，基亜種 (シベリア産) に類似するが，明瞭にふくれる後腿節，細長い三角形の小盾板，より強く隆起する触角の着部，雄交尾器の側片葉状部の形，雄の第8腹節背板の先端の形状などによって区別できる.

なお，本種は樺太，朝鮮半島，北欧州 (フィンランド) から記録があるが，樺太産の本種も亜種として区別される可能性がある.

References

HAYASHI, M., 1960. Study of the Lepturinae (Col.: Cerambycidae). *Niponius*, **1**(6): 1–26.

——— 1980. Check-List of Coleoptera of Japan, **19**: 1–28. The Coleopterists' Association of Japan.

KUSAMA, K., 1972. A list of Japanese Cerambycidae with the ecology and distribution. 156 pp. Uchida Rokakuho Shinsha. (In Japanese.)

——— & M. TAKAKUWA, 1984. The Longicorn-beetles of Japan in Color, 565 pp. (incl. 96 pls.). Kodansha.

NAKANE, T., 1975. The beetles of Japan (new series), 19. Cerambycidae 14. *Konchu to Shizen, Tokyo*, **10**(5): 2–5. (In Japanese.)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 133–141, June 15, 1988

Cyrtoclytus formosanus and its Allied Species (Coleoptera, Cerambycinae)

Tatsuya NIISATO

Bioindicator Co., Ltd. 18–26–201, Takadanobaba 1-chome,
Shinjuku-ku, Tokyo, 160 Japan

Abstract The cerambycid beetles of the genus *Cyrtoclytus* from Taiwan are classified into two species, one of which is a new form to be described herein under the name of *C. kusamai*. Though resembling in the coloration and pubescent maculation, the new species is evidently different from its congener, *C. formosanus* GRESSITT.

In recent years, our knowledge about the cerambycid fauna of Taiwan has become enriched as the result of various collecting trips mainly by the Japanese entomologists. Since GRESSITT's monograph of Chinese cerambycids was published in 1951, a large number of species have been added to the fauna of Taiwan. As regards the clytine cerambycids including the Anaglyptini, more than seventy forms have so far been known from the island. It is expected, however, that the number of the clytine species will exceed one hundred. In the course of my recent study, I have found an unexpected new form belonging to the genus *Cyrtoclytus*.

Cyrtoclytus formosanus GRESSITT (1933, p. 167) is an elegant species originally described from Numano-hira on Mt. A-li Shan in central Taiwan. This clytine has widely been known to Japanese collectors as rather a common species found on the lower mountains of Taiwan, since it was introduced and illustrated in a guide for collecting Taiwanese beetles by TAKEDA *et al.* (1976). On the other hand, our recent investigations brought forth another form of *Cyrtoclytus* from higher places above 2,000 m in altitude. Though evidently differing in body configuration, coloration and pubescent maculation of the two species are closely similar to each other. Thus, the true identity of *C. formosanus* has become uncertain.

Through the courtesy of Dr. David H. KAVANAUGH of the California Academy of Sciences, I was able to re-examine GRESSITT's type of *C. formosanus*, and carefully compared it with the two *Cyrtoclytus* species at my hand. It turned out that the species from higher places was actually *C. formosanus*, and that the other one, currently called *C. formosanus*, was undescribed.

In the present paper, I am going to report the result of my re-examination of the Taiwanese *Cyrtoclytus*, of which a new form will be described under the name of *Cyrtoclytus kusamai*. The abbreviations used herein are already explained in the previous papers of mine (*e.g.*, NIISATO, 1987, p. 297), except for the following depository of specimens: CAS—California Academy of Sciences, San Francisco;

NSMT— National Science Museum (Nat. Hist.), Tokyo; HA— H. AKIYAMA of Yokohama; TN— T. NIISATO of Tokyo; YI— Y. IZUMO of Kurashiki.

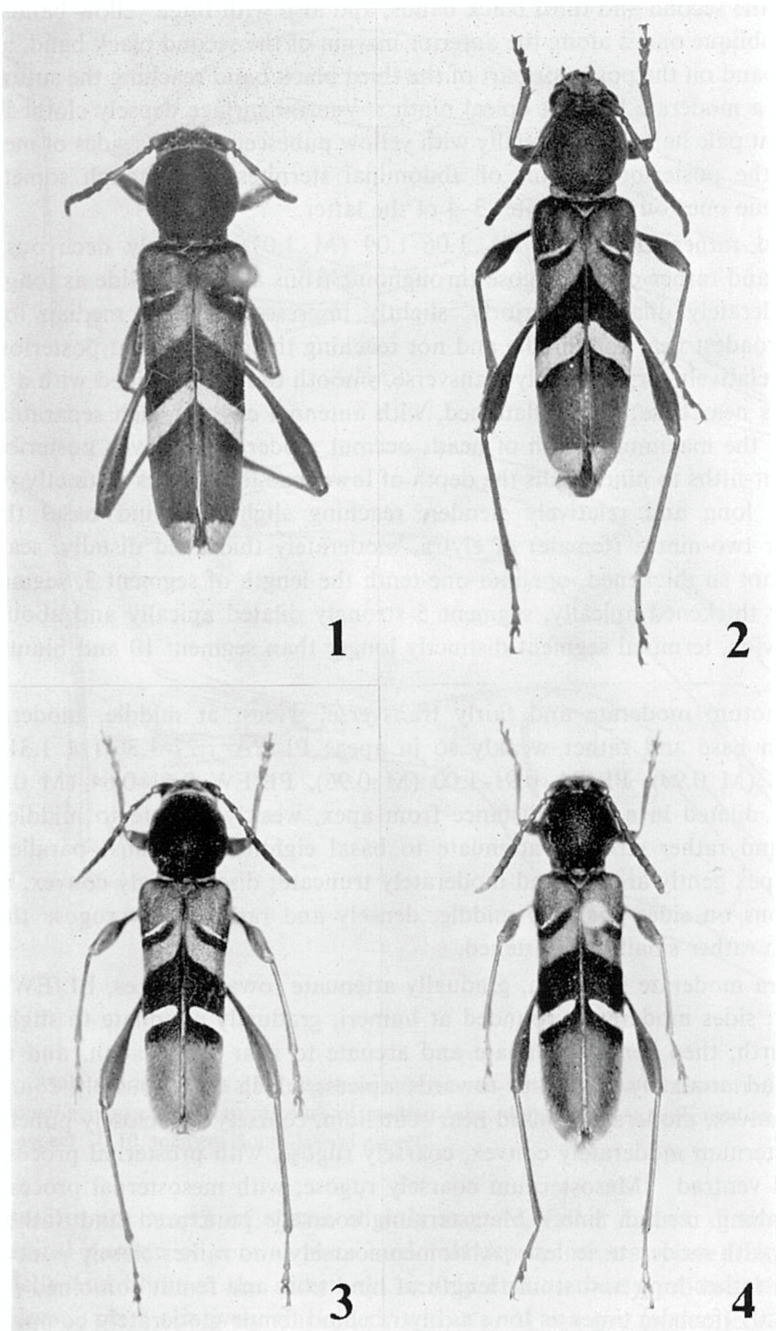
Before going further, I wish to express my cordial thanks to Dr. Shun-Ichi UÉNO of the National Science Museum (Nat. Hist.), Tokyo, for his constant guidance and reading the manuscript of this paper, to Dr. Yoshihiko KUROSAWA of the same museum and Professor Keiichi KUSAMA of Shizuoka University, Associate Professor Yasuaki WATANABE of the Laboratory of Entomology, Tokyo University of Agriculture, for their constant guidance. Deep thanks are also due to Drs. Norman D. PENNY and David H. KAVANAUGH of the California Academy of Sciences for their kindness in lending me GRESSITT's type, to Dr. Yoshiaki KOMIYA, Messrs. Yoshihiro IZUMO, Shusei SAITO, Toru SHIMOMURA and Hideo AKIYAMA for their kind offer of material, and to Dr. Toshio SENOH for taking photographs.

Cyrtoclytus formosanus GRESSITT, 1933

(Figs. 1–2, 5–7)

Cyrtoclytus formosanus GRESSITT, 1933, Pan-Pac. Ent., **9**, p. 167; type locality: Numanohira on Mt. Arishan in central Taiwan. —— MITONO, 1941, Bull. School Agr. For. Taihoku imp. Univ., **2**, p. 109. —— GRESSITT, 1951, Longicornia, **2**, p. 259. —— CHANG, 1976, Trans. ent. Soc. Taichung, **11**(1), p. 6, fig. 14; HUA, 1982, Check List Long. China, p. 35.

Medium-sized species with rather small fore body. Colour black and reddish brown, dull; head, thoraces and scutellum black, though reddish brown on mouthparts except for infuscate mandibular tips; elytra largely dark yellowish brown, each decorated with three black bands, of which the basal one extends to basal two-ninths along external margin and then usually bent inwards to middle of disc, an arcuate linear one near basal two-ninths not reaching the margins, and a broad median band at a level between basal two-eighths and apical third strongly oblique anteriorly and somewhat vague posteriorly; abdomen chocolate brown; antennae and legs reddish brown, though the former are brownish on distal segments, and slightly yellowish on tibiae and tarsi. Body largely clothed with yellowish brown pubescence and long weak hairs; head moderately with weak hairs, and with dense yellow pubescence on frons except for the median line and the posterior part of occiput, and also thinly with similar pubescence near vertex; antennae rather densely with yellowish brown pubescence on segments 1–5, and with dark brown one on the remainders; pronotum densely with yellowish brown (pale yellow in a female specimen examined) subrecumbent pubescence and yellowish brown long weak hairs, the former of which is waved towards the most vertical point of disc, and also with dense yellow pubescence on sides of base; scutellum densely with pale yellow pubescence. Elytra rather sparsely clothed with long weak yellowish brown hairs, and decorated with the following pubescence: dense yellowish brown one near basal two-ninths and a part at a level between apical five-eighths and apical ninth, blackish brown ones on the median black band and usually on the basal black band, pale yellow ones on the oblique part



Figs. 1–4. *Cyrtoclytus* spp. —— 1, *C. formosanus* GRESSITT, holotype male; 2, same species, female; 3, *C. kusamai* sp. nov., holotype male; 4, same, allotype female.

between the second and third black bands, and also with three yellow bands, of which a linear oblique one is along the anterior margin of the second black band, a moderate oblique band on the posterior part of the third black band reaching the sutural margin, and also a moderate band at apical ninth. Ventral surface densely clothed with long recumbent pale hairs, and partially with yellow pubescence at the sides of mesosternum and on the posterior margins of abdominal sternites 1–2, though sometimes with fairly vague ones on the sternites 3–4 of the latter.

Head rather large, HW/PA 1.06–1.09 (M 1.07), strongly declivous in front, coarsely and rather deeply rugose throughout; frons almost as wide as long, sinuately and moderately dilated anteriorly, slightly impressed, with a median longitudinal carina broadest near the middle and not reaching the anterior and posterior margins; clypeus relatively large, slightly transverse, smooth though provided with a few coarse punctures near base; vertex flattened, with antennal cavities each separated by four-elevenths the maximum width of head; occiput moderately convex posteriorly; genae large, four-fifths to nine-tenths the depth of lower eye-lobes; eyes distinctly prominent; antennae long and relatively slender, reaching slightly behind basal three-tenths (male) or two-ninths (female) of elytra, moderately thickened distally, scape weakly clavate, not so thickened, one and one-tenth the length of segment 3, segments 3 and 4 weakly thickened apically, segment 5 strongly dilated apically and about twice as long as wide, terminal segment distinctly longer than segment 10 and bluntly pointed apically.

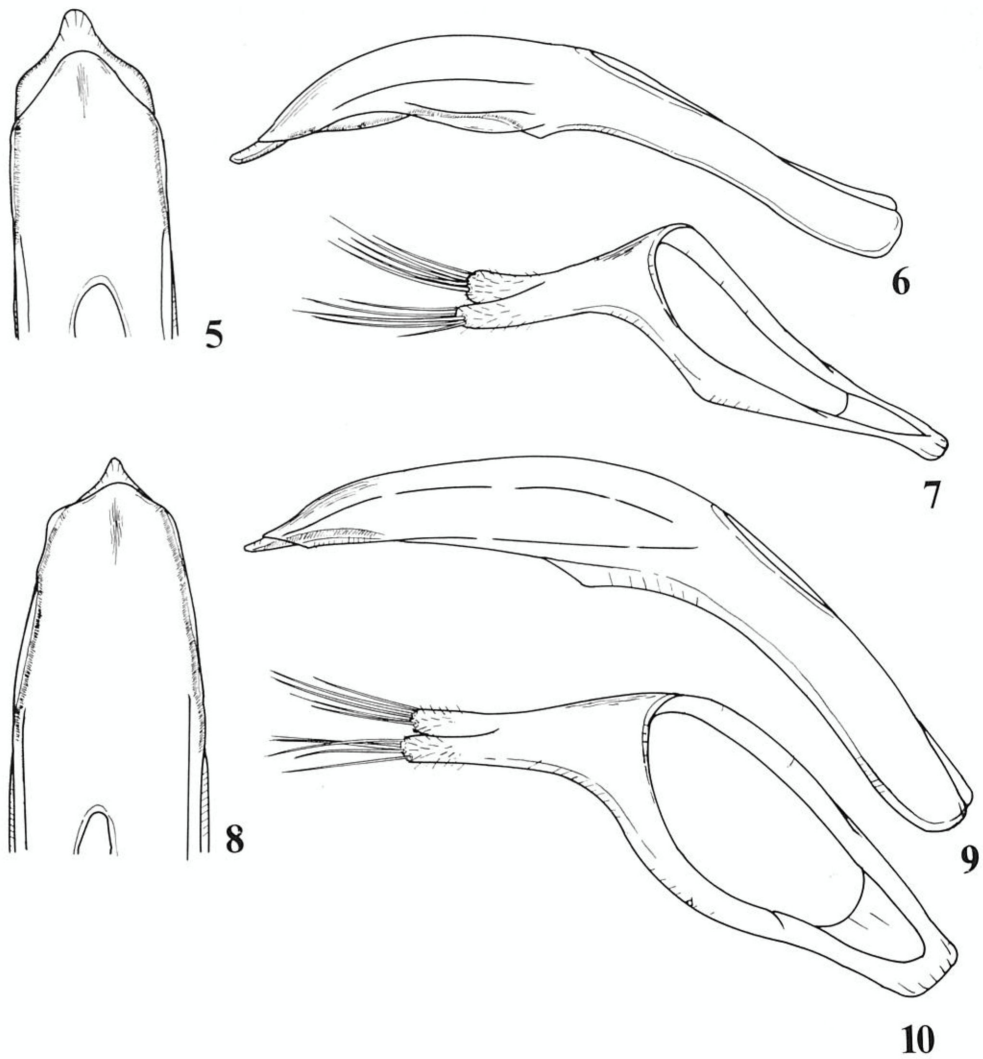
Pronotum moderate and fairly transverse, widest at middle, moderately contracted in base and rather weakly so in apex; PL/PA 1.27–1.36 (M 1.31), PL/PW 0.95–1.01 (M 0.99), PB/PA 0.91–1.00 (M 0.96), PB/EW 0.61–0.64 (M 0.63); sides obliquely dilated in a short distance from apex, weakly arcuate to middle, then arcuately and rather strongly attenuate to basal eighth and almost parallel to basal angles; apex gently arcuate and moderately truncate; disc strongly convex, with slight impressions on sides near the middle, densely and rather finely rugose throughout. Scutellum rather small and flattened.

Elytra moderate in length, gradually attenuate towards apices, EL/EW 2.61–2.81 (M 2.73); sides moderately rounded at humeri, gradually attenuate to slightly before basal fourth, then gently attenuate and arcuate to near apical sixth, and then moderately and arcuately attenuate towards apices, which are arcuately rounded; disc weakly convex, moderately raised near scutellum, coarsely and closely punctured.

Prosternum moderately convex, coarsely rugose, with prosternal process strongly produced ventrad. Mesosternum coarsely rugose, with mesosternal process strongly vertical along median line. Metasternum coarsely punctured and rather densely provided with moderate scales. Abdomen coarsely and rather closely punctured.

Legs rather long and stout; length of hind tibia and femur combined 1.19 (male) or 1.00–1.03 (female) times as long as elytra; hind femur moderately compressed, and weakly swollen in apical half.

Male genital organ relatively small and heavily sclerotized. Median lobe a little



Figs. 5–10. Male genital organs of *Cyrtoclytus* spp. —— 5–7, *C. formosanus* GRESSITT; 8–10, *C. kusamai* sp. nov.; 5, 8, apical part of median lobe, dorsal aspect; 6, 9, median lobe, lateral aspect; 7, 10, tegmen, dorso-lateral aspect.

less than one-fifth the length of elytra, slightly arcuate, rather broad, distinctly exposing the apical portion of ventral plate in dorsal aspect; ventral plate triangularly pointed apically and blunt at the extremity, weakly and arcuately produced ventrad near apex; dorsal plate relatively thickened, with dorsal margin moderately arcuate throughout, and with sides subparallel near the middle, and then weakly emarginate and attenuate towards the rounded apex. Tegmen about three-fourths the length of

median lobe; paramere rather slender, about three-fourths the length of tegmen, with the apical two lobes rather short and slightly produced outwards, each provided with five or six very long terminal setae.

Body length: 13.7–15.7 mm.

Specimens examined. 1 male (holotype), Numanohira (2,255 m in alt.) on Mt. A-li Shan, Chiai Prefecture of Taiwan, 3. VI. 1932, J. L. GRESSITT leg. (CAS); 1 female, near Meifeng (2,100 m in alt.) in Jenai County, Nantou Prefecture, 20. V. 1976, T. SHIMOMURA leg. (TN); 1 female, Shenmu (2,200 m in alt.) in Hsiulin County, Hwalien Prefecture, 8. V. 1977, S. SAITO leg. (TN).

Distribution. Taiwan.

Notes. All known locality of *C. formosanus*, Numanohira on Mt. A-li Shan (type locality!), Meifeng on the southwestern ridge of the Hohuanshan Mountains and Shenmu of Hwalien Prefecture are above 2,000 m in altitude. The clytine beetle seems very rare, since I have been able to examine only three specimens including the holotype. Also, GRESSITT (1951) has recorded two specimens from Chushinron near Puli City, but it is not known if they are actually *C. formosanus* or not.

In the original description, the type was said to be an unique female, but was acutually a male specimen, and I made the description and illustration of male genital organ based on the holotype.

Cyrtoclytus kusamai sp. nov.

(Figs. 3–4, 8–10)

Cyrtoclytus formosanus: TAKEDA *et al.*, 1976, Sayabane, Tokyo, (2), p. 9, fig. 22.

Clearly different from the preceding species, *C. formosanus*, though resembling in the coloration and pubescent maculation. Large species with rather voluminous fore body and stout legs. Colour almost as in *C. formosanus* though more reddish in general; elytra reddish brown to dark yellowish brown, each decorated with three black bands as in *C. formosanus*, though the basal one is sometimes absent, and the second linear one is narrower and meeting the basal one at the external margin. Hairs almost as in *C. formosanus* except for the following points: pronotum densely clothed with golden brown recumbent pubescence, hardly with erect hairs; yellow pubescence on elytra and ventral surface paler in coloration; abdominal sternites 3–5 uniformly with dark yellowish brown pubescence.

Head fairly large, HW/PA 1.02–1.08 (M 1.05), strongly declivous in front, coarsely and deeply rugose throughout; frons slightly wider than long, FL/FA 0.88–0.96 (M 0.92), slightly and arcuately dilated anteriorly, moderately impressed, with a median longitudinal carina distinctly raised, reaching the anterior and posterior margins, though the carina is sometimes divergent at the fork in basal four-fifths in male specimens; clypeus relatively large and transverse, almost smooth; vertex moderately raised at sides, with antennal cavities each separated by about one-third the maximum width of head; occiput strongly convex posteriorly; genae large, four-fifths

to eleven-twelfths the depth of lower eye-lobes; eyes strongly prominent; antennae moderate in length and stout, reaching basal one-fourth (male) or one-fifth (female) of elytra, rather distinctly thickened distally, scape moderately clavate and weakly arcuate, one and two-thirteenths the length of segment 3, segments 3 and 4 rather strongly thickened apically, segment 5 strongly dilated apically and about 1.5 times as long as wide, terminal segment distinctly longer than the preceding segment, bluntly pointed apically.

Pronotum relatively large and transverse though usually slightly elongate, widest just before the middle, moderately contracted in base and weakly so in apex; PL/PA 1.28–1.46 (M 1.37), PL/PW 1.05–1.10 (M 1.07), PB/PA 0.90–1.00 (M 0.96), PB/EW 0.63–0.68 (M 0.67); sides obliquely dilated to apical eighth, weakly arcuate at a level between apical one-eighth and basal fifth, then roundly attenuate to a short distance from base (though arcuately rounded throughout in a female paratype), and then subparallel to basal angles; apex arcuately rounded and distinctly marginate; disc distinctly convex, usually vertical behind middle, with slight impressions on sides near the middle, more finely rugose than on head. Scutellum rather small, usually concave.

Elytra fairly elongate, slightly sinuate and attenuate towards apices, EL/EW 2.73–3.05 (M 2.88), sides moderately rounded at humeri, gradually attenuate to basal two-ninths, slightly and arcuately emarginate at a level between basal two-ninths and apical third, then slightly rounded and attenuate to subtruncate apices; disc weakly convex, moderately raised near scutellum, coarsely and closely punctured.

Prosternum fairly short and moderately vertical, coarsely rugose, with prosternal process strongly produced ventrad. Mesosternum microsculptured near base, with mesosternal process strongly vertical along median line, finely reticulate. Metasternum coarsely and rugosely punctured. Abdomen moderately scattered with small punctures.

Legs long and stout; the length of hind tibia and femur combined 1.11–1.18 (male) or 1.05 (female) times as long as elytra; hind femur moderately compressed, moderately swollen in apical half.

Male genital organ moderate and heavily sclerotized. Median lobe a little more than one-fifth the length of elytra, thick and stout, moderately arcuate, slightly exposing the apex of ventral plate in dorsal aspect; ventral plate with sides gradually narrowed to slightly before apex, then arcuate and triangularly pointed to the narrow extremity; dorsal plate fairly thick, hardly exposing the ventral one in profile, with sides arcuately attenuate to near apex, which is bisinuately and weakly rounded. Tegmen a little more than three-fourths the length of median lobe, fairly broad in the ring part, weakly convex at middle; paramere slender and elongate, about two-fifths the length of tegmen, with the apical two lobes elongate, alomost parallel-sided, each provided with five long terminal setae.

Body length: 14.8–18.1 mm.

Type series. Holotype: male, Lushan (about 1,000 m in alt.) in Jenai County,

Nantou Prefecture of Taiwan, 2. V. 1977, Y. KOMIYA leg. (NSMT). Allotype: female, same locality and collector as the holotype, 9. V. 1977 (NSMT). Paratypes: 1 male, same locality and collector as the preceding, 5. V. 1977 (TN); 1 male, 1 female, same locality as the preceding, 22. IV. 1973, K. MATSUDA leg. (HA); 1 male, Sulin (about 1,000 m in alt.) in Fushin County, Taoyuan Prefecture, 27. IV. 1981, Y. IZUMO leg. (YI).

Distribution. Taiwan.

Notes. As was already pointed out in the introduction of this paper, *C. kusamai* may have some relationship with the preceding species, *C. formosanus*. Though very similar in the coloration and pubescent maculation, this new species has fairly large and robust body form as compared with *C. formosanus*, and is provided with rather strongly expanded prothorax, elongate elytra and stouter appendages. One of the pronounced difference is seen in male genital organ. Its median lobe is stouter and thicker than that of *C. formosanus*, with the dorsal plate not so distinctly shorter than the ventral one as in *C. formosanus*. The tegmen of *C. kusamai* is fairly broad, and the apical two lobes of paramere are elongate and almost parallel-sided.

One of the known localities of *C. kusamai*, Lushan in central Taiwan, is about 1,000 m in altitude, lying to the northwest of Mt. Nangkao-shan. At the locality, this clytine beetle usually comes flying to the freshly cut trunks of a broadleaved tree on clear midday. Another locality, Sulin in northern Taiwan, lies at the foot of Mt. Lalashan. *Cyrtoclytus kusamai* seems to be a species occurring on lower mountains, and was altitudinally segregated from *C. formosanus*.

摘　　要

新里達也：タイワンキスジトラカミキリとその近縁種.——*Cyrtoclytus formosanus* GRESSITT, 1933 タイワンキスジトラカミキリは，台湾中部阿里山の高地で採集された1個体により新種として発表された種で，原記載以降は MITONO (1940) や GRESSITT (1951), CHANG (1976) らによって再記録あるいは図示されている．これまで台湾の *Cyrtoclytus* 属のトラカミキリは，本種のみが知られていただけであったが，近年になって，同島から採集される *C. formosanus* とされる標本のなかには，色彩と毛斑のパタンがきわめてよく似ている2種が混在していることが判ってきた．この両種は台湾の山岳地帯に生息するが，体長が平均して小さく，触角と肢がより細く，翅鞘端部に黄色の明瞭な毛斑をもつ種は 2,000 m 以上の高山帯に，体長が平均して大きく，触角と肢がより太く，翅鞘端部にはまばらに明黄色の毛を散らす種は 1,000 m 前後の中山帯にみられ，分布を違えている．生息地の標高や翅鞘の毛斑パタンのわずかな違いから，高山帯の種が真の *C. formosanus* ではないかと考えられていたが，この推測はタイプ標本を検することにより実証された．一方，中山帯の種は本属の既知種とも異なり，新種と考えられるので，*C. kusamai* sp. nov. ミヤマキスジトラカミキリ (和名新称) としてここで記載した.

Literature Cited

CHANG, S., 1976. The clytine cerambycids of Taiwan. *Trans. ent. Soc., Taichung*, **11**(1): 1–19, pls. 1–7. (In Chinese.)

GAHAN, C. J., 1906. Cerambycidae. *Fauna Brit. Ind., Coleopt. Ceramyc.*, **1**: 1–329.

GRESSITT, J. L., 1933. New longicorns from the Japanese Empire. *Pan-Pac. Ent.*, **9**: 163–170.

——— 1938. New longicorn beetles from China, V (Coleoptera: Cerambycidae). *Lingnan Sci. J.*,

18: 45–56, pl. 4.

GRESSITT, J. L., 1951. Longicorn beetles of China. *Longicornia*, **2**: 1–667, 22 pls.

——— & J. A. RONDON, 1970. Cerambycids of Laos (Distenidae, Prioninae, Philinae, Aseminae, Lepturinae, Cerambycinae). *Pacif. Ins. Mon.*, **24**: 1–314.

HUA, L., 1982. A Check List of the Longicorn Beetles of China (Coleoptera: Cerambycidae). 159 pp. Zhongshan Univ.

KANO, T., 1938. Notes on longicorn Coleoptera from Japan, VIII. *Trans. nat. Hist. Soc. Formosa*, **18**: 346–358. (In Japanese.)

MITONO, T., 1940. Monography of Clytini in the Japanese Empire (Cerambycidae, Coleoptera), Part 1. *Bull. School Agr. For. Taihoku imp. Univ.*, (1): 74–119, pls. 5–8.

NIISATO, T., 1987. A new *Cyrtoclytus* (Coleoptera: Cerambycidae) from northern Thailand. *Coleopts Bull.*, **41**: 297–301.

PIC, M., 1906. *Mat. Long.*, **6**(1): 1–90.

——— 1908. Colèoptères éxotique nouveaux ou peu connus. *Échange*, **24**: 59–61.

——— 1914. *Mat. Long.*, **9**(1): 1–110.

TAKEDA, H., *et al.*, 1976. A guide for collecting Taiwanese beetles (I). *Sayabane, Tokyo*, (2): 1–12, 4 pls. (In Japanese.)

Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., (3): 142–154, June 15, 1988

A Study on the Group of *Glenea chlorospila* in Japan

——Studies on Cerambycidae (Coleoptera) of Japan (7)——

Hiroshi MAKIHARA

Tohoku Branch, Forestry and Forest Products Research Institute,
Shimo-kuriyagawa, Morioka, Iwate, 020-01 Japan

Abstract A study was made on the species-group of *Glenea chlorospila*, which consists of two species and three subspecies in Japan. These are *Glenea kusamai* sp. nov. from Miyako Is. of the Ryukyus, and *G. chlorospila* GAHAN, the latter of which is classified into the nominotypical subspecies from Shikoku, Kyushu and the Ohsumi and the Amami Isls., *G. c. hachijonis* MATSUMURA et MATSUSHITA, stat. nov., from the Tokara and the Izu Isls., and *G. c. okinawensis* subsp. nov. from Okinawa Is. of the Ryukyus.

With the exception of those belonging to the *chlorospila* species-group, the Japanese species of the genus *Glenea* can be easily classified, since most of them are beautifully colored, not so small in size and not so variable geographically. However, *Glenea chlorospila* and its relatives pose a difficult taxonomic problem due to high geographical variabilities, and their classification has been confused up to the present. In the present paper, I will try to describe their geographical variation in some detail, based upon many specimens collected from various localities of Japan.

The abbreviations of the type depositories used in the present paper are as follows: BMNH—British Museum (Natural History), London; HOKKAIDO—Entomological Laboratory, Faculty of Agriculture, Hokkaido University, Sapporo City; NODAI—Laboratory of Entomology, Tokyo University of Agriculture, Tokyo.

Key to the Species of the *Glenea chlorospila* Species-group from Japan

1. Each apex of elytra with a long (Fig. 1A–D) or somewhat short (Fig. 1E) spine at the outer angle; prosternal process small (Fig. 2B) in male; mesosternal process narrow (Fig. 2C) in male; apex of median lobe of male genitalia sharply pointed (Fig. 2A) 2
— Each apex of elytra with a short spine at the outer angle (Fig. 1F); prosternal process large in male (Fig. 2B′); mesosternal process wide in male (Fig. 2C′); apex of median lobe of male genitalia not so sharply pointed (Fig. 2A′); the outer three markings on each elytron conjointed each other and stabilized (Fig. 1F) ..... *G. kusamai* sp. nov.
2. Apex of each elytron with a long spine at the outer angle 3
— Apex of each elytron with a somewhat short spine at the outer angle ..... *G. chlorospila okinawensis* subsp. nov.
3. Elytra with erect or inclined long black hairs and dense and fine black pubescence ..... *G. chlorospila chlorospila*
— Elytra with erect or inclined short gray hairs and dense gray pubescence ..... *G. chlorospila hachijonis*

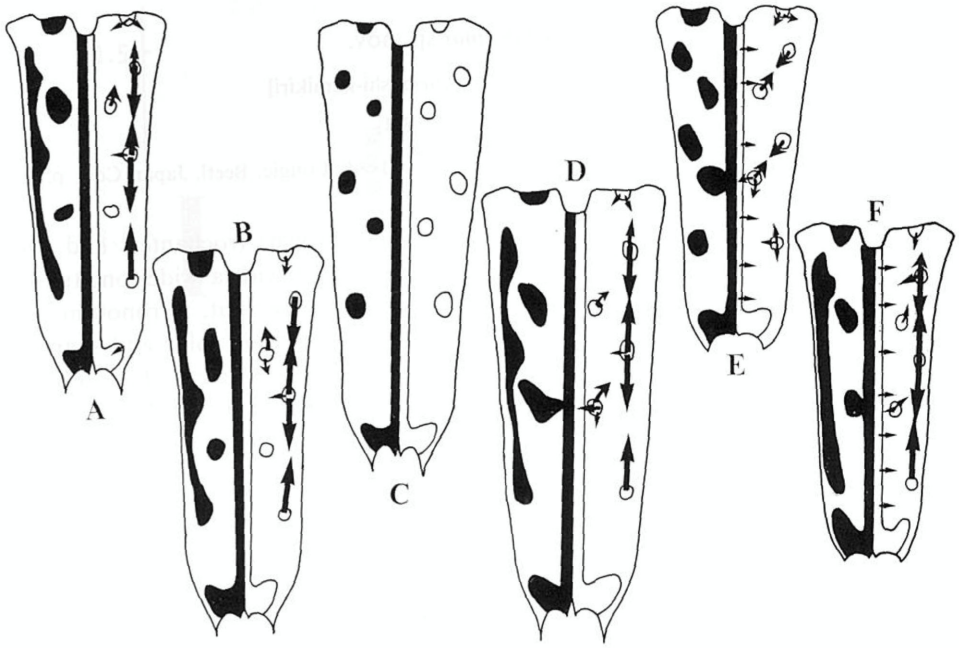


Fig. 1. Geographical variations of elytral markings. —— A: Tokara Isls., B: Izu Isls., C: Amami-Oshima Is., D: Kikai Is., E: Okinawa Is., F: Miyako Is.

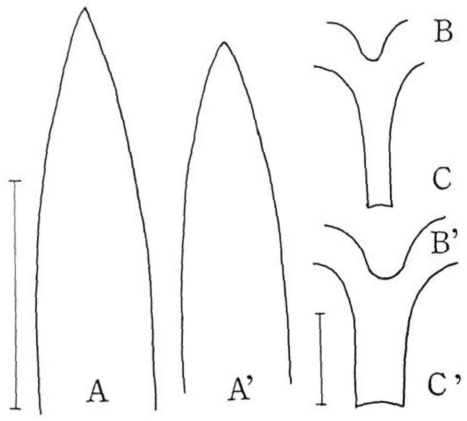


Fig. 2. Apex of median lobe (A, A′), prosternal process (B, B′, in male) and mesosternal process (C, C′, in male). —— A, B, C: *Glenea chlorospila chlorospila* from Yakushima Is. —— A′, B′, C′: *G. kusamai* sp. nov. Scales: 1 mm.

Glenea kusamai sp. nov.

[Japanese name: Miyako-ruriboshi-kamikiri]

(Figs. 1F, 2A′–C′, 3H)

Glenea (*Glenea*) *chlorospila* subsp.: KUSAMA & TAKAKUWA, 1984, Longic. Beetl. Japan Col., p. 529, pl. 91, fig. 640e, f.

Body black; palpi and tarsal claws light reddish brown; trochanters and apex of 7th abdominal sternite reddish brown. Head decorated with a wide longitudinal stripe, which consists of silverly green hairs like scales, on occiput. Pronotum with three longitudinal stripes, which consist of the hairs of the same color and shape as above, one stripe is on the middle and two are at the lateral sides. Each elytron decorated with seven pubescent markings, which consist of the hairs same colored as

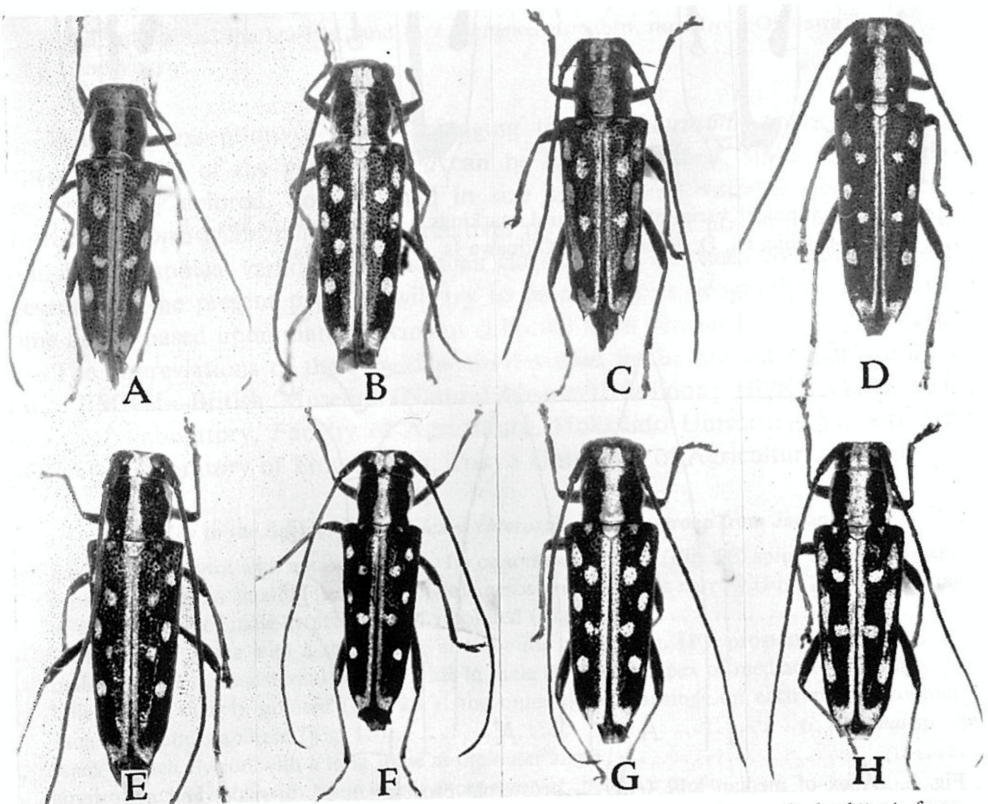


Fig. 3. *Glenea chlorospila* species-group, females. —— A: *Glenea chlorospila hachijonis* from Hachijo Is. of Izu Isls. B–E: *G. chlorospila chlorospila* from Cape Sata of Kyushu (B), Kuroshima Is. of Kagoshima Pref. (C), Amami-Oshima Is. (D), Okinoerabu Is. (E). —— F, G: *G. chlorospila okinawensis* subsp. nov. from the northern part (F) and the southern part (G) of Okinawa Is. —— H: *G. kusamai* sp. nov.

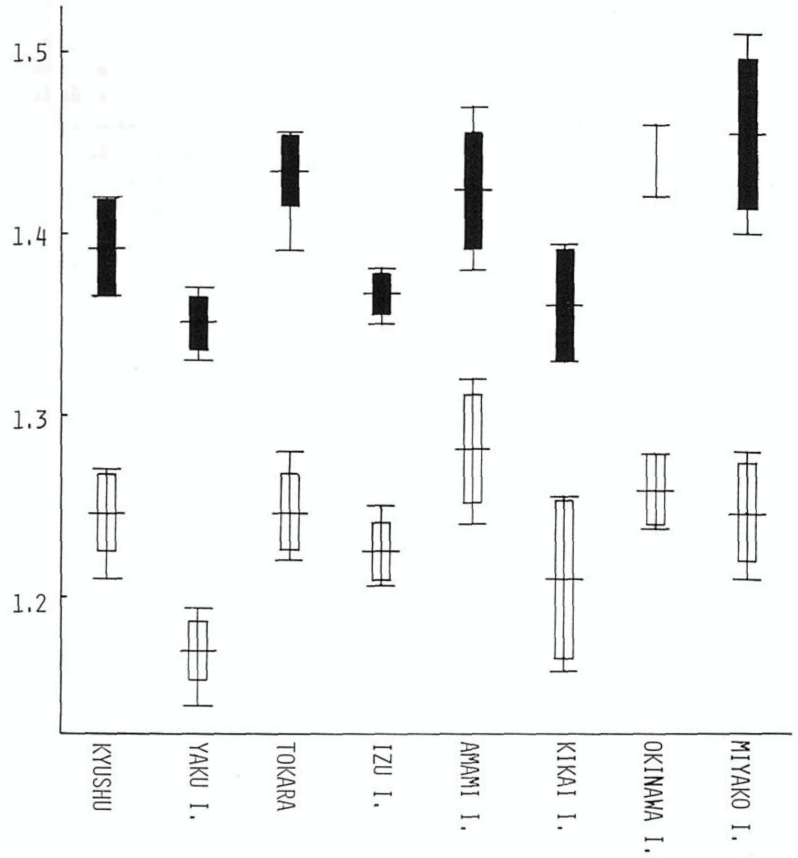


Fig. 4. Population range diagrams showing in relative length of antennae of the size of body for each locality. Means are represented by horizontal lines, range by bars and S.D. by closed (in male) or open (in female) rectangles.

above: lateral three markings, which are conjointed each other, from near humeri to apical 1/3, middle three markings from base to apical 1/2, and a sutural long marking, which is wide at apex, from base to apex.

Head wider than prothorax (in male) or as wide as prothorax (in female), coarsely punctured, with sparse erect long black hairs and dense prostrate black pubescence; vertex with sparse prostrate silverly green or blue pubescence and scales; genae with dense same pubescence and sclaes as on vertex. Antennae closely correlated in length to the size of body (Fig. 5); antennae 1.40–1.51 (in male) or 1.21–1.28 (in female) times as long as body (Fig. 4); relative lengths of antennal segments (%)—— 10.0: 1.3: 15.1: 10.0: 10.0: 9.7: 9.7: 9.0: 8.7: 7.7: 8.7 (in male) or 10.4: 1.9: 14.2: 11.2: 10.4: 9.7: 9.7: 9.0: 8.6: 7.5: 7.5 (in female); 1st to 11th segments with dense prostrate blackish brown pubescence; 1st to 7th segments with sparse suberect long

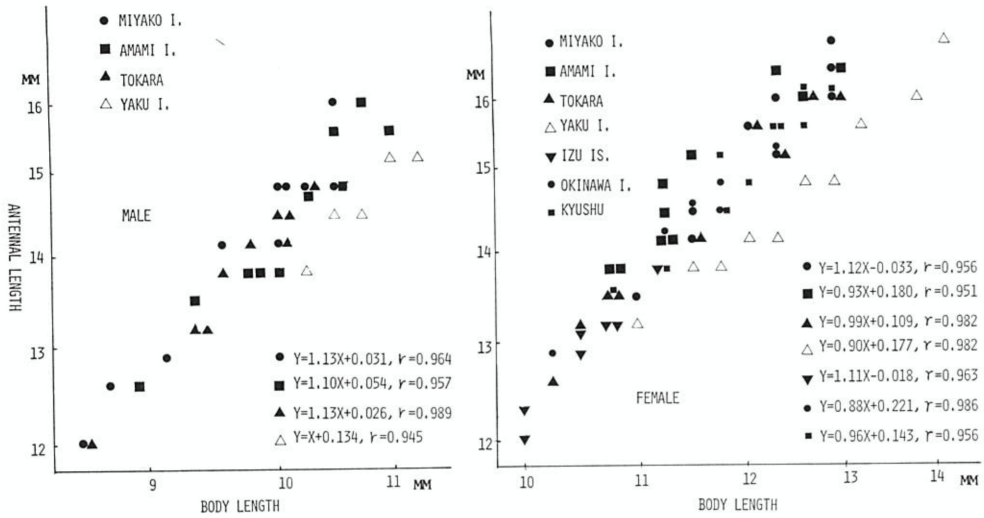


Fig. 5. Correlations of length between antennae and body for each locality.

blackish brown hairs on ventral sides; apices of 3rd to 10th segments with a few erect long blackish brown hairs on ventral sides; 1st to 3rd segments with sparse prostrate greenish blue pubescence on ventral sides.

Pronotum 1.0 (in male) or 1.17 (in female) times as long as broad, somewhat coarsely and deeply punctured, with sparse erect long brown hairs and dense prostrate black pubescence; prosternal stripe narrow (in male) or wide (in female) on the middle (Fig. 6).

Scutellum trapeziform, with dense prostrate silverly green pubescence and scales (except near apex and on lateral sides); apex with dense prostrate black pubescence; lateral sides fringed with dense yellowish brown pubescence.

Elytra about 2.4 (in male) or 2.0 (in female) times as long as broad, with rough punctures, which become weaker towards apex; humeri developed and wide; each apex slightly concave, with a short spine at the outer angle; disk with dense prostrate blackish brown pubescence and sparse suberect, somewhat long brown hairs.

Ventral side with dense prostrate silverly blue and brown pubescence, and with sparse suberect brown hairs; pro- and mesosternal processes well developed and wide.

Legs slender; femora with sparse inclined long whitish yellow hairs and with sparse prostrate short yellow hairs; tibiae with dense prostrate brown hairs, which become longer towards apices; tarsi with sparse inclined blackish brown setae like hairs and with dense prostrate blackish brown pubescence on dorsal sides.

Male genitalia somewhat stout, 2.5 mm in length; median lobe with somewhat short median struts; ventral edge of median orifice strongly projected; tegmen with roof and long basal piece; lateral lobes with sparse long setae on apical parts (Fig. 7).

Body length: 8.6–10.5 mm (male); 11.0–13.0 mm (female).

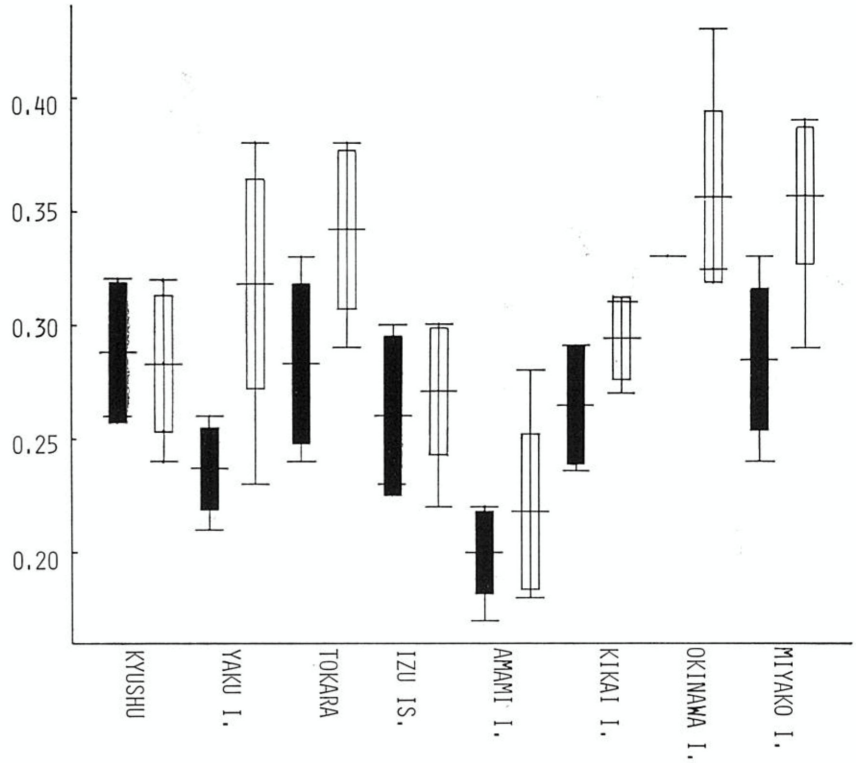


Fig. 6. Population range diagrams showing in relative width of pronotal band to pronotum for each locality. Means are represented by horizontal lines, range by bars and S.D. by closed (in male) or open (in female) rectangles.

Host plants. Living leaves of *Ampelopsis brevipedunculata* TRAUTV. var. *hancei* REHD., Vitaceae (adult); *Gracinia subelliptica* MERR., Guttiferae (larva).

Distribution. Southern part of Miyako Is. of the Ryukyus.

Type material. Holotype ♂ (Type No. 2652, Kyushu University), Uinpia, southern part of Miyako Is. of the Ryukyus, 30. v. 1975, H. MAKIHARA leg. Paratypes: 1 ♀, same locality as the holotype, 14. vi. 1972, M. HAYASHI leg.; 2 ♀, same locality and collector as the holotype, 28. vi. 1974; 8 ♂ 2 ♀, same locality and collector as the holotype, 30. v. 1975; 6 ♂ 4 ♀, same locality and collector as the holotype, 31. v. 1975.

Type depository. The holotype is preserved in the collection of the Entomological Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University; paratypes are in the private collection of the author.

This new species is similar and related to *G. chlorospila* GAHAN, 1897, but distinguishable from it by the following characters:

Glenea chlorospila: each apex of elytra with a long or somewhat short spine at the

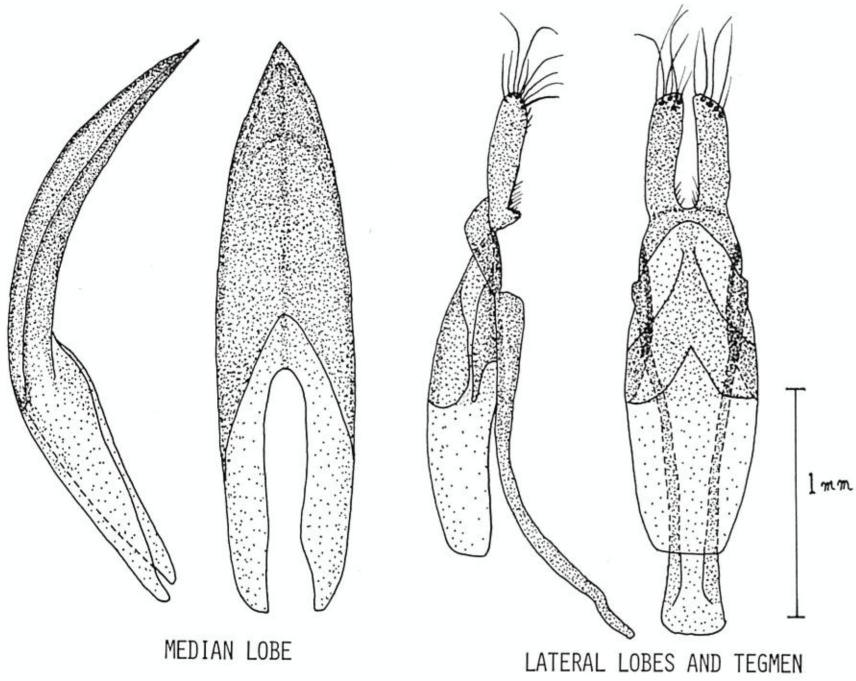


Fig. 7. Male genitalia of *Glenea kusamai* sp. nov.

outer angle; pro- and mesosternal processes small and narrow in male; variability of elytral markings is high.

Glenea kusamai sp. nov.: each apex of elytra with a short spine at the outer angle; pro- and mesosternal processes large and wide in male; variability of elytral markings is low.

Glenea chlorospila chlorospila GAHAN

[Japanese name: Ryukyu-ruriboshi-kamikiri]

(Figs. 1C–D, 2A–C, 3A–E)

Glenea chlorospila GAHAN, 1897, Annls. Mag. nat. Hist., (6), **19**: 488 (Oshima, Loo-Choo Archipelago, Japan, 1895: BMNH).

Glenea (s. str.) *chlorospila*: AURIVILLIUS, 1923, Coleopt Cat., (74): 499.

Glenea (s. str.) *chlorospila* ssp. *chlorospila*: BREUNING, 1956, Ent. Arb. Mus. Frey, **7**: 810.

Glenea (*Glenea*) *chlorospila chlorospila*: KUSAMA & TAKAKUWA, 1984, Longic. Beetl. Japan Col., p. 529, pl. 91, figs. 640, 640a–c.

Body black. Head decorated with greenish golden yellow or golden yellow short hairs like scales on occiput. Pronotum with three longitudinal stripes, which are colored as in occiput. Each elytron decorated with seven pubescent markings, which

are colored as above: lateral three markings, which are usually small but sometimes conjointed each other (Kikaijima Is.-type including specimens of Kuroshima Is.), from near humeri to apical 1/3, middle three markings, which are very small (Amami-Oshima Is.-type, Fig. 1c), or somewhat small (Yakushima Is.-type including specimens of Shikoku, Kyushu, Tanegashima Is., Tokunoshima Is. and Okinoerabu Is.) or somewhat large (Kikaijima Is.-type including specimens of Kuroshima Is., Fig. 1D) from base to apical 1/2, a sutural long marking, which is narrow (Amami-Oshima Is.-type) or somewhat wide (another localities) from base to apex.

Head coarsely punctured, with erect long black hairs and with bluish golden yellow pubescence on frons and genae. Antennal length is closely related to body (Fig. 5); antennae short (Yakushima Is. & Kikaijiam Is.) or somewhat longer (Fig. 4), relative length of antennae to body of the former 1.351 ± 0.015 (in male, Yakushima Is.), 1.361 ± 0.031 (in male, Kikaijima Is.), 1.170 ± 0.016 (in female, Yakushima Is.) and 1.210 ± 0.043 (in female, Kikaijima Is.), the latter 1.35–1.46 (in male) or 1.22–1.31 (in female).

Pronotum with a longitudinal narrow (Amami-Oshima Is.-type) or somewhat wide (other localities) stripe on the middle (Fig. 6), relative width of the pronotal stripe to pronotum of the former 0.200 ± 0.01 (in male) or 0.281 ± 0.034 (in female), and the latter 0.25–0.32 (in male) or 0.25–0.37 (in female).

Each elytron with a long spine at the outer angle; disk with dense prostrate short pubescence.

Prosternal process small and mesosternal process narrow in male (Fig. 2B, C).

Apex of median lobe of male genitalia sharply pointed.

Body length: 9.0–11.5 mm (male), 10.7–13.9 mm (female).

Host plants. Living leaves of *Rubus sieboldii* BLUME, Rosaceae, *Ampelopsis brevipedunculata* TRAUTV., *A. brevipedunculata* TRAUTV. var. *hancei* REHD., Vitaceae (adult); *Castanopsis cuspidata* SCHOTTKY var. *Sieboldii* NAKAI, Fagaceae (larva).

Distribution. Shikoku, Kyushu, Tanegashima Is., Yakushima Is., Kuroshima Is. of Kagoshima Pref., Amami-Oshima Is., Kikaijima Is., Tokunoshima Is. and Okinoerabu Is.

Specimens examined. Kagoshima Pref. (Mt. Takakuma, 1 ♂ 2 ♀, 10. vii. 1916, G. OKAJIMA leg.; 1 ♂ 2 ♀, same locality and collector as above, 10. vi. 1917; Cape Sata, 2 ♂ 3 ♀, 29. v. 1952, T. ESAKI & Y. HIRSAHIMA leg.; Cape Sata, 1 ♀, 24. vi. 1957, H. KAMIYA leg.; Cape Sata, 1 ♂, 30. v. 1967, H. SATOH leg.; Cape Sata, 1 ♀, 1. vi. 1968, H. MAKIHARA leg.; Cape Sata, 1 ♀, 28. vii. 1972, S. NAOMI leg.); Yakushima Is. (Ambo-Kosugidani, 1 ♀, 29. vii. 1929, H. HORI leg.; Ambo, 1 ♀, 4. viii. 1929, H. HORI leg.; Onoaida, 1 ♀, 7. vi. 1969, H. MAKIHARA leg.; Shiratani, 1 ♀, 21. vii. 1973, K. UEDA & M. TAKAGI leg.; Okawarindo, 4 ♂ 6 ♀, 28. vii.–1. viii. 1975, H. MAKIHARA leg.; Shiratani, 2 ♂ 7 ♀, 19–21. vii. 1976, S. NAOMI leg.); Tanegashima Is. (Ôgeri, 1 ♀, 24. v. 1984, K. MORI leg.); Kuroshima Is. of Kagoshima Pref. (Ôgora, 1 ♂ 3 ♀, 23–25. vii. 1975, H. MAKIHARA leg.); Amami-Oshima Is. (Nishinakama, 14 ♂ 5 ♀, 1–7. vi. 1970, H. MAKIHARA leg.; Ashikebu, 3 ♂ 2 ♀, 9. vi. 1970, H. MAKI-

HARA leg.; Yuwan, 1 ♂, 18. v. 1972, Y. YOSHIYASU leg.; Nishinakama, 1 ♂ 3 ♀, 23–25. v. 1973, H. MAKIHARA leg.; 1 ♀, same locality and collector as above, 26. v. 1976; 3 ♀, same locality and collector as above, 24–26. v. 1978); Kikaijima Is. (3 ♂ 2 ♀, 20. v. 1973, H. MAKIHARA leg.); Tokunoshima Is. (Mikyo, 1 ♂, 29. viii. 1987, W. MITSUHASHI leg.); Okinoerabu Is. (Wadomari, 1 ♂ 1 ♀, 2–5. vii. 1974, H. MAKIHARA leg.).

Glenea chlorospila hachijonis MATSUMURA et MATSUSHITA, stat. nov.

[Japanese name: Hachijo-ruriboshi-kamikiri]

(Figs. 1A, B, 3A)

Glenea hachijonis MATSUMURA et MATSUSHITA, 1933, Ins. matsum., **7**: 110 (♂, Is. Hachijo: HOKKAIDO).

Glenea chlorospila izuinsularis UMEYA et FUJIMURA, 1954, Kontyû, Tokyo, **22**: 13, Fig. 1 (♂, Is. Izu-Hachijo, June 5, 1951: NODAI).

Glenea chlorospila GAHAN var. *humerolineata* HAYASHI, 1956, Bull. Osaka munic. Mus. nat. Hist., (9): 19, pl. 5, fig. 2 (Is. Nakanoshima, Tokara Isls.).

Glenea chlorospila m. *hayashii* OHBAYASHI, 1963, Fragm. coleopt., (3): 12 (nom. nov. pro. *humerolineata* HAYASHI, 1956).

Glenea chlorospila chlorospila: KUSAMA et TAKAKUWA, 1984, Longic. Beetl. Japan Col., p. 529, pl. 91 figs. 640, 640a, b).

Antennal length is closely related to body (Fig. 5); antennae long (Tokara Isls., Fig. 4) or somewhat shorter (Izu Isls., Fig. 4), relative length of antennae to body of the former 1.434±0.019 (in male) or 1.247±0.021 (in female), and the latter 1.367±0.011 (in male) or 1.225±0.016 (in female).

Pronotum with a longitudinal wide (Tokara Isls.-type) or somewhat narrow (Izu Isls.-type) stripe on the middle (Fig. 6), relative width of this stripe to pronotum of the former 0.283±0.019 (in male) or 0.342±0.035 (in female), and the latter 0.271±0.028 (in male) or 0.200±0.018 (in female).

Each elytron with seven markings; the outer three markings sometimes conjointed each other, the middle one widely facing inside; middle one of the inner three markings large (Tokara Isls.-type, Fig. 1A) or long (Izu Isls.-type, Fig. 1B). Elytra with inclined short gray hairs and with very short gray pubescence.

Body length: 7.5–10.0 mm (male), 9.6–12.5 mm (female).

Host plants. Living leaves of *Ampelopsis brevipedunculata* TRAUTV., Vitaceae, *Hydrangea* spp., Saxifragaceae (adult); *Castanopsis cuspidata* SCHOTTKY var. *Sieboldii* NAKAI, Fagaceae (larva).

Distribution. Tokara Isls. and Izu Isls. (excluding Kozu Is.).

Specimens examined. Tokara Isls. (Kuchinoshima Is., 3 ♀, 26. vi.–3. vii. 1969, H. MAKIHARA leg.; Nakanoshima Is., 9 ♂ 7 ♀, 24–26. vi. 1973, H. MAKIHARA leg.; 1 ♀, 7. vii. 1974, J. ÔKUMA leg.; 1 ♀, 20. vii. 1975, H. MAKIHARA leg.); Izu Isls. (Miyake Is.—Tairo, 1 ♂, 26. vi. 1975, J. ÔKUMA leg.; Mikura Is.—Sato, 1 ♂ 2 ♀, 1. vii. 1975,

J. ÔKUMA leg.; 1 ♂ 1 ♀, 1. vi. 1973, Y. OBATA leg.; Hachijo Is.-Okago-Fuji, 1 ♂, 26. v. 1964, Y. HIRASHIMA et M. SHIGA leg.; Kamogawa, 1 ♂, 27. v. 1964, same collector as above; Sueyoshi, 1 ♂ 1 ♂, 28. v. 1964, same collector as above; Okago-Sokodo, 2 ♀, 5. vi. 1964, same collector as above).

This subspecies is very similar to individuals of *G. chlorospila chlorospila* in Kuroshima Is. and Kikaijima Is., but differs from them in having the elytra with inclined short gray hairs and very short gray pubescence.

Glenea chlorospila okinawensis subsp. nov.

[Japanese name: Okinawa-ruriboshi-kamikiri]

(Figs. 1E, 3F, G)

Glenea chlorospila: MATSUSHITA, 1933, J. Fac. Agric. Hokkaido imp. Univ., **34**: 411.
Glenea (s. str.) *chlorospila*: MITONO, 1940, Cat. coleopt. japon., (8): 207.
Glenea (*Glenea*) *chlorospila chlorospila*: KUSAMA & TAKAKUWA, 1984, Longic. Beetl. Japan Col., p. 529, pl. 91, fig. 640d.

Antenna closely correlated in length to the size of body (Fig. 5); relative length of antennae to body 1.42–1.46 (in male) or 1.259±0.019 (in female).

Pronotum with a wide longitudinal stripe on the middle (Fig. 6), relative width of pronotal stripe to pronotum 0.33 (in male) or 0.356±0.038 (in female).

Each elytron with seven markings, which are small (northern part-type) or somewhat large (southern part-type, Fig. 1E); disk with dirty gray pubescence including seven markings; apical spine of the outer angle short.

Body length: 8.7–8.9 mm (male), 10.3–12.3 mm (female).

Host plants. Living leaves of *Ampelopsis brevipedunculata* TRAUTV., var. *Hancei* REHD., Vitaceae (adult); unknown (larva).

Distribution. Okinawa Is. of the Ryukyus.

Type materials. Holotype ♂ (Type no. 2653, Kyushu University), Kudeken, Okinawa Is. of the Ryukyus, 22. v. 1974, H. MAKIHARA leg. Paratypes: 2 ♀, Yona, Okinawa Is., 12–17. vi. 1970, H. MAKIHARA leg.; 1 ♂ 2 ♀, same data as the holotype; 1 ♀, Yona, Okinawa Is., 30. vi. 1976, H. MAKIHARA leg.; 1 ♀, Oku, Okinawa Is., 16. v. 1978, H. MAKIHARA leg.; 1 ♀, Kudeken, Okinawa Is., 20. iv. 1979, H. MAKIHARA leg.

Type depository. The holotype is preserved in the collection of the Entomological Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University; paratypes are in the private collection of the author.

This new subspecies is very similar to *G. chlorospila chlorospila* and *G. chlorospila hachijonis*, but differs from them in the characteristic apex of each elytron with shorter spine at the outer angle.

Discussion

As was described in the foregoing chapter, the species-group of *Glenea chlorospila*

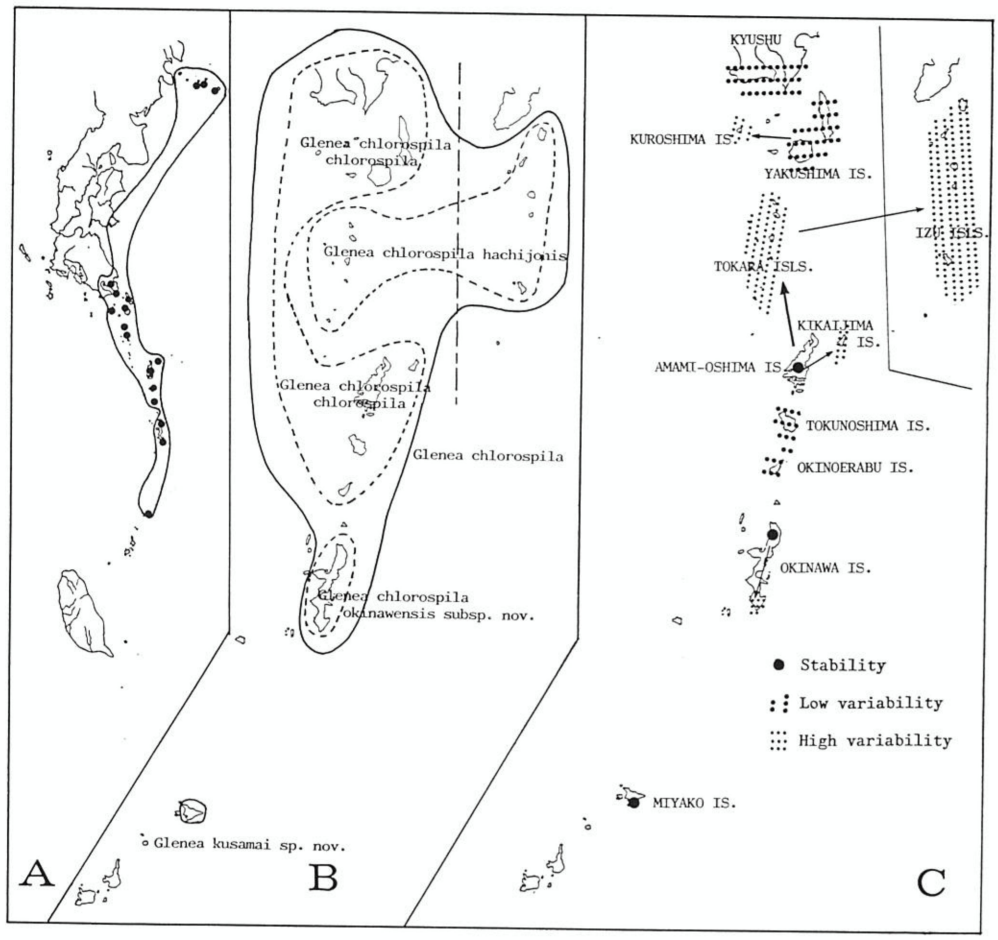


Fig. 8. Distribution maps of *Glenea chlorospila* species-group. —— (A), *G. kusamai* and *G. chlorospila* (B) and differences for variabilities of elytral markings (C). Closed circles in (A) mean localities where I examined specimens. Arrows mean routes of movings.

which consists of one widespread and one localized species (Fig. 8B), shows considerable geographical variation in the markings of elytra (Fig. 1). Populations of *Glenea chlorospila* occurring in such small islands or localities as the Tokara Isls., Izu Isls., Kuroshima Is., Kikaijima Is. and the southern part of Okinawa Is., are characterized by having large variable markings on elytra (Fig. 1A, B, D). The variability is especially pronounced in the populations distributed to the Tokara Isls. and the Izu Isls. (Figs. 1A, B, 8C). On the contrary, the populations occurring in such larger islands or localities as Shikoku, Kyushu, Tanegashima, Yakushima, Amami-Oshima Is., Tokunoshima Is., Okinoerabu Is. and northern part of Okinawa Is. are characterized by having small stable markings on elytra, and the stability is particularly high in the population of Amami-Oshima Is. (Fig. 1C).

From these facts, it can be surmised that the population of Amami-Oshima Is. is ancestral in this species-group.

Coleopterous borers including the Cerambycidae and Curculionidae, can move or disperse with development of forests and with the logs drifting on ocean currents. Around the distributional areas of this species-group, there flows the Black Current, whose strong streaming carries many vegetable materials. It is therefore very probable that the cerambycids of this group can disperse with logs by the Black Current. Thus, the routes of dispersal of the populations occurring in the Tokara Isls., Izu Isls., Kuroshima Is., Kikaijima Is. and the southern part of Okinawa Is., can be surmised as follows:

Amami-Oshima Is. → Tokara Isls. → Izu Isls.
↘ Kikaijima Is.

Tanegashima Is. & Yakushima Is. → Kuroshima Is.

Northern part of Okinawa Is. → Southern part of Okinawa Is.

I cannot determine the derivation of *Glenea kusamai* sp. nov. occurring on Miyako Is.

It should be an interesting subject to analyse more intensively the zoogeography of this species-group of cerambycid beetles. However, as the available data are not yet satisfactory, I have refrained from going into further discussion. The subject will be taken up again sometime in the future.

Acknowledgement

I wish to express my sincere gratitude to Professor K. KUSAMA, who gave me valuable advice. My thanks are due to Professor Y. HIRASHIMA of Kyushu University, Drs. M. SHIGA of the Agro-environmental Institute and S. NAOMI of Kyushu University, Messrs. W. MITSUHASHI of the Forestry and Forest Products Research Institute and J. ÔKUMA of Nagasaki Pref., for the donation or the loan of valuable specimens for my present study.

摘　　要

槇原　寛：日本のリュウキュウルリボシカミキリ種群の研究.——リュウキュウルリボシカミキリ *Glenea chlorospila* GAHAN は，宮古島から九州南部，四国南部と伊豆諸島に分布し，上翅の斑紋に変異が多いことで著名であるが，これまでその変異性の解析はなされたことがなかった.

筆者はこのたび，各地域の多数の個体を調べる機会を持ち，上翅の斑紋やその他の形質について地理的変異性の解析を試みた．その結果，リュウキュウルリボシカミキリは1種として扱うより，1種群として取り扱うべきものとの結論に達し，下記のように2種3亜種に分類整理した.

1. *Glenea chlorospila chlorospila* GAHAN リュウキュウルリボシカミキリ：四国南部，九州南部，種子島，屋久島，黒島（鹿児島県），奄美大島，喜界島，徳之島，沖之永良部島.

1′. *G. chlorospila hachijonis* MATSUMURA et MATSUSHITA ハチジョウルリボシカミキリ：トカラ列島，伊豆諸島.

1″. *G. chlorospila okinawensis* subsp. nov. オキナワルリボシカミキリ：沖縄島.

2. *G. kusamai* sp. nov. ミヤコルリボシカミキリ：宮古島.

さらに上翅の斑紋の変異性から，その移動経路の推定を行った．一般に同一群内では変異が少なく

安定しているものほどより原始的であるといわれている．そしてこのカミキリムシの仲間は陸路だけでなくシイなどの枯木に穿入するため，海流に運ばれる流木とともに分布を拡げることが可能な昆虫である．これらのことと最近の地史を考えあわせると，その移動経路・方法は次のように推定される．

奄美大島 ⟶(海流) トカラ列島 ⟶(海流) 伊豆諸島
奄美大島 ⟶(海流) 喜界島
種子島・屋久島 ⟶(陸橋) 黒島
沖縄島北部 ⟶ 沖縄島南部

しかし，宮古島のミヤコルリボシカミキリが沖縄島からどうような経路で分布するに至ったかについては，現状では推定することはできなかった．

References

AURIVILLIUS, C., 1923. *Coleopterorum Catalogus* (74), Cerambycidae: Lamiinae II, 704 pp.

BREUNING, S., 1956. Revision der Gattung *Glenea* Newm. *Ent. Arb. Mus. Frey*, **7**(2): 1–893.

GAHAN, C. J., 1897. Notes on the longicorn genus *Glenea* Newm., with descriptions of new species. *Annls. Mag. nat. Hist.* (6), **19**: 473–493.

HAYASHI, M., 1956. Entomological results from the scientific survey of the Tokara Islands V. Coleoptera: Cerambycidae. *Bull. Osaka Mus. nat. Hist.*, (9): 11–22, 2 pls.

KIMOTO, S., 1974. On some infraspecific variation of chrysomelid beetles (Coleoptera) occurring in the Ryukyu Archipelago. *Kontyû, Tokyo*, **42**(3): 270–282.

KOJIMA, K. & S. NAKAMURA, 1986. Food plants of cerambycid beetles (Cerambycidae, Coleoptera) in Japan, 336 pp. Hiba Soc. nat. Hist. (In Japanese.)

KUROSAWA, Y., 1978. Phylogeny and distribution of *Lucanus gamunis* SAWADA et Y. WATANABE (Coleoptera, Lucanidae), endemic to the Izu Islands, central Japan. *Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo*, (7): 141–153. (In Japanese, with English summary.)

KUSAMA, K. *et al.*, 1984. Longicorn Beetles of Japan in Color, 565 pp., 96 pls. Kôdansha, Tokyo. (In Japanese.)

MATSUSHITA, M., 1933. Beitrag zur Kenntnis der Cerambyciden des japanischen Reichs. *J. Fac. Agric. Hokkaido imp. Univ.*, **34**(2): 157–445, 5 pls.

——— 1933. Ueber die neuen Cerambyciden-Arten Japan. *Ins. matsum.*, **7**(3): 103–110.

MITONO, T., 1940. Cerambycidae. *In* MIWA, Y. & M. CHUJO (eds.), *Catalogus Coleopterorum Japonicorum*, (8): 5+283+2 pp. Noda-syobo, Taihoku. (In Japanese.)

OHBAYASHI, K., 1963. Systematic notes and descriptions of new forms in Cerambycidae from Japan. *Fragm. coleopt.*, (2): 7–12.

SAMUELSON, G. A., 1965. The Cerambycidae (Coleopt.) of the Ryukyu Archipelago II, Lamiinae. *Pacif. Ins.*, **7**(1): 82–130.

UMEYA, K. & T. FUJIMURA, 1954. On *Glenea chlorospila* GAHAN from the Izu Islands in Japan. *Kontyû, Tokyo*, **22**(1/2): 13–16. (In Japanese, with English summary.)

日本鞘翅目学会特別報告第3号
(草間慶一先生記念論文集)

1988年6月10日　印刷
1988年6月15日　発行

編　集　　日本鞘翅目学会
(高桑正敏・新里達也)

発　行　　日本鞘翅目学会
会　長　佐藤　正孝

〒110 東京都台東区東上野 4-26-8，福田惣一方

印　刷　　(株)国際文献印刷社

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-8-8